

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1748	寛延1	8/14~	竹 本 座	仮名手本忠臣蔵 拾一幕	第一 鶴岡の饗応（文字）、第二 諫言の寝刃（島）、第三 恋歌の意趣（信濃、百合）、第四 来世の忠義（政）、第五 恩愛の二玉（百合）、第六 財布の連判（島）、第七 大臣の鉈刀（此・文字・友・信濃・百合・政）、第八 道行旅路の嫁入（文字・友）、第九 山科の雪転（此）、第十 発足の櫛笄（友、政）、第十一 合印の忍兜（島、信濃）。 ※語り「かうのもろなをがなんだいはおもきがうへのさよごろもおりにきらめくしんもつのわうごん／ゑんやはんくはんがへんかはつまなかさねそのくろしやうぞくよめにかゝやくめうじのおほぼし」。 ※『浄瑠璃譜』の番付は配役が一部相違しているので次に掲げる。初段（此）、貳冊目（百合）、三冊目（口 信濃、奥 錦）、四冊目（政）、五冊目（百合）、六冊目（口 友、切 島）、七冊目（惣かけ合）、八冊目（道行 文・信濃）、九冊目（此）、十冊目（口 錦、切 政）、十一冊目（口 文、切 政）。	かうのもろなを（清三郎）、もゝみわかさの介（才治）、ゑんやはんくはん（助三郎）、女ぼうかほよ（源介）、からうかこがはほん蔵（門三郎）、女ぼうとなせ（小八郎）、娘小なみ（勘六）、大ぼし力弥（文吾）、さぎさか伴内（太四郎）、はやのかん平（才治）、女ぼうかる（伊平次）、おの九太夫（門三郎）、大ぼしゆらの介（文三郎）、おや与市兵衛（助三郎）、おの定九郎（彦三郎）、女ぼう（文三郎）、てらおか平右衛門（才治）、はゝおいし（源介）、天河や儀兵衛（助三郎）、女ぼうその（伊平次）。
△ 1749	寛延2	1	江戸肥前座	仮名手本忠臣蔵	六段目勘平切腹（播磨）、七段め（由良之助一肥前掾・おかる一駒・九太夫一播磨・他）、九段め（駒）。 ※『評判鶯宿梅』に拠る。	
△ 1749~1750頃	寛延2~寛延3頃		伊勢中之地蔵	忠 臣 蔵	※『伊勢歌舞伎年代記』に拠る。	
1755	宝暦5	1/18~	京竹本座	仮名手本忠臣蔵 拾一幕	第一（土佐）、第二（沢）、第三（湊、桐）、第四（土佐）、第五（千賀）、第六（長門、友）、第七（大和・友・長門・桐・富・沢）、第八 道行（沢・ツレ 湊）、第九（大和）、第十（富、千賀）、第十一（ツレ 富・桐）。 ※語り「かうのもろなをか難題はおもきかうへのさよころもおりにきらめくしんもつの黄金／ゑんやはんくはんか返歌はつまなかさねそのくろしやうそくよめにかゝやくめうしの大星」。	高の師直（才治）、桃井若江（ママ）の介（十五郎）、ゑんやはんくはん（勘十郎）、かほよ御せん（金七）、かこ川本蔵（勘十郎）、女房となせ（庫十郎）、娘小なみ（小八）、大ぼし力弥（彦五郎）、さき坂伴内（和三郎）、はやの勘平（貫蔵）、おかる（庫十郎）、斧九太夫（十五郎）、大ぼし由良之助（才治）、与兵へ（与八）、斧定九郎（彦五郎）、女ほう（源助）、てら岡平次（ママ）右衛門（勘十郎）、おいし（源助）、天川や義兵へ（貫蔵）、女ほうおその（助三郎）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割	
1762	宝暦12	5/5~	江戸 土佐座	仮名手本忠 臣蔵 十一幕	序(家)、第二(伊久、駿河)、第三(和、折)、第四(紋)、第五(友)、第六(伊久、座元伊勢)、第七(かけ合九太夫一折・伴内一和・力弥一家・おかる一岡・由良之助一友・平右衛門一座元伊勢)、第八道行(岡・家)、第九(座元伊勢、中)、第十(駿河、紋)、十一(信、狩野、鳴戸、佐、和、折)。 ※語り「高の師直が難題はおもきかうへの更衣衣折紙にきらめく進物の黄金／塩冶判官が返歌は妻なかさねその黒装束夜目にかゝやく苗字の大星」。	高の師直(文三郎)、若狭之介(藤九郎)、塩冶判官(友五郎)、かほよ御ぜん(幸次郎)、加古川本蔵(六三郎)、女房となせ(文吾)、むすめ小なみ(時蔵)、大星力弥(松五郎)、鷺坂伴内(文蔵)、早の勘平(文三郎)、おかる(文吾)、斧九太夫(市郎兵衛)、大星由良之助(文三郎)、与市兵衛(十三郎)、斧定九郎(万吉)、与市兵衛女房(六三郎)、寺岡平右衛門(友五郎)、おいし(万三郎)、天川屋義平(文吾)、おその(万三郎)。	
1762	宝暦12	6	京 竹本座	忠 臣 蔵	七ツ目(住・土佐・君・常・元・磯)。 ※「夏気色浄瑠璃合」の内。	りきや(源之介)、ばん内(吉十郎)、おかる(庫十郎)、九太夫(友次郎)、由良之介(才治)、平右衛門(重五郎)。	
1763	宝暦13	1/18~	竹 本 座	仮名手本忠 臣蔵 拾一幕	第一(文)、第二(中)、第三(口絹、奥志賀)、第四(政)、第五(志賀)、第六(口淀、奥錦)、第七(掛合大和掾・政・中・淀・絹・喜)、第八道行(文・ツレ淀)、第九(口中、奥大和掾)、第十(口絹、奥政)、第十一(喜・ツレ文)。 ※語り「附 高のもろ直がなんだいはおもきが上のさよ衣おりかみにきらめくしんもつのわうごん／并ニゑんや判官がへんかはつまなかさねその黒装束夜目にかゝやくめうじの大ぼし」。 ※正月9日の火災により竹田芝居が類焼、「仮名手本忠臣蔵」の通し上演計画が急遽変更になり、竹本竹田合同の浄りあやつり、からくり狂言打込興行になったものと推定される。追番付によると、第一、第五、第十、第十一は上演されていない(『義太夫年表 近世篇』に拠る)。	かうのもろなを(門三郎)、もゝの井若狭之助(七郎治)、ゑんやはんぐはん(助三郎)、かほよ御ぜん(平蔵)、かこ川本蔵(助三郎)、女ぼうとなせ(小八)、娘小なみ(平治郎)、大ぼし力弥(才蔵)、さぎ坂ばん内(源三郎)、はや野かん平(冠蔵)、おかる(門二)、おの九太夫(藤五郎)、大ぼしゆらの介(門三郎)、おや与一兵衛(門三郎)、おの泰(ママ)九郎(右蔵)、はゝ(助三郎)、寺岡平右衛門(冠蔵)、女ぼうおいし(門二)、天川屋義平(冠蔵)、女ぼうおその(小八)。	
1764	明和1	閏12/25 ~	竹 本 座	かな手本忠 臣 蔵 拾一幕	第一(岡)、第二(口文、ラク三根)、第三(口岩、中組、ラク三根)、第四(磯)、第五(口狩野、ラク彦)、第六(口岩、奥組)、第七(不残懸合岡・文・磯・彦・竹・狩野・岩)、第八道行(文・ツレ岩)、第九(口狩野、奥岡)、第十(口彦、ラク三根)、第十一(口懸合狩野・藤、切磯)。 ※語り「高の師直がなんだいはおもきがうへのさよ衣折紙にきらめく進物の黄金／塩冶判官がへんかにつまなかさねその黒装束夜目にかゝやく名字の大星」。	高師直(冠蔵)、若さの介(仲二)、ゑんや判官(右蔵)、かをよ御前(源蔵)、本蔵(右蔵)、となせ(右蔵)、小なみ(小五郎)、力弥(文蔵)、ばん内(林三郎)、勘平(冠蔵)、おかる(三十郎)、おの九太夫(仲二)、由良之介(冠蔵)、与一兵衛(新三)、おの定九郎(友蔵)、はゝ(右蔵)、平右衛門(右蔵)、おいし(扇二郎)、義平(右蔵)、おその(扇二郎)。	
△	1766	明和3	4	京 扇谷和歌太夫 座	忠 臣 蔵	七ツ目(掛合岡・他)、九ツ目(切岡)。 ※『浄瑠璃大系図』に拠るが、その前に書いてある「近江源氏先陣館」の件が不合理であるのでこの興行にも不安がある。	
△	1766	明和3	8以前	江戸 肥前座	忠 臣 蔵	六ツ目(加賀)、九段目(駒)。 ※『義太夫執心録』、『評判鶯宿梅』に拠る。 ※『義太夫執心録』の「此太夫(中略)其後肥前座へ下り師匠筑前の語られたる忠臣蔵九だんめ」とあるのもこの時のこととすれば、口が此太夫、切が駒太夫ということになる(『義太夫年表 近世篇』に拠る)。	

	西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△	1767	明和4	2中旬カ	伊勢 豊竹若太夫座	忠 臣 蔵	※『伊勢歌舞伎年代記』に拠る。	
	1767	明和4	11/24～	竹本口吉座	仮名手本忠 臣蔵	道行（岬・ツレ 道）、九段目（口 巻、奥 中）。	本蔵（門蔵）、本蔵となせ（門三郎）、本蔵 娘小浪（伊三郎）、大星力弥（久四郎）、由 良之助（門三郎）、おいし（源三郎）。
△	1768	明和5	4/15～	大坂	忠 臣 蔵	七ツ目（掛合 源・他）。 ※『浄瑠璃大系図』に拠るが、豊竹源太夫の条と竹本春太夫の条で上 演月日の相違に疑問が残る。	
△	1768	明和5	春	伊勢 中之地蔵	忠 臣 蔵	九段目（岡＝市太郎）。 ※『伊勢歌舞伎年代記』に拠る。	
	1770	明和7	閏6/23～	京 四条通北側東 大芝居 扇谷和歌太夫 座	仮名手本忠 臣蔵 拾一幕	第壹（七）、第二（萩、房）、第三（熊、雛）、第四（式）、第五 （雛）、第六（熊、伊）、第七（かけ合 志賀・式・伊・萩・仮名・ 岡）、第八 道行（熊・ツレ 萩）、第九（雛、岡）、第十（仮名、志 賀）、第十一（萩）。 ※語り「かうのもろなをがなんだいはおもきがうへのさよごろも〔不 可知〕にきらめくしんもつのわうごん／ゑんやはんぐはんかへんかは つまなかさねそのくろしやうぞくよめにかゝやくめうじのおふぼ し」。 ※第五に「仮名太夫」、第七に順に「此太夫、政太夫、百、文、信、 文字太夫」、第八に「房太夫」の書込みがある。	高師直（重五郎）、若狭之介（久五郎）、ゑ んや判官（岩五郎）、かほよ御せん（新 蔵）、加古川本蔵（重五郎）、となせ（庫十 郎）、小なみ（小八）、力弥（久五郎）、さ き坂伴内（藤四郎）、勘平（藤五郎）、おか る（新十郎）、九太夫（伊三郎）、由良之介 （庫十郎）、弥一兵衛（藤五郎）、定九郎 （伊三郎）、はゞ（伊三郎）、おいし（新十 郎）、義平（重五郎）、おその（小八）。
△	1770	明和7	11以前	江戸 外 記 座	（仮名手本 忠臣蔵）	七段目（かけ合 平右衛門一絹・他）。 ※『義太夫執心録』に拠る。	
△	1771	明和8	7/28	豊 竹 座	忠 臣 蔵	道行、九段目（政）。 ※『外題年鑑 安永版』に拠る。	
	1771	明和8	8/14～	豊 竹 座	仮名手本忠 臣蔵	第八 道行（町・ツレ 美和）、第九（口 氏、奥 政）。	本蔵（定七）、となみ（ママ）（小八）、小 なみ（武十郎）、大星力弥（藤三郎）、大星 （元五郎）、おいし（平次郎）。
	1772	明和9	7/18～	豊竹和歌三座	忠 臣 蔵	五ツ目（口 直、切 桐）、七ツ目（島・春・百合・糸・筆・加・源・ 桐）。	大星力弥（千四）、鷺坂伴内（新蔵）、早野 勘平（喜十郎）、女房おかる（門二）、斧九 太夫（伊三郎）、大星由良之介（東十郎）、 与市兵衛（新蔵）、斧定九郎（貫蔵）、寺岡 平右衛門（真吾）。
△	1773	安永2	秋頃	伊勢 古市	忠 臣 蔵	七ツ目（平右衛門一百合・由良之介一倉・おかる一春）。 ※『伊勢歌舞伎年代記』に拠る。	おかる（吉郎兵衛）、由良之介（文三郎）、 平右衛門（文蔵）。
△	1773	安永2	12頃	竹 本 座	（仮名手本 忠臣蔵）	※『歌舞伎年表』に12月3日より大阪中の芝居の興行について、「菊 五郎の由良之助大当りゆゑ、竹本座の人形も、吉田文三郎が、菊五郎 を写して遣ふとて大入」とあるに拠る。	
△	1774	安永3	4/6～	竹 本 座	仮名手本忠 臣蔵 五幕	※「絵尽し」に拠る。	もろなを（文三郎）、もゝのいわかさの介 （才蔵）、ゑんやはんぐはん（藤五郎）、か ほよ（小八）、かこ川ほんぞう（藤五郎）、 となせ（才次）、小なみ（文十郎）、大ぼし りきや（才蔵）、おかる（小八）、大ぼしゆ らの介（文三郎）、てらおか平右衛門（才 治）、おいし（小八）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1775カ	安永4カ	春	江戸 外記座	忠 臣 蔵	七段目（掛合残らず出語 平右衛門一染・九太夫一崎・おかる一和佐・由良介一筆）。	
△ 1776	安永5	春	江戸 肥前座	忠 臣 蔵	九だんめ（氏）。 ※『義太夫執心録』、『難有矣』に拠る。	
1778	安永7	3	北ノ新地西ノ 芝居 竹田万治郎座	忠 臣 蔵	七つ目（かけ合出語り 葉・稲・の・咲・男徳斎・染）。	大星力弥（小治郎）、さぎさか伴内（金蔵）、おかる（磯五郎）、おの九太夫（喜十郎）、大星ゆらの介（文三郎）、寺岡平右衛門（門蔵）。
△ 1778	安永7	5中旬頃	越前 米沢町裏	忠 臣 蔵	※『橘宗賢伝来年中日録』に拠る。	
△ 1778～ 1780頃	安永7～ 安永9頃		竹本政吉座カ	忠 臣 蔵	九だん目（政）。 ※『闇の磔』に拠る。	
△ 1780	安永9		兵庫	忠 臣 蔵	※『闇の磔』吉田文三郎の条に、正月「立春姫小松」の評に続けて「其後又一御退座にて兵庫の方へ御越との事兵庫にて由良助みや又平など大当りと承りました」とあるに拠る。	
1780～ 1789頃	安永末 ～天明 頃		伊勢カ 鶴沢弥吉座	仮名手本忠 臣蔵	第壹（伊尾）、第貳（和田）、第三（木一、名）、第四（中）、第五（繁）、第六（和田、繁）、第七（かけ合 中・名・和田・伊尾・繁・源）、第八 道行（和田・伊尾）、第九（中、源）、第十（伊尾、名）、第十一（織）。 ※角書「高師直ノ塩治判官」。	高師直（藤五郎）、若狭之介（伊蔵）、塩治判官（惣九郎）、かをよ御前（丈助）、加古川本蔵（門三郎）、となせ（門蔵）、娘小なみ（豊七）、力弥（利八）、ばん内（利八）、早（ママ）勘平（門蔵）、娘おかる（磯五郎）、斧九太夫（豊七）、大星由良之助（門三郎）、与一兵衛（勢七）、斧定九郎（常三郎）、ばゝ（豊七）、寺岡平右衛門（門蔵）、おいし（藤五郎）、天河や義平（惣九郎）、おその（磯五郎）。
△ 1781	安永10	1	江戸 外記座	忠 臣 蔵	四ツ目（住）、七段目（かけ合 平右衛門一紋・おかる一駒・由良の介一住）。 ※『評判篤宿梅』、『義太夫執心録』に拠る。 ※『義太夫執心録』に「九段目、駒太夫役場成しが類焼にて山料（ママ）出ず、残念／＼」とあり、この正月興行が火事で一時中断したことが窺われる（『義太夫年表 近世篇』に拠る）。	
△ 1781	天明1	4/18～	伊勢 古市	仮名手本忠 臣蔵	三ツ目（三根、組）、四ツ目（中）、九ツ目（岡、政）、天川屋（岡、組）。 ※『伊勢歌舞伎年代記』に拠る。	
1783カ	天明3カ		名古屋 若宮御社内	仮名手本忠 臣蔵	七冊目（座中のこらす罷出かけ合半出かたり相勤申候 氏・文・佐渡・千賀・枅＝市蔵）。 ※「みとり浄瑠璃番組附」の内。	
△ 1785	天明5	7/25～ 8/29	甲府	仮名手本忠 臣蔵 十一幕	（政、越、綱、鶴、由、喜代、重）。 ※『峡中劇場記録』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1786	天明6	2/8~	道とんぼり若 太夫芝居 竹本千太郎座	仮名手本忠 臣蔵 十一幕	第一 鶴岡の段(志津)、第二 も一の井やかたの段(咲)、第三 御 殿のだん(文、中)、第四 塩冶館の段(政)、第五 山ざきのだん (理、咲)、第六 勘平内のだん(氏、内匠)、第七 きをん町一力の 段(掛合 文・氏・町・咲・中・内匠・麓)、第八 道行旅路の嫁入 (麓・町)、第九 山しなの段(内匠、政)、第十 天川やのだん (町、麓)、第十一 敵討の段(座中不残掛合)。 ※語り「かうのもろなをがなんだいはおもきがうへのさよごろもおり かみにきらめく進物の黄金／ゑんやはんぐはんがへんかにつまなかさ ねそのくろしやうぞくよめにかゝやくみやうじの大ぼし」。	高のもろなを(文三郎)、もゝの井わかさの 介(才蔵)、ゑんやはんぐはん(新吾)、か ほよごぜん(栄蔵)、かこ川本ぞう(十五 郎)、となせ(才治)、小なみ(三吾)、大 ぼし力弥(才蔵)、さぎさかばん内(常三 郎)、はやのかん平(才蔵)、おかる(磯五 郎)、をの九太夫(門三郎)、大ぼしゆらの 助(文三郎)、与一兵衛(門三郎)、おの定 九郎(新吾)、与一兵へ女房(十五郎)、寺 をか平右衛門(才治)、おいし(磯五郎)、 天川や義平(才治)、おその(三吾)。
1790	寛政2	7/12~	道とんぼりち くご芝居 竹本徳松座	仮名手本忠 臣蔵 十巻幕	大序(絹=駒吉)、貳つ目(千賀=藤三郎)、三つ目(口 綾=駒 吉、中 弥=清七、切 雛=仲介)、四つ目(住=藤三郎)、五 新浄 るり浅草のたん(雛=仲介)、六 新浄るりうへ木やのだん(弥=清 七、政=弥七)、七つ目(かけ合 政・内匠・弥・雛・綾・岡=弥 七)、八つ目 道行(岡・ツレ 多賀=清七)、九つ目(口 岡=仲 介、切 掛合 住=藤三郎、政=弥七)、十つ目(口 千賀=駒吉、切 内匠=清七)、十一目(惣かけ合)。	高師直(冠蔵)、わかさの介(岩五郎)、塩 冶判官(新吾)、かほよ(三吾)、かこ川本 蔵(乙五郎)、となせ(才治)、小なみ(三 吾)、力弥(千五郎)、さきさか伴内(門 二)、かん平(東作)、おかる(三吾)、お の九太夫(新吾)、由良之介(文三郎)、お の定九郎(吉三郎)、平右衛門(才治)、お いし(文三郎)、天川屋義平(冠蔵)、おそ の(三吾)。
△ 1792	寛政4	8以前カ	江戸 土 佐 座	仮名手本忠 臣蔵	※次項興行の番付に「江戸表二而仕候通大序より大切敵討迄幕なしニ 仕奉入御覧候」とあり、『寛天見聞記』には「寛政六七の頃土 佐 座にて仮名手本忠臣蔵十二段つーき幕なし大仕掛を初て興行せり」と ある。番付のいう江戸での上演は恐らくこれをさすのであって、『寛 天見聞記』の記載する年代は筆者の記憶違いであろう(『義太夫年表 近世篇』に拠る)。	
1792	寛政4	8/1~	道頓堀東の芝 居 竹本千太郎座	仮名手本忠 臣蔵 十巻冊	大序(氏)、第二(君)、第三(口 和、切 中)、第四(住)、第五 (口 伊、切 君)、第六(口 加事 土佐、切 氏)、第七(かけ合 政・住・麓・氏・中・和・伊・十七)、第八 道行(土佐・ツレ 陸)、第九(口 中、切 政)、第十(口 八十、中 住、奥 麓)、第 十一(十七)。 ※「江戸表二而仕候通大序より大切敵討迄幕なしニ仕奉入御覧候」 (番付)。	高ノ師直(才治)、もゝの井わかさノ介(孫 市)、塩冶判官(文蔵)、かほよ御ぜん(重 三郎)、加古川本蔵(冠蔵)、となせ(才 治)、小なみ(辰五郎)、大ぼし力弥(平五 郎)、さぎ坂ばん内(平五郎)、早ノ勘平 (才治)、おかる(冠十郎)、おの九太夫 (藤五郎)、大星由良ノ助(才治)、与市兵 へ(藤五郎)、おの定九郎(千四)、与一兵 衛女房(勢蔵)、寺岡平右衛門(文蔵)、お いし(磯五郎)、天川屋義平(冠蔵)、おそ の(文蔵)。
△ 1792	寛政4	9頃	京 四条東大芝居	仮名手本忠 臣蔵	第一(氏)、第二(君)、第三(口 和、切 中)、第四(住)、第五 (口 和、切 君)、第六(加事 土佐、切 氏)、第七(太夫惣かけ 合)、第九(口 中、切 政)、第十(口 春、中 住、切 政)。 ※「絵尽」に拠る。第十一以下は欠丁カ(『義太夫年表 近世 篇』)。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1793	寛政5	7/15~	名古屋 稲荷御社内 夷屋忠吉座	仮名手本忠 臣蔵 十一冊	大序(富)、二つ目(巴)、三つ目(口式、切八十)、四つ目(口氏、奥式)、五つ目(口富、奥伊)、六つ目(口八十、切式)、七つ目(惣かけ合)、八つ目(道行(出語 巴・伊)、九つ目(口八十、出がたり 切氏)、十つ目(口式、切巴)、十一目(掛合 八十・伊・富)。 ※「大序より大切迄幕なしに奉入御覧候」(番付)。	高師直(文蔵)、わかさの介(孫市)、ゑんや判官(与三郎)、かほよ(重三郎)、かこ川本蔵(定蔵)、となせ(文蔵)、小なみ(伝七)、大ほし力弥(伊兵衛)、さき坂はん内(孫市)、早のかん平(勘蔵)、おかる(伝七)、おの九太夫(定蔵)、大ほしゆらの介(文蔵)、与一兵衛(文蔵)、定九郎(定蔵)、かん平はゞ(重三郎)、平右衛門(与三郎)、おいし(重三郎)、天川や義平(勘蔵)、おその(重三郎)。
1796	寛政8	1/2~	江戸 土佐座	(仮名手本 忠臣蔵)	第壹(重)、第貳(宮戸)、第三(伊勢、下り中)、第四(下り住)、第五(加、百合)、第六(宮戸、下り氏)、第七(惣かけ合)、第八(道行(下り多左・伊勢)、第九(宮戸、下り政)、第十(伊勢、下り住、下り多左)、第十一(出)。 ※「古めかしく候へ共また／＼忠臣蔵 幕なし大道具趣向取かへ奉御覧入候」(番付口上)。	高の師直(小八)、若狭之助(金助)、塩冶判官(門蔵)、かほよ御せん(慶蔵)、加古川本蔵(門蔵)、となせ(門蔵)、小なみ(六治)、大ほし力弥(新十郎)、さき坂はん内(冠作)、早野勘平(国五郎)、おかる(万吉)、斧九太夫(国五郎)、大ほし由良之助(清治)、与市兵衛(清治)、斧定九郎(冠作)、勘平はゞ(甚五郎)、寺岡平右衛門(門蔵)、おいし(慶蔵)、天川屋儀平(左蔵)、儀平女房おその(万吉)。
△ 1796	寛政8	9頃	伊勢 古市	忠 臣 蔵	※『伊勢歌舞伎年代記』に拠る。	
1797	寛政9	8/22~	江戸 土佐座	仮名手本忠 臣蔵 拾巻幕	大序(重)、二つ目(君)、三つ目(口筆、切中)、四つ目(かけ合 政・住・組)、五つ目(口式、切中)、六つ目(口筆、切住)、七つ目(掛合 政・君・重・出・式・筆・住)、九つ目(口中、切政)、十つ目(中組、切君)、十一目(加、文、和)、焼香の段(政)。 ※角書「高師直／＼塩冶判官」。	高の師直(甚蔵)、若狭之介(冠作)、塩冶判官(冠二)、かほよ御ぜん(万吉)、加古川本蔵(冠二)、となせ(新七)、小なみ(亀次郎)、大星力弥(金介)、さき坂はん内(辰三郎)、早野勘平(清治)、おかる(万吉)、斧九太夫(左蔵)、大星由良之助(門蔵)、与一兵衛(冠作)、斧定九郎(冠二)、勘平母(新七)、寺岡平右衛門(国五郎)、おいし(定次郎)、天川や義平(清治)、おその(冠二)。
△ 1798	寛政10	3/11以前	江戸 薩摩座	忠 臣 蔵	※烏亭焉馬作の読本『仮名手本後日の文章』(文化5年序・同6年刊)冒頭の焉馬自序に次のようにある。「爰に寛政十丙午年。東都薩摩掾外記座に於て。忠臣蔵操。大当数日を経て。後日の浄瑠璃を乞ふ。おのれも好める道なれば。需に応じ。仮名手本二度目清書。と題して。三段続の浄瑠璃を著作す。「忠臣二度目清書」の初日は『近世邦楽年表 義太夫節之部』では3月11日。また「祐田善雄ノート」も正本によって3月11日とする(但、正本未見)。よって忠臣蔵の上演はそれ以前と思われる(『義太夫年表 近世篇』に拠る)。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1798	寛政10	11/15~	道とんぼり東の芝居	仮名手本忠臣蔵 十一幕	大序(麓)、第貳(式、岡)、第三(美代、氏)、第四(綱)、第五(坂、紋)、第六(岡、氏)、第七(かけ合 政・麓・綱・氏・紋・坂・菊)、第八 道行(麓・ツレ 式)、第九(氏、政)、第十(綱、麓)、第十一(美代、しやうかう場 政)。 ※角書「高師直ノ塩治判官」。 ※「大序より大切までまくなし大道具ニ而奉御覧ニ入候」(番付)。 ※なお、「第貳」の太夫役割を(式、紋)、「第七」の五人目を(美代・岡)、最後を(坂)、「第八」のツレを(坂)、「第十」を(菊、綱、麓)とする別番付がある。また、太夫連名に、配役にない「大坂 竹本伊豆太夫、大坂 竹本千賀太夫、大坂 竹本巴太夫」の名がある別番付もある。	高ノ師直(門蔵)、もゝの井若座(ママ)ノ介(岩五郎)、ゑんや判官(重五郎)、かほよのまへ(磯五郎)、加古川本蔵(冠蔵)、本蔵女房となせ(重五郎)、本蔵娘小浪(磯五郎)、大ほし力弥(平五郎)、ばん内(平五郎)、早のかん平(岩五郎)、勘平女房かる(重五郎)、おの九太夫(定蔵)、大ほしゆらの助(門蔵)、与市兵へ(万吉)、おの定九郎(音五郎)、与市兵へ女房(重三郎)、寺岡平右衛門(音五郎)、由良ノ助女房いし(重三郎)、天川や義平(音五郎)、義平女房その(重五郎)。
1799	寛政11	1/15~	京 四条北側東大 芝居	仮名手本忠臣蔵 拾壹幕	第壹 鶴岡の饗応、第貳 諫言の寝刀、第三 恋歌の意趣、第四 来世の忠義、第五 恩愛の二玉、第六 財布の連判、第七 大尽の錆刀、第八 旅路の嫁入、第九 山科の雪転、第十 発足の櫛笄、第十一 合印の忍兜。大序(麓)、第貳(式、巴)、第三(美代、氏)、第四(かけ合 政・麓・氏)、第五(坂、美代)、第六(岡、内匠)、第七(かけ合 麓・内匠・氏・巴・美代・岡・坂・式)、第八 道行(巴・ツレ坂)、第九(氏、政)、第十(内匠、麓)、第十一(美代)、焼香のたん(政)。 ※角書「塩治判官ノ高師直」。 ※語り「かうの師直が難題はおもきがうへのさよ衣折紙にきらめく進物の黄金ノゑんや判官が返歌はつまなかさねその黒装束夜目ににかゝやく苗字の大星」。 ※「大序より大切までまくなし大道具にて奉入御覧ニ候」(番付)。	高ノ師直(門蔵)、桃の井若狭之介(岩五郎)、ゑんやはんぐはん(重五郎)、かほよのまへ(磯五郎)、加古川本蔵(冠蔵)、本蔵女房となせ(重五郎)、本蔵娘小なみ(磯五郎)、大ほしりきや(平五郎)、さきさかばん内(平五郎)、はや野かん平(岩五郎)、勘平女房かる(重五郎)、おの九太夫(定蔵)、大ほしゆらの助(門蔵)、与市兵へ(万吉)、おの定二(ママ)郎(音五郎)、与市兵へ女房(重三郎)、寺岡清(ママ)右衛門(音五郎)、由良介女房いし(重三郎)、天川や義平(音五郎)、義平女房その(重五郎)。
1800	寛政12	閏4/26~	江戸 土 佐 座	仮名手本忠臣蔵	第壹(重)、第二(河内、時)、第三(祖、中)、第四(住)、第五(式、祖)、第六(雛、春)、第七(かけ合 政・春・雛・式・祖・口・中・時・住)、第八 みちゆき(河内・式)、第九(中、政)、第十(雛、住)、第十一(時・ツレ 鷺)、焼香のだん(政)。	高ノ師直(清五郎)、もゝの井若さ之介(金助)、ゑんや判官(定治郎)、かほよ御ぜん(孫市)、加古川本蔵(清治)、本蔵女房となせ(冠二)、本蔵娘小浪(孫市)、大ほし力弥(西川万吉)、ばん内(西川万吉)、早のかん平(冠二)、勘平女房かる(吉田万吉)、おの九太夫(万作)、大ほしゆらの助(冠二)、与市兵へ(金助)、おの定九郎(冠作)、与市兵へ女房(定治郎)、寺岡平右衛門(清治)、由良ノ助女房いし(金助)、天川や義平(清治)、義平女房その(吉田万吉)。
1803	享和3	1/2~	ほり江戸のかは西側芝居	仮名手本忠臣蔵	五だん目(久、千賀)、七だん目(かけ合 麓・咲・巴・中・伊勢・橘・百合)。	力弥(利吉)、伴内(金吾)、かん平(新吾)、おかる(重五郎)、九太夫(喜市)、由良の助(門蔵)、与一兵へ(新吾)、定九郎(新吾)、平右衛門(新吾)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1803	享和3	2/8~	北の新地芝居	仮名手本忠臣蔵	五段目（久、千賀）、七段目（惣掛合 麓・咲・巴・中・湊・久・百合）。	力弥（利吉）、伴内（金吾）、かん平（三やく早かわり 新吾）、おかる（重五郎）、九太夫（喜市）、由良之助（門蔵）、与市兵へ（三やく早かわり 新吾）、定九郎（三やく早かわり 新吾）、平右衛門（新吾）。
1805	文化2	2/10~	道とんぼり大西芝居	仮名手本忠臣蔵 十一幕	第一（口 綾、おく 八重）、第二（口 百合、切 巴）、第三（口 伊勢、おく 重）、第四（咲、跡 千賀）、第五（口 秀、おく 八重）、第六（口 巴、切 内匠）、第七（かけ合 麓・内匠・咲・重・泉・百合・秀）、第八 道行（巴・ツレ 泉）、第九（口 千賀、切 麓）、第十（口 泉、中 咲、切 内匠）、第十一（勢ぞろへ 伊勢、敵討 秀、百合、綾）。 ※「五段目より大切迄まくなしにて奉御覧に入候」（番付）。	高の師直（音五郎）、つ（ママ）かさの介（才二）、ゑんや判官（文三）、かほよのまへ（辰五郎）、かこ川本蔵（定蔵）、となせ（新吾）、小なみ（東作）、大ほし力弥（熊吉）、さき坂はん内（金吾）、早のかん平（千四）、おかる（虎蔵）、おの九太夫（才二）、大ぼしゆらの介（音五郎）、与市兵へ（千四）、おの定九郎（千四）、おかるはゝ（重三郎）、寺岡平右衛門（新吾）、おいし（虎蔵）、天川や義平（文三）、おその（東作）。
1805	文化2	3中旬以後	伊勢 中地蔵芝居	仮名手本忠臣蔵 十一幕	壹（口 綾、おく 秀）、二（口 百合、おく 時）、三（口 伊勢、おく 重）、四（咲、あと 秀）、五（口 百合、おく 千賀）、六（口 時、中 内匠、切 巴）、七（かけ合 麓・内匠・咲・重・時・秀・綾）、八 道行（シテ 巴・ワキ 百合）、九（口 千賀、切 麓）、十（口 伊勢、中 咲、重、切 内匠）、十一（口 伊勢、中 加、切 綾）。 ※「大序より大切迄まくなしに奉御覧入候」（番付）。	高の師直（冠三）、わかさのすけ（才二）、塩治はん官（文三）、かほよ御せん（辰五郎）、かこ川本蔵（定蔵）、となせ（新吾）、小なみ（東作）、大ほし力弥（熊吉）、さき坂伴内（金吾）、早のかん平（出つかひ早かわり二相つとめ申候 千四）、おかる（虎蔵）、おの九太夫（才二）、大ほし由良ノ助（音五郎）、与市兵へ（出つかひ早かわり二相つとめ申候 千四）、斧定九郎（出つかひ早かわり二相つとめ申候 千四）、おかるはゝおや（十三郎）、寺岡平右衛門（新吾）、おいし（虎蔵）、天川や義平（文三）、おその（東作）。
1805	文化2	11/2~	北の新地芝居	仮名手本忠臣蔵	大序（口 芳、おく 綾）、二つ目（口 泉、切 巴）、三つ目（口 伊勢、切 染）、四つ目（咲、跡 組）、五つ目（口 百合、おく 秀）、六つ目（口 吾、切 氏）、七つ目（かけ合 麓・内匠・咲・氏・千賀・吾・伊勢・芳）、八つ目 道行（巴・ツレ 泉）、九つ目（口 染、切 麓）。 ※角書「高師直／塩治判官」。 ※「大序より切までまくなしにて奉入御覧二候」（番付）。	高の師直（音五郎）、もゝの井司（ママ）之介（冠三）、ゑんや判官（文三）、かほよ（辰五郎）、かこ川本蔵（定蔵）、となせ（新吾）、小なみ（東作）、大ほし力弥（国八）、さき坂はん内（金吾）、早のかん平（千四）、おかる（東作）、おの九太夫（冠三）、大ぼしゆらの介（音五郎）、与市兵へ（千四）、おの定九郎（千四）、与市兵へ女房（十三郎）、寺岡平右衛門（新吾）、おいし（虎蔵）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1806	文化3	9/21~	御霊宮境内芝居	仮名手本忠臣蔵	第壹 鶴岡の饗応(口塚、おく筆)、第貳 諫言の寝刀(口浜、切巴)、第参 恋歌の意趣(口町、切八重)、第四 来世の忠義(咲、跡泉)、第五 恩愛の二玉(口綾、おく秀、右人形早がわり出づかい)、第六 財布の連判(口八重、切巴)、第七 大尽の錆刀(かけ合 由良之介-巴・平右衛門-八重・九太夫-秀・しよし-綾・ていしゆ-浦・力弥-富・伴内-塚・おかる-浜)、第八 道行旅路の嫁入(泉・ツレ 八十、出かたり出づかい)、第九 山科の雪転(口筆、切咲)、大切 合印の忍兜(八十、富、浦、佐野)。 ※語り「高師直か難題はおもきかうへのさよ衣おり紙にきらめく進物の黄金／塩冶判官が返歌につまなかさねその黒装束夜目にかゝやく苗字の大星」。	高ノ師直(大五郎)、わかさの介(文子)、塩冶判官(新吾)、かほよ御前(勢蔵)、加古川本蔵(三吾)、となせ(新吾)、小なみ(文三)、大星力弥(重三郎)、伴内(国八)、早ノ勘平(三吾)、おかる(金吾)、おの九太夫(文子)、大星由良介(文三)、与市兵衛(三吾)、斧ノ定九郎(三吾)、勘平はゞ(重三郎)、寺岡平右衛門(新吾)、おいし(勢蔵)。
1806	文化3	10/5~	道とんぼり大西芝居	仮名手本忠臣蔵 十巻冊	第壹(茂)、第二(口錦、おく染)、第三(口伊勢、おく中)、第四(政)、第五(口琴、おく鐘)、第六(口錦、おく氏)、第七(かけ合 政・氏・鐘・茂・琴・伊勢・中・麓)、第八 道行(麓・ツレ 錦)、第九(口染、おく政)、第十(口中、おく麓)、第十一(淀、伊勢)、しやうかうの段(政)。 ※語り「高師直が難題はおもきが上のさよ衣折紙にきらめく進物の黄金／塩冶判官が恋歌につまな重ねその黒装束夜目にかゝやく苗字の大星」。 ※「大序より大切までまくなしにて奉入御覧候」(番付)。	高の師直(音五郎)、もゝノ井わかさノ助(冠三)、塩冶判官(千四)、かほよのまへ(東蔵)、かこ川本ぞう(国五郎)、本蔵女房となせ(千四)、本蔵娘小なみ(とらぞう 事 辰造)、大ほし力弥(千次郎)、さき坂ばん内(幸五郎)、早ノ勘平(才治)、こしもとおかる(とらぞう 事 辰造)、おの九太夫(東十郎)、大星由良ノ助(音五郎)、与市兵へ(冠三)、おの定九郎(国五郎)、おかるはゞ(音五郎)、寺岡平右衛門(千四)、由良ノ助女房お石(東十郎)、天川や義平(千四)、義平女房おその(冠十郎)。
△ 1807	文化4	5/27~	伊勢古市	忠 臣 蔵	七段目(かけ合 由良之助-弥・平右衛門-民・九太夫・十太郎-磯・おかる-錦・伴内・喜多八-要・弥五郎・亭主・中ゐ-友=弥三郎)。 ※『伊勢歌舞伎年代記』に拠る。	
1807	文化4	10/15~	京寺町泉式部境内芝居	仮名手本忠臣蔵 絵本拾巻冊	大序(鹿)、二段目(照、美代)、三段目(沢、中)、四段目(政、氏)、五段目(沢、美代)、六段目(重、氏)、七段目(内匠・中・照・沢・和・絹・重・美代・氏)、八段目(内匠・重)、九段目(照、政)、十段目(沢、中、内匠)、十一段目(絹、和)、焼香場(土佐)。 ※角書「高師直／塩冶判官」。 ※「一日幕なし」(番付)。 ※『義太夫執心録』によれば、七段目の太夫役割は(九太夫-美代・平右衛門-中・おかる-内匠・ゆらの介-氏)。	高ノ師直(文蔵)、桃井若狭之介(鬼市)、塩谷判官(冠四)、かほよ御せん(東蔵)、加古川本蔵(国五郎事 三郎平)、本蔵女房となせ(辰造)、小なみ(東蔵)、大ほし力弥(源三郎)、さき坂伴内(宗吉)、早野勘平(国五郎事 三郎平)、勘平女房おかる(辰造)、斧九太夫(鬼市)、大星由ら之介(文蔵)、与市兵へ(元吉)、斧定九郎(冠四)、与市兵へ女房(栄蔵)、寺岡貞(ママ) 右衛門(国五郎事 三郎平)、おいし(幸五郎)、天川や義兵へ(冠四)、義兵へ女房おその(勢蔵)。
1808	文化5	7/15~	道とんぼり角丸芝居	仮名手本忠臣蔵	五つ目(口塚、おく津賀)、七つ目(かけ合 麓・弥・八重・鐘・泉・重・倉・絹・スケ 内匠)。	力弥(卯之吉)、ばん内(伊三郎)、かん平(千四)、おかる(辰造)、九太夫(才二)、ゆらの介(音五郎)、与市兵へ(千四)、定九郎(千四)、平右衛門(門蔵)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1809	文化6	1/17~	江戸 結 城 座	忠 臣 蔵	※『我衣』に「元日の夜の類焼にて、芝居両座ともいまだ普請を始めず。然る所、結城座小屋がけ普請にて十七日より人形始る（中略）。忠臣蔵幕なし」とあるに拠る。	
1809	文化6	2/16~	天神社内芝居	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目まで	大序（房、伊達）、二つ目（口 式、おく 津賀）、三つ目（口 塚、切 鐘、跡 伊達）、四つ目（土佐）、五つ目（口 塚、おく 津賀）、六つ目（口 重、切 八重）、七つ目（掛合 中・鐘・津賀・伊達・重・塚・房・歳・式）、八つ目 道行（重・ツレ 歳）、九つ目（口 津賀、切 中）。 ※語り「高師直が難題はおもきが上のさよ衣折かみにきらめく進物の黄金／塩谷判官が返歌につまな重その黒装束夜目にかゝやく苗字の大星」。 ※「五つ目よりまくなしにて奉入御覧候」（番付）。	もろなを（冠三）、もゝの井若狭之介（小六）、ゑんや判官（千次郎）、かほよのまへ（才九郎）、かこ川本ぞう（冠三）、となせ（門蔵）、娘小なみ（東蔵）、大ぼし力弥（兵吉）、さぎ坂伴内（卯之吉）、早野勘平（千四）、おかる（千四）、おの九太夫（元五郎）、大ぼしゆら之介（音五郎）、与一兵へ（千四）、定九郎（千四）、おかるはゝ（音五郎）、寺岡平右衛門（門蔵）、おいし（千四）。
1810	文化7	9/27~	荒木芝居	仮名手本忠 臣蔵 初段より 九だん目迄	大序（口 戸、おく 和）、式つ目（口 東、おく 巴）、三つ目（口 田女、切 津賀）、四つ目（中、跡 加）、五つ目（口 和、おく 塚）、六つ目（口 錦、切 宮戸）、七つ目（出がたり 掛合 巴・錦・津賀・加・田女・和）、道行（錦・ツレ 富）、九つ目（口 富、切 かけ合 中・宮戸）。 ※角書「高師直／塩谷判官」。	高の師直（与十郎）、若（ママ）之介（門蔵）、塩谷判官（弥三郎）、かほよ御前（勢蔵）、加古川本蔵（紋子）、となせ（新吾）、小なみ（国八）、力弥（冠作）、さぎ坂伴内（兵吉）、かん平・与市兵へ・定九郎（右三役早かわりにて相動申候 新吾）、おかる（金吾）、斧九太夫（弥三郎）、大星ゆら之介（門蔵）、おかる母（重三郎）、平右衛門（新吾）、おいし（小六）。
1812	文化9	2/11~	いなり社内	仮名手本忠 臣蔵 拾壹冊	鶴岡のだん（和）、桃井館のだん（口 栄、おく むら）、殿中のだん（口 音、切 津賀）、扇ヶ谷のだん（政、跡 和）、川原のだん（口 理、おく むら）、喜内住家の段（口 綾、切 巴）、一力のだん（かけ合 政・津賀・綾・和・音・重・鐘）、道行（むら・ツレ 音）、山科のだん（口 重、切 政）、天河屋のだん（口 理、中 津賀、切 巴）、勢揃への段（綾・ツレ 和）、敵うちのだん（かけ合 重・むら・理・栄）。 ※語り「高の師直が難題はおもきがうへの小夜衣折紙にきらめく進物の黄金／塩谷判官が返歌は妻な重その黒装束夜目にかゝやく苗字の大星」。	高の師直（弥三郎）、桃井司（ママ）之介（紋子）、判官（大五郎）、かほよのかた（東蔵）、加古川本蔵（三吾）、となせ（新吾）、小なみ（金吾）、大ぼし力弥（竹吉）、伴内（小六）、早の勘平（兵吉）、おかる（金吾）、斧九太夫（東吉）、大星ゆらの介（新吾）、寺岡平右衛門（三吾）、おいし（東蔵）、天川や義平（与十郎）、おその（国八）。
1812	文化9	5/6~	御霊境内	仮名手本忠 臣蔵 拾一幕	大序（口 苦、おく 操）、第貳（口 稲、おく 重）、第三（口 吾、切 伊勢）、第四（弥、跡 吾）、第五（口 操、おく 伊勢）、第六（口 重、切 染）、第七（かけ合 麓・内匠・染・伊勢・生駒・吾・操）、第八 道行（弥・ツレ 重）、第九（口 生駒、切 麓）、第十（口 吾、中 染、切 内匠）、第十一（稲）、敵討のたん（苦）。 ※語り「高師直が難題は重きがうへの小夜衣折紙にきらめく進物の黄金／塩谷判官が返歌は妻な重その黒装束夜目にかゝやく苗字の大星」。	高の師直（豊吾）、若狭之介（才次郎）、判官（虎蔵）、かほよ（喜十郎）、本蔵（冠二）、となせ（冠十郎）、小なみ（小三郎）、力弥（才次郎）、伴内（小三郎）、早のかん平（豊吾）、おかる（才次郎）、九太夫（鬼市）、大ぼし由良之助（豊吾）、与市兵へ（豊吾）、定九郎（豊吾）、かん平母（冠十郎）、平右衛門（虎蔵）、おいし（才九郎）、義兵へ（小三郎）、おその（冠十郎）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1812	文化9	9/6~	道頓堀竹田芝居	仮名手本忠臣蔵 十一幕	壹冊目（口 三保、おく 律）、二冊目（口 生駒、おく 氏）、三冊目（口 伊勢、切 九重）、四冊目（中）、五冊目 浅草のたん（絹）、六冊目 植木やのたん（口 九重、出かたり出つかひ かけ合 土佐・中・氏・伊勢）、七冊目（かけ合 麓・土佐・中・九重・氏・生駒・律・三保）、八冊目 道行（伊勢・ツレ 絹）、九冊目（口 九重、切 麓）、十冊目（口 絹、中 氏、切 土佐）、十一冊目（律、三保）。 ※角書「高師直／塩治判官」。	高の師直（九孝）、もゝの井つ（ママ）かさノ介（新二）、塩治判官（千次郎）、かほよごぜん（冠十郎）、かこ川本蔵（冠三）、となせ（辰造）、小なみ（重五郎）、大ぼし力弥（才治）、さきさか伴内（重五郎）、早野かん平（才治）、おかる（辰造）、おの九太夫（千次郎）、大星由良之介（九孝）、寺岡平右衛門（千四）、おいし（重三郎）、天川屋義平（千四）、おその（冠十郎）。
1812	文化9	9/15~	京六角堂境内芝居	仮名手本忠臣蔵 つーき十一段 まくなし	大序（口 柁、奥 操）、第二（口 関、切 倉）、第三（口 茂、切 スケ 鐘、跡 柴）、第四（弥）、第五（口 操、切 柴、早替り出つかひ 勘平／与市兵へ／定九郎 吉田三吾 罷出相勤申候）、第六（口 倉、切 筆）、第七（かけ合 政・スケ 鐘・筆・錦・倉・関・柁）、第八 道行（弥・錦）、第九（口 筆、切 政）、第十（口 スケ 鐘、切 錦）、第十一（惣かけ合）。	高の師直（弥三郎）、桃ノ井若狭之介（元五郎事 吉五郎）、塩谷判官（与十郎）、かほよ御ぜん（才九郎）、加古川本蔵（虎蔵）、となせ（三吾）、娘小なみ（豊吾）、大ぼし力弥（源三郎）、さき坂伴内（与十郎）、早の勘平（三吾）、おかる（虎蔵）、斧九太夫（元五郎事 吉五郎）、大星由良之介（豊吾）、与市兵へ（三吾）、斧定九郎（三吾）、与市兵へ女房（源三郎）、寺岡平右衛門（三吾）、おいし（才九郎）、天川や義平（弥三郎）、おその（才九郎）。
1813	文化10	7/13~	いなり社内	仮名手本忠臣蔵	九段目（口 なた事 佐賀、切 中＝伊左衛門）。	加古川本蔵（与十郎）、となせ（国八）、娘小なみ（喜十郎）、大ぼし力弥（竹吉）、大星ゆらの介（大五郎）、女房おいし（東造）。
1814	文化11	7/25~	道頓堀若太夫芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より 大切迄	大序（口 雛、おく 茂）、二つ目（口 重、おく 咲）、三つ目（口 吾、切 鐘）、四つ目（染）、五つ目（口 三保、おく 咲）、六つ目（口 生駒、切 中）、七つ目（かけ合 麓・巴・染・咲・茂・生駒・吾）、八つ目 道行（重・生駒）、九つ目（口 鐘、切 麓）、十ヲ目（口 吾、中 中、切 巴）、十一目 師直うら門口の段（かけ合 中・染・鐘、おく 麓）、両国ばしの段（式、津）、大切 敵討ノ段（富、雛）。 ※角書「高師直／塩治判官」。 ※「大序より大切までまくなしニ仕大切に江戸両国橋せり上ニて奉御覧ニ入候」（番付）。 ※「両国ばしの段」を竹本式太夫、「敵討ノ段」を竹本津太夫とする別番付あり。	高野師直（冠四）、もゝの井司（ママ）之介（本五郎）、塩治判官（才二）、かほよ御ぜん（八九）、かこ川本ぞう（冠四）、本蔵女房となせ（三吾）、娘小なみ（東十郎）、大ぼし力弥（徳蔵）、さき坂伴内（東十郎）、早の勘平（豊吾）、おかる（才治）、斧九太夫（本五郎）、大星由良之介（三吾）、百しやう与一兵へ（鬼市）、斧定九郎（才治）、おかるはゝ（才九郎）、寺岡平右衛門（新吾）、おいし（東造）、天川や義兵へ（才二）、おその（冠十郎）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1815	文化12	11/8~	名古屋 大須御境内	仮名手本忠 臣蔵 十一段続	大序(宮)、弐段目(口 邑、中 巴、奥 紋)、三段目(口 左、切 氏、跡 美代)、四段目(宮戸)、五段目(口 菊、奥 美代)、六段目(口 錦、中 紋、切 氏)、七段目(惣出語り かけ合 巴・宮戸・錦・美代・紋・左・宮・政子)、八段目(錦・ツレ 菊)、九段目(口 氏、切 巴)、十段目(口 美代、中 宮戸、切 錦)、勢そろへ(紋・ツレ 邑)、かたき討(音羽)。 ※角書「高師直／塩冶判官」。 ※「大序より敵討迄幕なし出語り出つかひにて相勤申候」(番付)。	高ノ師直(金吾)、桃井若狭之助(金四)、塩冶判官(大五郎)、かほよごぜん(才九郎)、加古川本蔵(金吾)、となせ(新吾)、むすめ小浪(伝七)、大星力弥(勢七)、ばん内(金四)、早野勘平(三吾)、おかる(伝七)、斧九太夫(弥三郎)、大星由良之助(新吾)、与一兵衛(三吾)、斧定九郎(三吾)、勘平はゞ(勢七)、寺岡平右衛門(三吾)、おいし(才九郎)、天川屋儀平(弥三郎)、おその(金吾)。
1816	文化13	閏8/24~	いなり社内	仮名手本忠 臣蔵	第壹 鶴岡の饗応(口 千里、おく 富)、第弐 諫言の寝刀(口 弓、切 重)、第三 恋歌の意趣(口 光、中 要、切 筆)、第四 来世の忠義(土佐、跡 富)、第五 恩愛の二玉(口 光、おく 要、与一兵衛／斧定九郎／早のかん平 吉田千四／出遣ひ早替りにて相勤申候)、第六 財布の連判(口 重、切 中)、第七 大尽の錆刀(惣かけ合)、第八 旅路の嫁入(重・ツレ 富)、第九 山科の雪転(口 要、切 土佐)、第十 発足の櫛笄(中 中、切 筆)、大切 合印の忍兜(室、かけ合)。 ※語り「高師直が難題はおもきかうへのさよ衣おり紙にきらめく進物の黄金／塩冶判官が返歌につまなかさねその黒装束夜目にかゝやく苗字の大星」。 ※「大序より大切迄まくなしにて奉御覧二入候」(番付)。	高師直(冠三)、若狭之介(新二)、判官(千次郎)、かほよのまへ(重三郎)、加古川本蔵(三吾)、となせ(千四)、小なみ(東十郎)、力弥(新二)、伴内(新二)、早のかん平(千四)、おかる(三吾)、斧九太夫(冠三)、ゆら之介(九孝)、与一兵衛(千四)、斧定九郎(千四)、勘平母(九孝)、寺岡平右衛門(千四)、おいし(才九郎事 千柳)、義平(千次郎)、おその(三吾)。
1816	文化13	9/1以前	江戸 結 城 座	仮名手本忠 臣蔵	鶴ヶ岡の段 大序(氏)、桃井館の段(下り 梶)、進物のだん(音)、御殿のだん(下り 茂)、扇ヶ谷の段(祖事 住)、鉄砲のだん(頼母事 祖)、山崎のだん(口 若、切 茂)、祇園町一力の段(かけ合 住・祖・出水・多賀・氏・美和・名・音・梶)、道行旅路の嫁入(シテ 若・ツレ 名)、山科のだん(口 祖、切 氏)、天河屋の段(口 倉、中 若、切 梶)、敵討のだん(名)、焼香のだん(住)。 ※角書「塩冶判官／高野師直」。	高野師直(慶蔵)、桃井若狭之介(宇八)、塩冶判官(伊三良)、おく方かほよ御前(熊次良)、加古川本蔵(半三良)、本蔵女房となせ(新七)、娘小なみ(六三)、大星力弥(新十良)、さき坂伴内(冠二)、早野勘平(伊三良)、こしもとおかる(六三)、斧九太夫(宇八)、大星由良之介(清五良)、百性与一兵衛(慶蔵)、斧定九郎(巳之介)、勘平はゞ(冠二)、寺岡平右衛門(友五良)、由良介女房お石(熊次良)、天河屋義兵衛(伊三良)、義兵衛女房お園(新七)。
1817	文化14	4/14~	江戸 結 城 座	仮名手本忠 臣蔵	鶴ヶ岡の段(大序 氏)、桃井館の段(口 多賀、切 若)、進物のだん(律)、御殿のだん(住)、塩冶館の段(下り 土佐、ヲク 律)、鉄砲のだん(音)、勘平住家ノ段(口 若、切 住)、祇園町一力の段(かけ合 土佐・若・律・多賀・名・祖・氏)、道行(若・ツレ 名)、山科のだん(口 律、切 土佐)、天川屋の段(口 倉、中 祖、切 住)、敵討のだん(多賀)。 ※角書「塩冶判官／高野師直」。	高ノ師直(東作)、桃井若狭之介(冠二)、塩冶判官(友五良)、おく方かほよ(伝七)、加古川本蔵(伊三良)、本蔵女房となせ(新七)、小浪(巳之介)、大星力弥(熊蔵)、さき坂伴内(熊蔵)、早野勘平(伊三良)、こしもとおかる(六三)、斧九太夫(新十良)、大星由良之介(清五良)、百性与市兵衛(貫蔵)、斧定九郎(冠二)、勘平はゞ(冠二)、寺岡平右衛門(慶蔵)、由良之介女房おいし(熊治良)、天川屋義平(半三良)、義平女房おその(伝七)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1819	文政2	4/24~	いなり境内	仮名手本忠臣蔵 拾壹幕	第壹(島)、第貳(重、土佐)、第三(吾、むら)、第四(染、跡富)、第五(梶)、第六(むら、中)、第七(惣かけ合)、第八(むら・富)、第九(吾、土佐)、第十(染、重)、第十一(環、照)。 ※語り「高の師直が難題はおもきがうへのさよ衣おりかみにきらめく進物の黄金／塩冶判官が返歌はつまなかさねその黒しやうぞく夜目にかゝやく名苗の大星」。 ※「大序より大切敵討迄幕なしニ仕奉御覧ニ入候」(番付)。 ※「第十一」の太夫役割を(金、照)とし、人形の「桃井若狭之介」の役名を「桃井司之介」とする別番付あり。	高野師直(九孝)、桃井若狭之介(新二)、塩谷判官(兵吉)、かほよのまへ(千柳)、加古川本蔵(千四)、となせ(辰五郎)、小なみ(新二)、大星力弥(仙助)、さぎさか伴内(東十郎)、早(ママ)勘平・与市兵へ・斧定九郎(右三役出づかい早かはりにて相つとめ申候 千四)、おかる(辰五郎)、斧九太夫(冠三)、大星由良之介(九孝)、勘平母(九孝)、寺岡平右衛門(千四)、おいし(重五郎)、天川や義平(兵吉)、おその(重五郎)。
1819	文政2	閏4/11~	伊勢中之地蔵常芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より九段目迄	鶴ヶ岡(宗、長門)、桃井館(翁、勝、八重)、足利御殿(勝、美代)、扇ヶ谷(宮戸)、二つ玉(広、紋)、勘平内(錦、綱)、祇園一力(巴・宮戸・錦・美代・紋・長門・広)、道ゆき(錦・勝)、山しな(宮戸、巴)。 ※角書「高師直／塩冶判官」。	師直(与十郎)、若狭之助(三吾)、判官(弥三郎)、かほよ(重三郎)、本蔵(金吾)、となせ(新吾)、小なみ(冠作)、力弥(冠三郎)、伴内(林三郎)、勘平(金吾)、おかる(国八)、九太夫(鬼市)、由良之助(新吾)、与一兵衛(左蔵)、定九郎(金四)、勘平はゞ(磯五郎)、平右衛門(冠四)、おいし(磯五郎)。
1821	文政4	8	京四条南側大芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より九つ目迄	大序 鶴が岡のだん、二つ目 桃の井館のだん、三つ目 恋歌の意趣、四つ目 塩冶館のだん、五つ目 恩愛の二つ玉、六つ目 財布の連判、七つ目 大尽の錆刀、八つ目 道行旅路の嫁入、九つ目 山科の雪転。 大序(口光、切祖)、二つ目(口勝、切綱)、三つ目(口紋、切咲、跡綾)、四つ目(切弥、跡咲)、五つ目(口祖、奥紋)、人形出遣ひ早替り二而相勤申候 吉田兵吉)、六つ目(口綾、切中)、七つ目(カケ合 播磨大掾・中・村・綾・紋・祖・初)、八つ目(シテ筆・ツレ勝)、九つ目(口弥、切 播磨大掾)。 ※角書「高師直／塩冶判官」。	高師直(新吾)、若狭之介(弥三郎)、はん官(才治)、かほよ御ぜん(国八)、かこ川本蔵(兵吉)、となせ(重五郎)、小なみ(国八)、力弥(久吉)、ばん内(金四)、早のかん平(兵吉)、おかる(国八)、九太夫(与十郎)、大ほしゆらの介(新吾)、与市兵へ(兵吉)、定九郎(兵吉)、かん平はゞ(重五郎)、寺岡平右衛門(才治)、おいし(才治)。
1821	文政4	9/9~	道頓堀角丸芝居	仮名手本忠臣蔵 十壹冊	第壹 大序(光、祖)、第貳(口勝、切筆)、第三(口紋、切咲、跡富)、第四(播磨大掾)、第五(口武事 筑後、おく咲、人形三役共出遣ひ早かはりて相つとめ申候 吉田兵吉)、第六(口綾、切綱)、第七(かけ合 播磨大掾・中・咲・むら・綾・紋)、第八 道行(むら・ツレ勝)、第九(口富、切中)、第十(口紋、綱、切筆)、第十一(光、初、祖)。 ※語り「高師のふが難題はおもきがうへの小夜衣折かみにきらめく進物の黄金／塩冶判官が返歌につまな重ねその黒装束夜目にかゝやく苗字の大星」。 ※「大序より大切敵討迄幕なしにて御覧ニ入候」(番付)。 ※「第十」の太夫役割を(口紋、中綱、切筆)とし、人形の「斧九太夫」を(三四事 朝右衛門)とする版木の違う別番付あり。	高師のふ(新吾)、桃ノ井若葉(ママ)之助(才治)、塩谷判官(弥三郎)、かほよのまへ(国八)、加古川本蔵(兵吉)、となせ(重五郎)、小浪(国八)、大ほし力弥(久吉)、伴内(金四)、早の勘平(兵吉)、おかる(国八)、九太夫(朝右衛門)、大星ゆらの介(新吾)、与市兵へ(兵吉)、斧定九郎(兵吉)、勘平母(伝七)、寺岡平右衛門(才治)、おいし(才治)、天河屋義兵へ(金四)、おその(国八)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割	
1822	文政5	10/5~	いなり社内	仮名でほん 忠臣蔵 十巻冊	第壹(口 玉木、中 伊尾、おく 鶴)、第貳(口 錦、おく 重)、第 三(口 島、切 梶)、第四(染)、第五(口 錦、おく 梶)、第六 (口 島、切 湊)、第七(かけ合 染・梶・錦・播磨大掾・鶴・島・ 重)、第九(口 湊、切 播磨大掾)、第十(口 梶、中 染、切 重)、第十壹(惣かけ合)。	高師直(文三郎)、若狭之介(千助)、判官 (才治)、かほよ(三吾)、加古川本蔵(金 吾)、となせ(辰五郎)、小なみ(三吾)、 力弥(冠吉)、伴内(十九造)、勘平(新 治)、おかる(辰五郎)、九太夫(新治)、 大星由良之介(文三郎)、与市兵へ(才 治)、定九郎(東十郎)、勘平母(三吾)、 寺岡平右衛門(才治)、おいし(伝七)、儀 平(金吾)、おその(伝七)。	
1823	文政6	7/15~	江戸 結 城 座	仮名手本忠 臣蔵	※「来ル七月十五日より仮名手本忠臣蔵大道具口口并二寿式三番より 大序十一段目敵討の段迄まくなし二とり組古今まれ成る大道具大仕掛 二仕奉御覧二入候(後略)」(番付口上)。 ※現存は二枚番付の内の一枚か(『義太夫年表 近世篇』に拠る)。		
1823	文政6	8/28~	御霊境内芝居	仮名手本忠 臣蔵	鶴ヶ岡の段(口 勝、おく 綾)、桃ノ井館の段(口 菅、おく 音)、 鎌倉御殿の段(口 鐘、おく 咲)、扇ヶ谷の段(筆)、二つ玉の段 (口 式、おく 音、勘平 定九郎 与一兵へ 吉田金四ノ右三役出づか ひ早がわりにて相つとめ申候)、勘平住家の段(口 綾、切 中)、祇 園一力の段(おかる一巴・ゆら之介一時・伴内一音・仲居・力弥一 定・ていしゆ・諸士一鐘・九太夫一咲・平右衛門一中)、道行旅路の 嫁入の段(シテ 勝・ワキ 浦)、山科の段(口 綾、切 巴)、天川 屋の段(口 筆、切 時)、勢揃への段(定、菅)、敵討の段 (かけ合 咲・式・菅・泉・其)。 ※角書「高ノ師直ノ塩谷判官」。 ※「大序より敵討まで幕なしにて奉御覧入候」(番付)。	高ノ師直(金吾)、若狭之介(東十郎)、塩 谷判官(金四)、かほよのまへ(辰治)、加 古川本蔵(新吾)、となせ(金吾)、小なみ (東十郎)、大星力弥(勢造)、伴内(田 吉)、勘平(金四)、おかる(国八)、斧九 太夫(朝右衛門)、大星由良之介(冠四)、 与一兵へ(金四)、定九郎(金四)、与一兵 へ女房(東五郎)、寺岡平右衛門(新吾)、 おいし(国八)、天川や義平(金吾)、おそ の(国八)。	
1824	文政7	閏8/13~	あら木芝居	仮名手本忠 臣蔵 十一段	大序(戸和、歌門)、式段目(口 織、切 越)、三段目(口 の、お く 鐘)、四段目(弥、跡 の)、五段目(口 菅、おく 組、かん平ノ 定九郎ノ与一兵へ 吉田新吾ノ右役之義は是までれきノ致被置候跡 にて不重法の私相勤候義は奉恐入候誠に亡父新吾之佛じやと被思召幾 重にもこ用捨之ほど奉希上候已上)、六段目(口 鐘、切 筆)、七段 目(かけ合 ゆらの介一政・平右衛門一筆・九太夫一鐘・伴内一組・ おかる一錦・力弥一の・諸士一苦)、八段目 みち行(錦・ツレ 菅)、九段目(口 弥、切 政)、十段目(口 筆、切 越)、十一段目 (苦、戸和)。 ※角書「塩谷判官ノ高野師直」。 ※「大序より大切まで幕なしにて奉御覧二入候」(番付)。	高野師直(扇四)、司(ママ)之介(冠 吉)、塩谷判官(新吾)、かほよのかた(扇 造)、加古川本蔵(新吾)、となせ(扇 四)、娘小なみ(新吾)、大ぼし力弥(源 二)、伴内(扇四)、早の勘平(新吾)、勘 平女房おかる(伝七)、斧九太夫(源吾)、 大星由良之助(扇四)、与市兵へ(新吾)、 定九郎(新吾)、与一兵へ女房(扇四)、寺 岡平右衛門(新吾)、おいし(扇造)、天川 や義兵へ(新吾)、おその(扇四)。	
△	1825	文政8	夏	江戸	忠 臣 蔵	四段目(氏)、六段目(綱)、九段目(宮戸)、十段目(筆)。 ※『元木家記録』に拠る。	
△	1825	文政8	10/29	三州 御 油 宿	忠 臣 蔵	三段目(千歳)。 ※山本まち蔵「角力番付外二芝居番付」に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1826	文政9	2/1~	御霊境内	仮名手本忠臣蔵 十巻さつ	鶴ヶ岡の段（口 和佐、おく 生駒）、桃ノ井館の段（口 勝、おく 頼）、鎌倉御殿の段（口 町、切 綾）、扇ヶ谷の段（若）、二つ玉の段（口 泉、おく 富、勘平／定九郎／与一兵衛 吉田金四／右三役出づかひ早かはりにて相つとめ申候）、勘平住家の段（口 生駒、切 江戸 政）、祇園一力の段（おかる一巴・平右衛門一若・九太夫一綾・伴内一富・力弥・諸士一町・ていしゆ・仲一泉・ゆら之助一政）、道行 旅路の嫁入の段（頼・ツレ 和佐）、山科の段（口 生駒、切 巴）、天川屋の段（口 富、切 若）、勢ぞろへの段（和佐、元）、敵討の段（かけあい 町・泉・勝・民）。 ※角書「高師直／塩谷判官」。 ※「大序より大切迄まくなしにて奉御覧二入候」（番付）。	高ノ師直（金吾）、若狭之助（新治）、塩谷判官（岩五郎）、かほよのまへ（東三）、本ぞう（東十郎）、となせ（国八）、娘小浪（辰治）、力弥（朝之助）、伴内（岩五郎）、勘平（金四）、おかる（国八）、九太夫（朝右衛門）、由良之介（金吾）、与一兵へ（金四）、定九郎（金四）、勘平母（東十郎）、平右衛門（金四）、おishi（勢造）、義平（新治）、おその（東十郎）。
1826	文政9	3/3~	道頓堀角丸芝居	仮名手本忠臣蔵 十巻幕	鶴ヶ岡の段（口 杣、おく 桑）、桃井館の段（口 広、おく 春）、鎌倉御殿ノ段（口 長門、切 音）、扇ヶ谷の段（筆）、二つ玉の段（口 三根、切 音、勘平／定九郎／与一兵へ 吉田才治／右三役出づかひ早がわりにて相つとめ申候）、勘平住家の段（口 島、切 重）、祇園一力の段（由良之助一播磨大掾・おかる一重・伴内一島・力弥一長門・九太夫一音・平右衛門一筆）、道行 旅路の嫁入（シテ 春・ツレ 三根）、山科の段（口 島、切 播磨大掾）、天河屋の段（口 長門、中 筆、切 春）、勢揃への段（歌門、谷）、敵討の段（巻、熊）。 ※語り「高ノ師直が難題は おもきがうへのさよごろも折紙にきらめく進物の黄金／塩谷判官が返歌は つまなかさねその黒装束夜目にかゝやくめうじの大星」。 ※「大序より大切迄まくなしにて奉御覧二入候」（番付）。	高ノ師直（冠四）、もゝノ井司（ママ）之介（冠三）、塩谷判官（新吾）、かほよの前（三吾）、本ぞう（才治）、となせ（伝七）、娘小なみ（新吾）、力弥（新四）、伴内（新四）、勘平（才治）、おかる（三吾）、九太夫（鬼市）、由良之助（冠四）、与一兵衛（才治）、定九郎（才治）、勘平母（伝七）、平右衛門（新吾）、おishi（三吾）、天川や義平（新吾）、おその（伝七）。
1826	文政9	10/16~	高津社内けいこ場	仮名手本忠臣蔵	鶴ヶ岡の段（口 萩、おく 音羽）、桃ノ井館の段（口 美和、おく 錦）、鎌倉御殿段（口 友、切 町）、扇ヶ谷の段（切 政、口 の）、二つ玉の段（口 亀、おく 泉、勘平／定九郎／与一兵へ 豊松東十郎／右三やく出づかひ早がわりにて相つとめ申候）、勘平住家ノ段（口 錦、切 綾）、祇園一力の段（かけ合 由良ノ介一政・平右衛門一綾・おかる一錦・九太夫一泉・伴内一友）、道行 旅路の嫁入（錦・ワキ 亀）、山科の段（口 の、切 政）、天河屋の段（口 泉、切 綾）、敵討の段（かけ合 萩・美和・佐代）。 ※語り「高ノ師直が難題は重きがうへの小夜衣折紙にきらめく進物の黄金／塩谷判官が返歌は妻な重ねその黒装束夜目にかゝやく苗字の大星」。 ※「大序より敵討まで幕なしにて奉御覧二入候」（番付）。	高ノ師直（新吾）、若狭之介（一山）、塩谷判官（東十郎）、かほよの前（勢造）、加古川本ぞう（東十郎）、となせ（スケ 国八）、娘小なみ（東十郎）、力弥（喜十郎）、さぎ坂伴内（一山）、早の勘平（東十郎）、おかる（スケ 国八）、九太夫（伊平）、大星由良ノ助（新吾）、与市兵へ（東十郎）、定九郎（東十郎）、勘平母（新吾）、寺岡平右衛門（東十郎）、おishi（勢造）、天川屋義平（東十郎）、おその（スケ 国八）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1827	文政10	閏6/9~	江戸 肥 前 座	仮名手本忠 臣蔵 十一だんつ 一き	大序(古野)、二段目(口実、ラク宮子)、三段目(口鳴戸、切門)、四段目(津賀)、五段目(馬)、六段目(口門、切古野)、七段目(カケ合 津賀・房・古野・宮子・鳴戸・染)、道行(シテ房・ワキ生駒)、九段目(口宮子、切染)、十段目(口津、切房)、十一段目(木一)。 ※角書「高師直／塩谷判官」。 ※「此度長谷川清七新工風ヲこらしまくなし四十七段返し二取組奉御覧二入候猶また七やく早替り西川伊三郎」(番付口上)。 ※『染太夫一代記』に五代目染太夫の役場を「『忠臣蔵』にては九冊目、寺岡平右衛門」と記す。	高師直(伊三郎)、若狭の助(国五郎)、塩谷判官(半三郎)、顔よこせん(六三)、加古川本蔵(東作)、とな瀬(伊三郎)、小なみ(万治郎)、大ほし力弥(常吉)、鷺坂伴内(東九郎)、早の勘平(伊三郎)、こし元おかる(六三)、斧九太夫(国五郎)、大星由良之助(伊三郎)、百性一兵衛(伊三郎)、斧定九郎(伊三郎)、はゞ(半三郎)、寺岡平右衛門(重五郎)、おいし(重五郎)、天川や義平(新十郎)、おその(六三)。
1829	文政12	8/4~	御霊社内	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目まで	大序(桐、若事巴)、桃井館のだん(口和佐、おく頼)、鎌倉御殿の段(口道、切生駒)、扇が谷の段(湊)、二つ玉のだん(口勝事綾、おく半)、勘平住家の段(口佐渡、切君)、祇園一力の段(かけ合巴・歌代事巴勢・和佐・綾・頼・君・湊)、道行旅路の嫁入(頼・ツレ和佐)、山科の段(口生駒、切巴)。 ※角書「高師直／塩谷判官」。 ※「尤切浄るり迄残らずまくなしにて奉御覧入候」(番付)。 ※二代目鶴沢清八旧蔵番付に次の書込みがある。「勝次郎サ、ヤ師此時二世清七と改名シテ九段目と(中略)弾カレシナリ」。	高ノ師直(金吾)、若狭之介(新四)、塩谷判官(東十郎)、かほよ御ぜん(東三)、加古川本ぞう(東十郎)、となせ(国八)、娘小なみ(東十郎)、大ほし力弥(朝之助)、さぎ坂伴内(新四)、早野勘平(金四)、おかる(国八)、斧九太夫(朝右衛門)、大星由良ノ助(金吾)、与一兵へ(源吾)、斧定九郎(東十郎)、勘平母(勢造)、寺岡平右衛門(金四)、おいし(勢造)。
1830	文政13	3	京 四条北側芝居	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目迄	鶴ヶ岡(口巴津、切当賀)、松切(口房、切磯)、殿中(口出羽、切鐘)、扇ヶ谷(政、跡当賀)、二つ玉(口筆戸、ラク出羽)、山崎(中三津、切磯)、川狩(口当能、ラク鐘)、宮内屋敷の段(口錦、中磯、切筆)、一力表の段(筆戸)、一力(カケ合政・筆・歌代事巴勢・鐘・出羽・巴津)、道行(シテ錦・ツレ三津)、山科(口当賀、切あい玉事組)。 ※角書「塩谷判官／高師直」。 ※「二つ玉のだん かん平／定九郎／与一兵へ 吉田才治／右三役出づかひ早替りにて相勤申候」(番付)。	師直(才治)、若狭の介(辰造)、はん官(東十郎)、かほよ御前(辰造)、本蔵(東十郎)、となせ(才治)、小なみ(辰造)、力弥(勇之介)、ばん内(九孝)、かん平(才治)、おかる(辰造)、九太夫(鬼市)、由良之介(才治)、与一兵衛(才治)、定九郎(才治)、勘平はゞ(伊十郎)、平右衛門(弥三郎)、おいし(弥三郎)。
1830	文政13	4/10~	名古屋 清寿院御境内 芝居	仮名手本忠 臣蔵 大序より 幕なし	大序(喜代、音羽)、二つ目(口橋、おく駒)、三つ目(口音羽、切谷)、四つ目(音)、五つ目(口岩、おく長門、与市兵へ／定九郎／勘平 吉田金四／早替り出づかひ二而相勤申候)、六つ目(口音羽、切駒)、七つ目(カケ合綱・重・音・長門・谷・理・藤)、そうか場(口寿、おく長門)、喜内住家の段(口音、切綱)。 ※角書「高師直／塩谷判官」。 ※「去ル寛政二戌年四十一ヶ年已前稻荷御社内にて興行仕候通り大道具大仕掛相改舞台は勿論場一面に引わけせり上ヶ仕奉御覧入候」(番付口上)。	師直(金四)、若さの介(喜十郎)、はん官(清七)、かほよ御ぜん(新十郎)、本ぞう(与吉)、となせ(三吾)、小なみ(清七)、力弥(亀吉)、はん内(東造)、勘平(金四)、おかる(三吾)、九太夫(金助)、由う(ママ)良之介(金四)、与市兵へ(金四)、定九郎(金四)、与市兵へはゞ(金助)、平右衛門(与吉)。
△ 1830	文政13	7/13以前	江戸 芝神明社内芝 居	忠 臣 蔵	九冊目。 ※『染太夫一代記』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
1830	文政13	8/8~	いなり境内	仮名手本忠臣蔵	鶴が岡の段(口高、次桐、おく三根)、桃ノ井館の段(口淀、おく氏)、鎌倉御殿の段(口島、切久)、扇ヶ谷の段(切巴、跡島)、二つ玉の段(口八木、おく久、勘平/定九郎/与一兵へ吉田才治/右三やく出づかひ早かわりにて相つとめ申候)、勘平住家の段(口三根、切氏)、祇園一力のだん(かけあいむら・淀・八木・雛・春・巴津・家・島・氏)、道行旅路の嫁入(三根・ツレ島=勇造)、山科の段(口淀、切むら)。 ※角書「高ノ師直/塩谷判官」。 ※「大序より切浄るり迄一日まくなしにて奉御覧ニ入候」(番付)。	高ノ師直(よ十)、若狭之介(辰造)、塩谷判官(岩五郎)、おく方かほよ(重五郎)、加古川本蔵(岩五郎)、となせ(辰五郎)、娘小なみ(駒造)、大ぼし力弥(松助)、鷺坂伴内(多津助)、早野勘平(才治)、おかる(辰造)、斧九太夫(よ十)、大星由良ノ助(辰五郎)、百性与一兵へ(才治)、斧定五(ママ)郎(才治)、与市兵へ女房(三左衛門)、寺岡平右衛門(才治)、おいし(三左衛門)。	
1831	天保2	10/8~	道頓堀若太夫芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より敵討まで	大序(綾)、二つ目(口理、中筆戸、おく阿蘇)、三つ目(口綾、切時)、四つ目(筆)、五つ目(口文字、おく綾)、六つ目(中三根、切綱)、七つ目(かけあい由良ノ助一筆・九太夫一時・伴内一綾・弥五郎一当賀・喜多八一名田・仲みおぬい一縫・ていしゆ一喜代・重太郎一当摩・力弥一筆戸・おかる一巴勢・平右衛門一組)、八つ目 道行旅路の嫁入(巴勢・ツレ三根)、九つ目(口阿蘇、切組)、十段目(口時、切巴勢)、勢揃のだん(理、当賀)、師直屋敷段(三根)、敵討のだん(当摩、喜代、富、縫、名田)。 ※角書「高師直/塩谷判官」。	高ノ師直(千四)、若狭之介(辰造)、塩谷判官(新吾)、かほよ御ぜん(三吾)、加古川本蔵(新吾)、となせ(辰五郎)、小なみ(辰造)、力弥(駒造)、さき坂伴内(清七)、早野勘平(千四)、おかる(三吾)、九太夫(弥三郎)、由良之介(千四)、与市兵へ(金助)、定九郎(清七)、勘平母(辰造)、寺岡平右衛門(新吾)、おいし(三吾)、天河や義平(弥三郎)、女房おその(辰五郎)。	
△	1831	天保2	11/2	江戸千住大黒屋	忠臣蔵 四冊目。 ※『染太夫一代記』に拠る。		
△	1831	天保2	11下旬	下野奈佐原松屋	忠臣蔵 三ツ目(園)。 ※『染太夫一代記』に拠る。		
	1832	天保3	3	北ほり江市の側芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より九段目迄	鶴ヶ岡のだん(い、鹿、富士)、桃の井館の段(口歳、おく筑後)、鎌倉御殿の段(口高、切島、跡巴津)、扇ヶ谷の段(浪、跡富)、二つ玉のだん(口高、おく千賀)、勘平住家の段(口三根、切巴)、祇園一力のだん(かけあい由良助一住・おかる一氏・平右衛門一浪・九太夫一島・伴内一富・力弥一律・諸士一歳)、道行旅路の嫁入(シテ三根・ツレ倉)、山科の段(口島、切住)。 ※角書「高師直/塩谷判官」。	高ノ師直(与十)、もゝノ井若狭之介(新治)、塩谷判官(文三)、かほよ御ぜん(重五郎)、加古川本蔵(弥三郎)、となせ(辰五郎)、小なみ(辰造)、大ぼし力弥(東三)、さき坂伴内(多津助)、早の勘平(新吾)、おかる(辰五郎)、斧九太夫(与十)、大星由良之助(兵吉)、与一兵へ(新吾)、定九郎(新吾)、与一兵へ女房(源十郎)、寺岡平右衛門(才治)、おいし(小辰)。
	1832	天保3	4	兵庫生田境内	仮名手本忠臣蔵 大序より七つ目まで	鶴ヶ岡のだん(吾妻=藤吉)、桃井館のだん(口石源=平四、切南吉=前三)、殿中のだん(口北谷=伊助、中官六=平四、切魚九=伊助)、塩治館のだん(口茶弥=前三、切塩新=平四、人形出づかひ)、二つ玉のだん(口小茶弥=百助、切茶由=伊助)、勘平住家の段(口瓜義=前三、切茶一=百助)、祇園一力のだん(かけ合茶弥・茶一・瓜義・南吉・茶由=百助、人形出づかひ)。 ※素人玄人打交ぜ興行。	高ノ師直(才治)、わかさ之介(辰助)、判官(新治)、かほよ御ぜん(勢造)、かこ川本ぞう(新治)、となせ(東三)、娘小なみ(源十郎)、力弥(東三)、さき坂伴内(辰助)、早ノ勘平(文三)、おかる(才治)、九太夫(源十郎)、大星由良之介(兵吉)、与一兵へ(源吾)、勘平母(源十郎)、寺岡平右衛門(文三)。
△	1832	天保3	8/29	江戸品川本宿川熊	忠臣蔵 四ツ目(実カ)。 ※『染太夫一代記』に拠る。		

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1832	天保3	10	兵庫 兵庫津芝居	仮名手本忠 臣蔵	鶴ヶ岡の段（口 い、おく 浅）、桃井館の段（口 河内、おく 筑 庫）、鎌倉御殿段（口 古野、切 浪、跡 音羽）、扇が谷の段 （筆）、二つ玉の段（口 律、おく 古野、定九郎／与一兵へ／おか る 吉田兵吉／右三やくとも出づかひ早がわりにて相つとめ申候）、 勘平住家段（口 筑庫、切 浪）、祇園一力の段（かけ合 由良之助 一筆・平右衛門一巴・九太夫一浪・おかる一三根・伴内一音羽・力弥 一工賀・諸士一浅）、道ゆき 旅路の嫁入（三根・ツレ 河内）、山科 の段（口 音羽、切 巴）、天河屋の段（口 工賀、切 三根）、敵う ちの段（かけ合 さの・い）。 ※語り「高ノ師直が難題はおもきがうへのさよごろも折紙にきらめく しんもつの大黄／塩治判官が返歌はつまなかさねそのくろしやうぞく 夜目にかゝやくめうじの大星」。 ※「大序より敵討迄まくなしにて奉御覧に入候」（番付）。	高ノ師直（才治）、若狭之介（辰助）、塩治 判官（源十郎）、かほよ御前（重五郎）、加 古川本蔵（与十）、となせ（兵吉）、娘小な み（辰助）、大ぼし力弥（吉之助）、さき坂 伴内（辰助）、早野勘平（文三）、おかる （兵吉）、九太夫（与十）、大星ゆら之介 （才治）、与市兵衛（兵吉）、斧定九郎（兵 吉）、かん平母（源十郎）、寺岡平右衛門 （文三）、おいし（東三）、天河や義平（与 十）、おその（源十郎）。
1833	天保4	5/7~	江戸 結 城 座	仮名手本忠 臣蔵 拾壹だんつ 一き	大序（張）、二つ目（口 沢、切 下り 文字）、三つ目（口 若佐、切 張）、四つ目（要）、五つ目（夏）、六つ目（口 下り 倉、切 下り 文字）、七つ目（惣かけ合）、八つ目（絹・ワキ 羽摩）、九つ目 （口 文字、切 入）、拾段目（口 夏、切 絹）、夜討之段（弦＝吉左 衛門）。 ※角書「高師直／塩治判官」。	高師直（幸五郎）、桃井若狭之助（六治 郎）、塩治判官（新十郎）、おくかたかおよ ごぜん（万治郎）、加古川本蔵（幸五郎）、 本蔵女ほうとなせ（六三）、本蔵娘小浪（万 治郎）、大星力弥（兼三郎）、鷺坂伴内（六 治郎）、早野勘平（伊三郎）、こし元おかる （六三）、斧九太夫（久太郎）、大星由良之 助（伊三郎）、百性与市兵へ（門三）、斧定 九郎（新七）、勘平はゝ（門三）、寺岡平右 衛門（幸五郎）、由良之助女ほうおいし（喜 代松）、天川や義平（新十郎）、義平女ほう おその（新七）。
1833	天保4	7/29~	稲荷境内	仮名手本忠 臣蔵 大序より かたき討迄 まくなし	大序（湊、千賀）、式冊目（口 錦、おく 三根）、三冊目（口 島、 切 むら）、四冊目（切 長門、跡 音羽）、五冊目（口 千賀、おく 谷）、六冊目（口 三根、切 むら）、七冊目（かけ合 由良之介一 住・伴内一谷・力弥一湊・仲居一由良・おかる一巴勢・諸士一芝・十 太郎一音羽・九太夫一島・平右衛門一長門）、八冊目（三根・ツレ 錦）、九冊目（口 長門、切 住）、十冊目（口 谷、切 巴勢）、勢揃 へ（由良、志賀）、十一冊目（かけ合 雛・三保・さと・歳・栄・出 水・力・小賀）。 ※角書「高師直／塩谷判官」。 ※語り「兜の目きゝはれんぼの発端殿の短慮に思ひ切たる松の一枝武士 の意気地はうらみの切先殿中のそうどうにひらいてわたした扇がや つの城外で主人のむねんをうけついでる九寸五ぶは義士の一つ心／狩 人の目あてはうつつかはつた舅の敵も早まつた早野が後悔先二立たる 仲居の勢揃へも大尽の鑄刀磨上たる娘が貞女母諸共に嫁入の解ても解 ぬ雪こかしの五りん五体は男一疋天と川との合詞二本望とげたる大願 成就」。	高師直（門蔵）、若狭之助（清七）、塩谷判 官（岩五郎）、かほよ御せん（歌六）、加古 川本蔵（東十郎）、となせ（辰五良）、娘小 なみ（小辰）、力弥（朝之助）、さき坂伴内 （清七）、早ノ勘平（金四）、おかる（辰五 良）、九太夫（岩五郎）、由良之介（門 蔵）、与市兵へ（朝右衛門）、定九郎（岩五 郎）、与一兵へ女房（東十郎）、寺岡平右衛 門（金四）、おいし（清七）、天河や義平 （東十郎）、おその（小辰）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1833	天保4	9	京 四条南側大芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目まで	大序(和国、琴、さの)、二つ目(口い、おく氏)、三つ目(口氏尾、切岡)、四つ目(筆)、五つ目(口頼母、おく岡)、六つ目(口久、切氏)、七つ目(カケ合 由良之助一筆・おかる一重・平右衛門一巴・九太夫一岡・伴内一筆戸・諸士一頼母・力弥一氏尾)、八つ目 道行(シテ 久・ツレ 律=咲治)、九つ目(口筆戸、切巴)。 ※角書「高師直ノ塩谷判官」。	高師直(千四)、桃井若狭之介(門三)、塩谷判官(文三)、かほよ御前(重五郎)、加古川本蔵(文三)、となせ(兵吉)、小なみ(辰造)、力弥(東三)、ばん内(辰助)、早野勘平(文三)、おかる(辰造)、斧九太夫(門三)、大星由良之助(千四)、与一兵衛(門三)、斧定九郎(辰助)、勘平母(東三)、寺岡平右衛門(兵吉)、おいし(辰助)。
1834	天保5	3/27~	名古屋 清寿院芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より 敵討迄	大序(口巴磨、跡和国)、武段目(口名田、おく雛)、三段目(口筆戸、切入)、四段目(筆)、五段目(口理、跡寿)、六段目(口さの、切氏)、七だん目(カケ合 筆・巴・氏・筆戸・寿・理・名田)、八段目(理・さの・和国)、九段目(口筆戸、切巴)、十段目(口雛、切入)、十一段目(巴磨、名田、和国)。 ※角書「高師直ノ塩治判官」。	師直(千四)、若狭之介(東造)、はん官(新治)、かほよ(辰治)、本蔵(新治)、となせ(三吾)、小なみ(辰治)、力弥(松助)、ばん内(八十八)、勘平(千四)、おかる(三吾)、九太夫(東造)、由良之介(千四)、与市兵へ(千四)、斧定九郎(千四)、与一兵へば(辰治)、平右衛門(新治)、おいし(新十郎)、儀平(東造)、おその(三吾)。
1834	天保5	8/28~	いなり境内	仮名手本忠臣蔵	鶴ヶ岡の段(口巻、おく家、島)、桃井館の段(口さど、おく淀)、御殿のだん(口志賀、淀、切岡)、扇ヶ谷の段(氏)、二つ玉の段(口為、おく岡、勘平ノ定九郎ノ与一兵へ 吉田金四ノ右三やく早かわりにて相つとめ申候)、勘平住家ノ段(口島、切住)、祇園一力のだん(かけあい 平右衛門一むら・おかる一巴勢・伴内一淀・仲居一家・力弥一為・諸士一志賀・九太夫一岡・ゆら之助一住)、道行 旅路の嫁入(シテ 巴勢・成駒事 絹)、山科のだん(口氏、切むら)。 ※角書「高の師直が難題の意趣ノ塩治判官が返歌の遺恨」。 ※「大序より九段目迄并に大切鉢の木までまくなしにて奉御覧二入候」(番付)。	高ノ師直(東十郎)、若狭之介(門三)、塩治判官(徳蔵)、かほよ御前(猪三郎)、本蔵(徳蔵)、となせ(辰五良)、娘小なみ(清七)、力弥(亀造)、伴内(清七)、勘平(金四)、おかる(辰五良)、九太夫(朝右衛門)、由良之助(門蔵)、与一兵へ(金四)、定九郎(金四)、与一兵へ女房(東十郎)、寺岡平右衛門(金四)、おいし(門三)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1834	天保5	8	堺 宿院芝居	仮名手本忠 臣蔵 大序より かたき討迄	大序(口当和、おく組)、式冊目(口艶、切錦)、三冊目(口当米、切入)、四冊目(筆)、五冊目(口名田、おく由良、定九郎ノ与一兵へノ勤平 三やく早がはり 吉田新吾ノ度一相勤古めかしく候得ともだんノ御す一めに預り御意にしたがひ又一相勤申候間此段御用捨可被下候)、六冊目(口筆の、切長門)、七冊目(かけ合由良之介一筆・平右衛門一長門・九太夫一錦・おかる一筆の・伴内一由良・力弥一艶・諸士一当和)、八冊目 道行(筆の・ツレ名田)、九冊目(口錦、切組)、十冊目(口由良、切入)、大切 敵うち(由良、当和)。 ※角書「高師直ノ塩冶判官」。 ※語り「兜の目きよはれんほの発端殿の短慮二思ひ切たる松の一枝武士の意気地はうらみの切先殿中のさうどうにひらいて渡した扇がやつ城外で主人のむねんをうけついでる九寸五分は義士の一つ心ノ狩人の目あてはうつてかはつた舅の敵も早まつた早野の後悔先立たる仲居の勢揃へも大しんの鑄刀みがき立たる娘が貞女母諸共に嫁入の解でも解ぬ雪こかし五輪五たいは男一疋天と川との合詞に本望とげたる大願成就」。	高ノ師直(新吾)、若狭之介(新治)、塩冶判官(冠四)、かほよ御せん(国八)、本ぞう(冠蔵)、となせ(国八)、小なみ(新三)、大ほし力弥(虎造)、伴内(冠四)、かん平(新吾)、おかる(国八)、九太夫(門二)、由良之介(新吾)、与一兵衛(新吾)、定九郎(新吾)、勤平母(冠蔵)、平右衛門(新治)、おいし(新治)、天川や義平(冠四)、おその(国八)。
1834	天保5	10中旬	奈良 瓦堂芝居	仮名手本忠 臣蔵 大序ヨリ 大切マテ	鶴か岡之段(口当和、切多満)、桃井やかたノ段(口加、切若)、鎌倉御殿の段(口当米、切入)、扇ヶ谷の段(筆)、二つ玉の段(口名田、切多満、勤平ノ定九郎ノ与一兵衛 吉田新吾ノ右三やく早かわりニて相勤申候)、勤平住家ノ段(口当能、切若)、祇園一力之だん(かけ合筆・若・多満・入・加・三根・組)、旅路の嫁入 道行(シテ三根・ツレ名田)、山科の段(口浜、切組)、天川屋内ノ段(口入、切三根)、敵討之段(当米、当和)。 ※角書「高ノ師直ノ塩谷判官」。	高野師直(新吾)、桃井若狭之助(一橋)、塩谷判官(冠四)、かほよ御せん(辰治)、かこ川本蔵(冠造)、本蔵女房となせ(新吾)、本蔵娘小なみ(新三)、大星力弥(虎吉)、鷺坂伴内(国五郎)、早の勤平(新吾)、おかる(辰造)、斧ノ九太夫(門治)、大星由良之助(新吾)、与一兵衛(新吾)、斧ノ定九郎(新吾)、勤平母(辰治)、寺岡平右衛門(一橋)、由良ノ介女房お石(辰治)、天川屋義平(冠四)、おその(一橋)。
△ 1835	天保6	2/4~	名古屋 広小路神明社	忠 臣 蔵	(惣掛合)。 ※『見世物雑誌』、『名陽見聞図会』に拠る。	
1835	天保6	閏7/19~	座摩社内	仮名手本忠 臣蔵	鶴ヶ岡の段(口相生、おく由良)、桃井館の段(口登勢、おく実)、鎌倉御殿ノ段(口登志、切八重)、扇ヶ谷の段(若)、横田川の段(実)、茅野村の段(口由良、切鞆)、祇園一力之だん(かけ合 由良之介一麓・九太夫一実・力弥一信・おかる一三光齋・諸士一登志・伴内一い・平右衛門一若)、道行 旅路の嫁入(シテ八重・信・ツレ相生)、山科の段(口鞆、切麓)。 ※語り「高ノ師直が難題の意趣ノ塩冶判官が返歌の遺恨」。 ※「大序より大切八陣迄まくなし二奉御覧入候」(番付)。 ※「横田川の段」「茅野村の段」の代わりに「二ツ玉の段(口相生、おく実)」「勤平住家ノ段(口由良、切鞆)」とし、人形役割に定九郎(与十郎)、勤平母(東十郎)とある別番付あり。	高ノ師直(与十郎)、若狭之助(鬼十郎)、塩冶判官(清七)、かほよ御前(重五郎)、加古川本蔵(東十郎)、となせ(辰造)、娘小なみ(篤次郎)、力弥(吉之助)、伴内(東造)、勤平(清七)、おかる(辰造)、九太夫(源吾)、大星由良之助(与十郎)、平右衛門(東十郎)、おいし(重五郎)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1835	天保6	10	京 京四条道場芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目まで	大序(口当美、後鳳雄)、式段目(口今、おく越)、三段目(口弥宗、中当能、切筆戸)、四段目(鞞)、五段目(口枅、おく多満、勘平／与一兵へ／定九郎 吉尾新吾／右三やくとも早がはり出づかひにて相つとめ申候)、六段目(口源、切鳳雄)、七段目(かけあい筆・越・多満・鞞・源・筆戸・組)、八段目(シテ当磨・ツレ源)、九段目(口筆戸、切筆)。 ※角書「高ノ師直／塩谷判官」。 ※人形役割の平右衛門と塩谷判官を吉尾冠四、斧九太夫を吉尾文字、天川や義兵衛を吉尾一橋とする別番付あり。	高ノ師直(新吾)、若狭之介(東三)、塩谷判官(一橋)、かほよ御前(辰治)、本ぞう(冠四)、となせ(国八)、娘小なみ(市太郎)、大星力弥(国五郎)、伴内(亀蔵)、勘平(新吾)、こう(ママ)しもとおかる(国八)、斧九太夫(門二)、由良之介(新吾)、与市兵へ(新吾)、定九郎(新吾)、勘平母(辰治)、平右衛門(一橋)、おいし(辰治)、天川や義平(冠四)、おその(国八)。
1836	天保7	7/16~	金沢 川上芝居	仮名手本忠臣蔵 十巻冊続	鶴ヶ岡ノ段(美津)、三つ目(口房、切百合)、四つ目(阿蘇、おく房)、五つ目(美津、吉田文吉／早替り相勤候)、六つ目(口百合、切中)、七つ目(掛合 由良之助-阿蘇・おかる一岩・九太夫-美津・ひらい一房・伴内-百合・平右衛門-中)、道行(カケ合 岩・房・美津)、九つ目(口百合、切阿蘇)、十段目(口歳、中中、切岩)。 ※角書「高野師直／塩谷判官」。	高ノ師直(六蔵)、若さ之助(歌五郎)、判官(弥十郎)、かほよ(庄助)、本蔵(冠三)、となせ(冠孝)、小なみ(庄助)、力弥(為七)、伴内(冠二)、勘平(文吉)、おかる(伝八)、九太夫(冠三)、由良之助(冠孝)、与市兵へ(文吉)、定九郎(文吉)、ばゝ(庄助)、平右衛門(冠吾)、おいし(弥十郎)、義平(冠吾)、おその(伝八)。
1836	天保7	11/1~	稲荷境内	仮名手本忠臣蔵 大序より 大切敵討迄 幕なし	鶴ヶ岡の段(妻、新)、桃井館の段(口巴満、おく綾)、鎌倉御殿の段(口さと事 美咲、切長門)、扇が谷の段(切綱)、二つ玉の段(美咲、綾、勘平／定九郎／与市兵へ 吉田金四／右三やく出づかひ早がわりにて相つとめ申候)、勘平住家ノ段(口岡、切勢イ見)、祇園一力の段(かけ合 由良之介-綱・九太夫-勢イ見・伴内一綾・諸士-巴満・仲居-妻・力弥-美咲・おかる一岡・平右衛門-長門)、道行 旅路の嫁入(三根・美咲)、山科の段(口岡、切住)、天川屋の段(口綾、切長門)、勢揃への段(美咲)、敵討の段(巴満、新)。 ※角書「高師直／塩谷判官」。	高ノ師直(東十郎)、桃ノ井若狭之介(勝造)、塩谷判官(徳蔵)、かほよ(勝信)、加古川本蔵(徳蔵)、となせ(辰五郎)、小なみ(辰造)、大星力弥(徳次郎)、鷺坂伴内(門三)、早野勘平(金四)、おかる(辰五郎)、斧九太夫(源吾)、大星由良之介(門蔵)、百姓与一兵へ(金四)、斧定九郎(金四)、勘平母(東十郎)、寺岡平右衛門(金四)、おいし(重五郎)、天川や儀平(勝造)、おその(辰造)。
△ 1837	天保8	3/28~	名古屋 大須本堂うしろ芝居小屋	忠臣蔵	(浪=文しち)。 ※『見世物雑誌』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1838	天保9	1/17~	北堀江市の側芝居	仮名手本忠臣蔵拾巻冊	鶴が岡の段(口歳、おく当磨)、桃井館の段(筆戸)、鎌倉殿中の段(口滝、切八重)、扇ヶ谷の段(筆)、一文字やの段(実)、二つ玉の段(実、吉田兵信/此所出遣ひ早がわりにて相つとめ申候)、勘平住家の段(口い、切靱)、祇園一力の段(かけ合 由良ノ助一組・九太夫一実・重太郎一い・喜多八一律・おかる一三光齋・弥五郎一滝・力弥一歳・ばん内一多満・平右衛門一靱/此所惣出がたり出づかひにて相つとめ申候)、道行 五十三次の段(シテ 操・ツレい・信・元、吉田兵信/此所出づかひ早がわりにて相つとめ申候)、山科の段(口当磨、切組)、堺大寺の段(多満)、芝居表の段(歳)、天川屋の段(口筆戸、切操)、両国ばし勢揃の段(登名、当喜)、大切 敵うちの段(惣かけ合、吉田兵信/此所出づかひ早がわりにて相つとめ申候)。 ※「大序より大切までまくなし」(番付)。 ※「当忠臣蔵浄瑠璃裏表四十七段がへしと仕新工夫の道具さし加へ大序より大切敵討まで幕なしにて奉御覧入候」(番付口上)。	高ノ師直(兵信)、桃井若狭之助(新五郎)、塩谷判官(文三)、かほよ御前(八蝶)、加古川本蔵(国五郎)、となせ(兵信)、娘小なみ(新五郎)、大星力弥(吉之助)、鷺坂伴内(文蔵)、早野勘平(兵信)、おかる(兵信)、斧九太夫(冠四事 九幸)、大星由良ノ介(千四)、百姓与一兵へ(兵信)、定九郎(兵信)、勘平はゞ(喜十郎)、寺岡平右衛門(文三)、おいし(東三)、天川や義平(冠四事 九幸)、義平女房その(喜十郎)。
1838	天保9	3	京誓願寺芝居	仮名手本忠臣蔵大序より大切まで	鶴ヶ岡の段(登名)、桃井屋敷の段(筆戸)、鎌倉殿中の段(口巴磨、切実)、扇ヶ谷の段(君)、一文字やの段 二つ玉の段(実、吉尾兵信/此所出づかひ早替りにて相勤申候)、勘平住家の段(口錦、切入)、祇園一力の段(カケ合 君・実・巴磨・三光齋・増・道・若)、道行 五十三次の段(カケ合 錦・道・都賀、吉尾兵信/此所出遣ひ早がはり相つとめ申候)、山科の段(口筆戸、切三光齋)、天川やの段(口豊、切入)、両国橋の段(登名)、大切 敵討の段(増、吉尾兵信/此所出づかひ早替りにて相勤申候)。	高ノ師直(兵信)、若狭之介(新五郎)、塩治判官(喜十郎)、かほよ御前(八蝶)、加古川本蔵(文三)、となせ(国八)、小なみ(新五郎)、大星力弥(清五郎)、さぎ坂伴内(文蔵)、早野勘平(兵信)、おかる(国八、六つ目=兵信)、斧九太夫(朝右衛門)、由良之助(兵信)、与一兵へ(兵信)、定九郎(兵信)、勘平はゞ(喜十郎)、寺岡平右衛門(文三)、おいし(東三)。
1838	天保9	4	播州明石川	仮名手本忠臣蔵大序より大切まで	鶴ヶ岡の段(登名)、桃ノ井屋敷の段(筆戸)、鎌倉殿中の段(口巴磨、切実)、扇ヶ谷の段(若)、一文字やの段 二つ玉の段(実、吉田兵信/此所出づかひ早替りにて相勤申候)、勘平住家の段(口錦、切入)、祇園一力の段(カケ合 筆・実・巴磨・操・増・多満・若)、道行 五十三次の段(カケ合 錦・道・巴磨、吉田兵信/此所出遣ひ早がはり相つとめ申候)、山科の段(口筆戸、切筆)、天川やの段(口豊、切操)、両国橋の段(登名)、大切 敵討の段(増、吉田兵信/此所出づかひ早替りにて相勤申候)。	高ノ師直(兵信)、若狭之介(新五郎)、塩治判官(喜十郎)、かほよ御前(八蝶)、加古川本蔵(文三)、となせ(国八)、小なみ(新五郎)、大星力弥(清五郎)、さぎ坂伴内(文蔵)、早野勘平(兵信)、おかる(国八、六つ目=兵信)、斧九太夫(朝右衛門)、由良之介(兵信)、与一兵へ(兵信)、定九郎(兵信)、勘平はゞ(喜十郎)、寺岡平右衛門(文三)、おいし(東三)。
1839	天保10	1/1~	江戸結城座	仮名手本忠臣蔵拾巻だんつき	鶴が岡の段(浪)、桃井屋しき(口巴世、奥由良)、足利御殿(口須磨、中泉、切紋)、判官館(切氏、跡由良)、二ツ玉(口増、奥文字)、勘平住家(口程、切額)、茶屋場(カケ合 染・紋・増・須磨・久賀・浅・松尾・程・氏)、道行の段(シテ 津瑠・ツレ 巴世)、山科の段(口文字、切染)、与茂七住家(口泉、切浪)、勢揃の段(松尾)、敵討の段(浅、菊、浪戸)。 ※角書「高野師直/塩谷判官」。	高の師直(伊三郎)、桃井若狭之介(兼三郎)、塩谷判官(幸五郎)、かほよ(力造)、加古川本蔵(新十郎)、となせ(千四)、小なみ(六三)、大星力弥(兼三郎)、鷺坂伴内(虎蔵)、早野勘平(伊三郎)、おかる(千四)、斧九太夫(六二)、大星由良之介(伊三郎)、百姓与一兵衛(幸五郎)、定九郎(千四)、勘平母(力造)、寺岡平右衛門(冠二)、おいし(幸五郎)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1839	天保10	3/8~	徳島二軒屋 長見寺	忠 臣 蔵	※『元木家記録』に「二軒屋長見寺二而久太夫芝居出来初日三月八日（中略）、出し物始楠迄其次花木屋夫よりお染質店末忠臣蔵懸合由良之助九段目、始終不評判当り不申候、質店之節余程大入、其後不景氣、元請大損四月十九日迄」とあるに拠る。	
1839	天保10	3	道頓堀東竹田 芝居	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目迄 幕なし	鶴ヶ岡のだん（口 加、おく 小松）、桃ノ井館のだん（生駒）、鎌倉殿中ノ段（口 喜代、切 中、跡 綾）、扇ヶ谷のだん（切 咲ノ鞆 右 両人毎日かわり）、城わたしの段（跡 小松）、二つ玉のだん（口 巴 磨、おく 中）、おかる身売ノ段（口 越）、勘平住家ノ段（切 鞆ノ 咲 右両人毎日かわり）、祇園一力のだん（かけあい 由良ノ助一長 門・平右衛門一鞆・伴内一越・諸士一綾・力弥一三根・九太夫一咲・ おかる一大隅）、道行 旅路の嫁入（越・ツレ 綾）、山科の段（口 三根、切 長門）。 ※角書「高ノ師直ノ塩治判官」。 ※「切浄瑠璃大念仏開帳の場吉田金四早かわり巴磨太夫役場にて三味線鶴沢安治郎後清八也右の役場替り役申付られて其夜初て床に入て勤る巴磨太夫病氣段々重りて終には千秋楽迄勤る其明る日鳴尾崎の段勤て其明る日忠臣蔵二ツ玉の段又殿中の段尤此時分には風邪流行にて日々病氣多く上の役は小松太夫是後に弥太夫なり下の役は登茂太夫にて勤芝居は大当りにて五十余日勤る也」（『増補浄瑠璃大系図』竹本登茂太夫の項）。 ※人形役割の斧定九郎を吉田金三、斧九太夫・与一兵へ女房・おいしを吉田文三とする別番付あり。	高野師直（門蔵）、もゝノ井若狭ノ助（新作）、塩治判官（金三）、かほよ御前（国五郎）、加古川本蔵（東十郎）、となせ（国八）、娘小なみ（新作）、大星力弥（金之助）、さき坂伴内（新作）、早野勘平（金四）、おかる（国八）、斧九太夫（金三）、大星由良之介（門蔵）、百性与一兵へ（朝右衛門）、斧定九郎（文三）、与一兵へ女房（文三）、寺岡平右衛門（金四）、おいし（文三）。
1839	天保10	10	竹田芝居	仮名手本忠 臣蔵	山しなのだん（十二才 豆熊＝仙助）。 ※「梅の浪花子供遊」の内。 ※子供浄瑠璃。	本ぞう（金花）、となせ（辰之助）、小なみ（政吉）、力弥（政吉）、ゆらの介（小三郎）、おいし（福之助）。
1840	天保11	2/22~	稲荷社内東芝 居	仮名手本忠 臣蔵 大序ヨリ 大切まで	鶴ヶ岡の段（鶴、真鳥、町）、桃井屋敷ノ段（おく 佐賀）、追手口の段（口 音、おく 頼母）、鎌倉御てんノ段（切 梶）、扇ヶ谷のだん（切 大隅＝清六、跡 佐賀）、山崎の段（口 琴、おく 氏）、勘平住家の段（中 はる、切 綱）、一力の段（かけ合 由良之介一重事 政・おかる一大隅・ばん内一佐賀・ていしゆ一町・仲居一曾根・力弥一頼母・九太夫一梶・平右衛門一綱）、両国橋の段（琴）、道行のだん（大隅・ツレ はる・ワキ 曾根、此所にて七やく 吉田兵吉ノ右出づかひ早がはりにて相つとめ申候）、山科の段（口 梶、切 重事 政）、堺浜寺ノ段（口 音）、天川やの段（中 はる、切 氏）、勢揃への段（琴）、敵討の段（曾根、梶馬）。 ※角書「高ノ師直が難題の意趣ノ塩谷判官が返歌の遺恨」。 ※六代目染太夫（この時梶太夫）の番付書込みに「二月廿四日より四月十五日迄日数四十九日続」、「山崎段氏太夫かわり役半月勤ル」、「天川屋氏太夫かわり役三日勤ル 三味線勝七」、「九段目政太夫かわり役五日勤ル 三味線広助 吉田兵吉かわり役の口上」などとある。また、二代目鶴沢清八旧蔵番付の「一力の段」の上に「掛合この七ツ目三世広助」、「山科の段」の上に「広助」などの書込みがある。	高師直（国五郎）、桃ノ井若狭之介（喜十郎）、塩谷判官（徳造）、かほよごぜん（重五郎）、加古川本蔵（国五郎）、となせ（辰五郎）、娘小なみ（新五郎）、大星力弥（咲造）、鷺坂ばん内（文蔵）、早野勘平（辰造）、おかる（辰五郎）、斧九太夫（源吾）、大星ゆらの介（兵吉）、百性与一兵衛（源吾）、斧定九郎（兵吉）、かん平はゝ（喜十郎）、寺岡平右衛門（徳造）、おいし（辰造）、天川や儀平（徳造）、おその（辰五郎）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1840	天保11	2	名古屋 清寿院御境内	仮名手本忠 臣蔵	山料（ママ）のだん（小操、豆熊）。	ほんぞう（福之助）、となせ（正吉）、小な み（玉造）、力弥（金花）、由良之介（正 吉）、おいし（巳之助）。
1840	天保11	4/2～	名古屋 清寿院御境内	仮名手本忠 臣蔵	十段目（操）。	由良之助（正吉）、天川や儀平（福之助）、 女房おその（玉造）。
△ 1840	天保11	4下旬～5 中旬	名古屋 清 寿 院カ	仮名手本忠 臣蔵	※『増補浄瑠璃大系図』竹本長門太夫の条に「清寿院……四月朔日よりひらかな盛衰記……同廿四日より仮名手本忠臣蔵にて扇ヶ谷九ツ目の切勤る当芝居五月十五日切にて千秋楽致し同十六日より秋葉山参詣として出立す」。竹本喜代太夫の条には「清寿院芝居……同四月二日よりひらかな盛衰記……同次に忠臣蔵勤めて五月中旬より秋葉山参詣」と、また竹本登茂太夫の条には「清寿院……四月二日よりひらかな盛衰記……同廿五日より忠臣蔵大下馬先の段城渡しの段勤め同五月十五日千秋楽」とある。竹本山四郎（寿太夫）の条には「長門太夫一座にて清寿院芝居にて……盛衰記……同五月忠臣蔵殿中の段勤る同十六日切にて千秋楽」とあり、竹本むら太夫の条には「清寿院……盛衰記……同四月十日より前忠臣蔵切に阿波の鳴戸玉造りの段勤る也」とある。初日についての記載は太夫によってまちまちであるが、清寿院の三の替興行以後に4月下旬から5月中旬にかけて「仮名手本忠臣蔵」を建狂言とする、この一座の興行があったか（『義太夫年表 近世篇』）。	
1840	天保11	5	京 四条南側大芝 居	仮名手本忠 臣蔵 十巻段	大序（口 美木、おく 高来）、弐（口 美尾、おく 錦、磯）、三（口 登賀、次 町、切 入）、四（筆）、五（口 高来、おく 多満、吉尾金 四／此所にて三役出づかひ早がわりにて相勤申候）、六（口 茂、切 若）、七（由良之介一筆・平右衛門一若・おかる一茂・九太夫一磯・ ばん内一多満・力弥一高来・重太郎一町・弥五郎一巴磨・喜多八一美 尾）、道行（シテ 茂・ツレ 錦・ワキ 当喜）、九（口 入、切 重事 政）、十（口 琴、中 茂、切 入）、かたき討の段（当喜、民）。 ※角書「高師直／塩谷判官」。	高ノ師直（門蔵）、若狭の介（金三）、塩谷 判官（文三）、かほよ御前（八蝶）、加古川 本蔵（一暁）、本蔵妻となせ（文三）、娘小 なみ（国葉）、大星力弥（重太郎）、伴内 （金三）、早の勘平（勝造）、勘平女房おか る（国八）、斧九太夫（勝造）、大星由良 之助（門蔵）、与一兵へ（金四）、定九郎（金 四）、おかるはゞ（東三）、寺岡平右衛門 （金四）、妻おいし（東三）、天川や義兵へ （一暁）、女房おその（八蝶）。
1841	天保12	7/23～	座摩西ノ芝居	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目迄	鶴ヶ岡の段（口 辰、おく 美和、八重戸）、桃井館の段（口 巴枝、 おく 八百、頼母）、鎌倉御殿の段（口 勝、切 琴、跡 峰）、扇ヶ谷 の段（咲、跡 淀）、二つ玉の段（口 峰、おく 内匠、かん平／与市 兵へ／斧定九郎／角兵へ女房 吉田文三／右四やく出遣ひ早がはりニ 而相つとめ申候）、勘平住家の段（口 頼母、切 錦翁軒）、祇園一力 のだん（カケ合 由良之介一錦翁軒・平右衛門一内匠・力弥一勝・仲 居一巴枝・諸士一吾妻・ばん内一八百・九太夫一琴・おかる一茂）、 道行旅路の嫁入（シテ 頼母・ワキ 勝・ツレ 峰）、山科の段（口 茂、切 咲＝広作）。 ※角書「高師直／塩谷判官」。	高ノ師直（新吾）、桃井若狭之助（文三）、 塩谷判官（文蔵）、かほよ御ぜん（千枝）、 加古川本蔵（文三）、となせ（国八）、娘小 なみ（千枝）、大星力弥（福之助）、鷺坂伴 内（国五郎）、早野勘平（文三）、おかる （国八）、斧九太夫（朝右衛門）、大星由良 之助（新吾）、百性一兵衛（文三）、斧定 九郎（文三）、与一兵へ女房（新吾）、寺岡 平右衛門（文三）、由良之介女房お石（国五 郎）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1841	天保12	9/27~	御霊社内	仮名手本忠臣蔵	鶴ヶ岡の段（口 元、次 百合、おく 阿蘇）、桃井館の段（口 鹿、おく 恵美）、足利殿中の段（口 浅香、切 佐賀）、塩谷館の段（阿蘇）、二つ玉の段（口 富、おく 多満）、勘平住家の段（口 錦、切 若）、祇園一力の段（かけ合 平右衛門一若・九太夫一佐賀・喜太八一浅香・重太郎一富・仲居一多賀・弥五郎一鹿・力弥一是・ばん内一多満・由良之介一勢見・おかる一三光斎）、重太郎出立の段（口 戸和、切 勢見）、道行（錦・ツレ 多賀・百合、やつこ内ノ座頭ふく市ノたいこ入八 吉田国五郎ノ此所三やく出遣ひ早かわりニ而相勤申候）、山科の段（口 恵美、切 三光斎）、天川屋の段（口 是、切 内匠＝竜造）、勢ぞろへの段（カケ合 鹿・富）、敵討のだん（民）。 ※角書「高ノ師直が難題の意趣ノ塩冶判官が返歌の遺恨」。 ※語り「兜の目きゝはれんほの発端殿の短慮に思ひ切たる松の一枝武士の意気地はうらみの切先殿中のさうどうにひらいてわたした扇がやつ城外で主人のむねんをうけついだる九寸五部は義士の一つ心ノ狩人の目あてはうつてかはつた舅の敵も早まつた早野が後悔先に立たる仲居の勢揃へも大尽の錆刀磨上たる娘が貞女母諸共に嫁入の解ても解ぬ雪こかしの五りん五躰は男一疋天と川との合詞二本望とげたる大願成就」。 ※「大序より大切りまでまくなしニ而奉御覧ニ入候」（番付）。 ※「足利殿中の段・口」を豊竹鹿太夫とする別番付あり。	高ノ師直（冠蔵）、桃ノ井若狭之助（新治）、塩谷判官（冠四）、かほよ御前（宗十郎）、加古川本蔵（国五郎）、となせ（門蔵）、娘小なみ（重八）、大星力弥（国三郎）、鷺坂伴内（咲造）、早野勘平（冠四）、おかる（清十郎）、斧九太夫（文吾）、大星ゆら之介（門蔵）、与一兵へ（宗十郎）、斧定九郎（新治）、かん平はゝ（文吾）、寺岡平右衛門（国五郎）、おいし（新治）、天川や儀平（冠四）、おその（清十郎）。
1841	天保12	10/18~	市の側芝居	仮名手本忠臣蔵	鶴ヶ岡の段（口 元、次 百合、おく 阿蘇）、桃井館の段（口 鹿、おく 恵美）、足利殿中の段（口 鹿、切 佐賀）、塩谷館の段（阿蘇）、二つ玉の段（口 富、おく 多満）、勘平住家の段（口 錦、切 若）、祇園一力の段（かけ合 平右衛門一若・九太夫一佐賀・喜太八一浅香・重太郎一富・仲居一多賀・弥五良一鹿・力弥一是・ばん内一多満・由良之介一勢見・おかる一三光斎）、重太郎出立の段（口 戸和、切 勢見）、道行（錦・ツレ 多賀・百合、やつこ内ノ座頭ふく市ノたいこ入八 吉田国五郎ノ此所三やく出遣ひ早かわりニ而相勤申候）、山科の段（口 恵美、切 三光斎）、天川屋の段（口 是、切 内匠＝竜造）、勢ぞろへの段（カケ合 鹿・富）、敵討のだん（民）。 ※角書「高ノ師直が難題の意趣ノ塩冶判官が返歌の遺恨」。 ※語り「兜の目きゝはれんほの発端殿の短慮に思ひ切たる松の一枝武士の意気地はうらみの切先殿中のさうどうにひらいてわたした扇がやつ城外で主人のむねんをうけついだる九寸五部は義士の一つ心ノ狩人の目あてはうつてかはつた舅の敵も早まつた早野が後悔先に立たる仲居の勢揃へも大尽の錆刀磨上たる娘が貞女母諸共に嫁入の解ても解ぬ雪こかしの五りん五躰は男一疋天と川との合詞二本望とげたる大願成就」。 ※「大序より大切りまでまくなしニ而奉御覧ニ入候」（番付）。	高ノ師直（冠蔵）、桃ノ井若狭之助（新治）、塩谷判官（冠四）、かほよ御前（宗十郎）、加古川本蔵（国五郎）、となせ（門蔵）、娘小なみ（重八）、大星力弥（国三郎）、鷺坂伴内（咲造）、早野勘平（冠四）、おかる（清十郎）、斧九太夫（文吾）、大星ゆら之介（門蔵）、与一兵へ（宗十郎）、斧定九郎（新治）、かん平はゝ（文吾）、寺岡平右衛門（国五郎）、おいし（新治）、天川や儀平（冠四）、おその（清十郎）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1842	天保13	8	道頓堀竹田芝居	仮名手本忠臣蔵 大序ヨリ 十段目迄	鶴ヶ岡のだん(口寅、次緑)、桃ノ井館の段(口和、中組門、おく綾)、鎌倉殿中のだん(口勝、切琴、跡巴枝)、扇ヶ谷の段(切梶、跡組門)、二つ玉のだん(口巴枝、おく琴)、勘平住家ノ段(口越、切内匠)、祇園一力のだん(かけ合巴・文字事春・綾・勝・巴枝・琴・梶)、道行旅路の嫁入(小野・ツレ勝・寅)、山科のだん(口琴、切巴)、増補天河屋のだん(口組門、中内匠、切小野)。 ※角書「高ノ師直ノ塩冶判官」。 ※咲太夫改メ三代豊竹巴太夫襲名披露。	高ノ師直(吉田国五郎)、司(ママ)之介(豊松国五郎)、塩冶判官(冠四)、かほよ(豊松国五郎)、加古川本蔵(冠四)、となせ(清十郎)、娘小なみ(豊松国五郎)、大星力弥(藤治)、さき坂伴内(八十八)、早の勘平(吉田国五郎)、おかる(冠十郎)、九太夫(清十郎)、大星由良ノ助(吉田国五郎)、与一兵へ(定蔵)、斧定九郎(豊松国五郎)、おかる母(清十郎)、寺岡平右衛門(冠四)、おいし(宗十郎)、天河や儀兵へ(冠十郎)、おその(清十郎)。
1842	天保13	9/7~	江戸猿若町芝居 結城座	仮名手本忠臣蔵 十一冊続幕 なし	鶴ヶ岡の段(須磨)、桃の井館の段(口朝、奥程)、殿中の段(口松尾、中岸、切越)、扇ヶ谷の段(額)、二つ玉の段(口羽矢、跡須磨)、勘平住家の段(口津瑠、切宮戸)、一力の段(由一播磨・平一宮戸・伴一美名・カ一十九・諸一朝・諸一松尾・かる一津瑠・九一額)、道行の段(越・柏・松尾)、山科の段(口程、切播磨)、敵討の段(蔦、勇)。 ※角書「高師直ノ塩冶判官」。 ※天保の改革により移転を命ぜられた結城座の、猿若町二丁目における第1回興行(『義太夫年表 近世篇』)。	師直(清五郎)、若狭の介(巳之吉)、判官(伝七)、かほよ(六三)、本蔵(伝七)、となせ(力造)、小なみ(六三)、力弥(三十郎)、伴内(冠造)、勘平(六二)、おかる(力造)、九太夫(兼吉)、由良之助(清五郎)、与一兵衛(荒吉)、定九郎(六二)、ばよ(清五郎)、平右衛門(伝七)、おいし(六二)、おその(六三)。
1842	天保13	9頃	江戸薩摩座	仮名手本忠臣蔵 大序より 十段目迄	四段目(中)、六段目(伊勢)、九段目(靱)、十段目(紋)。 ※角書「高師直ノ塩冶判官」。 ※「幕なし大道具奉御覧入候」(番付)。 ※現存の番付は二枚番付と思われるが、他の一枚の現存は知らない(『義太夫年表 近世篇』)。	
1842	天保13	10	京四條南側大芝居	仮名手本忠臣蔵	鶴ヶ岡の段(虎、小、鷹)、桃井屋舗段(口美濃、奥つる)、殿中のだん(口小、切恵美)、扇ヶ谷の段(岡、跡つる)、勘平住家段(口錦、切内匠)、喜内住家段(口恵美、切勢見)、一力茶屋のたん(平右衛門一綱・九太夫一恵美・伴内一つる・力弥一錦・おかる一岡・ゆら之介一勢見)。 ※角書「高野師直ノ塩谷判官」。 ※番付では大序より七段目迄だが、人形役割には九段目にのみ登場する「おいし」「下人ノりん」を含む。 ※この興行には、「一力茶屋のたん」のみ役割が違う番付と、「桃井屋舗段」「殿中のだん」「扇ヶ谷の段」の役割が違う別番付が三種ある。相違点は次の通り。「一力茶屋のたん(おかる一三光斎・九太夫一恵美・伴内一つる・力弥一錦・平右衛門一内匠・ゆら之介一勢見)」、「桃井屋舗の段(口土和、奥綱)、殿中のだん(口つる)、扇ヶ谷の段(跡要)、一力茶屋のたん(平右衛門一綱・ゆら之介一勢見・九太夫一内匠・力弥一錦・伴内一つる・おかる一岡)」、「桃井屋舗の段(口土和、奥つる)、殿中のだん(口小)、扇ヶ谷の段(跡要)」。	高野師直(国五郎)、桃ノ井若狭之介(大五郎)、塩谷判官(清十郎)、かほよ御せん(国三郎)、加古川本蔵(国五郎)、となせ(国八)、小なみ(辰之助)、大星力弥(金花)、はん内(八十八)、早ノかん平(辰之助)、おかる(清十郎)、斧九太夫(文吾)、大星由良之介(新吾)、寺岡平右衛門(国五郎)、おいし(東三)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1842	天保13	11/18	紀州 佐野芝居	忠 臣 蔵	三冊目（三好＝民蔵、跡 梶戸＝民蔵）、四（越＝豊吉）、五（梶戸＝豊吉）、六（春＝清八）、八（越・梶戸＝豊吉・民蔵）、九（梶＝広作）、七（由良の助－梶・平右衛門－春・おかる－越・九太夫－梶戸）。 ※『染太夫一代記』に拠る。	
△ 1842	天保13	11/20	紀州 妙寺ざしき	忠 臣 蔵	九冊目（梶）。 ※『染太夫一代記』に拠る。	
△ 1842	天保13	11	名古屋 若宮	忠 臣 蔵	七段目（かけ合 大ほし由良之介－呂角齋・斧九太夫－須磨・おかる一要・大ほし力弥一桂・鷺坂伴内一房・寺岡平右衛門－久＝才治、才四）。 ※素浄瑠璃。 ※『小寺玉晁記録』中の書写番付に拠る。	
1843	天保14	2/28～	北堀江市の側 芝居	仮名手本忠 臣蔵 大序ヨリ 九段目まで	大序（広、小、紅梅）、武段目（口 勇、おく 時）、三段目（切 是、跡 春）、四段目（切 岡、跡 是）、五段目（口 要、おく 越）、六段目（中 春、切 氏＝広助）、祇園一力のだん（かけ合 ゆらノ介－染・ばん内－越・力弥－喜代・おかる－岡・諸士－勇・九太夫－時・平右衛門－氏）、道行（シテ 越・ワキ 喜代）、九段目（口 勢イ見、切 染）。 ※角書「高ノ師直が難題の意趣／塩谷判官が返歌の遺恨」。 ※「祇園一力のだん」諸士を竹本広太夫と竹本小太夫、「九段目・口」を豊竹駒太夫とし、「十段目」をつけた別番付あり。十段目の役割は次の通り。（口 要、中 時、切 小野事 駒）。人形は、天川や義兵へ（重五郎）、女房おその（寿五郎）。	高ノ師直（金四）、桃井博多（ママ）之介（門十郎）、塩谷判官（喜十郎）、かほよ御ぜん（咲造）、加古川本蔵（徳蔵）、となせ（辰五郎）、小なみ（新五郎改 重五郎）、大ほし力弥（冠三）、鷺坂ばん内（金三）、早（ママ）勘平（辰造）、おかる（辰五郎）、斧九太夫（猪造）、大星由良之助（金四）、百姓与一兵へ（源吾）、斧定九郎（金四）、おかるはゞ（門十郎）、寺岡平右衛門（徳蔵）、おいし（八蝶改 寿五郎）。
1843	天保14	2	名古屋	忠 臣 蔵	七段目（寺岡平右衛門－綱・おかる－むら・大星力弥一綾・鷺坂伴内一寿・千崎弥五郎－真島・斧九太夫－咲・大星由良之介－巴）。	
△ 1843	天保14	4	堺 堺南新地芝居	（仮名手本 忠臣蔵）	桃の井屋敷（口 弘）、殿中の段（切 小松）、二つ玉（登茂）、勘平切腹（長門）、七段目（掛合 由良之助－長門・平右衛門－小松・伴内－登茂）、山科の段（切 長門）。 ※『増補浄瑠璃大系図』に拠る。	
1843	天保14	5/15～	名古屋 若宮芝居	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目迄	大序（輝）、松切のだん（口 喜代、奥 里）、殿中のだん（口 輝、次 和、中 真島、切 むら）、扇ヶ谷のだん（切 綱、巴、跡 寿）、二つ玉のたん（口 和、奥 里、右は出づかい早替り二而豊松重八相勤申候）、勘平住家のだん（口 真島、切 咲）、寺岡忠義のだん（口 里、切 寿）、山科雪転のだん（口 咲、切 巴）。 ※角書「高師直／塩谷判官」。	高ノ師直（与吉）、若狭之介（三之助）、塩治はん官（冠十郎）、かほよ（松之助）、加古川本蔵（清七）、となせ（清十郎）、小なみ（冠十郎）、力弥（玉蔵）、鷺坂伴内（玉蔵）、早の勘平（重八）、おかる（清十郎）、九太夫（吉之助）、大星由良之介（スケ 門蔵）、与一兵へ（重八）、定九郎（重八）、勘平母（与吉）、寺岡平右衛門（清七）、おいし（与市）。
△ 1843	天保14	5	堺 堺南島北向芝 居	（仮名手本 忠臣蔵）	松切の段（当能）、三の口（当久）、七ツ目（九太夫－当久）。 ※『増補浄瑠璃大系図』に拠る。	
△ 1843	天保14	閏9下旬	阿波 富田秋田町行 詰	忠 臣 蔵	九段目（染）。 ※『元木家記録』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1843	天保14	閏9	道頓堀竹田芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より 敵討まで	鶴ヶ岡の段（口、次行、おく小）、桃井館の段（口 淀、おく 鞠）、鎌倉殿中の段（口 鞠木、中 当久、切 当能、跡 万）、扇ヶ谷の段（切 若、跡 津島）、二つ玉の段（口 当久、おく 多満）、勘平住家段（口 むら、切 若）、祇園一力の段（かけあい 平右衛門一若・九太夫一当能・ていしゆ一万・諸士一淀・仲ぬ一鞠木・力弥一当久・伴内一多満・由良ノ助一鞠・おかる一三光斎）、道行 旅路の嫁入（シテ むら・ツレ 万・吉の・栄）、山科の段（口 当能、切 鞠）、天河やノ段（口 淀、切 むら）、夜討ノだん（行、小、里）。 ※角書「高ノ師直ノ塩治判官」。 ※この興行には「鶴ヶ岡の段・口」を豊竹住の江太夫、「扇ヶ谷の段・切」を竹本田組太夫と豊竹若太夫、「道行 旅路の嫁入」の豊竹栄太夫の後に竹本辰巳太夫を加えた別番付と、「鶴ヶ岡の段・口」を豊竹栄太夫、「扇ヶ谷の段・切」を竹本田組太夫と豊竹若太夫とする別番付がある。	高ノ師直（門蔵）、桃ノ井高（ママ）狭ノ介（金吾）、塩治判官（虎造）、かほよ（清十郎）、加古川本ぞう（喜十郎）、となせ（国八）、娘小なみ（国三郎）、力弥（金吾）、伴内（福之助）、早の勘平（門十郎）、おかる（国八）、斧九太夫（文吾）、由良ノ助（門蔵）、与一兵へ（松之助）、斧定九郎（金吾）、与一兵へ女房（文吾）、寺岡平右衛門（喜十郎）、おいし（松之助）、天河や義平（虎造）、おその（喜十郎）。
1843	天保14	11	兵庫 兵庫芝居	仮名手本忠臣蔵 大序ヨリ 敵討迄	大序（秀、和）、第二（口 美和、おく 駒）、第三（口 真島、切 千賀、跡 巴枝）、第四（巴、跡 里）、第五（口 巴枝、おく 田組）、第六（口 綾、切 氏）、第七（由良ノ助一綱・平右衛門一氏・おかる一駒・九太夫一干賀・伴内一綾・力弥一巴枝・諸士一里）、第八（シテ 駒・ツレ 綾）、第九（口 巴、切 綱）、増補 第十（口 氏尾、切 田組）、第十一（和、秀）。 ※角書「高野師直ノ塩治判官」。 ※六代目染太夫（この時梶太夫）の番付書込みに「此時五日目より四段目ト平右衛門のかわり役二行」とある。 ※三代目竹本越路太夫旧蔵番付には次の書込みがある。「二ノ奥 丑之助」、第四の上に「跡 丑之助」、第七の上に「燕三」、「道行 丑之助 ツレ 広吉 仙八」、第九の上に「口 広造」「広助」、第十口の上に「丑之助」、「切 燕三」。	高ノ師直（徳造）、司（ママ）之介（金三）、塩谷判官（文造）、かほよ（文造）、本蔵（才二）、となせ（辰五郎）、小なみ（国助）、力弥（国助）、伴内（文五郎）、早の勘平（辰造）、おかる（辰五郎）、九太夫（金三）、大星由良之助（徳造）、与一兵へ（国助）、斧定九郎（文五郎）、与一兵へ女房かよ（文五郎）、平右衛門（文造）、おいし（辰造）、義兵へ（金三）、おその（文造）。
△ 1844	天保15	9下旬頃	阿州徳島 左古町五丁目 掛け小屋	忠 臣 蔵 通し座	四段目（伊豆＝伝八）、六段目（岩見＝伝八）、七段目（由良之助一伊豆・平右衛門一梶＝伝八）、九段目（梶＝伝八）。 ※『染太夫一代記』に拠る。 ※豊沢広作病気休演、九段目は鶴沢伝八が代わる（『染太夫一代記』に拠る）。	
△ 1844	天保15	11/6	阿波 津田浦氏神境内	忠 臣 蔵	四（忠兵衛事 錦＝広作）。 ※『染太夫一代記』に拠る。	
△ 1844	天保15	11上旬	徳島 正 覚 院	忠 臣 蔵	九（梶）。 ※『染太夫一代記』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1845	弘化2	2	道頓堀竹田芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より 敵討迄 幕なし	鶴ヶ岡のだん(多喜、理、佐土、瀬戸)、桃ノ井館のだん(口弘、おく実)、鎌倉殿中の段(口梅、次小、切中)、扇ヶ谷のだん(切八重、跡登茂)、山崎のだん(口亀、おく筑呉)、勘平住家ノ段(口実、切田組)、一力のだん(由良ノ助一長登・九太夫一重・伴内一実・重太郎一弘・喜多八一梅・力弥一君登・おかる一瑠理・平右衛門一田組)、道ゆき(シテ瑠理・ワキ是・ツレ亀)、山科の段(口中、切長登)、堺浜寺の段(君登)、天川やの段(口是、切音羽)、勢揃の段(登茂・ツレ八尾)、敵討の段(登代)、焼香の段(口八重登、おく筑呉)。 ※角書「高師直ノ塩治判官」。	高ノ師直(喜十郎)、桃ノ井若狭ノ助(猪蔵)、塩治判官(徳蔵)、かほよ御前(歌六)、本ぞう(徳蔵)、となせ(辰造)、小なみ(咲造)、大星力弥(徳十)、さぎ坂伴内(猪蔵)、早ノ勘平(喜十郎)、おかる(辰造)、斧九太夫(文十郎)、大星由良之助(門蔵)、百性与一兵へ(文十郎)、斧定九郎(門蔵)、おかる母(歌六)、寺岡平右衛門(文三)、おいし(喜十郎)、天川や義平(徳蔵)、おその(咲造)。
△ 1845	弘化2	3/3~	新築地周防町	忠臣蔵	二段目(錦)、三段目(時)、四段目(岡)、五段目(多満)、六段目(梶)、七段目(カケ合 由良之助一染・おかる一岡・平右衛門一梶)、九段目(染)。 ※『染太夫一代記』に拠る。	
1845	弘化2	4/2~	四ツ橋南へ入浜	忠臣蔵	(大序より大切まで惣かけ合にて壱場づー毎日かわり相勤申候)。 ※「みどり浄るり番組」の内。	
1845	弘化2	8	京 四条南側大芝居	仮名手本忠臣蔵 大序 九段目迄 幕なし	大序(房、小住、登賀、大木、賀)、弐(口広、おく富)、三(口登茂、切島、跡浪)、四(切音羽、おく蔦)、五(口吉野、おかる一島)、六(口文、切津賀)、七(かけあい 由良之助一長登・おかる一大住・平右衛門一鞆・九太夫一音羽・伴内一津賀・重太郎一多賀・弥五郎一浪・喜多八一政の)、八 道ゆき(山登・文・吉野・蔦・住尾・理・岸)、九(口多賀、切鞆)。 ※角書「高師直ノ塩治判官」。 ※六段目の切を豊竹岡太夫とする別番付あり。	高ノ師直(喜十郎)、桃ノ井司(ママ)之介(冠三)、塩治判官(門十郎)、かほよのまへ(東三)、かこ川本蔵(虎造)、となせ(三吾)、小なみ(辰之助)、大星力弥(竹吉)、さぎ坂伴内(文五郎)、早ノ勘平(兵吉)、おかる(三吾)、斧九太夫(虎造)、大星由良ノ介(新吾)、与一兵へ(大蔵)、斧定九郎(文五郎)、おかる母(新吾)、寺岡平右衛門(喜十郎)、おいし(東三)。
1846	弘化3	2	紀州 立かし	仮名手本忠臣蔵 大序ヨリ 大切迄	大序(常)、二つ目(美咲)、三つ目(口光、おく玉城、相模)、四つ目(切巴)、五つ目(口玉城、おく入)、六つ目(口十七、切紀古久)、七つ目(由良助一紀古久・九太夫一入・力弥一久我・おかる一美咲・伴内一玉城・平衛門一相模)、道行(美咲・ツレ十七)、九つ目(口久我、切巴)、十段目(口紀和、切入)、十一段目(光)。	師直(鶴助)、若左之介(数右衛門)、はんぐはん(利平)、かをよ(国五郎)、本ぞう(要助)、となせ(力弥)、小なみ(国五郎)、力弥(竹二郎)、伴内(団九郎)、勘平(民造)、おかる(勝造)、九太夫(数右衛門)、由良之介(鶴助)、与一へ(沢蔵)、定九郎(勝造)、ぱゝ(弥平)、平(ママ)衛門(利平)、おいし(勝造)、儀平(助八)、おその(弥平)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1846	弘化3	3/1~	甲府 亀屋座	仮名手本忠 臣蔵 大序より 十一段目迄	鶴ヶ岡の段(播磨)、桃井屋舗の段(口喜久、奥富)、殿中の段(口豊、中志磨、切絹)、扇ヶ谷の段(高麗)、二つ玉の段(口伊磨、奥志磨)、勘平住家の段(口絹、切越)、一力の段(由良之助-播磨・九太夫-高麗・力弥-伊磨・おかる-富・諸士-喜久・伴内-志磨・平右衛門-越=紋左衛門)、道行の段(富・絹・豊)、山科の段(口高麗、切播磨)、天川屋の段(口司、切富)、敵討の段(喜久)。 ※角書「高師直／塩治判官」。 ※「三月十日より」とする書写番付もある。	高師直(新一郎)、桃の井若狭之助(久太郎)、塩治判官(六二)、かほよ御ぜん(刀造)、加古川本蔵(国五郎)、戸南(ママ)瀬(伊三郎)、本蔵娘小なみ(六三)、大星力弥(巳之助)、鷺坂伴内(兼三郎)、早野勘平(伊三郎)、こし元おかる(刀造)、斧九太夫(新一郎)、大星由良之助(伊三郎)、百性と市兵衛(清助)、斧定九郎(兼三郎)、勘平母おかや(新一郎)、寺岡平右衛門(国五郎)、由良之助女房おいし(六二)、天川屋義平(久太郎)、義平女房おその(大三郎)。
1846	弘化3	5/9~	京 左女牛北側芝 居	忠 臣 蔵	二(きの)。	
△ 1846	弘化3	8	西横堀鰻谷浜	忠 臣 蔵	大序より九冊目まで。五ツ目 鉄砲場(掛け合 定九郎-梶)、六冊目 勘平腹切(梶)、茶屋場(掛合 由良之助-染・平右衛門-梶)、九冊目(染)。 ※『染太夫一代記』に拠る。 ※「中程より染太夫は伊勢行き約束ありて、無理暇を取りてかの地へ出立すれば(中略)、梶太夫に由良之助と平右衛門式役語れとの難題もだしがたく、古来まれなる珍らしき二役、総出語りの掛け合、人形割に由良之助と平右衛門との二役はよっぽどむづかしながら梶太夫はこれを請け引き(『染太夫一代記』)。	
1846	弘化3	8下旬~	伊勢 古市芝居小家	忠 臣 蔵	五つ目(久)。九内の館(万)。 ※「弘化三年八月二十五日」との書入れがある。前項の鰻谷浜の「忠臣蔵」興行の「中程より染太夫は伊勢行き約束ありて、無理暇を取りてかの地へ出立(『染太夫一代記』)して、古市へ来たものである。	
△ 1846	弘化3	7以後	西横堀鰻谷浜	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九冊目迄	鶴ヶ岡の段(播磨)、桃井館の段(口蘭、ヲク淀)、進物の段(カケ合 大人太夫大勢)、殿中の段(カケ合 子供太夫)、裏門の段(カケ合 大人太夫大勢)、扇ヶ谷の段(切津島)、鉄砲場の段(口百合、ヲク小隅)、汁屋の段(島菊軒)、勘平住家の段(口小浪、切中 毎日替 小梶/九重)、道行(シテ 愛玉・大人太夫大勢)、山科の段(口梶戸、切梶=広作)、大切 七冊目 茶屋場の段(カケ合 大星由良之助-九重・寺岡平右衛門-小梶・おかる・伴内・大星力弥-小浪・九太夫-小隅・竹森喜多八-梶・矢間重大良-津島・神崎与五郎-島菊軒)。 ※『染太夫一代記』に拠る。 ※この年前半、梶太夫が阿波へ行った際の入門子供太夫3人、九重太夫(12才)・小隅太夫(9才)・小浪太夫(8才)が大坂へ出て来たので、鰻谷浜へ出勤させた。大人太夫・子供太夫打ち交じり興行。前項の忠臣蔵との前後関係は未詳だが、『染太夫一代記』の記述順序に従う(『義太夫年表 近世篇』に拠る)。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1847	弘化4	1	兵庫 兵庫定芝居	仮名手本忠 臣蔵 大序ヨリ 大切マデ	鶴ヶ岡のだん(岡)、桃井館のだん(口 稲葉、おく 矢)、足利殿中ノ段(口 稲葉、切 巴勢)、判官館の段(切 咲=弥三郎、音羽=勝右衛門)、二つ玉のだん(口 弦、おく 時)、勘平住家段(口 巴勢、切 岡)、一力のだん(かけあい 由良ノ助-染・平右衛門-音羽・重太郎-稲葉・おかる-多賀・力弥-琴・伴内-時・九太夫-岡)、道行(多賀・ツレ 弦)、山科のだん(口 巴勢、切 染)、植木やのだん(口 矢、かけあい 弥七-咲・左右衛門-時・お高-多賀・兵内-弦・こしもと-琴)。 ※角書「高ノ師直ノ塩治判官」。	高ノ師直(三吾)、若狭之介(猪造)、塩治判官(冠三)、かほよの前(音吉)、本蔵(喜十郎)、となせ(三吾)、小なみ(徳十)、力弥(門二)、伴内(猪造)、勘平(五つ目=辰造、六つ目=冠三)、おかる(辰造)、九太夫(福之助)、由良之助(金四)、与一兵へ(辰造)、定九郎(辰造)、おかる母(喜十郎)、平右衛門(喜十郎)、おいし(冠三)。
1847	弘化4	7	西横堀清水町 浜	仮名手本忠 臣蔵 大序より 十たん目まで	鶴が岡のだん(尾上、律、咲)、桃の井館のたん(口 春戸、奥 文=豊松)、殿中のだん(口 梶さ、切 千賀、跡 都)、判官館のだん(田組=伊八)、二つ玉のだん(口 秀、奥 千賀)、勘平住家の段(中 錦、切 咲=弥三郎)、ぎおん-一力のだん(由良之介-梶・力弥-春戸・喜太八-秀・伴内-咲・弥五郎-都・重太郎-梶さ・平右衛門-田組・おかる-茂・九太夫-千賀)、山科のだん(口 文、切 梶=団平)、天川屋のたん(口 琴の、切 茂=豊之助)。 ※角書「塩治判官ノ高野師直」。	
△ 1847	弘化4	11/29	江戸茅場町 高松亭	忠 臣 蔵	九。 ※『染太夫一代記』に拠る。	
1848	弘化5	2/22~	名古屋 清寿院境内	仮名手本忠 臣蔵	七段目(かけ合 惣出語相勤申候 寺岡平右衛門・鷺坂伴内-小浪・大星由郎(ママ)之介-小田美・おかる-浪重・斧九太夫-染戸・大星力弥・仲居-浪子・武森喜多八-鳥菊軒・矢間十太郎-三国・千崎弥五郎-浪花=米作)。 ※子供浄瑠璃。	
1848	嘉永1	3/3~	名古屋 清 寿 院	忠 臣 蔵	五段目(浪子=米作)。 ※子供浄瑠璃。	
1848	嘉永1	3	入郷村	仮名手本忠 臣蔵	大序(口 登根、切 萩)、二段目(口 加、切 多賀)、三段目(口 市、切 二見)、四段目(津島)、五段目(口 登根、切 萩)、六段目(口 加、切 大登)、七つ目(かけ合 由良之介-染・九太夫-二見・諸士-市・おかる-大登・カヤ-登根・ばん内-直・平右衛門-津島)、道行(多賀・加)、九段目(口 直、切 染)、十段目(口 市、中 大登、切 多賀)、敵討(萩)。 ※「大序ヨリ大切迄出使イ早替り」(番付)。	師直(文吾)、若さ之介(大治良)、はん官(寅造)、かおよの前(亀助)、本蔵(文吾)、となせ(国八)、こなみ(辰造)、力弥(政吉)、伴内(大治良)、かん平(寅造)、おかる(辰造)、九太夫(友三良)、由良之介(喜十良)、与市兵へ(寅造)、定九郎(寅造)、与市兵へ母(歌六)、平右衛門(金吾)、おいし(歌六)、天川や(金吾)、おその(国八)。
1848	嘉永1	7/26~	なんば新地松 の尾南山	忠 臣 蔵	九段目(巴=文蔵)。	
1848	嘉永1	10/26以 前	江戸	仮名手本忠 臣蔵	七段目(惣かけ合 大星由良之助-梶・おかる・亭主-木尾・斧九太夫・弥五郎・仲居-当鬼・力弥・喜多八・仲居-梶代・鷺坂伴内・重太郎・仲居-梶尾・寺岡平右衛門-梶戸=浄るり三味線 富造、長歌三味線 語助・ツレ 辰治郎)。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1849	嘉永2	1	西横堀清水町浜	仮名手本忠臣蔵	鶴が岡のだん（津戸、咲尾、淀木）、桃の井館のたん（口春戸、奥文＝豊松）、殿中のだん（口淀木、切当久、跡仙八）、判官館のだん（津島＝重造）、二つ玉のだん（与一兵へー若・定九郎一梶・勘平一津島）、勘平住家の段（中田喜、切梶＝燕三）、ぎおん一力のだん（平右衛門一梶・力弥一春戸・喜太八一淀木・伴内一当久・弥五郎一咲尾・重太郎一梶さ・九太夫一津島・由良之介一若・おかる一富司）、山科のだん（口当久、切若＝団平）。 ※角書「塩冶判官／高野師直」。	
1849	嘉永2	3/7～	名古屋 若宮御社内	忠臣蔵	九段目（九才小住）。 ※子供浄瑠璃。	
1849	嘉永2	4	京 四条南側大芝居	仮名手本忠臣蔵	鶴が岡のだん（早、佐ト、成駒）、桃井やかたノ段（節玉齋）、殿中のだん（口大房、中錦、切頼）、扇ヶ谷ノ段（むら、切大住、跡筆の）、二つ玉の段（口市、おく浪）、勘平住家段（口伊達、切錦木）、一力のだん（カケ合染・頼・筆の・都・錦木・栄・二見・浪・三光齋）、喜内住家ノ段（口筆の、切むら）、山しなのだん（口頼、切三光齋）。 ※「大序より大切迄幕なし十段続」（番付）。	高ノ師直（馬丸）、桃井司（ママ）之介（国八）、塩谷判官（玉蔵）、かほよ御前（八蝶）、加古川本蔵（才次）、となせ（辰造）、娘小なみ（東作）、大星力弥（徳十郎）、鷺坂伴内（小竹）、早ノ勘平（冠三）、おかる（辰造）、斧九太夫（朝右衛門）、大星由良之介（門蔵）、斧定九郎（馬丸）、おかるはゞ（朝右衛門）、寺岡平右衛門（門十郎）、おいし（国八）。
1849	嘉永2	4頃	備中カ	忠臣蔵	大序（小佐）、式段目（久）、三ノ口（常）、三ノ切（三谷）、四段目（鶴羽）、五段目（八代）、六ノ口（秀）、六段目（咲）、〔七段目〕（ゆら之助一巴・おかる一鶴羽・平右衛門一咲）、九段目（巴）、十段目（八代）、十二段目（久）。 ※書入れ番付であるため、太夫と役場の関係、また人形役割に不明な点を残す。	師直（清左衛門）、若狭之助（時造）、判官（鶴吉／伝兵衛）、かをよ（政吉）、本蔵（喜市）、となせ（文七）、小なみ（政吉）、力弥（朝蔵）、伴内（喜代蔵）、おかる（文七）、九太夫（万吉）、由良之助（清左衛門）、ばゞ（熊造）、平右衛門（喜市）、おいし（熊造）、義平（善兵衛）、おその（よし吉）。
1849	嘉永2	閏4/24～	江戸 東両国	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目まで	鶴ヶ岡の段（朝＝清太郎）、桃井屋敷の段（当鬼、千代＝安太郎）、殿中の段（カケ合高ノ師直一豊・伴内・本蔵一干代・若狭之助・判官一当鬼・おかる一木尾＝房治郎）、扇ヶ谷の段（一日替り二相勤申候 小鞆／長尾＝清六）、二つ玉の段（朝＝安太郎）、勘平内の段（口千代＝房治郎、切豊＝清三郎）、山科の段（口木尾＝房治郎、一日替り二相勤切長尾／小鞆＝清六）、一力茶屋場の段（カケ合由良之助一長尾・九太夫・仲居一朝・伴内・諸士一干代・力弥・亭主一当鬼・おかる一木尾・平右衛門一豊＝清三郎）。	
1849	嘉永2	9	西宮 西の宮芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目迄	鶴ヶ岡のだん（巴木、鶴）、桃ノ井やしきのだん（綾）、殿中のだん（口桐、切浪）、判官館のだん（切富）、二つ玉のだん（口豊、おく浪）、勘平住家だん（口町、切咲）、祇園一力のだん（かけあい由良介一豊・おかる一富・力弥一町・十太郎一都・喜多八一鶴・弥五郎一豊・伴内一桐・九太夫一浪・平右衛門一咲）、道ゆき旅路の嫁入（シテ町・ワキ桐・ツレ都）、山科のだん（口綾、切巴）。 ※角書「塩冶判官／高師直」。	高師直（伊蔵）、若狭之介（小竹）、塩冶判官（玉造）、かほよ御前（徳十）、本ぞう（喜十郎）、となせ（辰造）、娘小浪（徳十）、力弥（勇造）、さぎ坂伴内（文五郎）、おかる（辰造）、早ノ勘平（兵吉）、九太夫（金三）、大星由良之助（千四）、与一兵へ（小竹）、定九郎（文五郎）、勘平母（喜十郎）、寺岡平右衛門（門十郎）、おいし（小竹）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1849	嘉永2	10前半	松山 松山城下五穀 神境内	忠 臣 蔵	勘平切腹の段、(由良之助一隅・平右衛門一梶)。 ※素浄瑠璃。 ※『染太夫一代記』に拠る。	
1849	嘉永2	11	兵庫 兵庫常芝居	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目迄	鶴岡ノ段(小錦、峰)、松切ノ段(口若美、おく巴津)、殿中ノ段(口富さ、切森)、扇ヶ谷ノ段(切錦、跡峰)、二つ玉ノ段(口富さ、おく巴津)、勘平住家ノ段(口常盤、切津賀)、茶屋ノ段(かけ合 由良之介一若・九太夫一森・伴内一富さ・亭主一若美・力弥一峰・おかる一常盤・平右衛門一津賀)、道行ノ段(シテ常盤・ワキ 富さ・ツレ 小錦)、山科ノ段(口森、切若)。	師直(勇蔵)、若狭之介(金三郎)、判官(辰三郎)、かほよ御前(国七)、加古川本蔵(門十郎)、となせ(国八)、小なみ(兵吉)、力弥(兵三郎)、伴内(小兵吉)、勘平(与市)、おかる(国八)、九太夫(与市)、由良之介(兵吉)、与一兵へ(瀧蔵)、定九郎(兵三郎)、与一兵へ女房(門十郎)、平右衛門(勇蔵)、おいし(金三郎)、天川や儀平(千柳)、おその(文二)。
1849	嘉永2	12/3~	江戸 深川元町 神明社内	仮名手本忠 臣蔵 大序より 敵討まで	大序(朝)、二段目(口多津、切伊磨)、三段目(口伊名、切梶尾)、四段目(切祖、跡錦子)、五段目(口伊名、切梶尾、与一兵へ/定九郎 豊松伝七/二やく早替り)、六段目(口木尾、切伊勢)、七段目(かけ合 由良の介一播磨・九太夫一朝・諸士一登和・おかる一此母・力弥一光・伴内一伊磨・平右衛門一祖)、道行(光・登和・木尾)、九段目(口朝、切播磨)、十冊目(口姫、切此母)。 ※角書「高野師直/塩谷判官」。	高師直(伝七)、若狭の介(清吉)、塩谷判官(六二)、かほよ御せん(弥市)、加古川本蔵(六二)、となせ(力造)、小浪(伝七)、大星力弥(綱吉)、伴内(安次郎)、早野勘平(清吉)、おかる(力造)、斧九太夫(清吉)、由良の助(伝七)、与一兵へ(伝七)、定九郎(伝七)、勘平母(玉三郎)、寺岡平右衛門(六二)、おいし(栄二)、天川屋義平(玉三郎)、おその(弥市)。
△ 1850	嘉永3	2/6	伊予 西条新居浜 慈明寺	忠 臣 蔵	九(梶)、大切 かけ合 一力(由良之助一梶)。 ※素浄瑠璃。 ※『染太夫一代記』に拠る。	
△ 1850	嘉永3	2後半	伊予 銅山敷場役所	忠 臣 蔵	九(梶=楠六)。 ※『染太夫一代記』に拠る。	
1850	嘉永3	3/21~	播州 明石平松山	忠 臣 蔵	九段目(菊寿=文吉)。七つ目(カケ合 斧九太夫一喜尾・寺岡平右衛門一小熊・一力亭主一福寿・女郎おかる一小の・伴内一さの・力弥一豆熊・由良の介一菊寿=清吾)。	
△ 1850	嘉永3	夏頃	播州 明石王子芝居	忠 臣 蔵	九(菊寿=文吉)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△ 1850	嘉永3	夏頃	播州 大咲	忠 臣 蔵	茶屋の段(惣カケ合 寺岡平右衛門一小熊・大星力弥一豆熊・斧九太夫一喜尾・女郎おかる一小楚・大星由良の介一左乃)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△ 1850	嘉永3	夏頃	播州 姫路竜ノ町一 丁目	忠 臣 蔵	(惣カケ合)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△ 1850	嘉永3	夏頃	播州 網干	忠 臣 蔵	十(左乃)。 四(小熊)、七つ目(カケ合)。 (小九満)、七つ目(カケ合)。 六(小熊)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割	
1850	嘉永3	8/1~	新築地清水町 浜文楽小家	忠臣蔵	九段目(若=団平)。 ※「みどり浄瑠璃」の内。		
△	1850	嘉永3	9/16カ	しゆく 井筒屋宅	忠臣蔵	四(小熊)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	1850	嘉永3	9/19 9/22	丹波 園部本町	忠臣くら 忠臣蔵	四(小熊)。 四(小熊)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	1850	嘉永3	10カ/16	丹後 田辺付近願蔵 寺	忠臣蔵	三段目より九段目迄。勘平住家(切豊峰)、山しな(切公文熊)、一力亭の段(女郎おかる=豊峰・竹森北八・寺岡平右衛門=公文熊)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
	1850	嘉永3	10	道頓堀竹田芝 居	仮名手本忠 臣蔵 大序より 敵討迄 幕なし	鶴が岡のだん(袖、三木)、桃ノ井館のだん(口森、おく佐賀)、鎌倉殿中ノ段(口市、次森、切中)、扇が谷のだん(切湊=勝右衛門、跡喜代)、二つ玉の段(口菅、おく多満)、勘平住家のだん(口中、切田組)、祇園一力のだん(かけ合長登・中・浪・理・富司・田組・曾・佐賀・喜代・多満・湊)、山科の段(口湊、切長登)、天川やノだん(理、富司)、敵討ノだん(市、三木)。 ※語り「高ノ師直が難題はおもきがうへの小夜衣おり紙にきらめく進物の黄金ノ塩谷判官が返歌につまなかさねその黒装束夜目にかゝやく苗字の大星」。 ※小なみの人形役割を吉田喜十郎とする別番付あり。	高ノ師直(喜十郎)、もゝの井若狭ノ介(兵吉)、塩谷判官(新五郎)、かほよ御ぜん(新五郎)、加古川本蔵(文三)、となせ(辰造)、小なみ(新五郎)、大星力弥(市松)、鷺坂伴内(文五郎)、早野勘平(兵吉)、おかる(辰造)、斧九太夫(兵吉)、大星由良之介(門蔵)、百姓与一兵へ(市松)、斧定九郎(文五郎)、おかる母おかや(喜十郎)、寺岡平右衛門(文三)、おいし(喜十郎)、天川や儀平(文五郎)、おその(喜十郎)、おその(新五郎)。
△	1850	嘉永3	11/10	丹後 宮津吹屋谷芝 居	忠臣蔵	(惣カケ合 寺岡平右衛門=小長門)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
	1850	嘉永3	11/14~	堺 さかい新地南 芝居	忠臣蔵	七つ目(双かけ合 由之介=きく寿・おかる・伴内=小なみ・九太夫=なみ子・弥五郎=末・重太郎=染戸・喜多八=ふく寿・力弥=つる・平右衛門=小寿美=正治郎)、九だん目(小隅)。 ※子供浄瑠璃。	
△	1850	嘉永3	11/19 11/20	丹波 園部寺町	(仮名手本 忠臣蔵) 忠臣蔵	四段目(小長門)、判官館(小熊)。 (小熊)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
	1850	嘉永3	12	兵庫 兵庫定芝居	忠臣蔵	九半目(多満)。 ※「みどり浄瑠璃」の内。	となせ(東作)、小なみ(勇造)、おいし(与市)。
	1851	嘉永4	1	清水町浜	忠臣蔵	三(登馬)。 ※「緑り浄瑠璃」の内。	
△	1851	嘉永4	1	西横堀御池橋 北へ入所	忠臣蔵	九(小住)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△	1851	嘉永4	1頃	西横堀御池橋 北へ入所	忠臣蔵	六(菊寿)。 ※『弥太夫日記』に拠る。 ※前項興行の次の替り。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1851	嘉永4	1頃	西横堀御池橋 北へ入所	忠 臣 蔵	九（菊寿）。 ※『弥太夫日記』に拠る。 ※前項興行の次の替り。	
△ 1851	嘉永4	7頃	江戸 大和田	忠 臣 蔵	四（長子）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△ 1851	嘉永4	7頃	江戸 王子扇や	忠 臣 蔵	四（長子）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△ 1851	嘉永4	8/5	江戸	忠 臣 蔵	五つ目（小定）。	
		8/11	両国		二つ玉（小定）。	
		8/15			四段目（長子）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△ 1851	嘉永4	8/16~	江戸 赤城明神地内	忠 臣 蔵	鶴ヶ岡（常、咲の、春）、松きり（咲の、登磨）、しんもつ（登の）、鯨ふみ（長子）、殿中うら門（鐘）、判官腹切（咲）、城わたし（佐賀）、しろうち（春）、二つ玉（賀）、身うり（佐賀）、勘平腹切（直喜）、一力茶や（惣カケ合）、道行（カケ合理・登磨・巻）、雪こかし（咲）、山しな（長門）。 ※『弥太夫日記』に拠る。 ※『睦佳詩野志雄里』とは初日が一月余相違し、配役も一部相違する。同じ興行をさすものか問題が残るが、役割を掲げる。四段目（巻）、六つ目（咲）、茶屋場（由良之助一長門・平右衛門一咲・おかる一利・九太夫一中・判（ママ）内一賀）、九段目（長門）（『義太夫年表 近世篇』に拠る）。	
1851	嘉永4	11	堺 [不可知] 芝居	忠 臣 蔵	五 二つ玉ノだん（浪子）。 ※「大あやつり子供浄るり」の内。	かん兵へ（小竹）、与一兵へ（音三郎）、定九郎（友造）。
1852	嘉永5	閏2/6~	京 四条道場	忠 臣 蔵	一力（亀平）。 ※「かげゑ」浄瑠璃。	
1852	嘉永5	4/16~	清水町浜	忠 臣 蔵	三（和咲=団七）。 ※「みどり浄瑠璃」の内。 ※初日は番付の書込みに拠る。	判官（卯之助）。
△ 1852	嘉永5	4/22	紀州 大島	忠 臣 蔵	四つ（長子）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△ 1852	嘉永5	5/22	上町鍵屋町 大ろうじ席	忠 臣 蔵	四段目。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△ 1852	嘉永5	8/1	大坂	（仮名手本 忠臣蔵）	四（長子）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
	嘉永5	8/1~	京 寺町寅やくし	忠 臣 蔵	四（竹久米）。 ※「かげゑ」浄瑠璃。	
△ 1852	嘉永5	10/23	法 善 寺	（仮名手本 忠臣蔵）	四（かけ合 長子・津広）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△ 1852	嘉永5	11/1	法 善 寺	忠 臣 蔵	六（成清）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1852	嘉永5	11/14	九 軒 町	(仮名手本忠臣蔵)	(寺岡平右衛門・さき坂伴内一長子・大星由良之介・千さき弥五郎一松=清三郎)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
1853	嘉永6	1/2~	法善寺境内	仮名手本忠臣蔵 大序より 九冊目迄	大序(小鞆、浪、染=仙糸)、二段目(口 緑=徳造、おく 巴木=豊八)、三段目(口 緑=弥市、切 磯=清三郎、おく 津磨=清太郎)、四段目(口 頼尾=清左、切 巴勢=寛治、おく 種=信太郎)、五段目(口 三輪=栄太郎、カケ合 梶勢・梶虎=信太郎)、五半目(島菊軒=鶴太郎)、六段目(口 増=福造、切 浪=浜右衛門)、七段目(口 三輪=豊八、切 小鞆=清六)、茶屋場(惣かけ合=徳太郎)、八段目(芝・巴木・津磨=清六・ツレ 徳太郎・清三郎・福造・直二郎)、九段目(口 小鞆=清三郎、切 染=仙糸)。 ※番付の絵によって「七段目」の配役が次のように知られる。由良之助-染・おかる-芝・九太夫-磯・伴内-島菊軒・力弥-津磨・三人侍-梶虎・梶勢・種・仲居-福・亭主-緑・平右衛門-浪(『義太夫年表 近世篇』)。	
△ 1853	嘉永6	2/4	大坂	忠 臣 蔵	(カケ合 鳴戸・当組=くま吉)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△ 1853	嘉永6	4/1	大坂	忠 臣 蔵	四(長子=豊八)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△ 1853	嘉永6	12/2	播州 明石平松山	忠 臣 蔵	扇ヶ谷之段カ(長子=文四)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
1854	嘉永7	1/17~	道頓堀法善寺 境内	仮名手本忠臣蔵 大序ヨリ 大切マデ	鶴ヶ岡のだん(氏、小鞆、対馬=鶴六)、桃ノ井館の段(口 浪路=友太郎、おく 相模=徳三郎)、殿中のだん(口 佐和=平吉、中 谷=徳造、切 鞆木=清太郎、跡 津磨=亀太郎)、扇ヶ谷のだん(切組=清鳳、跡 津=清之介)、二つ玉のだん(口 谷=福造、カケ合 相模・種=栄太郎)、勘平住家の段(口 津=平吉、切 小鞆=清六)、佐藤与茂七住家の段(口 種=栄太郎、切 浪=浜右衛門)、矢間喜内住家のだん(口 津磨=徳三郎、切 氏=徳太郎)、道行 旅路の嫁入(シテ 芝・ツレ 氏・ワキ 津磨=清六・ツレ 清鳳・徳太郎・福造・清之介)、山科の段(口 鞆木=清太郎、切 対馬=重造)、祇園一力のだん(惣かけ合 由良之介-組・平右衛門-浪・おかる-芝・九太夫-相模・伴内-津磨・弥五郎-津・重太郎-種・喜多八-浪路・力弥-武津・亭主-対馬・たいこ持-小鞆・仲居-鞆木=重造)。 ※角書「高師直ノ塩冶判官」。 ※「祇園一力のだん」は「勘平住家の段」の後「道行」の前のどこかに置かれたものであろうが、番付の記し方では明らかでない(『義太夫年表 近世篇』)。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1854	嘉永7	1	西横ぼり御池 ばし東づめ	仮名手本忠 臣蔵 大序より 十段目迄 幕なし	大序（口直、中咲左、ヲク小倉）、二つ目（口武津、中伊織、ヲク森）、三つ目（口梶木、中津磨、切二見、跡増）、四つ目（切巴勢、跡森）、五つ目（口梶虎、ヲク要）、六つ目（口富司、切対馬）、道ゆき（シテ二見・ワキ津磨・ツレ増）、九つ目（口巴勢、切染）、十だん目（口津加、切富司）。 ※番付に「七段目」の絵があり、次のような太夫の役割が知られる。 由良之助一染・おかる一富司・九太夫一津加・伴内一梶木・力弥一森・三人侍一梶虎・伊織・小倉・平右衛門一対馬・ソノ他一二見（『義太夫年表 近世篇』）。	
1854	嘉永7	3/27~	道頓堀法善寺 境内	忠 臣 蔵	六段目（谷）。	
1854	嘉永7	5下旬~	伊勢 伊勢津に糸崎 川口	仮名手本忠 臣蔵 大序ヨリ 九段目マテ	鶴が岡の段（福、小倉）、桃ノ井館の段（口伊織、ヲク要）、恋歌意趣（口島戸、中種、ヲク久我）、塩谷館の段（切巴勢、ヲク種）、二つ玉の段（口島戸、ヲク要）、勤平住家段（口津磨、切浪）、道行（伊豆・久我・津磨）、山科の段（口久我、切対馬）、一力の段（平右衛門一浪・伴内一津磨・十太郎一種・喜太八一島戸・由良之介一対馬・中ゝ一小倉・九太夫一要・力弥一久我・おかる一伊豆）。 ※角書「高ノ師直ノ塩治判官」。	師直（新三）、若狭之介（清七）、判官（金子）、かほよ（東三）、本蔵（金子）、となせ（三吾）、小なみ（金作）、大星力弥（小才）、伴内（友八）、勤平（才治）、おかる（三吾）、九太夫（朝右衛門）、由良之介（才治）、与一兵へ（才治）、定九郎（才治）、おかるはゞ（朝右衛門）、平右衛門（金子）、おいし（東三）、天川や義平（治三郎）。
1854	嘉永7	閏7	新築地清水町 浜小家	仮名手本忠 臣蔵 続拾壹冊	大序 鶴ヶ岡のだん（三津、喜志、曾根）、桃井屋敷の段（口秀、おくむら）、追手先のだん（口当勢、次田喜）、殿中のだん（切弥、跡多賀）、扇ヶ谷のだん（切田組、跡佐賀）、二つ玉のたん（口和国、おく勇）、勤平切腹の段（中当久、切湊）、一力のたん（由良之介一巴・九太夫一弥・伴内一勇・亭主一和国・諸士一音賀・力弥一町・おかる一むら・平右衛門一田組）、道行のだん（カケ合当久・多賀・町）、山科のだん（中湊、切巴）、天川屋の段（口佐賀、切咲）、勢揃のだん（桐、音賀）、敵討のだん（秀）。 ※角書「高師直が難題の意趣ノ塩谷判官が返歌の遺恨」。	
1854	嘉永7	8	天満天神境内 新席	仮名手本忠 臣蔵 大序ヨリ 十段目まで	大序 鶴岡の段（倉＝多三郎、鹿＝重太郎）、桃井屋舗のだん（口音の＝絹松、次理＝団十郎、奥多満＝泰次郎）、鎌倉殿中のだん（口鳴瀬＝増次郎、次音の＝絹松、切千賀＝団十郎、跡津磨＝拵次郎）、扇谷のだん（切八重＝仙八、跡三国＝竜八）、二つ玉のだん（森＝新次郎、奥多満＝泰次郎）、勤平住家のだん（口理＝団十郎、切長尾＝団平）、祇園一力のだん（由良之介一長登・伴内一多満・力弥一理・諸士一森・九太夫一長尾・仲居一鳴瀬・諸士一三国・おかる一富司・平右衛門一八重＝燕二）、山科のだん（口長尾＝泰次郎、切長登＝団平）、儀平住家の段（口三国＝竜八、切富司＝燕二）。	
1854	嘉永7	10/13~	京 四条北側大芝 居	忠 臣 蔵	三（鷹）。 ※素浄瑠璃。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1855	安政2	4	天満天神戎門 小家	仮名書四拾 七本 夜討合紋	鶴ヶ岡のだん（口 味矢＝延吉、次 千束、奥 八尾＝力まつ）、桃の井館のだん（口 味矢＝種吉、中 倉＝熊八、奥 種＝権六）、追手先のだん（千束＝延吉）、殿中の段（次 倉＝団七、切 森＝豊八）、うら門のだん（跡 是羽＝熊八）、判官館のだん（切 三国＝絹松、跡 薫＝太三郎）、山さきの段（口 森＝豊八）、二つ玉のだん（かけ合 二見・薫＝咲造）、勘平住家のだん（口 津磨＝絹まつ、切 喜代、鰻＝竜七）、七段目（かけ合 由良之介＝喜代・九太夫＝二見・おかる＝津磨・重太郎＝薫・弥五郎＝倉・喜太八＝是羽・力弥＝小八重・亭主＝味矢・仲居＝千束・伴内＝森・平右衛門＝鰻＝竜七）、道行のだん（シテ 二見・ワキ 津磨・ツレ 倉＝清三郎・ツレ 絹松・豊助・熊八・延吉）、雪こかしのだん（口 三国＝絹松）、山科のたん（切 鰻、喜代＝豊造）。	
1855	安政2	5	京 四条北側大芝 居	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目迄	鶴ヶ岡ノたん（鶴尾、津和、鹿、りつ）、桃ノ井館ノ段（口 薫、ヲク 多賀）、殿中之だん（口 島戸、中 房、切 津賀）、扇ヶ谷ノ段（切 春、跡 成）、二つ玉のたん（口 志賀、ヲク 氏戸）、勘平住家ノ段（口 浪、切 津島＝重造）、一力のだん（由良之介＝長登・おかる＝春・平右衛門＝津島・ばん内＝多満・九太夫＝津賀・諸士＝氏戸・諸士＝浪・力弥＝山登）、道行 旅路の嫁入（シテ 山登・ワキ 寿・ツレ さの）、山しな之だん（口 越、切 長登）、加古川本蔵仏事之段（口 小津賀、切 多満）。 ※角書「塩谷判官／高野師直」。	高ノ師直（文三）、わかさ之介（才造）、塩谷判官（兼三郎）、かほよ御せん（国三郎）、加古川本蔵（文造）、となせ（兼三郎）、娘小なみ（国三郎）、力弥（千助）、ばん内（文次）、早ノ勘平（文三）、おかる（兼三郎）、斧九太夫（才造）、大星由良之介（兵吉）、与市兵へ（友八）、斧定九郎（兵吉）、与市兵へ女房（千四）、寺岡平右衛門（文三）、おいし（文五郎）、おその（重五郎）。
1855	安政2	8/13～	京 四条北側芝居	忠 臣 蔵	六（増磨＝広市）。四（阿蘇＝滝造）。七段目（カケ合 由郎（ママ）之介＝巴・おかる＝富司・諸士＝浜・伴内＝山城掾・力弥＝寿・九太夫＝津賀・平右衛門＝津島）。	
1855	安政2	9	稲荷社内東門 小家	仮名手本忠 臣蔵 大序より 十段目迄	鶴ヶ岡のだん（妻、鶴尾、美谷、辰）、桃の井館の段（口 卯、おく 多賀）、鎌倉殿中の段（口 津和、次 種、切 八十、跡 さの）、扇ヶ谷のだん（切 対馬／春／右役場一日かわりに相勤申候）、城渡しの段（跡 三国）、二つ玉のだん（口 卯、おく 三国）、勘平住家の段（中 多賀、切 長尾）、一力の段（由良之介＝春／対馬／右役場一日かわりに相勤申候 平右衛門＝長尾・伴内・喜太八＝種・弥五郎・仲居＝さの・九太夫＝津賀・ていしゆ・仲居＝津和・力弥・重太郎＝卯・おかる＝富司）、道行 旅路の嫁入（富司・さの・卯）、山科のだん（中 八十、切 春／対馬／右役場一日替りに相勤申候）、天川屋のだん（口 二見、切 富司）。 ※角書「高師直／塩谷高定」。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1855	安政2	10/14~	京 寺町誓願寺新 席	仮名手本忠 臣蔵 大序ヨリ 大切迄	鶴ヶ岡の段（旭、鯉津）、桃井館の段（口 芳、奥 浪）、足利殿中の 段（口 小津賀、中 秀、切 越）、扇ヶ谷の段（切 内匠、跡 氏 戸）、二つ玉の段（口 巴津、奥 勇）、勘平住家のたん（口 浪、切 伊勢）、一力のだん（カケ合 由良ノ助-巴・平右衛門-内匠・おか る-山登・九太夫-咲・伴内-山城掾・諸士-氏戸・力弥-浪・仲居 -勇）、道行 旅路の嫁入（山城掾・山登・小津賀）、山科のだん （口 越、切 巴）、天川屋の段（口 氏戸、切 咲=猿糸）、勢揃への 段（鷹、旭、和咲、巴磨、杣）、泉岳寺開帳のだん（切 山城掾）。 ※角書「高師直が難題の意趣／塩谷判官が返歌の遺恨」。 ※「かげ画」浄瑠璃。	
1855	安政2	10中旬~	奈良 奈良芝居	仮名手本忠 臣蔵 大序ヨリ 十段目マテ	鶴ヶ岡の段（口 司、おく 鶴尾）、桃井館の段（口 津和、おく 音 の）、鎌倉殿中の段（口 大浪、中 鳴瀬、切 多賀）、扇ヶ谷の段 （切 長尾）、二つ玉の段（口 音の、おく 三国）、勘平住家の段 （口 多賀、切 津賀）、一力の段（カケ合 津島・津賀・三国・鳴 瀬・津和・鶴尾・大浪・音の・富司・長尾）、山科の段（口 三国、 切 津島）、天川屋の段（口 鳴瀬、切 富司）。 ※角書「日本花赤穂塩竈／義勇伝侍士銘々」。	高ノ師直（徳三郎）、若狭之介（小才）、塩 谷判官（冠十郎）、かほよ御せん（与十 郎）、加古川本蔵（与十郎）、女房となせ （冠十郎）、娘小なみ（市松）、大星力弥 （小才）、伴内（卯之助）、早ノ勘平（才 治）、おかる（冠十郎）、斧ノ九太夫（音五 郎）、大星由良之介（才治）、与一兵衛（音 五郎）、定九郎（徳三郎）、おかるはゞ（伊 左衛門）、平右衛門（与十郎）、女房おいし （小六）、天川屋義平（与十郎）、おその （小六）。
1855~ 1856	安政2~ 安政3	10/20~	京 押小路高倉東 へ入 口の屋席	仮名手本忠 臣蔵 大序ヨリ 大切マテ	鶴ヶ岡之たん（口 福寿、アト 登=元三郎）、桃井館の段（輝=仙 七）、殿中のたん（口 筑の=豊之助、切 巴未=太三郎、アト 島登 =仙七）、扇ヶ谷のたん（一日替り 筑後=広八／土佐=広造、ア ト 富志=仙七）、二つ玉のだん（口 筑の=宗四郎、奥 緑=豊之 助、此所三役早替り）、勘平住家のだん（口 巴未=豊之助、切 音の =太三郎）、祇園一力の段（由良の助-一日替 土佐／筑後・九太夫 -緑・伴内-筑の・仲居-登・力弥-輝・諸士-富志・おかる-島 登・平右衛門-音の=広八）、道行旅路のよめ入（巴未・島登・輝= 広造・ツレ 太三郎・豊之助・仙七）、山科のだん（口 緑=豊之助、 切 一日替り 土佐=広造／筑後=広八）。 ※角書「高師直／塩谷判官」。	
1855~ 1856	安政2~ 安政3		京 蛭子屋吉郎兵 衛座	忠 臣 蔵	茶屋場（カケ合 由良之助-土佐・伴内-飛蝶軒・おかる-島登・諸 士-緑り・力弥-百合・九太夫-音・平右衛門-筑後=広八）。	
1856	安政3	10	名古屋 若宮御境内	仮名手本忠 臣蔵	（不明）。 ※「人形 不残出つかいニ而相勤申候」（番付）。	（不明）

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1856	安政3	11	新築地清水町 浜	仮名手本忠 臣蔵 大序より 大切迄	鶴ヶ岡の段（今、芝キ、鶴尾）、桃井館の段（口 要、おく 町）、 鎌倉殿中の段（口 大浪、中 森、切 鰈、跡 久我）、扇ヶ谷の段 （切 巴、跡 森）、二つ玉の段（口 鳴瀬、おく 三国）、勘平住家 の段（中 錦、切 咲）、一力のたん（由良之介一巴・おかる一富司・ 諸士一森・後由一長尾・伴内一多満・諸士一鳴瀬・九太夫一鰈・平右 衛門一咲）、旅路の道行（シテ 錦・ツレ 町・ワキ 久我）、山科の たん（口 富司、切 巴）、天川屋の段（口 三国、切 長尾）、勢揃 の段（大浪、鳴瀬）、敵討の段（鶴尾）。 ※「一力のたん」の「後由」を「後由良之介」、「二つ玉のたん・お く」を竹本鰈太夫とする別番付あり。	
1856	安政3	11	堺 新地北芝居	忠 臣 蔵	九段目（巴＝燕三）。七つ目（かけ合 巴・八十・久我・芝木・要・ 錦・咲＝猿糸）。 ※「七つ目」の太夫役割を（巴・錦・久我・芝木・要・咲）とし、欄 外に「忠臣蔵 九段目（口 九太夫一八十＝燕二郎）」の書込みがあ る別番付あり。	本蔵（才治）、戸なせ（兼枝）、小なみ（小 六）、大星力弥（主寅）、伴内（万玉）、お かる（喜楽）、九太夫（里光）、由良之助 （才治、七つ目＝一力）、平右衛門（亀 鳳）、おいし（清吉）。
1857	安政4	2	いなり社内東	仮名手本忠 臣蔵 大序より 敵討迄	大序 鶴ヶ岡の段（千鳥、辰、小松、喜志、曾根）、桃井館の段 （口 さの、おく 当久）、大下馬先の段（口 当勢、次 佐賀）、殿中 の段（切 弥、跡 久）、扇ヶ谷の段（切 湊、跡 理）、二つ玉の 段（口 和国、おく 多満）、勘平住家の段（中 むら、切 染）、 一力の段（由良之介一湊・おかる一春・伴内一長登・重太郎一佐賀・ 喜多八一田喜・弥五郎一久・力弥一理・九太夫一弥・平右衛門一 染）、道行の段（むら・田喜・和国・音賀）、山科の段（口 弥、 切 長登）、天川屋の段（口 和国、中 当久、切 春）、勢揃の段 （音賀、曾根）、敵討の段（百合）。 ※角書「高師直／塩谷判官」。	
1857	安政4	9/9～	京 四条寺町道場 北新席	仮名手本忠 臣蔵 大序ヨリ 九段目迄	大序 鶴ヶ岡のたん（福徳来、津力登、小巻、司登、鶴尾、峰）、桃 の井館の段（口 綱井、おく 寿）、殿中のたん（口 蔦、中 巴津、切 浜、跡 久我）、扇ヶ谷のたん（切 津島、跡 巴代）、二つ玉のたん （口 杣、おく 小津賀）、勘平住家のたん（口 阿蘇、切 津賀）、一 力之段（由良之助一巴・平右衛門一津島・おかる一富司・九太夫一津 賀・伴内一山城掾・喜太八一浜・弥五郎一寿・重太郎一巴代）、道行 の段（カケ合 富司・久我・蔦）、山科の段（口 寿、切 巴）。 ※角書「高師直／塩谷判官」。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1857	安政4	9	法善寺席	仮名手本忠臣蔵	(天川や義平・かほよ御前・となせ一富、悴力弥一浪子、高ノ師直・千崎弥五郎・百姓与一兵へ一其、仲居とし・竹森喜多八・下女りん・奴角介一塚、薬師寺次郎左衛門・本蔵・一力亭主一秀、早野勘平・[不可知]夫・おいし一筑後、寺岡平右衛門・斧定九郎・加古川本蔵一浪、塩谷判官・一文字や才兵へ一八十、天川や悴一浪子、鷺坂伴内・大星力弥・原郷右衛門一音の、桃井若狭介・矢間十太郎一津、奴可内・足利直よし一登和、中間久介・中居あは一弥生、たいこ持一八・中居いそ一磯の、奴筆介・中居よし一筆尾、大序判官・二段目となせ・狩人角兵へ・たいこ持咲八一咲の、道行ツレ・右馬之丞一文、娘小浪・おかる一大和、勘平は一・大星由良之助一咲、堀部安兵へ・道行となせ・小し元一津磨改 常盤)。 ※角書「高師直ノ塩谷判官」。 ※「大序より惣出語りにて相勤申候間正五ツ時よりにきノしく御光来之程偏ニ奉希上候以上」(番付)。	
1857	安政4	11/2~	竹田芝居	仮名手本忠臣蔵 大序ヨリ 十段目マデ	鶴が岡ノだん(津)、若狭ノ介やかたノだん(口 緑、おく 町)、門前ノだん(口 い)、進物ノだん(中 鐘)、殿中ノだん(切 筑前)、うら門ノだん(跡 常盤)、城明渡しノ段(切 染、跡 稲)、山崎ノだん(口 津)、二つ玉ノだん(おく 泉)、与茂七内ノだん(口 錦、切 咲=猿糸)、辻君ノだん(口 鐘、おく 錦)、喜内住家ノ段(口 町、切 湊=勝右衛門)、旅路の嫁入(シテ 錦・ツレ 常盤・ワキ 稲)、山科ノだん(口 筑前、切 巴)、増補天河やノ段(口 い、切 富)。 ※角書「高師直ノ塩谷判官」。 ※「進物之段・中」を竹本種太夫とし、「裏門之段」の後に「松原之段 豊竹錦太夫」を加え、「城明渡しノ段」を「扇ヶ谷之段」、「与茂七内ノだん・辻君ノだん」の代りに「勘平住家段 口 豊竹町太夫、切 竹本咲太夫、猿糸」、「喜内住家ノ段・口」豊竹町太夫を「喜内内之段・口」豊竹錦太夫、「旅路の嫁入」のツレを豊竹町太夫、ワキを豊竹常盤太夫、人形役割の高師直と若狭之介を桐竹門蔵、かほよ御前と大星由良之介とおそのを吉田新吾、大星力弥と伴内と九太夫を吉田福蔵、戸無瀬を吉田辰造とする別番付あり。	高ノ師直(文吾郎改 文三)、若狭之介(千助)、塩谷判官(文吾郎改 文三)、加古川本蔵(文吾郎改 文三)、となせ(兵吉)、小なみ(浜吉)、大星力弥(兵造)、伴内(辰造)、早ノ勘平(兵吉)、おかる(辰造)、斧九太夫(和十郎)、大星由良ノ助(兵吉)、与一兵へ(和十郎)、斧定九郎(文吾郎改 文三)、天川や義兵へ(文吾郎改 文三)、おその(兵吉)。
1858	安政5	3/1~	名古屋 若宮	忠 臣 蔵	五段目より七段目迄(五役早替り 吉田才治)。 ※説経「接合恵当柳」の内。	早ノ勘平(才治)、こし元おかる(清十郎)、斧九太夫(才四)、大星由良之助(才治)、百姓与一兵へ(才治)、斧定九郎(才治)、勘平はゞ(清八)、寺岡平右衛門(浅右衛門)。
1858	安政5	3/3~	京 四条南側大芝居	忠 臣 蔵	六つ目(岩戸=福之助)。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1858	安政5	5頃	名古屋 橘町常芝居	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目迄	大序 鶴ヶ岡（対馬、跡 対留）、二段目 松切（口 日の出、切 芝）、三段目 殿中（口 摩津、跡 阿蘇）、四段目 扇ヶ谷（口 芝、切 豊島）、五段目 双玉（口 茂、切 豊島）、六段目 財布の血判（口 阿蘇、切 越）、七段目（カケ合 由良之介-対馬・おかる-茂・工（ママ）太夫-阿曾・十太郎-対る・喜多八-摩津・弥五郎-芝・ばん内-豊島・平右衛門-越）、八段目 道行（摩津・芝）、九段目 山科之段（対馬）。	高の師直（清八）、桃ノ井若狭之介（正平）、塩治はん官（東三）、かほよ（左吉）、加古川本蔵（才四）、となせ（清十郎）、娘小浪（清八）、大ほし力弥（喜三郎）、鷺坂判（ママ）内（源治）、早の勘平（清十郎）、こし元おかる（東三）、斧九太夫（松朝）、大星由良之介（清十郎）、百性（一兵衛（金枝）、斧定九郎（才四）、寺岡平右衛門（才四）、おいし（東三）。
△ 1858	安政5	10/26 10/29	紀州 小島	忠 臣 蔵	四（長子）。 九（伏見、長子）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
1858	安政5	12	法善寺小家	仮名手本忠 臣蔵 大序ヨリ 九段目マテ	鶴が岡のだん（口 大内=虎造、次 浜、おく 筆尾=才吉）、桃井館のだん（口 三国=虎造、中 浜=小作、おく 司=九弥）、足利大手先の段（口 筆尾=宗二郎、次 秀=小作）、殿中のだん（切 泉=猿次郎、跡 咲の=才吉）、扇が谷の段（切 筆=清吉）、城明渡シの段（跡 司=小作）、二つ玉のだん（口 三国=宗次郎、かけ合 常盤・秀=力弥）、勘平住家の段（口 百合=友太郎、切 八十=万八）、七だん目 茶や場（惣かけ合 ゆら之介-越・おかる-常盤・九太夫-司・伴内-文・重太郎-百合・力弥-浪子・弥五郎-咲の・喜多八-三国・仲あ-浜・亭主-筆尾・平右衛門-梶=友太郎）、五十三次道行のだん（シテ 富・ワキ 常盤・ツレ 百合=清吉・燕二・友太郎・力まつ・小作・才吉・宗二郎）、山科のだん（口 常盤=友太郎、切 越=清吉）。	
1859	安政6	1	京 四条南側大芝 居	忠 臣 蔵	四段目（磯の=宗治郎）。	
1859	安政6	2	京 四条南側大芝 居	仮名手本忠 臣蔵	大序（筆の=清治、津矢=猿八）、桃ノ井屋敷之段（口 森=燕六、中 巴代=滝造、奥 稲=燕六）、殿中ノだん（口 政の=才知、中 綾=宗次郎、切 田組=万八、跡 秀=才知）、扇ヶ谷之たん（大筆=広左衛門）、城渡シ之段（稲=燕六）、二つ玉之だん（綾=宗次郎、巴代=滝造）、喜内住家之段（口 秀=才知、切 生駒=清吉）、勘平内之段（口 錦=万八、切 津島=猿糸）、一カノ段（カケ合 ゆら之介-巴・九太夫-津賀・伴内-田組・十太郎-秀・喜多八-綾・与五郎-是・力弥-巴代・おかる-錦・平右衛門-津島=源吉）、道行（シテ 錦・ワキ 巴代・ツレ 是=猿糸・万八・滝造・宗次郎・才知）、山しなのだん（口 生駒=清吉、切 巴=燕三）。	
△ 1859	安政6	3/15	泉州 深日	忠 臣 蔵	五（伏見）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△ 1859	安政6	3/18	紀州 谷川	忠 臣	四（長子）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1859	安政6	9/12	紀州 道成寺門前小 家	忠しん蔵	三(和)。	
		9/17		忠 臣 蔵	三(カケ合)。	
		9/18		忠 臣 蔵	三(カケ合)、四(浪)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
1859	安政6	10/14~	京 寺町道場北新 小家	仮名手本忠 臣蔵 大序より 大切迄	鶴か岡の段(宝、来、直、政の、緑り)、桃之井屋舗(口直、奥巴未)、三段目(口秋津、切巴未)、殿中の段(高師直一梶・判官・勘平一長柄・伴内一小津賀・司之助・おかる一蟻=歌女造)、扇ヶ谷(切長柄、跡秋津)、二つ玉のたん(口政の、奥小津賀)、勘平住家の段(口美名尾、切浜)、旅路の嫁入(シテ三津・ワキ巴未・ツレ直)、山科のたん(口巴代、切梶)、敵討より焼香場まで(巴代)、一力のたん(カケ合 由良之助一長柄・おかる一三津・九太夫一巴代・伴内一小津賀・カ弥一美名尾・諸士一秋津・平右衛門一梶=吉五郎)。 ※角書「高ノ師直ノ塩谷判官」。	
1859	安政6	10	御霊社内	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目まで	鶴か岡のたん(米、巴美、竜、喜代)、桃ノ井館ノたん(口勇、次阿蘇、おく町)、足利殿中のたん(口小巴、中い、切筑前、跡司)、扇谷のたん(切若、跡巴津)、二つ玉ノたん(口薫、次泉)、勘平住家ノ段(口茂、切津島)、一力のたん(由良之介一巴・九太夫一越・諸士一茂・亭主一い・おかる一富司・カ弥一小巴・諸士一阿蘇・伴内一筑前・平右衛門一津島)、道行 旅路の嫁入(若・ワキ 茂・ツレ 久我・阿蘇・喜代)、山科のたん(口富司、切巴)。 ※角書「塩治判官ノ高師直」。 ※「一力のたん」諸士を豊竹巴津太夫とし、4人目の「亭主」を「諸士」とする別番付と、「道行 旅路の嫁入」の竹本阿蘇太夫と竹本喜代太夫を削った別番付あり。	高ノ師直(才治)、若狭之介(冠寿)、判官(才造)、かほよ御前(冠平)、加古川本蔵(才造)、となせ(辰造)、小なみ(国八)、大星力弥(冠寿)、伴内(冠三郎)、勘平(国八)、おかる(辰造)、九太夫(兵三)、大星由良ノ介(才治)、与一兵へ(市松)、斧定九郎(兵三)、勘平はゞ(冠福)、平右衛門(才三郎)、おいし(冠平)。
△ 1860	安政7	1/2~	道頓堀法善寺 小家	忠 臣 蔵	六つ目(友=燕勝)。 ※『近世邦楽年表 義太夫節之部』に拠る。	
△ 1860	安政7	1/2~	京 寺町道場北小 家	忠臣一力	(浜=亀助)。 ※『近世邦楽年表 義太夫節之部』に拠る。	
△ 1860	万延1	閏3/21~ 23	讃州 金毘羅宮付近	忠 臣 蔵	九段目まで。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
△ 1860	万延1	4/15~16	淡州 高村芝居	忠 臣 蔵	※『弥太夫日記』に拠る。	
△ 1860	万延1	6/16~ 18カ	淡州 佐野	忠 臣 蔵	※『弥太夫日記』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1861	万延2	2	京 四条北側大芝 居	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目迄	鶴ヶ岡の段（直、鰻尾、由）、本蔵松切ノ段（口 尾上、ヲク 司）、 殿中のだん（口 益、中 小津賀、切 鰻）、扇ヶ谷の段（切 山城掾、 アト 司）、二つ玉のだん（口 鶴尾、ヲク 宮戸）、勘平住家ノ段 （口 寿、切 長尾＝仙糸）、一力のだん（カケ合 対馬・伊達・山城 掾・小津賀・阿蘇・寿・鰻・長尾）、旅路の道行（シテ 山城掾・ツ レ 富・ワキ 阿蘇、人形 あま／草かり／子もり／神主 吉田兵吉／出 つかひ早かはりにて相勤申候）、山科隠家ノ段（口 宮戸、切 対 馬）。 ※角書「我つまならで／妻な重そ」。 ※「勘平住家ノ段・口」を竹本阿蘇太夫とする別番付あり。	高ノ師直（金花）、桃井司（ママ）之介（冠 十郎）、塩谷判官（文三）、かほよ御ぜん （冠十郎）、加古川本蔵（清七）、となせ （辰造）、娘小なみ（兵吉）、大星力弥（小 兵吉）、伴内（辰三郎）、早の勘平（兵 吉）、おかる（辰造）、斧九太夫（金花）、 大星由良ノ介（兵吉）、与市兵へ（辰三 郎）、斧定九郎（金花）、勘平はゞ（金 四）、寺岡平右衛門（清七）、おいし（文 三）。
1861	文久1	10	阿弥陀池	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目迄	鶴ヶ岡ノ段（館、登司）、松切ノ段（口 若美、切 町）、殿中のだん （口 小野、中 富さ、切 巴津、跡 浜）、扇ヶ谷ノ段（切 錦、跡 吾 妻）、二つ玉ノ段（口 若美、おく 巴津）、喜内住家ノ段（口 富 さ、切 富司）、勘平切腹ノ段（口 森、切 津賀）、一力のたん（由 郎（ママ）之介－若・九太夫－森・カ弥－吾妻－おかる－錦・亭主－ 富さ・伴内－巴津・平右衛門－津賀）、道行（シテ 町・ワキ 浜・ツ レ 小錦）、山科の段（口 森、切 若）。	高師直（才三郎事 勇造）、若狭ノ介（多喜 造）、塩谷判官（才蔵事 与市）、かほよ御前 （国七）、加古川本蔵（門十郎）、となせ （国八）、娘小浪（兵吉）、大星力弥（辰之 助）、さき坂伴内（小兵吉）、早ノ勘平（才 蔵事 与市）、おかる（国八）、斧九太夫（千 柳）、大星由良ノ介（兵吉）、百性と一兵へ （辰之助）、斧定九郎（兵三郎）、与一兵へ 女房（門十郎）、寺岡平右衛門（才三郎事 勇 造）、おいし（勇士）、天川や義平（千 柳）、女房おその（勇士）。
1861～ 1862	文久1～ 文久2	11～3	宮島カ	忠しん	四段目（二見）。	
1861～ 1862	文久1～ 文久2	11～3	宮島カ	忠しん	七つ目（掛合）。	
1862	文久2	2/3～	いなり社内東 小家	仮名手本忠 臣蔵 大序ヨリ 敵討まで	大序 鶴か岡のだん（竜、弥増、咲の、咲花、小松）、桃ノ井館ノだ ん（口 桑、おく 実）、大下馬先ノだん（口 佐土、次 佐賀）、殿中 ノだん（切 多満、跡 音羽）、扇が谷ノだん（切 咲、跡 実）、二つ 玉ノだん（口 音賀、奥 長枝、此所出つかひ早替りニ而奉御覧ニ入候 吉田玉造）、勘平住家ノ段（中 住、切 湊）、一力のだん（由良ノ介 －湊・カ弥－音羽・平右衛門－弥・おかる－春・九太夫－多満・伴内 －咲・重太郎－音賀・喜多八－佐土・弥五郎－松尾・亭主－岩戸＝吉 弥）、道行 恋の初旅（かけ合 住・音羽・和・琴）、山科ノだん（中 佐賀、切 長登）、天川やノだん（口 長枝、中 春、切 弥）、勢そろ へノだん（松尾、岩戸）、敵討ノだん（和）。 ※角書「塩谷判官／高師直」。 ※春太夫は「七ツ目おかる、十段目の中役場成共、番付斗にて出勤な く」（『増補浄瑠璃大系図』）。	高ノ師直（文三）、もゝの井若狭ノ介（玉三 郎）、塩谷判官（玉造）、かほよ御前（花 兄）、加古川本蔵（文三）、となせ（才 治）、娘小なみ（花兄）、大星力弥（玉 蝶）、さき坂伴内（辰十郎）、早野勘平（玉 造）、こしもおかる（松江）、斧九太夫 （喜十郎）、大星由良ノ介（才治）、百性と 一兵へ（玉造）、斧定九郎（玉造）、勘平母 （喜十郎）、寺岡平右衛門（玉造）、おいし （松江）、天川や義平（喜十郎）、女房おそ の（松江）。
1863	文久3	3/6	(不明)	忠 臣 蔵	九半目の茶リ（従）。	
△ 1863	文久3	5/23	たいた村	忠 臣 蔵	九ノ切（富＝豊平カ）。 ※『道中大楽安平記』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1863	文久3	5/24	桑原坂	忠臣蔵	九ツ目(富=豊平カ)。 ※『道中大楽安平記』に拠る。	
△ 1863	文久3	5/28	法興寺	忠臣蔵	九ノ切(富=豊平カ)。 ※『道中大楽安平記』に拠る。	
1863	文久3	9	堀江芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目迄	鶴が岡の段(虎、直、園)、桃ノ井館ノ段(口直、おく阿蘇)、鎌倉御てんの段(口谷、中妻、切塚、跡曾我)、扇が谷の段(切宮戸、跡妻)、二つ玉の段(口三国、おく阿蘇、勘平ノ与一兵へノ定九郎 吉田文三ノ右三やく早かはり)、勘平住家ノ段(口吾妻、切浜)、祇園一力のだん(由良之介一三光斎・平右衛門一浜・力弥一吾妻・諸士一三国・中ゐ一曾我・諸士一谷・九太夫一妻・おかる一伊達・伴内一山城掾)、道行 旅路の嫁入(シテ越路・ワキ 曾我・谷・ツレ 園)、山科の段(口宮戸、切春=吉兵衛)。 ※角書「高師直ノ塩治判官」。	高ノ師直(門十郎)、若狭之介(歌録)、塩谷判官(文三)、かほよ御前(竹次郎)、加古川本蔵(文三)、となせ(歌録)、小なみ(徳三郎)、大星力弥(小金)、さき坂伴内(小玉)、早野勘平(文三)、おかる(辰十郎)、九太夫(玉十郎)、大星由良ノ介(門蔵)、与一兵へ(文三)、定九郎(文三)、勘平母(歌録)、平右衛門(文三)、おいし(小玉)、天川や義兵へ(門十郎)。
1863	文久3	10	堺新地南芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目迄	鶴が岡ノだん(殿母、虎)、桃ノ井やしきノ段(口直、おく妻)、鎌倉殿中ノ段(口直、切塚、跡園)、扇が谷の段(切宮戸、跡曾我)、二つ玉のだん(口三国、おく阿蘇)、勘平住家ノ段(口三国、切浜)、祇園一力のだん(由良之介一三光斎・九太夫一塚・力弥一三国・中ゐ一園・諸士一曾我・おかる一阿蘇・平右衛門一浜・伴内一山城掾)、山科のだん(口宮戸、切春=吉兵衛)。 ※角書「高師直ノ塩治判官」。	師直(門蔵)、若狭之介(小玉)、判官(文三)、かほよ御前(辰之助)、本蔵(文三)、となせ(歌録)、小なみ(徳三郎)、大星力弥(小金)、伴内(小玉)、早ノ勘平(文三)、おかる(辰十郎)、九太夫(玉十郎)、由良之介(門蔵)、与一兵へ(巳之助)、定九郎(文三)、勘平母(歌録)、平右衛門(文三)、おいし(小玉)。
△ 1864	文久4	1/9	紀州大川報恩講寺	忠臣蔵	殿仲(ママ)ノ段(寿茂立)、裏門段(長子)、扇ヶ谷(中久)、二つ玉(米)、勘平住家(米升、梅子)、一力茶屋場(平右衛門一梅升・かる・や五郎一白虹・仲居・十太郎一米升・由良之介・九太夫一米・伴内・喜太八一長子=花雀、歌 新左衛門、口五郎)。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
1864	文久4	2	御霊裏門	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目まで	鶴ヶ岡のだん(亀、千鳥)、桃井館のだん(鳴門)、御殿のたん(口谷、中鶴尾、切一二、跡道)、塩谷館の段(切久、跡鶴尾)、二つ玉のだん(口谷、おくい、此所早替り相勤申候 吉田兵吉)、勘平住家の段(口千鳥、切富司)、一力之だん(由良之介一若・九太夫一富・重太郎一い・力弥一鶴尾・平右衛門一久・喜多八一道・弥五郎一谷・伴内一一二・おかる一伊達)、山料(ママ)のたん(口富、切若)。	もろ直(門蔵)、若狭之介(小玉)、はん官(文三)、かほよ(小玉)、本蔵(文三)、となせ(辰造)、小浪(歌録)、力弥(小金)、伴内(辰之助)、勘平(兵吉)、おかる(辰造)、九太夫(歌録)、由良之介(兵吉)、与一兵へ(兵吉)、定九郎(兵吉)、勘平母(歌録)、平右衛門(文三)、おいし(門蔵)。
1864	元治1	3頃	広島カ	忠臣蔵	三たん目(氏戸=小源吉)、六たん目(八十=卯吉)。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1864	元治1	6	天満戒門	仮名手本忠臣蔵 大序より 大切まで	鶴が岡の段（入、河内）、桃ノ井館の段（口 田美、おく 鶴尾）、鎌倉殿中の段（口 富田羽、中 田美、切 鳴門、跡 艶）、扇が谷の段（切 富司、跡 鳴瀬）、山崎の段（口 富田羽）、二つ玉の段（かけ合 鳴瀬・尾上）、勘平住家の段（口 鶴尾、切 津賀）、一力の段（由良之介－長尾・九太夫－鳴門・伴内－尾上・力弥－艶・おかる－富司・亭主・喜多八－滝尾・弥五郎－鳴瀬・重太郎－鶴尾・平右衛門－津賀）、道行の段（シテ 文・ワキ 芝登・ツレ 艶）、山科の段（口 鳴門、切 長尾）、平右衛門物語ノ段（文）。 ※角書「高師直ノ塩谷判官」。 ※三味線欄「鶴沢新造」の上に「十一才」および「二つ玉めりやすこきうつれ引」の墨書のある番付がある。新造の役場を示すものであろう（『義太夫年表 近世篇』）。	
△ 1865	元治2	1/13 1/14	紀州 大川 辺	忠 臣 蔵	四（長子）。 三（米）。 ※『弥太夫日記』に拠る。	
1865	元治2	3	いなり東小家	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目迄	鶴ヶ岡の段（三喜、三芳、咲美、田美、左馬、理久）、桃の井家敷の段（口 越路、奥 咲）、大下馬先の段（中 照、次 佐賀）、殿中の段（切 津賀、跡 二見）、扇ヶ谷の段（切 湊、跡 長枝）、二つ玉の段（口 和、奥 実、此所出遣ひ早替り二而相つとめ申候 吉田玉蔵）、勘平住家の段（中 筑前、切 咲）、一力の段（由良之介－湊・力弥－常・九太夫－長枝・伴内－多満・重太郎－二見・喜多八－浪登・弥五郎－照・平右衛門－染・おかる－春・亭主－理久）、道行 恋のはつ旅（筑前・越路・和・常）、山科の段（中 津賀、切 染＝叶）。 ※角書「高ノ師直ノ塩谷判官」。 ※「越路は二日目より楽に至るまで『松切』の前より引続きて咲太夫の役場を勤め、又筑前太夫も欠席したるより道行のシテに廻り（後略）」（『竹本撰津大掾』）。	高野師直（才治）、桃井若狭之介（玉三郎）、塩谷判官（喜十郎）、かおよ御ぜん（徳三郎）、加古川本蔵（喜十郎）、となせ（才治）、娘小なみ（玉三郎）、大星力弥（玉蝶）、鷺坂伴内（玉之助）、早野勘平（玉造）、おかる（松江）、斧九太夫（玉三郎）、大星由良之介（玉造）、百性与一兵へ（玉造）、斧定九郎（玉造）、母おかや（新五郎）、寺岡平右衛門（才治）、お石（松江）。
1865	慶応1	5/5～	京 四条道場北の 小家	仮名手本忠臣蔵 大序より 大切迄	鶴ヶ岡の段（定＝常吉）、桃井やかたの段（緑＝由松、小賀＝万八）、足利殿中の段（鰐尾＝常吉、緑＝伝吾、相模＝団六、有馬＝竜糸）、扇ヶ谷の段（切 宮戸＝兵吉、鰐尾＝団六）、恩愛二つ玉之段（有馬＝伝吾、島＝竜糸）、勘平住家の段（伊達＝万八、切 長尾＝吉左衛門）、一力の段（由良ノ介－対馬・九太夫－相模・諸士－小賀・亭主－鰐尾・おかる－阿蘇・力弥－緑・仲ぬ－有馬・伴内－小津賀・平右衛門－長尾＝猿糸）、旅路の嫁入（阿蘇・伊達・緑・定＝庄次郎・吉左衛門・竜糸・万八・玉造・伝吾・常吉・由松・三吉）、山科の隠家ノ段（宮戸＝兵吉、切 対馬＝猿糸）、泉岳寺開帳ノ段（小津賀＝玉造）。 ※角書「高師直ノ塩谷判官」。	
1865	慶応1	6/20～	京 四条道場北ノ 小家	忠 臣 蔵	焼香ノ段（春戸＝鶴太郎）。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1866	慶応2	1	道頓堀竹田芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より 十段目迄	鶴ヶ岡の段(宝、梅、巴栄)、桃ノ井館ノ段(口小町、跡若美)、殿中のだん(口巴栄、中寅、切富、跡梅)、扇が谷ノ段(切塚、跡寅)、二つ玉の段(大美、い改土佐)、勘平住家段(中艶改頼、切文改町)、茶や場(由良之介-若・九太夫-富・重太郎-土佐・力弥-大美・おかる-大住・喜多八-寅・弥五郎-頼・伴内-町・平右衛門-君)、山科の段(口土佐、切君)、山科の段(口勝、切町改巴勢)。 ※角書「高師直ノ塩治判官」。 ※二つ目の「山科の段」を「天川屋ノ段」とする別番付あり。	高ノ師直(歌録)、もゝ井司(ママ)之介(辰之助)、塩谷判官(辰五郎)、かほよ御前(小玉)、加古川本蔵(与市)、女房となせ(辰蔵)、娘小浪(歌録)、大星力弥(市十郎)、さき坂伴内(辰之助)、早野勘平(与市)、女房おかる(辰蔵)、斧九太夫(小玉)、大星由良之介(兵吉)、与一兵へ(辰之助)、斧定九郎(小玉)、おかる母かや(文三)、寺岡平右衛門(文三)、女房おいし(辰五郎)、天川や義平(千柳)。
1866	慶応2	5/19~	京 四条道場北ノ 小家	仮名手本忠臣蔵 全十冊	鶴ヶ岡之段(要鯉=小兵)、桃の井やかたノ段(小賀=庄之助)、足利殿中のだん(口要鯉=小兵、中賀シ輪=常吉、切春戸=鶴太郎)、扇ヶ谷之段(切相模=吉兵、跡小賀=庄之助)、山崎海道の段(口賀シ輪=常吉、奥津=鶴太郎)、勘平住家の段(口津賀子=庄之助、切宮戸=兵吉)、一力茶やの段(由良ノ介-宮戸・おかる-阿蘇・重太郎-小賀・伴内-津賀子・弥五郎-津・喜多八-春戸・九太夫-相模・平右衛門-長尾=吉左衛門)、旅路之嫁入(シテ阿蘇・ワキ津賀子・ツレ賀シ輪=庄次郎・兵吉・万八・鶴太郎・庄之助・小熊・常吉・三吉・弥一郎・小兵)、山科(ママ)隠家之段(口相模=吉兵、切長尾=吉左衛門)、天川やのだん(口津=小熊、切阿蘇=万八)。 ※「高師直ノ塩治判官」。	
1866	慶応2	11/15~	京 四条道場北ノ 小家	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目迄	鶴ヶ岡段(登茂=小兵)、核(ママ)井やかたノ段(津賀子=喜代七)、足利殿中のだん(口要鯉=弥市、中春戸=玉造、切寿=団六)、扇ヶ谷ノ段(切むら=喜代七、跡春戸=常吉)、二つ玉ノ段(口津=庄之助、奥寿=玉造)、勘平住家ノ段(口桂=庄之助、切浜=兵吉)、旅路の嫁入(むら・桂・津賀子=庄次郎・兵吉・団六・庄之助・常吉・弥子)、山科隠家のだん(口津=団六、切津賀=吉左衛門)、大切茶屋場之段(カケ合由良之介-津賀・おかる-むら・九太夫-桂・諸士-津賀子・力弥-津・伴内-寿・平右衛門-浜=庄次郎)。 ※角書「高師直ノ塩治判官」。	
1866~ 1867頃	慶応2~ 慶応3頃		名古屋 若宮	仮名手本忠臣蔵	鶴ヶ岡の段(土佐)、松切のだん(口宮戸、切津賀)、殿中の段(口瓢、切時、跡小土佐)、扇ヶ谷の段(切宮戸、跡七重)、二つ玉之段(口大美、奥七重)、勘平住家段(口珥、切津賀)、旅路嫁入(宮戸・珥・大美)、山科之段(口時、切土佐)、一力茶屋(由良の助-土佐・伴内-時・ていしゆ・諸士-入・仲居・諸士-小土佐・力弥・諸士-大美・九太夫-七重・おかる-宮戸・平右衛門-津賀)。 ※角書「高ノ師直ノ塩治判官」。 ※「大序より九段目迄幕あり幕なし」(番付)。	高ノ師直(新吾)、桃ノ井若狭之助(太七)、塩や判官(与吉)、かほよ御せん(太七)、加古川本蔵(新吾)、となせ(三十郎)、小なみ(弥吉)、大星力弥(甚之助)、鷺坂伴内(久三郎)、勘平・定九郎・与一兵へ(早替り三十郎)、こし元おかる(三十郎)、斧九太夫(大治郎)、大星由良之助(久三郎)、はゝおかや(太三郎)、寺岡平右衛門(新吾)、おいし(与吉)、天川や義兵へ(弥吉)、女房おその(与吉)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1867	慶応3	8/18~	名古屋 清寿院御境内 常小家	忠 臣 蔵	六つ目(頼)。	早の勘平(鹿蔵)、勘平ノはゞ(才九)。
1867	慶応3	8/22~	京 四条道場北ノ 小家	仮名手本忠 臣蔵	鶴ヶ岡之段(宝=弥子、登茂=虎次郎、此母=源六)、桃ノ井やかた 之段(口 登茂=虎造、奥 春戸=小熊)、足利殿中のだん(口 七= 芳松、中 春戸=小熊、切 相模=団六)、扇ヶ谷のだん(切 長尾= 鱗糸、跡 津=常吉)、山崎海道之段(口 此母=小兵、奥 和石軒= 時造)、勘平住家の段(口 むら=喜代七、切 津賀=豊吉)、祇園町 茶屋場之段(カケ合 由良ノ介=長尾・九太夫=和石軒・重太郎=小 賀・喜多八=津・おかる=三光齋・力弥=七・弥五郎=春戸・伴内= 寿・平右衛門=津賀=吉兵衛)、道行 旅路の嫁入(シテ むら・ワキ 津・ツレ 此母=庄次郎・源之助・鱗糸・喜代七・小熊・常吉・小 兵)、山科隠家のだん(口 氏=源之助、切 春=吉兵衛)、人形廻シ 之段(寿=団六)、天川やのだん(中 相模=時造、切 氏=源之 助)、敵討より焼香之段(口 春戸=小熊、切 三光齋=豊吉)、大切 光明寺奥殿 十八ヶ条大星申開之段(カケ合 飯田多門守=春・大星由 良介=長尾・光明寺西念=氏・荒木弾正=相模・山名図書=津=庄次 郎)。 ※語り「重きが上の小夜衣/妻な重着の黒/装束は闇夜に/光る大星 の申開キ」。	
△ 1867	慶応3	10/2~	名古屋 清 寿 院	仮名手本忠 臣蔵	※『小寺玉晁記録』に「仮名手本忠臣蔵 敵討迄 竹本志太夫」とあ るに拠る。	
1868	明治1	12/6~	京都 四条北側芝居	忠 臣 蔵	九段目(春=吉兵衛)。	
1869	明治2	3	御りやう芝居	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目迄	大序 鶴が岡のだん(久栄、三保、隅江、友、羽矢、弥蘇、勇)、桃 の井館の段(口 友、次 羽矢、奥 富)、大下馬先の段(口 弥蘇、中 額)、殿中のだん(切 富司、跡 小隅)、扇が谷の段(切 大隅、跡 弥儀)、二つ玉のだん(口 額、奥 町改 巴勢、此所出つかひ早替り にて相つとめ申候 吉田兵吉)、勘平住家の段(口 尾木、切 塚改 対 馬)、一力の段(由良之介=越・力弥=頼母・喜多八=弥儀・九太夫 =富・平右エ門=富司・仲居=巴勢・弥五郎=小隅・伴内=尾木・お かる=大隅)、道行恋のはつ旅(頼母・小隅・羽矢・勇・隅江)、山 科のだん(口 巴勢、切 越)。 ※角書「塩谷判官/高の師直」。	高の師直(兵吉)、桃の井若狭之介(琴 糸)、塩谷判官(東十郎)、かほよ御前(才 寿)、加古川本蔵(兵吉)、となせ(辰十 郎)、娘小なみ(小兵)、大星力弥(小 辰)、鷺坂伴内(才寿)、早野勘平(小兵 吉)、こしもおかる(小兵)、斧九太夫 (東十郎)、大星由良之介(小兵吉)、百姓 与市兵へ(辰十郎)、斧定九郎(光造)、お かるの母(千柳)、寺岡平右エ門(光造)、 女房おいし(東十郎)。
1869	明治2	12/10~	京都 北側大芝居	忠 臣 蔵	九段目(三光齋)。	
△ 1870	明治3	3	座摩裏門小家	忠 臣 蔵	※『義太夫年表 明治篇』欄外記事に拠る。出演は嶋太夫、若太夫、 頼太夫、勢見太夫、豊助、清兵衛、勝市、才十郎。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1870	明治3	7/23~	京都 道場北の小や	仮名手本忠 臣蔵 大序より 大切まで	鶴岡段（小賀）、桃井やかた段（此母）、足利殿中之段（口 道奥、切 津）、扇ヶ谷之段（切 織、跡 此母）、山崎海道之段（口 須廣、奥 寿）、勘平住家之段（口 津、切 浜）、茶屋場之段（カケ合 由良介一長尾・おかる一織・九太夫一小賀・弥五郎一此母・亭主・喜多八一道奥・仲み・重太郎一須廣・力弥・伴内一寿・平右衛門一浜）、山科之段（小賀、長尾＝鱗糸）、天川や之段（紋）、泉岳寺開帳段（寿）、大切 光明寺奥殿 大星十八ヶ条申開ノ段（飯田多門ノ頭一紋・荒木弾正一津・山名図書一小賀・大星由良介一長尾）。 ※語り「重きか口の小夜衣／我妻ならて妻な／重着の黒装束／ハ口夜ニ光ル大星□□」。 ※典拠とした番付には興行年次に関する記述が見当たらないが、出演者の改名から明治2年あるいは3年の興行と推定できる。出演者の顔ぶれが、明治2年のものに比べ、明治3年のものにやや近いので、仮に明治3年の興行とした（『近代歌舞伎年表 京都篇』）。	
1870	明治3	7	いなり東芝居	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九ツ目迄	大序 鶴ヶ岡の段（住都、梅、春尾、亀久、春馬、梶、豊）、桃の井館の段（口 七、奥 染子）、大下馬先の段（中 音羽）、殿中の段（切 実）、裏門の段（跡 三根）、扇ヶ谷の段（切 湊、跡 中）、二ツ玉の段（口 春戸、奥 浪、此所出つかひ早替りにて御覧に入候 吉田玉造）、勘平住家の段（中 越路、切 越）、一力の段（由良之介一湊・力弥一三根・九太夫一実・伴内一浪・重太郎一春戸・喜多八一左馬・弥五郎一豊・おかる一越路・平右衛門一越）、道行旅路の嫁入（かけ合 むら・染子・七）、山科の段（中 中、切 春）。 ※角書「高の師直／塩谷判官」。	高の師直（玉之助）、桃の井若狭之介（辰之助）、塩谷判官高貞（喜十郎）、かほよ御前（小玉）、加古川本蔵（喜十郎）、妻となせ（辰造）、娘小浪（鹿造）、大星力弥（玉助）、鷺坂伴内（辰之助）、早野勘平（玉造）、こしもおかる（辰造）、斧九太夫（玉之助）、大星由良之介（玉造）、百しやう与一兵へ（玉造）、斧定九郎（玉造）、母おかや（玉之助）、寺岡平右衛門（光造）、妻おいし（小玉）。
1871	明治4	2/16~	京都 道場北の小家	仮名手本忠 臣蔵 大序より 大切迄	鶴ヶ岡之段（小富士、駒登）、桃ノ井やかたの段（口 小富士、奥 須廣）、足利殿中の段（口 駒登、中 嶋戸、切 小賀、跡 蔦）、扇ヶ谷の段（切 津、跡 嶋戸）、二ツ玉之段（口 駒戸、奥 須戸）、勘平住家の段（口 絹、切 佐賀見）、七条河原の段（津）、喜内住家の段（口 小賀、切 長尾）、祇園町茶屋場之段（カケ合 伴内一紋・九太夫一津・重太郎一小賀・おかる一駒・弥五郎一須廣・喜多八一絹・由良之介一佐賀見・平右衛門一長尾）、山科の隠家之段（口 絹、切 駒）、増補天川やの段（口 須廣、切 紋）、敵討より焼香之段（小賀）。 ※語り「さなきたに重きか上の小夜衣妻な重着のみつゝけ客尻を長尾の平右衛門／隠駒の口取て吾妻をさして行にけり光りかゝやく大星ニ随ふ四十七の物語りを今爰」。 ※典拠とした番付には興行年次に関する記述が見当たらないが、出演者の改姓、板元の用字などから、明治5年以降の可能性も残るが、仮に明治4年の興行とした（『近代歌舞伎年表 京都篇』）。	
1871	明治4	12/9~	京都 寺町北向芝居	忠 臣 蔵	三段目（滝＝小時）。九（吉兵衛）。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1872	明治5	3	京都 北側大芝居	忠臣蔵	四段目（綱＝弥七）。 ※典拠とした番付には興行年次に関する記載が見当たらない。『義太夫年表 明治篇』、八世竹本綱太夫『でんでん虫』には明治4年とあるが、『中西仁智雄コレクション 浄瑠璃番付写真集』に従い、明治5年とした。	
1872	明治5	9	ほりへ芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目まで 幕なし	鶴ヶ岡のだん（金、八尾、松栄、弥津、浜尾）、桃の井館の段（春子、弥儀）、大下馬先の段（浜栄、琴）、殿中のだん（切音）、大広間のだん（咲尾）、扇ヶ谷の段（切駒、跡巴駒）、墓所のだん（芝、文字）、萱野村の段（春戸、切津嶋）、勘平切腹の段（切浜）、一力のだん（由良之介－長尾・九太夫－織・喜多八－巴駒・弥五郎－浜栄・平右工門－浜・亭主・仲ぬ－春子・力弥－琴・十太郎－弥儀・伴内－津嶋・おかる－松鳳軒）、桃の井別荘の段（春戸、織＝団六）、山科のだん（中文字、切長尾＝鱗糸）。 ※角書「高の師直ノ塩谷判官」。 ※「桃ノ井館」ハ「本蔵下屋敷」ノ原形（『義太夫年表 明治篇』）。	高の師直（金四）、若さ之介（兵三）、塩谷判官（千次郎）、かほよ御ぜん（万治）、加古川本蔵（金四）、となせ（東十郎）、小なみ（兵吉）、大星力弥（兵造）、鷺坂伴内（千次郎）、早野勘平（兵吉）、おかる（東十郎）、九太夫（兵三）、大星由良之介（金四）、百姓市（ママ）兵へ（新造）、寺岡平右工門（兵吉）、おいし（兵三）。
1872	明治5	10	京都 道場芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目まで 幕なし	鶴ヶ岡のだん（織尾、緑り、松栄）、桃ノ井館ノ段（織登、巴駒）、大手先ノ段（盛葉改 緑り、八木改 橋）、殿中のだん（切大筆改 蟠龍軒）、裏門のだん（十七）、扇ヶ谷の段（鞆＝兵吉改 栄三、跡登和）、墓所のだん（芝、初改 寿）、萱野村ノ段（口琴、中紋、切津嶋）、一力のだん（由良之介－長尾・十太郎－紋・弥五郎－寿・力弥－九重・平右衛門－鞆・仲居－巴駒・喜多八－大筆・九太夫－蟠龍軒・伴内－津嶋・おかる－松鳳軒）、本蔵屋舗ノ段（九重、織＝団六）、山科隠家ノ段（盛改 大筆、切長尾）。 ※角書「高ノ師直ノ塩谷判官」。	高師直（綱五郎）、若サ之介（兵三）、塩谷判官（千次郎）、加古川本蔵（金四）、となせ（東十郎）、小なみ（兵吉）、大星力弥（兵造）、鷺坂伴内（千次郎）、早野勘平（兵吉）、おかる（東十郎）、九太夫（兵三）、大星由良之介（金四）、寺岡平右衛門（兵吉）、おいし（兵三）。
△ 1873	明治6	1/1～4	博労町 稲荷社内	仮名手本忠臣蔵	九段目迄（浅野内匠之頭・萱野三平・妻となせ－越路・妻おいし・女房おかる－むら・与三兵衛・大野軍右衛門・原惣右衛門－弥・上野之介・田村右京・寺坂吉右衛門－梶・三平の母・小浪・蔵之助－古鞆＝新左衛門・勝七・猿糸・松花・徳太郎）。 ※素浄瑠璃。 ※『義太夫年表 明治篇』欄外記事に拠る。	
1873	明治6	2	堀江芝居跡新 席	（仮名手本忠臣蔵）	九（織登）。四（津馬）。六（織尾）。 ※素浄瑠璃。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1873	明治6	9	松島文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序より 敵討まで	大序 鶴ヶ岡の段(さの、むら尾、宮城、角、越の、松栄)、亀井能登守やしきの段(中 春栄、奥 弥)、大下馬先の段(口 園、次 三根)、殿中の段(吉良上野之介一染・浅野内匠頭一越路・亀井能登守一養老・加古川本蔵一路)、裏門の段(中)、浅野殿館の段(切 越)、霞ヶ関の段(実)、ニッ玉の段(口 豊、奥 浪、此所出遣ひ早替りにて御覧に入申候 吉田玉造)、茅の三平切腹の段(中 養老、切 越路)、一力の段(内蔵介一春・主税一路・九郎兵へ一中・伴内一弥・十次郎一町・只七一園・与五郎一鰻・吉右工門一染・おかる一むら・亭主一越の)、道行恋のはつ旅(かけ合 三根・春栄・路・松栄、此所人形出遣ひ早替りにて相つとめ申候)、山科の段(中 実、切 春)、天川やの段(中 町、切 むら)、両国ばしの段(鰻、春馬)、敵討の段(豊)。 ※角書「吉良上野介義英ノ浅野内匠頭長矩」。 ※「九月十四日ヨリ卅九日間」(『義太夫年表 明治篇』)。	吉良上野之介(玉之助)、亀井能登守(玉治)、浅野内匠頭(辰五郎)、かほよ御前(小玉)、加古川本蔵(玉之助)、妻となせ(辰造)、娘小なみ(辰五郎)、大石主税(玉助)、鷺坂伴内(玉助)、萱野三平(玉造)、おかる(辰造)、斧九郎兵へ(玉治)、大石内蔵之介(玉造)、百しやう与一兵へ(玉造)、斧定九郎(玉造)、寺坂吉右工門(玉治)、女房おいし(鹿造)、天川や義平(玉治)、女房おその(小玉)。
1874	明治7	4	道頓堀竹田芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より 十段目迄	鶴ヶ岡の段(古勢、織の、織子、小文字、美馬、巴代、浜尾)、桃の井館の段(口 浅尾、奥 頼)、足利殿中の段(口 宮、中 鳴見、切 津、跡 織尾)、扇ヶ谷の段(切 長尾、跡 頼)、与茂七住家の段(口 梶摩、中 小賀、切 梶)、山崎海道の段(口 鞆登、切 文字、此所吉田金四出遣ひにて四役早替りにて御覧に入申候)、勘平住家の段(中 若、切 浜)、祇園町茶や場の段(由良之介一巴・伴内一山四郎・力弥一古鞆・亭主一織・弥五郎一梶・仲居一春戸・平右工門一呂・仲居一小賀・喜多八一津・重太郎一文字・仲一浜・九太夫一長尾・おかる一若)、山科隠家の段(春戸、巴)、天川やの段(小賀、若)。 ※角書「高野師直ノ塩谷判官」。	高の師直(光造)、桃井若狭之介(兵三)、塩谷判官(喜十郎)、かほよ御前(新三郎)、加古川本蔵(喜十郎)、となせ(東十郎)、むすめ小なみ(辰太郎)、大星力弥(兵造)、鷺坂伴内(玉四)、早野勘平(金四)、おかる(東十郎)、斧九太夫(小辰)、大星由良之介(金四)、百しやう与一兵へ(金四)、斧定九郎(金四)、勘平はゞ(勢造)、寺岡平右工門(光造)、女房おいし(門造)、女房おその(喜十郎)。
1874	明治7	11/1~14	名古屋末広座	忠 臣 蔵	山科段(口 淀、切 巴)。 ※浄瑠璃身振り。	
△ 1874	明治7	12/10~	名古屋古袖町芝居(橘座)	忠 臣 蔵	(鶴)。 ※『古袖町句欄記』に拠る。	
1875	明治8	4	京都新京極東ノ席亀廻家	仮名手本忠臣蔵 大序ヨリ 植木や迄	鶴ヶ岡の段(蔵、入、栄)、桃ノ井館の段(口 浅尾、奥 千駒)、足利殿中の段(口 角、中 長勢、切 三国、次 千駒)、扇ヶ谷の段(切 長尾、次 長勢)、山崎街道の段(口 浅尾、カケ合 なぎさ・君)、勘平住家の段(口 いつ、切 佐賀美)、一力茶や場(由良之介一春・九太夫一佐賀美・弥五郎一いつ・喜多八一萩・一力亭主一干駒・おかる一駒・力弥一浅尾・太鼓持入一長勢・重太郎一君・伴内一なぎさ・平右衛門一長尾)、七条河原ノ段(君)、喜内住家の段(口 萩、切 駒=吉弥)、山科の段(口 いつ、切 春)、大切 植木屋ノ段(カケ合 左右衛門一佐賀美・弥七=君=栄三郎・蘭ノ方一いつ・兵内一なぎさ=時造)。	
1875	明治8	5	名古屋亀の家座	忠 臣 蔵	丸はんめ(なぎさ=安次郎)。 ※「浄瑠璃大寄」の内。	
1875	明治8	7	名古屋橘座	忠 臣 蔵	扇ヶ谷(小賀=仙之助)。 ※太夫 豊竹古鞆太夫。素浄瑠璃。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1875	明治8	11	竹田芝居	忠 臣 蔵	三段目（幾＝吉丸）。扇ヶ谷（豊＝仙吾）。九段目（山四郎＝兵ノ吉）。 ※素浄瑠璃。	
1876	明治9	1/1～	天満大工町芝居	忠 臣 蔵	三（幾）。九（春）。 ※「浄瑠璃緑りの鉢植」の内。	
1876	明治9	4	大江橋席	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目迄	鶴ヶ岡のだん（さ馬、品、鑊、勇、篤の）、桃の井館の段（口 関、奥 春戸）、殿中のだん（口 巴木、中 田古、切 磯、跡 十九）、扇ヶ谷の段（切 呂、跡 小浜）、山崎街道の段（口 浜尾、奥 文字、此所吉田才治出遣い三役相かわり相つとめ申候）、勤平住家の段（中 織の、切 浜）、祇園町茶や場の段（由良之介－春・伴内－山四郎・仲居－呂・喜多八－春戸・弥五郎－小賀・おかる－茂・力弥－小浜・亭主－春子・重太郎－磯・九太夫－巴・平右工門－浜）、道行旅路嫁入（シテ 茂・ワキ 多門・ツレ 巴木）、山科隠家の段（中 春戸、切 春＝*団平）。	高野師直（才治）、桃井若狭之介（兵造）、塩谷判官（小光）、かほよ御前（為十郎）、加古川本蔵（辰五郎）、女房となせ（鹿造）、むすめ小浪（辰五郎）、大星力弥（庄造）、鷺坂伴内（友造）、早野勘平（才治）、おかる（鹿造）、斧九太夫（寛四）、大星由良之介（才治）、与市兵衛（才治）、斧定九郎（才治）、勤平母（辰五郎）、寺岡平右工門（辰五郎）、おいし（寛四）。
1877	明治10	2/13～	弁 天 座	（仮名手本忠臣蔵）	扇ヶ谷（多口）。七（入）。山しな（理）。 ※「過し日のノ其年月もノめぐり来て 連営手向の薫樹 礼拝三度」の内。故人太鼓卯之助追善。 ※初日は役割番付欄外の墨書に拠る。	
1877	明治10	5	松島文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序より 敵討迄	大序 鶴ヶ岡のだん（組栄、七重、弥津、福、山登、氏栄、芳、登勢）、亀井能登守やしきの段（口 豊、奥 津）、大下馬先の段（口 鶴羽、次 田喜、奥 三根）、殿中の段（上野之介－梶・内匠頭－弥・能登守－組）、うら門のだん（跡 春子）、浅野内匠頭館のだん（切 春）、霞ヶ関の段（氏）、二ツ玉の段（口 長子、奥 組、此所三役出遣い早替りにて御覧に入申候 吉田玉造）、萱野三平切腹のだん（中 津、切 住）、一力のだん（内蔵之介－春・主税－路・九郎兵へー氏・伴内－住・重次郎－豊・只七－春子・与五郎－長子・吉右工門－梶・おかる－越路・亭主－田喜）、道行恋の初旅（かけ合 三根・春子・田喜＝団平・叶・友之助、此所出つかひ早替りにて御覧入申候 吉田玉造ノ桐竹亀松ノ吉田玉助）、山科のだん（中 実、切 越路）、天野やの段（中 路、切 弥＝*団平）、勢揃のだん（越の、越代）、敵討之段（長子）。 ※角書「吉良上野之助ノ浅野内匠の頭」。 ※「五月一日ヨリ卅六日間」（『義太夫年表 明治篇』）。 ※「四ツ目の切と七ツ目の掛合に由良之助を春太夫に振付けありし所、遂に出勤せず。四ツ目は弥太夫が代り、由良之助は実太夫が勤め、春太夫は其年の七月廿五日、遂に帰らぬ人の数に入りぬ。時に年七十歳なり」（『竹本撰津大掾』）。 ※三味線は『竹本撰津大掾』に拠る。	吉良上野之介（玉造）、亀井能登守（玉之助）、浅野内匠の頭（玉助）、かほよ御前（小玉）、加古川本蔵（玉治）、妻戸無瀬（亀松）、娘小浪（玉助）、大石主税（辰吉）、鷺坂伴内（小兵吉）、萱野三平（玉造）、おかる（亀松）、小野九郎兵衛（東十郎）、大石蔵之介（玉造）、百しやう与一兵へ（玉造）、小野定九郎（玉造）、母おかや（小玉）、寺坂吉右工門（玉助）、天野や義平（玉治）、女房おその（東十郎）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
1877	明治10	12	御霊社内小家	仮名手本忠臣蔵 大序より 夜討迄	鶴ヶ岡の段(勢喜、久子、勢尾、小勢見、氏栄、小音、田手)、桃の井館の段(口 鞆茂、次 光、奥 新呂)、下馬先の段(口 の、中 呂勢、田古)、殿中の段(切 中、跡 鞆登)、扇ヶ谷の段(切 久、跡 鞆栄)、山崎の段(鞆登)、二つ玉の段(浜鞆)、勘平住家の段(中 頼、切 勢見)、一力揚屋の段(由良之介-久・伴内-仮名・力弥-新鞆・喜多八-鞆登・亭主-呂勢・おかる-古鞆・仲居-田古・弥五郎-鞆栄・重内-浜鞆・九太夫-頼・平右工門-勢見)、七条川原の段(口 の、奥 仮名)、喜内住家の段(中 中、切 古鞆)、道行旅路の嫁入(シテ 嶋鞆・ハキ 鞆栄・ツレ 田古)、山科の段(口 新呂、切 呂=松太郎)、夜打の段(光、の、鞆 茂)。 ※角書「高野師直が難題の意趣／塩谷判官が返歌の遺恨」。 ※「十二月六日ヨリ」(『義太夫年表 明治篇』)。	高野師直(金四)、桃の井若狭之介(辰枝)、塩谷判官(猪造)、かほよ御前(喜市)、加古川本蔵(金四)、女房となせ(才治)、娘小なみ(喜市)、大星力弥(国三郎)、鷺坂伴内(金四)、鷺坂伴内(冠四)、早野勘平(金四)、おかる(国三郎)、斧九太夫(勢造)、大星由良之介(才治)、与一兵衛(辰十郎)、斧定九郎(猪造)、勘平母(喜十郎)、寺岡平右工門(金四)、おいし(冠四)。
1878	明治11	1	名古屋 愛栄座	忠 臣 蔵	六ツ目(路)。本蔵屋敷(春子)。九段目。 ※太夫 竹本越路太夫。素浄瑠璃。	
1878	明治11	3	名古屋 愛栄座	忠 臣 蔵	茶屋場(カケ合 由良之介-重・九太夫-大筆・重太郎-縫・竹森喜太八-是・おかる-茂・力弥-浜路・弥五郎-山登・伴内-小賀・寺岡平右衛門-浜=鉄二郎、豊吉)。 ※浄瑠璃身振り。	
1878	明治11	4	大江橋席	仮名手本忠臣蔵 大序より 大切迄	鶴ヶ岡の段(綾の、隅子、氏栄、小音)、桃の井館の段(光、頼)、足利殿中の段(綾賀、成、新鞆、浜鞆)、扇ヶ谷の段(久、橋)、与茂七住家の段(の、仮名)、山崎海道の段(嶋鞆、山四郎=兵吉、此所吉田金四出遣ひにて四役早替りにて御覧に入申候)、勘平住家の段(新呂、呂=吉三郎)、祇園町茶や場の段(由良之介-綾瀬・九太夫-仮名・喜多八-嶋鞆・弥五郎-春路・平右衛門-若・亭主-春子・力弥-新呂・仲居-浜鞆・重太郎-橋・おかる-呂・伴内-山四郎)、本蔵別荘の段(房、春子)、山科の段(春路、綾瀬)、天川やの段(綾賀、文字)、両国橋の段(延寿)。 ※角書「高野師直／塩谷判官」。	高野師直(才治)、桃の井若狭之介(玉枝)、塩谷判官(喜十郎)、かほよ御前(辰枝)、加古川本蔵(光造)、女房となせ(才治)、娘小浪(冠四)、大星力弥(辰之助)、鷺坂伴内(玉枝)、早野勘平(金四)、こしもとおかる(才治)、斧九太夫(辰十郎)、大星由良之助(金四)、百姓与一兵衛(金四)、斧定九郎(金四)、勘平母(喜十郎)、寺岡平右衛門(光造)、女房おいし(喜十郎)、天川や義兵へ(光造)、女房おその(冠四)。
1878	明治11	8/15~	東京 愛宕町二丁目 芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より 十一段目迄	大序(巴)、桃の井館の段(口 常、奥 勢尾)、殿中の段(口 巴代、切 相生、跡 芳)、扇ヶ谷の段(切 岡、跡 勝)、二つ玉の段(豊嶋、此所早替り相勤申候 西川伊三郎)、勘平住家の段(中 小鞆、切 田組)、一力揚屋の段(由良之助-岡・おかる-大和・九太夫-勢尾・伴内-渚・力弥・重太郎-芳・喜多八-巴代・弥五郎-常・仲居・亭主-田綱・平右工門-豊嶋)、旅路の嫁入の段(シテ 大和・ワキ 花鞆・ツレ 勝・ツレ 芳)、山科の段(中 相生、切 巴)、天川屋の段(口 渚、中 古鞆、切 田組)、夜討の段(惣座中)。 ※角書「塩谷判官／高野師直」。	高野師直(伊三郎)、桃の井若狭の助(国三郎)、塩谷判官(国八)、御台所(新七)、加古川本蔵(新七)、本蔵女房となせ(伊三郎)、本蔵娘小波(ママ)(国三郎改 才二)、大星力弥(伊十郎)、すき坂伴内(綱七)、早野勘平(冠二)、こし元かる(国八)、斧九太夫(国三郎)、大星由良之助(文三郎)、百姓与市兵へ(伊三郎)、斧定九郎(伊三郎)、勘平はゞ(国三郎)、寺岡平右工門(新七)、由良之助女房いし(国八)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1879	明治12	2	道頓堀角の芝居	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目まで	鶴ヶ岡の段（小賀）、桃の井館の段（小勢見、綾）、下馬先の段（鶴、巴枝）、殿中のだん（師道（ママ）一新靴・判官一路・若狭の介一富・本蔵一千駒）、裏門のだん（成）、扇ヶ谷の段（綾瀬、縫）、山崎街道の段（楠）、二つ玉のだん（定九郎一路・与一兵衛一頼・勘平一楠、与一兵衛定九郎勘平右三役吉田辰五郎出つかひ早替にて御覧に入候）、勘平住家のだん（千駒、呂）、本蔵下やしきの段（三好、春子）、祇園町茶や場之段（カケ合 由良之介一巴・伴内一仮名・重太郎一頼・喜多八一千駒・亭主一駒・仲居一浜・仲居一綾瀬・力弥一綾・弥五郎一富・九太夫一新靴・平右衛門一呂・おかる一一世一代 若）、山科隠家の段（新靴、巴=*友治郎）。 ※角書「高野師直ノ塩谷判官」。	高の師直（辰五郎）、桃井若狭之介（玉枝）、塩谷判官（兵三）、かほよ御前（冠四）、加古川本蔵（光造）、女房となせ（辰造）、娘小浪（辰太郎）、大星力弥（金之助）、鷺坂伴内（玉枝）、早野勘平（駒十郎）、二つ玉=辰五郎、こしもとおかる（辰造）、斧九太夫（辰十郎）、大星由良之介（辰五郎）、与一兵衛（辰五郎）、定九郎（辰五郎）、勘平はゞ（冠四）、寺岡平右衛門（光造）、女房おいし（勢造）。
1880	明治13	6	旭 座	武士鑑忠臣実記 大序より 鎌腹まで	大序 鶴が岡のだん（見習 清、筆の、浜子、枅）、亀井やしきのだん（呂子、奥 源）、鎌倉殿中のだん（口 枅、中 船、切 橋、跡 呂 鳳）、早打の段（船）、評義のだん（頼）、奥殿のだん（若松）、うら門のだん（綾賀）、寺坂吉右衛門住家のだん（口 成、切 新靴）、吉良上野之介別館のだん（口 咲梅、奥 朝、此所吉田辰五郎五役出つかひ早替りにて御覧に入申候）、萱の三平住家のだん（口 龍、切 仮名）、赤穂城古御殿のだん（口 呂勢、奥 布袋、此所吉田辰五郎五役出つかひ早替りにて御覧に入申候）、七条川原のだん（口 咲梅、奥 富）、喜内住家のだん（中 橋、切 浜）、弥作鎌腹のだん（口 呂 勢、中 頼、切 呂）。 ※角書「高家の出頭吉良上野之助ノ饗応の役は浅野内匠頭」。 ※忠臣蔵各種の集め物（『義太夫年表 明治篇』）。	吉良上野之介（兵三）、亀井能登守（栄造）、浅野内匠頭（富十郎）、かほよ御前（辰五郎）、加古川本蔵（勢造）、むすめ小浪（喜市）、大石主税（辰助）、さ記坂伴内（玉枝）、萱の三平（駒十郎）、斧九太夫（勢造）、大石内蔵之介（才治）、斧定九郎（栄造）、女房おかや（冠四）、女房おいし（喜市）。
1880	明治13	9	京都 蛸薬師新席 福 の 家	仮名手本忠臣蔵 従大序 九段目迄	大序ヨリ松切迄（徳=団四）、足利殿中のだん（玉=伝造）、扇ヶ谷のだん（若重=伝四）、二ツ玉のだん（玉=伝造）、勘平腹切のだん（雛=弥六）、喜内住家のだん（嶋戸=弥造）、山科隠家のだん（九重=友三郎）、祇園一力揚屋のだん（惣一座カケ合）。 ※角書「高野師直ノ塩谷判官」。 ※浄瑠璃身振り。	
1881	明治14	12	京都 せいぐわんじ 本堂前定席 夷 谷 座	仮名手本忠臣蔵 大序より 討入まで	鶴か岡ノ段（喜代=浅造）、桃ノ井館ノ段（初=文作）、殿中のだん（カケ合=浅造）、扇か谷の段（寿=文作）、二ツ玉ノだん（カケ合=文作）、勘平住家ノ段（是=浅造）、一力のだん（カケ合=浅造）、山しなの段（カケ合=文作）、天川やの段（是=浅造）、□□のだん（喜代=浅造）。 ※浄瑠璃身振り。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1883	明治16	1/1~	京都 北側演劇	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目迄	大序 鶴ヶ岡の段（長登）、桃の井館ノ段（百合、春戸）、足利殿中 のだん（大倉、田喜、時、春栄、此所出遣二而御らん二入申候）、扇 ヶ谷のだん（染、袖）、二ツ玉の段（山登、氏、吉田玉造此所二而出 遣早替にて御らん二入申候）、勘平住家のたん（むら、住、惣出遣イ ニテ御らん二入候）、一力のだん（由良之介一実改 長登・力弥一 住・九太夫一氏・伴内一組・重太郎一田喜・喜多八一袖・弥五郎一山 登・亭主一楠・平右衛門一染・中居一大倉・おかる一越路、惣出遣二 テ御らん二入候）、道行恋の初たび（シテ むら・ワキ 春栄・ツレ 百合、紋十郎玉助出遣イニ而御らん二入候）、山科隠家のだん（中 時、切 越路）。 ※角書「高野師直ノ塩谷判官」。 ※初日は「京都滋賀新報」（明治15年12月26日）に拠る。 ※人形役割の桃井若狭之介を桐竹新七とする別番付あり。 ※「道行恋の初たび」ワキの竹本春栄太夫の右上に「栄太夫」とあ り。	高野師直公（紋三郎）、桃井若狭之介（玉 七）、塩谷判官（亀松）、かほよ御前（紋之 助）、加古川本蔵（玉治）、妻となせ（紋十 郎）、娘小浪（玉助）、大星力弥（玉松）、 鷺坂伴内（紋三郎）、早野勘平（玉七、六ツ 目＝玉治）、おかる（紋之助、七ツ目＝紋十 郎）、斧九太夫（亀松）、大星由良之介（玉 造）、百姓与一兵衛（玉造）、斧定九郎（玉 造）、勘平母（紋十郎）、寺岡平右衛門（玉 助）、女房おいし（鹿造）。
1883	明治16	11	日本橋 沢 の 席	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目まで	大序 鶴ヶ岡のだん（朝の、重の、大見、組子、源氏、組与、越磨、 津代）、桃の井館のだん（口 呂子、中 駒子、本蔵一組・若狭之介一 春子）、大下馬先の段（中 琴、次 山登）、殿中のだん（切 町、跡 隅栄）、扇ヶ谷のだん（切 春子、跡 琴）、山崎街道の段（口 駒 子、奥 源、此所出つかひ早替りにて御覧に入申候 吉田辰五郎）、勘 平住家のだん（中 朝、切 組）、祇園一力茶や場のだん（由良之介一 春子・伴内一町・喜多八一山登・仲居一津代・亭主・仲居一越磨・お かる一重・弥五郎一隅栄・力弥一呂子・重太郎一琴・九太夫一巴・平 右衛門一組）、道行旅路の嫁入（シテ 朝・ワキ 駒子・ツレ 隅栄・ ツレ 越磨＝新左衛門・喜八郎・大吉・三造・浜之介・富助・新昇・ 米吉）、山科のだん（中 源、切 重）。 ※角書「高野師直ノ塩谷判官」。 ※沢の席での人形浄瑠璃興行はこれが最後（『吉田栄三自伝』に拠 る）。	高野師直（栄造）、桃の井若狭之介（笑 吉）、塩谷判官（辰枝）、かほよ御ぜん（才 子）、加古川本蔵（駒十郎）、女房となせ （東十郎）、娘小なみ（松江）、大星力弥 （喜市）、鷺坂伴内（松江）、早野勘平（辰 五郎）、こしもおかる（東十郎）、百姓与 一兵衛（辰五郎）、斧九太夫（栄寿）、大星 由良之介（辰五郎）、斧定九郎（辰五郎）、 勘平母おかや（才子）、寺岡平右衛門（駒十 郎）女房お石（喜市）。
1884	明治17	6/1~	彦 六 座	仮名手本忠 臣蔵 九段目	山科のだん（中 朝、切 柳適）。	加古川本蔵（辰五郎）、女房となせ（東十 郎）、むすめ小なみ（松江）、大星力弥（友 造）、大星由良之介（才治）、女房おいし （辰枝）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1884	明治17	11	御霊文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目迄	大序（越江、浜子、尾木、時尾、時寿、尾上、浪尾、弥の、稲葉）、鶴が岡の段（呂子、喜久、絹、弥儀）、恋の倭うた（師直一袖・かほよ一路・若狭之介一春戸）、桃の井若狭之介やしきの段（口 春栄、奥 氏）、大下馬先の段（口 常子、中 南部）、殿中の段（切 長尾）、裏門の段（跡 多門）、塩谷判官館段（切 津）、霞ヶ関の段（春戸）、加古川本蔵やしきの段（口 梶栄、奥 浪）、山崎街道の段（額）、ニツ玉の段（呂、出遣ひ早替りにて御覧に入申候 吉田玉造）、早野勘平住家の段（中 路、切 弥）、一力の段（由良之介一長登・力弥一越代・九太夫一浪・伴内一弥・十太郎一南部・喜多八一春栄・弥五郎一富・平右工門一呂・おかる一越路・亭主一多門＝広助）、道行恋の初旅（時・岡・谷・越登・絹・百合、出遣ひにて御覧に入申候／福市 吉田玉造／富市 桐竹紋十郎／徳市 吉田玉助）、山科の段（中 長尾、切 越路）。 ※角書「高野師直／塩谷判官」。 ※「十一月十七日より四十五日間」（『竹本撰津大掾』『野沢の面影』）、「十二月十五日打上げ、十八年一月一日より十五日迄」（『増補浄瑠璃大系図』）。 ※「本蔵下屋敷」を新作上演（『義太夫年表 明治篇』欄外記事に拠る）。	高野師直（玉造）、桃の井若狭之介（玉七）、塩谷判官（玉助）、かほよ御前（鹿造改 燕造）、加古川本蔵（玉治）、妻戸なせ（紋十郎）、娘小浪（玉助）、大星力弥（玉米）、鷺坂伴内（玉七）、早野勘平（玉助）、おかる（紋十郎）、斧九太夫（辰枝）、大星由良之介（玉造）、百姓与一兵衛（玉造）、斧定九郎（玉造）、勘平母（玉五郎）、寺岡平右工門（玉助）、妻おいし（鹿造改 燕造）。
1885	明治18	4/17	京都 南側劇場	忠 臣 蔵	三段目（組代＝小仙）。 ※彦六座。	
1886	明治19	1/2～	彦 六 座	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目迄	大序（朝美、三輪、重の、源枝）、鶴ヶ岡の段（鹿、住の、組路）、桃の井館の段（芳、若狭之介一富司・加古川本蔵一町）、大下馬先の段（口 津代、次 若松）、殿中の段（切 源／越／新靱、右三人一日替りにて相つとめ申候）、裏門の段（袖）、扇ヶ谷の段（切 源／越／新靱、右三人一日替りにて相つとめ申候、山登、此所人形出つかひにて御覧に入申候 吉田辰五郎）、山崎街道の段（口 若靱、奥 源／越／新靱、右三人一日替りにて相つとめ申候、此所人形出つかひ早替りにて御覧に入申候 吉田才治）、勘平切腹の段（中 朝、切 組）、祇園一力の段（大星由良之介一柳適・斧九太夫一新靱・大星力弥一鳴・亭主一組子・矢間重太郎一若松・仲居おいろ一組路・おかる一大隅・仲居おさせ一組代・竹森喜多八一山登・仲居おすぎ一住の・千崎弥五郎一若靱・鷺坂伴内一町・寺岡平右衛門一組、此所人形惣出つかひにて御覧に入申候）、道行旅路の嫁入（シテ 富司・ワキ 袖・ツレ 芳・ツレ 住の、此所人形出つかひにて御覧に入申候）、山科の段（中 町、切 柳適）。 ※角書「高野師直／塩谷判官」。 ※「山崎街道の段・口」を竹本山登太夫とする別番付あり。	高野師直（才治）、桃の井若狭之介（門造）、塩谷判官（亀松）、かほよ御前（喜市）、加古川本蔵（才治）、妻となせ（三吾）、むすめ小浪（亀松）、大星力弥（松江）、鷺坂伴内（栄造）、早野勘平（門造）、おかる（三吾）、斧九太夫（兵三）、大星由良之介（辰五郎）、百姓与一兵へ（清造）、斧定九郎（友造）、勘平母（辰五郎）、寺岡平右衛門（兵吉）、妻おいし（門造）。
△ 1887	明治20	7/30 8/3	名古屋 千 歳 座	忠 臣 蔵	九段目（柳適）。 四段目（海）。 ※「金城新報」（7月29日・8月3日の記事）に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1887	明治20	11	御霊文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序より 敵討まで	大序 鶴が岡の段(桐、弥福、南枝、津田)、恋慕の倭うた(師直一尾上・かほよ一絹・若狭之助一組路)、桃の井若狭之助やかたの段(口 浜子、奥 町)、大下馬先の段(口 路代、次 仮名)、殿中の段(切 谷)、裏門の段(富)、塩谷判官館の段(切 呂)、霞ヶ関の段(越羽)、二ツ玉の段(口 浜子、奥 織、此所出つかひ早替りにて御覧に入申候 吉田玉造)、早野勘平住家の段(中 綾、切 長尾)、一力の段(由良之介一津・力弥一浜子・九太夫一呂・伴内一織・重太郎一むら・喜太八一越羽・弥五郎一尾上・亭主一若鞆・おかる一綾・平右エ門一長尾=広助)、道行恋の初旅(シテ 谷・ワキ 富・ツレ 路代・ツレ 組路、此所出つかひ早替りにて御覧に入申候/となせ 吉田玉之助/小なみ 桐竹紋十郎/奴玉平 吉田玉七/こしもとくら路 吉田玉造)、山科の段(中 むら、切 津)、赤垣出立の段(切 仮名)、両国ばし勢揃の段(かけ合 越羽・若鞆・巴勢・津田)、敵討の段(町)。 ※角書「高野師直/塩谷判官」。 ※「十一月十五日ヨリ十二月十一日マデ廿八日間」(『義太夫年表 明治篇』)。	高野師直(玉造)、桃井若狭之介(紋十郎)、塩谷判官(玉七)、かほよ御前(紋之助)、加古川本蔵(玉治)、妻となせ(玉之助)、娘小浪(玉五郎)、道行小浪(紋十郎)、大星力弥(卯三郎)、鷺坂伴内(幸三郎)、早野勘平(玉七)、おかる(紋十郎)、斧九太夫(栄造)、大星由良之介(玉造)、百姓与一兵工(玉造)、斧定九郎(玉造)、寺岡平右エ門(玉七)、妻おいし(玉亀)。
△ 1888	明治21	1/26	京都 南側劇場	忠 臣 蔵	六ツ目(町=三造)。	
		2/1			七ツ目(由良之介一津・おかる一綾・力弥一文・喜多八一尾上・伴内一織・重太郎一むら・仲居一路代・九太夫一仮名・弥五郎一巴勢・亭主一町・平右衛門一呂)。 ※文楽座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1888	明治21	2/19	名古屋 末 広 座	忠 臣 蔵	九段目 山科の段(越路=吉兵衛)。 ※越路太夫・吉兵衛。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1888	明治21	4/8	京都 坂 井 座	仮名手本忠臣蔵 大序より 山科隠家の段迄	勘平切腹の段(組)、喜内住家の段(住)、山科隠家の段(柳適)。 ※大坂彦六座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1888	明治21	6	彦 六 座	仮名手本忠臣蔵 大序鶴ヶ岡より 大切敵討まで	鶴ヶ岡のだん（笑、朝の、越磨、七五三、生嶋、袖）、桃の井館の段（口 組子、中 かしく、切 田喜）、殿中のだん（口 組代、中 真砂、切 新靱）、裏門のだん（芳）、扇ヶ谷の段（切 組＝豊吉、此所人形出つかひにて御覧に入申候）、城渡しのだん（山登、此所人形出つかひにて御覧に入申候）、二ツ玉のだん（口 住次、奥 此、此所人形出遣い早替りにて御覧に入申候）、勘平腹切の段（中 七五三、切 柳適）、一力茶やのだん（由良之介－柳適・九太夫－氏・力弥－袖・喜多八－七五三・仲居－組代・亭主－住次・おかる－住・仲居－笑・仲居－津代・弥五郎－此・重太郎－山登・伴内－若・平右エ門－組、此所惣出つかひにて御覧に入申候）、道行旅路の嫁入（若・かしく・越磨、此所人形出つかひにて御覧に入申候）、山科のだん（生嶋、切 住、此所人形惣出つかひにて御覧に入申候）、堀部住家の段（口 越磨、切 越）、勢揃のだん（袖）、敵討のだん（芳）。 ※語り「高野師直が難題はおもきがうへのさよ衣をり紙にきらめく進物の黄金／塩谷判官が返歌につまなかさねその黒装束夜目にかゝやく苗字の大星」。 ※彦六座再新築落成披露興行。	高野師直（光造）、桃の井若狭之介（玉枝）、かほよ御前（三吾）、塩谷判官（兵吉）、加古川本蔵（才治）、妻となせ（三吾）、娘小なみ（亀松）、大星力弥（玉米）、鷺坂伴内（玉松）、早野勘平（辰五郎）、こしもおかる（亀松）、斧九太夫（門造）、大星由良之助（辰五郎）、百姓与一兵へ（清造）、斧定九郎（光造）、母おかや（門造）、寺岡平右エ門（兵吉）、妻お石（門造）。
△ 1888	明治21	8/2	名古屋千歳座	忠 臣 蔵	四段目（長尾）。	
		8/9		忠 臣 蔵 総通し	四段目 判官館の段（綾）、五段目 二ツ玉の段（織）、六段目 勘平腹切の段（長尾）、九段目 山科の段（津＝広助）、大切 七段目 一力茶屋場（総掛合 由良之助－津・おかる－綾・平右衛門－長尾・判（ママ）内－織・九太夫－越代・力弥－文・三人侍－富＝勝右衛門）。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1889	明治22	8/6～7	京都北側演劇場	忠 臣 蔵	六段目（高尾）。	
		8/8			松切本蔵場（津和）。	
		8/14・17			四段目（路）。 ※文楽座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1889	明治22	12/14	名古屋千歳座	忠 臣 蔵	六ツ目（さの＝小庄）。	
		12/19			殿中（南枝＝広吉）。	
		12/20			四ツ目（路＝鶴太郎）。	
		12/21			六段目（南枝＝勝丸）。	
		12/25			六ツ目（巴勢＝寛次郎）。 ※竹本越路太夫・豊沢広介一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1890	明治23	3/1~	彦 六 座	仮名手本忠臣蔵 大序鶴ヶ岡より 大切敵討まで	大序 鶴ヶ岡の段(朝代、朝路、八重加、組登、朝の、鹿、宝、田喜)、桃の井やしきの段(口 越磨、かけ合 本蔵一生嶋・若狭之介一七五三)、殿中の段(口 袖、中 此、切 源)、裏門の段(伊達)、扇ヶ谷の段(切 新靱)、城明渡しの段(山登)、山崎街道の段(口 菅、奥 生嶋)、勘平住家の段(中 朝、切 組=松太郎)、一力茶やの段(かけ合 由良之介一組・九太夫一大隅・重太郎一新靱・弥五郎一山登・仲居一越磨・仲居一朝路・おかる一朝・亭主一伊達・力弥一袖・喜多八一越・伴内一源・平右工門一此、此所惣出つかひにて御覧に入候)、道行旅路の嫁入(シテ 田喜・ワキ 芳・ツレ 伊達・ツレ 越磨・ツレ 朝路=*友松、此所出つかひにて御覧に入候)、山科の段(七五三、大隅=団平、此所出つかひにて御覧に入申候)、天川やの段(口 袖、切 越=*吉三郎)、両国橋の段(芳)、敵討の段(組登)。 ※角書「高野師直が難題の意趣／塩谷判官が返歌の遺恨」。 ※「忠臣蔵」の裏門で辰五郎が勘平を遣った。辰五郎は「裏門」のある忠臣蔵を語れといった。その裏門は伊達太夫今の土佐太夫が現に語つてゐたに拘らず「裏門」を語れといふ意は、伊達の語るは「裏門」の浄るりの「風」ではないといふのであつた。即ち団平が改曲した風々団平の教へを語つてゐたのだが、辰五郎は「裏門」がないといふ。団平はこの段々忠臣蔵三冊目の「落合」を直しすぎるのだといふのが辰五郎の主張で、団平に言はずと、直すのでなくて、古來の手を整理したのだといつて、両々下らなかつたといふ話がある。これほど浄るりの「風」といふものは斯道にとつてはやかましいものである(石割松太郎『近世演劇雑考』)。	高野師直(光造)、桃の井若狭之介(玉松)、塩谷判官(亀松)、かほよ御前(紋之助)、加古川本蔵(兵吉)、妻となせ(鹿造)、娘小なみ(玉米)、大星力弥(光栄)、鷺坂伴内(宗十郎)、早野勘平(辰五郎)、こしもおかる(亀松)、斧九太夫(鹿造)、大星由良之助(辰五郎)、百姓与一兵衛(宗十郎)、斧定九郎(兵吉)、女房おかや(三吾)、寺岡平右工門(玉松)、妻お石(三吾)、天川や儀平(兵吉)、女房おその(亀松)。
△ 1890	明治23	4/24 4/29	名古屋 千 歳 座	忠 臣 蔵 忠 臣 蔵 惣通し	四段目(新靱)。 大序 鶴ヶ岡の段(朝代、八重加)、力弥上使の段(芳)、松切の段(本蔵一生島・桃の井一七五三)、進物の段(菅)、門前の段(此)、殿中の段(新靱)、裏門の段(伊達)、扇ヶ谷の段(源)、山崎街道の段(菅)、二ツ玉の段(生島)、おかる身売の段(朝)、勘平腹切の段(組)、道行旅路の嫁入(シテ 芳・ワキ 伊達・ツレ 菅=総連れ弾 松太郎・仙二郎・友松・助三郎・惣太郎・広六・松三郎・広作)、雪ころばしの段(七五三)、山科隠れ家の段(大隅=団平)、大切 七段目(太夫三味線惣掛け合)。 ※素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1890	明治23	5/8	京都 北側劇場	忠 臣 蔵	六段目(小松)。 ※大坂文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1891	明治24	1/16	名古屋 末 広 座	忠 臣 蔵	九段目(越路=広助)。 ※素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1891	明治24	1/18カ	京都 北 座	忠 臣 蔵	扇ヶ谷（谷）。 ※「日出新聞」（1月20日）ほかに「一昨十八日より」とあり、18日の番組が掲載されているが、「大阪毎日新聞」（1月29日）には「去十九日より初日」とある。『義太夫年表 明治篇』に、御霊文楽座での興行が18日までとあるので、北座での興行は19日からとも考えられる。	
		1/20			四段目（調）。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
1891	明治24	3/28～	御霊文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序より 敵討迄	大序 鶴ヶ岡のだん（相寿、呂嘉、谷路、津子、鶴尾）、恋慕の倭うた（品尾、越戸、呂瀬）、桃井若狭之介館のだん（中 小長、奥路）、大下馬先の段（口 越戸、奥 調）、殿中のだん（綾）、裏門のだん（緑り）、塩谷判官館の段（切 呂）、霞ヶ関のだん（氏）、山崎街道の段（津和）、二ツ玉のだん（相生、此所出つかひ早替りにて御覧に入申候 吉田玉造）、早野勘平住家のだん（中 さの、切 津＝吉兵衛）、一力のだん（由良之介－津・カ弥－緑り・九太夫－調・伴内－相生・重太郎－むら・喜太八－さの・弥五郎－久・亭主－巴勢・平右エ門－呂・おかる－越路）、道行恋の初旅（かけ合 路・むら・巴勢・小長・鶴尾）、山科のだん（中 綾、切 越路）、天川やの段（中 久、切 長尾）、両国橋勢揃のだん（かけ合 津和・呂勢・品尾）、敵討のだん（氏）。 ※角書「塩谷判官／高野師直」。 ※「三月廿八日ヨリ五月十二日マデ四十四日間」（『義太夫年表 明治篇』）。	高野師直（玉造）、桃の井若狭之介（紋十郎）、塩谷判官（玉助）、かほよ御前（玉亀）、加古川本蔵行国（玉朝）、妻となせ（紋十郎）、娘小浪（玉助）、大星力弥（卯三郎）、鷺坂伴内（金之助）、早野勘平（玉助）、おかる（紋十郎）、斧九太夫（玉治）、大星由良之介義雄（玉造）、百姓与一兵へ（玉造）、斧定九郎（玉造）、勘平母（玉亀）、寺岡平右エ門（玉助）、妻おいし（玉治）、天川義平（玉治）、女房おその（卯三郎）。
△ 1891	明治24	8/2	京都 道 場 座	仮名手本忠臣蔵	勘平腹切（品尾）。	
		8/7			忠 臣 蔵 三 殿中の段（津子＝勝吾）。 ※竹本津太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1891	明治24	8/19	京都 北 座	仮名手本忠臣蔵	松切り（呂賀）。	
		8/22			扇ヶ谷（調）。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1891	明治24	11	兵庫 弁 天 座	忠 臣 蔵	※彦六惣一座引越。 ※『義太夫年表 明治篇』欄外記事に拠る。	
△ 1892	明治25	1/24	東京 井生村楼	忠 臣 蔵	九段目（綾瀬＝豊造）。 ※富太夫改め駒太夫襲名披露。 ※演芸資料選書・5『東京の人形浄瑠璃』に拠る。	
△ 1892	明治25	1/29	京都 北 座	仮名手本忠臣蔵	扇ヶ谷（調）。	
		1/30			忠 臣 蔵 四段目（路）。 ※竹本越路太夫・豊沢広助一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1892	明治25	7/24	名古屋 千 歳 座	忠 臣 蔵	六段目（久）。	
		7/28			四段目（久）。	
		8/1			大序（呂瀬）、松切（相寿）、三段目（高尾）、裏門（鶴尾）、四段目（相生）、五段目（小隅）、六段目（口久、切越）、九段目（呂）、七段目（掛合 由良之助一越・平右衛門一呂・おかる一相生・九太夫一高尾・伴内一久・弥五郎一鶴尾・喜太八一呂瀬・力弥一小隅＝鶴太郎）。 ※文楽・彦六両座合併。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1892	明治25	8/14	名古屋 千 歳 座	忠 臣 蔵	四切腹の段（阿蘇）。	
		8/17			三だん目 殿中（組の）。	
		8/19			四段目（靱）。	
		8/20			六段目の切（阿蘇）。 ※竹本朝太夫・豊竹新靱太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1892	明治25	8/20	京都 北 座	忠 臣 蔵	三段目（呂美）。	
		8/21			四ツ目（呂）。	
		8/23			六ツ目（調）。 ※竹本越路太夫・豊沢広助・其外文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1893	明治26	3/15~16	京都 北 座	忠 臣 蔵 大序より 敵討まで	鶴ヶ岡（越江、綾女、相十）、松切（村、路）、殿中（寿、綾）、裏門（高尾）、扇ヶ谷（呂）、二ツ玉（相生）、勘平腹切（佐野、長尾）、喜内住家（調、津）、一力茶屋場（津・長尾・佐野・調・寿・越路・高尾・相生・呂＝広助）、道行（路・村・越江）、山科（綾、越路）、敵討（寿、操、津弥）。 ※文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
1893	明治26	5/10~	彦 六 座	仮名手本忠 臣蔵 大序より 敵討まで	大序 鶴が岡のだん（弥生、源氏、五、葉知、九三恵、源子、麻時）、恋慕の倭歌（組尾）、桃の井若狭之介館のだん（口叶、奥浦）、大下馬先のだん（口越○、奥尾上）、殿中のだん（切生嶋）、裏門のだん（角）、塩谷判官館の段（切新靱）、霞ヶ関のだん（菅）、山崎街道の段（口梅、奥十八、此所出つかひ早替りにて御覧に入候 吉田玉松）、早野勘平住家のだん（中生嶋、切越＝吉弥）、一力茶屋のだん（由良之介一源・力弥一叶・九太夫一靱・伴内一越・重太郎一浦・喜多八一尾上・弥五郎一組尾・仲居一越○・亭主一七栄・仲居一梅・おかる一中・平右工門一七五三）、道行旅路の嫁入（菅・角・組栄・八・源子＝*広作・*仙昇・他）、山科のだん（中七五三、切組）、天川屋内の段（口朝路、切源）、勢揃工のだん（七栄、八、光勢）、敵討のだん（組栄）。 ※角書「塩谷判官／高野師直」。 ※「早野勘平住家のだん・中」竹本生嶋太夫の代役、竹本組栄太夫（『義太夫年表 明治篇』に拠る）。	高野師直（玉米）、桃の井若狭之介（小友）、塩谷判官（亀松）、御台かほよ（紋之助）、加古川本蔵（亀松）、妻となせ（鹿造）、娘小なみ（玉米）、大星力弥（彦三郎）、鷺坂伴内（栄三）、早野勘平（玉松）、おかる（亀松）、斧九太夫（栄造）、大星由良之介（玉松）、百姓与一兵へ（玉松）、斧定九郎（玉松）、勘平母（鹿造）、寺岡平右工門（玉米）、妻お石（三吾）、天川や儀平（小友）、女房おその（三吾）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1893	明治26	8/16	京都 南 座	忠 臣 蔵	四段目（調）。	
		8/23			四段目（長尾）。	
		8/25			六ツ目（長尾）。 ※越路一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1894	明治27	2/4	京都 南 座	忠 臣 蔵	四段目（路）。 ※越路一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1894	明治27	2/16	京都 南 座	忠 臣 蔵	四つ目（雲龍齋）。 ※彦六一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
1894	明治27	6/1~	稲 荷 座	仮名手本忠 臣蔵 大序より 大切まで	大序 鶴が岡のだん（稲、福、一、源子、朝の、弥生、いさみ、源、新靱）、桃の井邸の段（口 角、本蔵一此・若狭之介一伊達）、殿中のだん（中 谷路、次 長子、切 源）、裏門のだん（組栄）、花籠のだん（春子）、扇谷のだん（切 越=* 吉弥）、城明渡しの段（菅）、山崎街道のだん（口 組の、奥 新靱、此所出つかひ早替りにて御覧に入申候）、勘平住家の段（中 生嶋、切 弥）、一力茶屋のだん（由良之介一弥・九太夫一新靱・重太郎一生嶋・弥五郎一此・仲居一角・仲居一源子・おかる一伊達・亭主一いさみ・力弥一春子・喜多八一長子・伴内一越・平右工門一大隅、此所出つかひにて御覧に入申候）、道行のだん（菅・角・組栄・津葉芽・谷路・一、此所出つかひにて御覧に入申候）、山科隠家のだん（十八改 柳適、大隅=団平）、天川やのだん（津葉芽、尾上、此）、敵討のだん（いさみ）。 ※角書「高野師直ノ塩谷判官」。	高野師直（清十郎）、桃の井若狭之介（鶴松）、塩谷判官（玉米）、御台かほよ御前（三十郎）、加古川本蔵（東京下り 駒十郎）、妻となせ（清十郎）、娘小なみ（栄三）、大星力弥（彦三郎）、鷺坂伴内（栄三）、早野勘平（玉松）、こしもおかる（玉米）、斧九太夫（栄寿）、大星由良之介（玉松）、百姓与一兵衛（玉松）、斧定九郎（玉松）、勘平母（三吾）、寺岡平右工門（東京下り 駒十郎）、妻おいし（三吾）、天川や儀平（小友）、女房おその（松江）。
△ 1894	明治27	7/19	名古屋 新 守 座	忠 臣 蔵	六ツ目（操）。 ※綾太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1894	明治27	7/24	名古屋 宝 生 座	忠 臣 蔵	六ツ目（操=卯三郎）。 ※綾太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1895	明治28	6/29	東京 新 声 館	忠 臣 蔵	四段目（小土佐）。 ※第1回義太夫大演芸会。 ※演芸資料選書・5『東京の人形浄瑠璃』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1895	明治28	7/31	京都 南 座	忠 臣 蔵	三段目（つばめ）。	
		8/2		仮名手本忠臣蔵 大序より 大切迄	大序 鶴ヶ岡の段（津ばめ＝卯三郎）、松切の段（操＝小庄）、殿中の段（越登＝大之助、れら（ママ）＝花助）、裏門の段（操＝卯三郎）、扇ヶ谷の段（さの＝大造）、二ツ玉の段（叶＝小庄）、身責（ママ）の段（鶴尾＝滝造）、勘平腹切之段（調＝花助）、道行の段（シテ むら・ワキ 高尾・ツレ 叶＝叶・大造・大三郎・滝造・小庄・卯三郎）、ゆきこかしの段（鶴尾＝三郎）、山科隠家の段（呂＝叶）、茶屋場の段（由良之助－呂・九太夫－調・伴内－鶴尾・重太郎－操・弥五郎－叶・喜多八－千倉・力弥－津ばめ・仲居－越登・亭主－越江・おかる－高尾・平右衛門－さの）。 ※呂太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1895	明治28	8/10	名古屋 千 歳 座	忠 臣 蔵	四つ目（調＝文二郎）。 ※大坂文楽、豊竹呂太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1895	明治28	8/17	名古屋 千 歳 座	（仮名手本忠臣蔵）	旅路の嫁入（道行掛合 無良・高尾・叶・津葉免）。	
		8/18		忠 臣 蔵	九ツ目（呂）。七ツ目（掛合 由良之助－呂・九太夫－調・重太郎－むら・弥五郎－操・喜多八－かの・おかる－高尾・亭主－趣江・仲居－呂波・力弥－つばめ・伴内－産尾・平右衛門－さの）。 ※呂太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
1895	明治28	12/15	浪 花 座	忠 臣 蔵	六（角＝浅太郎）。	
		12/17			九（大隅＝団平）。	
		12/18			三（弥駒＝留子）。六（雛＝力松）。 ※稲荷座総一座。素浄瑠璃。	
△ 1896	明治29	1/27	名古屋 千 歳 座	忠 臣 蔵	四ツ目（越）。	
		1/31・ 2/6			三ツ目（梅）。	
		2/1			四ツ目（新靱）。	
		2/9			六段目（新靱）。 ※竹本越太夫・新靱太夫・七五三太夫・菅太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1896	明治29	2/14	名古屋 千 歳 座	忠 臣 蔵	四段目（新靱）。	
		2/19			四ツ目（越）。 ※前項の二の替り。竹本越太夫。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1896	明治29	4/11~	御霊文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序より幕なし 十二段返し	大序 鶴ヶ岡八幡宮兜改めのだん（津根、谷勢、越見、綾寿、越か、津代、谷栄）、恋歌のだん（師直一殿母・かほよ御前一綾免・若狭之介一越江）、桃の井館のだん（口 呂嶋、奥 高尾）、大下馬先のだん（呂瀬）、殿中刃傷の段（切 綾）、裏門のだん（鶴尾）、塩谷判官館の段（切 津）、霞ヶ関のだん（跡 呂瀬）、山崎街道の段（口 尾上）、二つ玉のだん（奥 さの）、早野勘平住家のだん（中文、切 呂）、祇園一力のだん（由良之介一津・力弥一津ばめ・九太夫一むら・伴内一さの・重太郎一文・喜多八一高尾・弥五郎一尾上・亭主一叶・平右工門一呂・おかる一越路=広助）、道行恋初旅（綾・むら・鶴尾・津ばめ・呂嶋、此所出つかひにて御覧に入申候/妻戸無瀬 桐竹紋十郎/娘小なみ 桐竹亀松/口（※鼓の下に女）おきん 吉田金之助/座頭富市 吉田玉助）、山科閑居のだん（中 谷、切 越路）、天川屋のだん（口 叶、切 谷）、両国橋義士勢揃のだん（殿母、登勢、綾免）。 ※角書「高野師直/塩谷判官」。 ※「四月十一日ヨリ六月十四日マデ六十四日間」（『義太夫年表 明治篇』）。	高野師直（玉造）、桃の井若狭之介（亀松）、塩谷判官高貞（玉助）、顔世御前（玉五郎）、加古川本蔵（金之助）、妻戸無瀬（紋十郎）、娘小浪（亀松）、大星力弥（卯三郎改 助太郎）、鷺坂伴内（亀松）、早野勘平（玉助）、おかる（紋十郎）、斧九太夫（幸三郎改 文三）、大星由良之助（玉造）、百姓与市兵へ（玉朝）、斧定九郎（幸三郎改 文三）、与一兵衛女房（玉五郎）、寺岡平右工門（玉助）、女房おいし（玉助）、天川屋義平（玉助）、女房おその（亀松）。
△ 1896	明治29	4/17~27	東京新声館	仮名手本忠臣蔵 大序より大切まで	鶴ヶ岡の段（綾瀬）、桃井館の段（織栄、柳、絹）、足利殿中の段（識予）、判官館の段（磯）、二ツ玉の段（花）、勘平住家の段（鑑、織）、一力の段（掛合 津賀・識・其の他）、道行の段（和国・柳・絹=兵吉）、山科の段（柳、綾瀬=団八）、打入の段（惣掛合）。 ※「報知新聞」（4月25日）には「七段目（中略）出る可き筈の津賀太夫、和佐太夫、鶴助等少しも顔を出さず、代りとして磯太夫が由良之助を、和国太夫がおかるを勤めたるさへあるに、平右衛門を語る識太夫と俱に和国の勝手なる事を言し杯（中略）八段目（中略）三弦は兵吉の筈の処、此れも出ず、代りには連れ弾を勤むる連中が間に合はせを勤めたり」とある。 ※演芸資料選書・5『東京の人形浄瑠璃』に拠る。	本蔵（兵吉）、となせ（伊三郎）、小浪（兵三郎）、力弥（冠五郎）、おかる（兵吉）、由良之助（伊三郎）、平右衛門（冠二）、おいし（文三郎）。
△ 1896	明治29	7/22 7/29	京都南座	忠 臣 蔵	四段目（路）。 六ツ目（尾上）。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1896	明治29	8/5 8/6 8/11	名古屋末広座	忠 臣 蔵	段（ママ）中之段（隅栄=団左）、裏門の段（一=寛之助）。 九段目 山科隠家の段（大隅=団平）。 四段目 扇ヶ谷の段（春子=惣太郎）、六段目 勘平腹切の段（伊達=友松）。 ※大隅太夫・団平一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1896	明治29	10/12	名古屋音羽座	忠 臣 蔵	八段目（宮）。 ※土佐太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1896	明治29	11/2~	稲 荷 座	仮名手本忠臣蔵 大序より九段目迄	大序（源路、弥雲、隅子、弥駒、弥登、源子）、鶴ヶ岡のだん（隅栄、越○）、桃の井館のだん（口品、若狭之介-仮名・本蔵-雲龍）、大下馬先のだん（磯、菊）、殿中のだん（切新靴）、裏門のだん（角）、判官切腹のだん（切弥）、城明渡しのだん（柳適）、山崎街道のだん（雛、此、此所人形出つかひ三役早替りにて御覧に入申候）、勘平住家のだん（中春子、切越）、一力茶屋のだん（由良之介-大隅・九太夫-春子・力弥-源子・重太郎-此・弥五郎-小隅・仲居-一・おかる-伊達・仲居-弥生・仲居-菊・喜多八-柳適・伴内-長子・亭主-弥・平右工門-組、此所人形出つかひにて御覧に入申候）、旅路の嫁入のだん（カケ合 小隅・角・一・隅栄）、山科隠家のだん（中源、切大隅=団平）。 ※角書「塩谷判官／高野師直」。 ※稲荷座改組大阪文芸株式会社の創立記念興行。「旅路の嫁入のだん」は、「寿式三番叟」からの引き抜き。	高野師直（清十郎）、桃の井若狭之介（小友）、塩谷判官（玉米）、御台かほよ御前（三十郎）、梶川与三兵へ（宗七）、妻となせ（亀松）、娘小なみ（栄三）、大星力弥（福松）、鷺坂伴内（簗助）、早野勘平（玉松）、こしもとおかる（亀松）、斧九太夫（小友）、大星由良之助（玉松）、百姓与一兵へ（玉松）、斧定九郎（玉松）、勘平母おかや（門蔵）、寺岡平右工門（玉米）、妻おいし（清十郎）。
△	1896	明治29	12/20	名古屋	忠 臣 蔵	勘平腹切（越）。
			12/22	千 歳 座		
						四段目（新靴）。 ※竹本越太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。
△	1897	明治30	1/12	名古屋 笑 福 座	忠 臣 蔵	一力由良之助出立（鷹賞軒）。 ※竹本絹太夫・小土枝太夫・小綱太夫・鷹正軒・広井太夫・一太夫ほか。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。
△	1897	明治30	3/10	名古屋 音 羽 座	忠 臣 蔵	勘平住家（園=大七）。 ※竹本相生太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。
△	1897	明治30	7/8	名古屋 千 歳 座	忠 臣 蔵	勘平住家（雛=力松）。
			7/10			三段目（隅栄）。
			7/12			四段目（住）。 ※竹本組太夫・住太夫・朝太夫・伊達太夫合併大一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。
△	1897	明治30	7/15	名古屋 宝 生 座	忠 臣 蔵	三段（越○=団二）。
			7/18			六段目（雛）。 ※素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。
△	1897	明治30	7/18	名古屋 千 歳 座	忠 臣 蔵	二段目 松切（朝子）。 ※組太夫・朝太夫・生島太夫ほか。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。
△	1897	明治30	7/28	京都 南 座	忠 臣 蔵	三（越江=豊之助）。
			7/30			四段目（染=勝蔵）。
			8/1			六つ目（七五三=松三郎）。 ※越路一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△ 1897	明治30	10/26	京都 南座	忠臣蔵	四段目(文)。	
		10/31			殿中之段(さわ=三治郎)。	
		11/4~5		仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目迄	鶴ヶ岡の段(かけ合)、桃井館の段(佐次)、松切の段(小さの)、殿中の段(呉)、裏門の段(小常)、扇ヶ谷の段(高尾)、山崎街道の段(佐次)、二つ玉の段(操)、おかる身売の段(小さの)、財布連判の段(長子)、喜内住家の段(文)、雪こかしの段(操)、山科の段(佐の)。 ※竹本さの太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
1898	明治31	3	稲荷座	仮名手本忠臣蔵 従大序 九冊目迄	大序 鶴ヶ岡のだん(高野師直一住・若狭之介一伊達・塩谷判官一組・かほよ御前一大隅・足利直義一弥・大名一芳=団平)、桃の井若狭之介館のだん(口芳・奥柳適)、大下馬先のだん(中一、次生嶋)、足利館殿中の段(切新靱)、裏門のだん(跡雛)、塩谷判官切腹の段(切弥)、霞ヶ関のだん(跡菊)、山崎街道のだん(口源子、奥春子)、早野勘平住家のだん(中生嶋、切組)、一力茶屋のだん(由良之介一組・力弥一源子・九太夫一新靱・伴内一大隅・重太郎一生嶋・喜多八一春子・弥五郎一菊・亭主一住・仲居一隅栄・仲居一弥雲・おかる一伊達・平右工門一弥=団平)、道行恋の初旅(菅・雛・芳・一・弥瑠)、山科のだん(中 新靱=*友松、切 大隅=団平)。 ※角書「高野師直が難題の意趣／塩谷判官が返歌の遺恨」。 ※「(大序の)直義の弥太夫さんは、番附だけで、柳適さんが代りをして居られました。そして、人形も、何時もこの場は黒衣で勤めるのを、出遣ひで勤めました。この時、団平さんは、この外「茶屋場」と「九段目」も弾いて居られ、老いて益々盛んなのに皆驚いてしまひました。しかし、「茶屋場」だけは、中頃から源吉さんが代つて居られました」(『吉田栄三自伝』)。	高野師直(駒十郎)、若狭之介(栄寿)、塩谷判官(門造)、御台かほよ(三十郎)、加古川本蔵(駒十郎)、妻となせ(玉松)、娘小なみ(簗助)、大星力弥(福松)、鷺坂伴内(鶴松)、早野勘平(玉松)、おかる(玉松)、斧九太夫(友蔵)、大星由良之助(清十郎)、百姓与一兵へ(玉松)、斧定九郎(玉松)、母おかや(門造)、寺岡平右工門(駒十郎)、お石(門造)。
△ 1898	明治31	5/13	名古屋 宝生座	忠臣蔵	三段目(さ)。 ※路太夫・山城太夫・鶴尾太夫・三味線 団六・大三郎・卯三郎一座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1898	明治31	8/11	京都 南座	忠臣蔵	九段目(文字)。	
		8/12		裏表忠臣蔵 大序より 八冊目迄	鶴ヶ岡の段(かけ合)、桃の井の段(小五口)、松切の段(さ)和)、殿中の段(鑑)、裏門の段(さ)字)、扇ヶ谷の段(むら)、弥作鎌腹の段(鶴尾)、喜内住家の段(文)、宅兵衛上使の段(七五三)、本蔵下屋敷の段(高尾)、赤垣源蔵出立の段(文字)、大切 祇園一力の段(かけ合 由良の助一文・力弥一小口・重太郎一鶴尾・弥五郎一操・喜多八一瓢・おかる一文字・亭主一さ字・仲居一さ)和・九太夫一むら・伴内一高尾・平右衛門一七五三=猿糸)。 ※素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1898	明治31	8/18	名古屋 御園座	忠 臣 蔵	四段目（文）。	
		8/19			三段目の殿中（小常）。	
		8/22			五段目（操）。	
		8/25			仮名手本忠 臣蔵	
△ 1898	明治31	12/11	名古屋 御園座	忠 臣 蔵	六ツ目（菊＝卯三郎）。	
		12/12			二段目（隅代）。	
		12/18			六ツ目 勘平腹切（一）。	
		12/24			仮名手本忠 臣蔵	
△ 1899	明治32	1/15	京都 南 座	忠 臣 蔵	六（品）。 ※柳適太夫・春子太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1899	明治32	3/10	名古屋 末広座	忠 臣 蔵	六段目（品）。	
		3/14			四段目（柳適）。	
		3/15			七段目 茶屋場（由良之助一柳適・九太夫一品・弥五郎一弥雲・仲居一森・重太郎一菅・おかる一角・力弥一卯・亭主一仙・喜多八一卯三・伴内一一・平右衛門一春子＝仙二郎）。	
		3/16			三段目（弥雲）、裏門（一）。 ※大阪稲荷座若手一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1899	明治32	4/24	名古屋 西栄座	忠 臣 蔵	六段目（品）。	
		4/25			三段目（品）。 ※春子太夫・新左衛門一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1899	明治32	7/19	京都 南 座	忠 臣 蔵	殿中の段（寿＝花子）。	
		7/25			四段目（呂＝勝鳳）。	
		8/1			六段目（七五三＝仙昇）。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1899	明治32	7/24	東京 歌舞伎座	忠 臣 蔵	四（菅＝寛之助）。	
		7/26			大序より九段目まで（大隅＝叶、一座総掛合）。 ※素浄瑠璃。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	
1900	明治33	1/31～	明 楽 座	仮名手本忠 臣蔵 大序より 敵討まで	大序 鶴ヶ岡のだん（千歳、此路、小達、此子、隅尾）、桃の井館の だん（隅次、菊）、大下馬先のだん（弥珥、隅栄）、殿中のだん（生 嶋）、裏門のだん（鏝）、塩谷館のだん（新靱）、霞ヶ関のだん（隅 次）、二ツ玉のだん（隅尾、小隅）、勘平住家のだん（伊達、組）、 一力茶屋場のだん（大星由良之介－大隅・斧九太夫－此・矢間重太郎 －菊・竹森喜多八－立身・亭主－此子・仲居－小達・おかる－伊達・ 仲居－千歳・仲居－此路・大星力弥－隅栄・千崎弥五郎－隅次・鷺坂 伴内－生嶋・寺岡平右工門－組）、道行旅路の嫁入（小隅・鏝・弥 珥・隅尾・此子）、山科のだん（新靱、大隅）、天川屋のだん（菊、 此）、敵討のだん（立身）。 ※角書「塩谷判官／高野師直」。 ※吉田栄三、文楽座と掛け持ちのため「文楽の方の三役を勤めてか ら、大急ぎで明楽座へ来て、「道行」の小浪から勤めました。勿論、 「松伐り」の小浪は、代りを頼んで居ましたが、日によると「道行」 でさへトチツて、玉次郎さんに代りをして貰つて居ました」（『吉田 栄三自伝』）。	高野師直（清十郎）、桃の井若狭之介（玉治 郎）、塩谷判官（門造）、顔世御前（琴 糸）、加古川本蔵（門造）、妻となせ（清十 郎）、娘小浪（栄三）、大星力弥（兵之 助）、鷺坂伴内（光ル）、早野勘平（玉 松）、おかる（清十郎）、斧九太夫（友 造）、大星由良之介（玉松）、爺与一兵衛 （玉松）、斧定九郎（玉松）、母おかや（友 造）、寺岡平右工門（門造）、妻おいし（玉 松）、天川屋儀兵へ（小友）、天川屋女房お その（栄三）。
△ 1900	明治33	7/23	京都 南 座	忠 臣 蔵	殿中の段（越江）。	
		7/30			四段目（呂）。 ※文楽座、越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1900	明治33	8/5	名古屋 末 広 座	忠 臣 蔵	六段目（源子）。	
		8/7			三段目（小常）。	
		8/8			四段目（源）。	
		8/14			大序 鶴ヶ岡（さ）和）、二段目 松切（小常）、三段目 喧嘩場（小 富）、裏門（葉）、四段目 判官切腹（源）、五段目 山崎街道（さ 和）、二ツ玉（源子）、六段目 おかる身売（文字、南部）、七段目 茶屋場（総かけ合）。 ※大阪文楽座、竹本文字太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1900	明治33	12/1	名古屋 末 広 座	忠 臣 蔵	三段目（生栄＝新三）。	
		12/3			判官切腹（住＝小団二）。	
		12/5			勘平腹切（雛＝猿九郎）。	
		12/7			二段目 松伐（子友＝叶吉）。	
		12/9			五段目（生栄＝新三）。	
		12/16		仮名手本忠臣蔵	大序 鶴ヶ岡（総一座）、二段目 桃井館 松切（子友＝叶吉、生栄＝新三）、三段目 殿中より裏門まで（一＝富子）、四段目 判官切腹（生島＝浜右衛門）、濡合羽（隅尾＝団友）、五段目 二つ玉（春子＝新左衛門）、六段目 おかる身売（雛＝猿九郎）、勘平腹切（住＝小団二）、九段目 山科大屋隠家（大隅＝叶）、七段目 一力茶屋場（総かけ合 由良之助－住・九太夫－雛・矢間－隅尾・亭主－住子・力弥－大隅・おかる－春子・仲居－富子・竹森－生栄・千崎－子友・伴内－一・平右衛門－生島＝小団二）。 ※明楽座一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1901	明治34	2/2	名古屋 御 園 座	忠 臣 蔵	六（長子＝松之助）。	
		2/3			判官切腹（柳適＝市兵衛）。	
		2/6			勘平切腹（住治＝叶吉）。 ※竹本組太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
1901	明治34	3	御霊文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序より 十段目まで	大序 鶴ヶ岡八幡宮兜改めのだん（津国、紀国、七、津ばさ、小常、常盤、越喜、津矢、谷登）、恋歌のだん（師直－殿母・若狭之介－呂嶋・顔世御前－登勢）、桃の井若狭之介館のだん（口 山城、奥 高尾）、大手先のだん（口 小富、奥 叶）、殿中刃傷のだん（切 文字）、裏門のだん（南部）、塩谷判官館のだん（切 津）、霞ヶ関のだん（跡 司）、浜寺のだん（むら）、山崎街道のだん（口 叶）、二ツ玉のだん（奥 七五三）、早野勘平住家のだん（中 文、切 呂）、祇園一力のだん（由良之介－津・力弥－津ばめ・九太夫－むら・伴内－文字・重太郎－七五三・仲居－越登・おかる－越路・仲居－津直・仲居－呂嶋・弥五郎－文・喜太八－高尾・亭主－司・平右衛門－呂）、道行恋初旅のだん（染・南部・源子・越登・葉、此所出遣い早替りにて御覧に入申候／吉田玉助／桐竹紋十郎）、山科大屋閑居のだん（中 源、切 越路）、泉州天川屋のだん（中 津ばめ、切 染）、兩國橋のだん（豊、角、蔦、越丘、谷栄、越可、津直、谷代）。 ※角書「塩谷判官／高野師直」。 ※「三月一日ヨリ五月十五日マデ七十四日間」（『義太夫年表 明治篇』）。 ※4月22日より竹本越路太夫病気休演、5月6日より再出勤し、同15日打揚げ。74日間にわたる大入興行（『竹本撰津大掾』に拠る）。 ※竹本文字太夫、竹本越路太夫の代役として「九段目・切」を語る（『義太夫年表 明治篇』欄外記事に拠る）。	高野武蔵守師直（玉造）、桃の井若狭之介（助太郎）、塩谷判官高貞（玉助）、顔世御前（三吾）、加古川本蔵行国（多為蔵）、妻戸無瀬（紋十郎）、娘小なみ（玉助）、大星力弥（玉六）、鷺坂伴内（多為蔵）、早野勘平（玉助）、腰元おかる・傾城おかる（紋十郎）、斧九太夫（玉治）、大星由良之助（玉造）、百姓与一兵衛（玉朝）、斧定九郎（多為蔵）、与一兵へ女房（玉治）、寺岡平右工門（玉助）、妻お石（玉治）、天川屋義平（多為蔵）、女房おそよ（ママ）（玉六）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1901	明治34	4/10	京都 弁 天 座	忠 臣 蔵	財布連判(尾上)。 ※素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1901	明治34	6/8 6/10 6/21	名古屋 千 歳 座	忠 臣 蔵	勘平腹切の段(七栄)。 殿中(達路)。 鶴ヶ岡(福)、二段目(本蔵-此路・若狭之助-達路)、三段目(七栄)、四段目(鑊)、五段目(七栄)、六段目 おかる身壳(谷路)、勘平腹切(此)、九段目 山科(伊達)、七段目(惣掛合)。 ※伊達太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
1901	明治34	7/8~14	京都 南 座	仮名手本忠 臣蔵 大序より 七段目迄	大序 鶴ヶ岡のだん(二三、紋子、口、薩喜、弁=常吉、浜吉、広子)、松切のだん(口 寄=常造、奥 鷹=力造)、大手先のだん(口 亀代=捨造)、殿中のだん(切 尾上=広十郎)、裏門のだん(跡 章=力造)、扇ヶ谷のだん(切 紋=庄治郎)、山崎街道のだん(口 綱尾=藤三郎)、二ツ玉のだん(奥 津和=力造、此所出遣イ早替り御覧入候 吉田兵吉)、勘平住家のだん(中 操=門之助、切 薩摩=卯三郎)、本蔵下やしきのだん(切 路=吉作)、祇園一力の段(由良之助-薩摩・九太夫-尾上・重太郎-鷹・弥五郎-七・喜多八-綱尾・おかる-南部・亭主-亀代・仲居-寄・力弥-章・伴内-操・平右衛門-文=旧 八兵衛)。 ※千穂楽は「京都日出新聞」(7月15日)に拠る。	高の師直(東助)、桃井若狭之介(紋三)、塩谷判官(簗助)、顔世御前(兵枝)、加古川本蔵(東助)、妻戸無せ(簗助)、娘小なみ(兵枝)、大星力弥(東三郎)、鷺坂伴内(紋三)、早ノ勘平(兵吉)、おかる(簗助)、斧九太夫(東治郎)、大星由良之助(兵吉)、百性と市兵衛(兵吉)、斧定九郎(兵吉)、母おかや(東助)、寺岡平右衛門(兵之助)。
△ 1901	明治34	7/16~カ	京都 岩 神 座	忠 臣 蔵 大序より 七段目迄	※「南座の人形浄瑠璃の引越し」(「京都日日新聞」7月16日)。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1901	明治34	7/20 7/21 7/22 7/26	名古屋 歌舞伎座	忠 臣 蔵	四段目(文)。 六ツ目(葉)。 裏門の段(小常)。 六ツ目(小常)。 ※越路太夫・文字太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1901	明治34	8/11	京都 南 座	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目迄	鶴ヶ岡(むら)、桃井屋敷(越喜、さの)、大手先(葉)、殿中(文)、裏門(津直)、扇ヶ谷(津)、山崎街道(さの)、二ツ玉(高尾)、身壳(南部)、勘平切腹(文字)、祇園一力茶屋(カケ合 由良之助-津・九太夫-むら・重太郎-高尾・弥五郎-南部・喜多八-さの・おかる-越路・亭主-津直・仲居-越喜・力弥-葉・伴内-文・平右衛門-文字=吉兵衛)、山科隠家(高尾、越路)、道行旅路の嫁入(むら・南部・越登・葉・越喜=吉弥・寛次郎・八助・勝太郎・猿吾・春次郎・国次郎)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
△ 1901	明治34	8/16	京都 幾代亭	忠臣蔵	殿中（七栄（ママ））。	
		8/18			勘平内（七一栄）。	
		8/19			四（柳適）。 ※組太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1901	明治34	8/22	名古屋 末広座	忠臣蔵	四段目（新靱）。	
		8/24			松切の段（隅代）。	
		8/28			六つ目 勘平腹切（新靱）。	
		8/29			七ツ目（新靱）。九段目（大隅）。 ※「扶桑新聞」（8月23日）には、29日の語り物について「忠臣蔵 六ツ目（新靱太夫）（中略）同じく七段目（総かけ合）」とある。 ※大坂明楽座、竹本大隅太夫・鶴沢叶一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1901	明治34	12/5	名古屋 末広座	忠臣蔵	四段目 判官切腹（住＝小団二）。	
		12/10			六段目（雛＝団丸）。	
		12/12			判官切腹（緑＝猿之助）。	
		12/13			三段目（此路＝小団）。	
		12/14			四段目（新靱＝市治郎）。	
12/16	七段目（掛合）。 ※住太夫・朝太夫ほか。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。					
△ 1901	明治34	12/6	京都 布袋座	（仮名手本 忠臣蔵）	六（七栄＝新造）。 ※七五三太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1901	明治34	12/16	東京 歌舞伎座	忠臣蔵 通し	鶴ヶ岡（隅治・千歳＝叶吉）、本蔵下屋敷（加賀＝伊之助）、三段目（鏝＝寛之助）、裏門（千歳＝友三郎）、扇ヶ谷（長子＝吉作）、二つ玉（加賀＝伊之助）、累（ママ）身売（鏝＝寛之助）、腹切（伊達＝友松）、山科閑居（大隅＝叶）、茶屋場（平右衛門＝大隅・おかる＝伊達・ほか）。 ※大隅太夫一座。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割	
1902	明治35	1/2~	明 楽 座	仮名手本忠臣蔵 大序より敵討まで	大序（織登、隅の、織尾、住ノ江、鞆登、隅路、子筑、組代、鞆木、弥代）、鶴ヶ岡のだん（此勢、弥常、小福、小達、子友）、桃の井屋敷のだん（口立身、切柳適）、大下馬先のだん（口此路、次弥珪）、殿中のだん（切新鞆）、裏門のだん（弥生）、判官切腹のだん（切住）、城明渡しのだん（小隅）、山崎街道のだん（口加賀、与一兵べー角・定九郎一雛）、勘平住家のだん（中 小隅、切組）、一力茶屋のだん（由良之介一隅・九太夫一住・重太郎一弥生・力弥一隅代・亭主一立身・おかる一春子・仲居一此路・弥五郎一加賀・喜多八一弥珪・伴内一新鞆・平右工門一組）、道行旅路の嫁入のだん（カケ合 雛・角・弥珪・隅代・子友＝仙左衛門）、山科隠家のだん（中 柳適、切大隅＝叶）、敵討のだん（加賀、此路、津子）。 ※角書「高野師直ノ塩谷判官」。	高野師直（清十郎）、桃の井若狭之介（玉治郎）、顔世御前（琴糸）、塩谷判官（門造）、加古川本蔵（門造）、妻となせ（清十郎）、娘小なみ（栄三）、大星力弥（玉市）、鷺坂伴内（光ル）、早野勘平（玉松）、こし元おかる（玉五郎）、斧九太夫（友造）、大星由良之介（玉松）、百姓与一兵衛（玉松）、斧定九郎（玉松）、母おかや（清十郎）、寺岡平右工門（栄三）、妻おいし（玉五郎）、天川屋義兵へ（光ル）。	
△	1902	明治35	2/25	名古屋御園座	仮名手本忠臣蔵	大序 鶴ヶ岡（昇）、二段目 桃の井屋敷（葉）、三段目 殿中（むら）、四段目 判官切腹（南部）、五段目 ニツ玉（山城）、六段目 勘平住家（文）、九段目 山科隠家（文字）、七段目 祇園一力茶屋（由良之助一文・九太夫一むら・力弥一葉・重太郎一南勢・弥五郎一むら・おかる一文字・喜多八一昇・亭主一山の・仲居一文字・伴内一山城・平右衛門一南部＝吉弥、鶴太郎）。 ※大阪文楽座、文字太夫・吉弥一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1902	明治35	4/1・4	名古屋末広座	忠 臣 蔵	三段目（生栄）。 ※竹本七五三太夫・生島太夫・さの太夫・三味線 豊沢新左衛門・仙十郎・外十数名。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1902	明治35	6/3	京都岩神座	忠 臣 蔵	山科隠家（文字＝吉兵衛）。 ※大阪文楽座、文字太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1902	明治35	8/3 8/11 8/12	京都南座	（仮名手本忠臣蔵）	六（越栄＝猿吾）。 九（文字＝吉弥）。 四（呂＝猿糸）。 ※素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1902	明治35	8/23 8/26	京都歌舞伎座	忠 臣 蔵	四（吉（ママ）友）。 判官切腹（住）。 ※大隅太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1902	明治35	9/6	京都 岩 神 座	忠 臣 蔵	三（隅喜）。	
		9/7		仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目	鶴ヶ岡（隅喜）、桃井館（若狭之助一信・加古川本蔵一生勢）、殿中より裏門迄（角）、判官切腹（小隅）、山崎街道（一）、勘平切腹（生島）、山科隠家（大隅）、七ツ目（総掛合 由良之助一隅・九太夫一角・重太郎一生勢・喜太八一隅喜・亭主一友・仲居一猿・おかる一隅・仲居一捨・力弥一葉・弥五郎一信・伴内一一・平右衛門一 生島）。 ※大隅太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1902	明治35	9/9		（仮名手本 忠臣蔵）	九（津＝猿糸）。 ※小松宮、伏見宮台臨御前演奏。 ※『義太夫年表 明治篇』欄外記事に拠る。	
△ 1902	明治35	12/18	京都 夷 谷 座	忠 臣 蔵	二ツ玉（好友）。	
		12/19			裏門（組代）。	
		12/20			勘平切腹（君）。判官切腹（新靱）。	
		12/22			勘平切腹（好友）。 ※組太夫一座。素浄瑠璃。 ※「京都日出新聞」「大阪朝日新聞（京都附録）」12月23日の記事から、千種楽は12月21日と判断されるが、「京都日出新聞」（12月22日）に、22日の番組が掲載されている。実際には上演されたかは不明。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1902	明治35	12/18	名古屋 千 歳 座	忠 臣 蔵	三段目（此路）。	
		12/23			四（住）。 ※「大坂文楽明楽合併大浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1903	明治36	7/28	京都 大 黒 座	（仮名手本 忠臣蔵）	六（操）。 ※素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1903	明治36	8/17	名古屋 御 園 座	忠 臣 蔵	六（源子＝亀太郎）。	
		8/20			九（越路＝吉弥）。茶屋場（由良之助一新靱・おかる一南部・九太夫一むら・伴内一源子・平右衛門一越路＝市太郎）。 ※竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。竹本文字太夫改三代目竹本越路太夫改名披露。 ※「茶屋場」の三味線は「市次郎」の誤りか。なお、「新愛知」（8月20日）には「吉弥」とある。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割	
△ 1903	明治36	9/3	京都 南 座	(仮名手本 忠臣蔵)	四(文)。		
		9/5			六(源子=勝太郎)。		
		9/7			忠 臣 蔵 四段目(新靱=市次郎)。		
		9/8			(仮名手本 忠臣蔵)	九(越路=吉弥)。	
		9/9			忠 臣 蔵 茶屋場(カケ合 由良之助-越路・九太夫-新靱・重太郎-源子・弥五郎-さ路・喜太(ママ)八-南勢・おかる-南部・亭主-都・仲居-文字・力弥-常子・伴内-むら・平右衛門-文)。 ※文字太夫改め越路太夫・むら太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。		
△ 1903	明治36	9/13	京都 千 本 座	(仮名手本 忠臣蔵)	四(文)。		
		9/15			六(源子)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。		
△ 1903	明治36	12/1	名古屋 千 歳 座	忠 臣 蔵	勘平腹切(弥常)。		
		12/4			殿中(生栄)。 ※大坂明楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。		
△ 1904	明治37	7/16	名古屋 御 園 座	忠 臣 蔵	三段目(いさ)。		
		7/17			六(源子)。		
		7/25			九(越路)。茶屋場(由良之助-文・平右衛門-時・おかる-南部・伴内-越路・九太夫-むら・弥五郎-越路・喜太八-南勢・重太郎-広見・力弥-源子=吉弥・寛次郎)。 ※越路太夫・文太夫・南都太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。		
△ 1904	明治37	8/2	京都 歌舞伎座	(仮名手本 忠臣蔵)	扇ヶ谷(さ路=弥次郎)。		
		8/5			勘平切腹(源子=勝太郎)。		
		8/6			松伐(広見=兵三)。		
		8/7			鉄砲渡(広見=兵三)。		
		8/10			山科隠家(越路=吉弥)。		
		8/11			一力茶屋場(由良之助-越路・伴内-源子・重太郎-さ路・弥五郎-南勢・喜多八-広見・おかる-南部・仲居-むらの・亭主-いさ・力弥-常子・九太夫-むら・平右衛門-文)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。		
△ 1904	明治37	8/12	京都 千 本 座	忠 臣 蔵	殿中之段(さ路)。		
		8/14			四段目(文)。		
		8/15			二段目(南勢)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。		

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1904	明治37	9/18	名古屋 歌舞伎座	忠 臣 蔵	六ツ目（千歳）。	
		9/21			九段目 山科の段（大隅）。 ※竹本大隅太夫・伊達太夫・長子太夫・鏝太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1904	明治37	12/14	東京 歌舞伎座	忠 臣 蔵	殿中（さ路＝吉助）。 ※大阪文楽義太夫一座。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	
△ 1905	明治38	1/18	京都 朝 日 座	（仮名手本 忠臣蔵）	勘平腹切（米＝広市）。	
		1/20			扇ヶ谷（米＝広市）。 ※伊達太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1905	明治38	2/20	名古屋 新 守 座	忠 臣 蔵	扇ヶ谷判官切腹の段（住）。	
		2/22			三段目（文字子）。	
		2/23			殿中（さ路）。	
		2/27			九段目（越路＝吉弥）。 ※竹本住大夫・竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1905	明治38	2/28	名古屋 新 守 座	忠 臣 蔵	大序より七段目迄。 ※竹本越路太夫一座による慈善興行。 ※「大阪浄瑠璃は好評を以て昨二十七日打揚げたれば、大入の謝意を表する為め（中略）愛知婦人国恩会及び愛知育児院へ寄附の慈善興行を為す由」（『新愛知』2月28日）。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1905	明治38	6/6	京都 岩 神 座	（仮名手本 忠臣蔵）	六（米）。	
		6/10		忠 臣 蔵	裏門（米）。	
		6/11		（仮名手本 忠臣蔵）	四（長子）。	
		6/12		茶屋場（総力ヶ合）。 ※竹本伊達太夫・竹本長子太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。		
△ 1905	明治38	7/8	名古屋 新 守 座	忠 臣 蔵	殿中（いさ）。	
		7/15			七段目（惣掛合）。 ※竹本文太夫一座による「大阪文楽若手浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1905	明治38	7/18	東京 歌舞伎座	（仮名手本 忠臣蔵）	六（米＝広市）。	
		7/29		忠 臣 蔵 通し	二段目（米＝広市）、殿中（隅野＝清太郎）、四段目（長子＝仙之助）、五段目（静＝春太郎）、六段目（伊達＝市次郎）、九段目（大隅＝清六）、七段目（掛合 由良之助＝大隅・おかる＝伊達・平右衛門＝長子・九太夫＝静＝三絃総連中）。 ※竹本大隅太夫一座。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1905	明治38	8/17	京都 南 座	(仮名手本 忠臣蔵)	裏門(広見)。 ※大阪文楽座青年連、南部太夫・猿糸一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1905	明治38	8/26	京都 千 本 座	(仮名手本 忠臣蔵)	四(新靱)。 ※南部太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1905	明治38	9/6	名古屋 千 歳 座	忠 臣 蔵	(津磨)。 ※「大阪両座撰抜若手揃浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1906	明治39	2/3 2/8	京都 南 座	(仮名手本 忠臣蔵)	四(住)。 三(さ路)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1906	明治39	2/12	京都 南 座	忠 臣 蔵	一力(由良之助一染・九太夫一源子・重太郎一尾上・弥五郎一操・喜 多八一南勢・おかる一南部・亭主一広見・仲居一千鳥・力弥一越喜・ 伴内一綴・平右衛門一七五三)。 ※故紫福七回忌追悼の浄瑠璃会。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1906	明治39	2/20	京都 岩 神 座	(仮名手本 忠臣蔵)	扇ヶ谷(住)。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1906	明治39	7/25 7/29 8/2 8/3	京都 歌舞伎座	忠 臣 蔵 (仮名手本 忠臣蔵) 忠 臣 蔵 (仮名手本 忠臣蔵)	殿中(広見)。 勘平切腹(静)。 裏門(南路)。 九(大隅)。 ※大隅太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1906	明治39	8/3 8/4 8/7 8/11	名古屋 末 広 座	忠 臣 忠 臣 蔵	三段目(いさ)。 扇ヶ谷(文)。 三(さ路)。 (惣掛合)。 ※大阪文楽座、竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1906	明治39	8/7 8/10 8/12	名古屋 歌舞伎座	忠 臣 蔵	勘平腹切(三笠)。 殿中(津路)・七(惣掛合)。 茶屋(惣掛合)。 ※竹本津ばめ太夫ほかによる「大阪若手浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1906	明治39	12/5	名古屋 末 広 座	忠 臣 蔵	四（住＝龍助）。	
		12/9		（仮名手本 忠臣蔵）	六（殿母）。	
		12/12		忠 臣 蔵	四（菅＝友三郎）。 ※朝太夫・松太郎一座、住太夫・龍助一座による「合併大浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
1907	明治40	3/1～	堀 江 座	仮名手本忠 臣蔵 大序より 両国橋迄	大序 鶴ヶ岡のだん（小国、紋、初音、照、初子、敷嶋、鞆木、筑、米）、桃の井屋敷のだん（口 敷嶋、中 静、切 司）、殿中のだん（口 里＝*竜太郎、中 一＝*新造、切 菅＝*助太郎）、裏門のだん（角＝*仙之助）、扇ヶ谷のだん（切 住＝*龍助）、城明渡しのだん（司）、山崎街道二ツ玉のだん（口 三笠、奥 角＝*団丸、此所人形出遣い早替にて御覧に入候）、勘平住家のだん（中 雛＝*竹三郎、切 春子＝*新左衛門）、一力茶屋のだん（由良之介－大隅・九太夫－長子・重太郎－住・弥五郎－君・仲居－一・仲居－薫・おかる－伊達・仲居－敷嶋・亭主－組代・力弥－米・喜太八－菅・伴内－鏝・平右エ門－春子＝龍助、此所人形出遣いにて御覧に入申候）、道行旅路の嫁入（シテ 雛・ワキ 鏝・ツレ 組栄・里・薫＝仙左衛門・猿治郎・市治郎・団丸・春治郎、此所人形出遣いにて御覧に入候）、山科のだん（中 伊達＝*市治郎、切 大隅＝*仙左衛門）、天川屋のだん（中 君、切 長子）、両国橋のだん（弥常、筑、鞆木）。 ※角書「高野師直／塩谷判官」。 ※三代竹本大隅太夫紋下披露。 ※番付並びに『野沢の面影』は3月1日初日とするが、『浄瑠璃雑誌』第55～56号では、3月3日初日とする。 ※豊沢猿治郎、「一力茶屋のだん」を7日間代演（番付の書入れに拠る）。	高野師直（兵三）、桃の井若狭之介（玉市）、塩谷判官（簗介改め 亀松）、顔世御前（政亀）、加古川本蔵（玉治）、妻戸無瀬（玉松）、娘小浪（簗介改め 亀松）、大星力弥（玉市）、鷺坂伴内（紋三）、早野勘平（玉松）、おかる（簗介改め 亀松）、斧九太夫（清吉）、大星由良之介（兵吉）、百姓与市兵べ（玉松）、斧定九郎（玉松）、母おかや（冠四）、寺岡平右エ門（玉治）、妻お石（政亀）、天川屋儀平（紋三）、女房おその（小兵吉）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1907	明治40	3	御霊文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序より 両国橋勢揃迄	大序 鶴ヶ岡八幡宮兜改めのだん（南戸、南芳、稲葉、福、富子、喜、路久、いさ、広見）、恋歌のだん（師直一谷栄・若狭之介一葉・顔世御前一南勢）、桃の井若狭之介屋敷のだん（口 越喜、奥 叶）、大下馬先のだん（口 さ路、奥 勢見）、殿中刃傷のだん（切 文）、裏門のだん（源）、塩谷判官館のだん（切 津＝猿糸）、霞ヶ関のだん（富）、山崎街道のだん（さの）、二ツ玉のだん（時）、勘平住家のだん（中 南部、切 染）、祇園一力のだん（由良之介一津・仲居一隅の・重太郎一時・喜多八一さの・弥五郎一叶・仲居一干代・九大夫一七五三・伴内一文・力弥一源・亭主一むら・仲居一さ路・おかる一撰津大掾・平右工門一越路）、道行恋初旅（染・南部・津直・常子・越見）、山科閑居のだん（中 越路＝吉弥、切 撰津大掾）、天川屋のだん（中 登勢改め 谷、切 七五三）、両国橋勢揃のだん（越可、谷登、須磨）。 ※角書「高野師直／塩谷判官」。 ※「かねがね喧しかった大掾さんのおかるは、この時がお名残り、私が亦初役のおかるでしたが（中略）、彦六座や稲荷座のおかるは見えて知って居ましたが、文楽座のおかるは知りませんでした（中略）。それから、「九段目」は勿論、大掾さんでしたが、ほんとうに結構なものでした」（『吉田栄三自伝』）。 ※「三月一日ヨリ五月十日マデ六十九日間」（『義太夫年表 明治篇』）。	高野師直（門造）、桃の井若狭之介（栄三）、塩谷判官（多為蔵）、顔世御前（玉六）、加古川本蔵（多為蔵）、妻戸無瀬（紋十郎）、娘小浪（玉六）、大星力弥（玉吉）、鷺坂伴内（玉治郎）、早野勘平（多為蔵）、こし元おかる（栄三）、斧九太夫（三吾）、大星由良之介（紋十郎、九段目＝門造）、百姓与市兵べ（琴糸）、斧定九郎（玉治郎）、母おかや（玉亀）、寺岡平右工門（多為蔵）、妻お石（玉五郎）、天川屋儀兵へ（栄三）、女房おそよ（ママ）（玉五郎）。
△ 1907	明治40	7/1～	東京 明 治 座	忠 臣 蔵	大序から両国橋まで。 ※堀江一座引越興行（配役は堀江座3月興行に殆ど同じ）。『野沢の面影』には5日初日とある。 ※仙左衛門改メ二代豊沢団平襲名披露。 ※『義太夫年表 明治篇』欄外記事に拠る。	
△ 1907	明治40	8/6～12	名古屋 御 園 座	仮名手本忠臣蔵 大序より 両国橋迄	大序 鶴ヶ岡、二 桃井屋敷、三 殿中、裏門、四 扇ヶ谷、城明渡、五 山崎街道（与一兵衛／定九郎 出遣い早替り 玉松）、六 勘平住家（三味線 竹三郎）、七 一力茶屋（掛合 由良之助一隅・九大夫一長子・重太郎一住・弥五郎一君・おかる一伊達・力弥一米・喜多八一菅・伴内一鏝・平右衛門一春子＝市次郎、人形出遣）、八 道行（人形出遣）、九 山科、十 天川屋、十一 両国橋。 ※堀江座。 ※『御園座七十年史』、『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	与一兵衛・定九郎（出遣い早替り 玉松）。
△ 1907	明治40	8/12	京都 南 座	（仮名手本忠臣蔵）	茶屋場（カケ合 由良之助一越路・九大夫一村・重太郎・力弥一常子・おかる一南部・平右衛門一七五三）。 ※撰津大掾一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1907	明治40	12/11	名古屋 御園座	忠 臣 蔵 (仮名手本 忠臣蔵)	殿中の段(時勢)。	
		12/14			勘平腹切(常子)。	
		12/15			裏門(南芳)。	
		12/17			勘平切腹(七五三)。九段目(越路=吉兵衛)。 ※大阪文楽座、竹本越路太夫・大隅太夫・南部太夫・時太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』、『御園座七十年史』に拠る。	
△ 1907	明治40	12/18	名古屋 末広座	忠 臣 蔵 (仮名手本 忠臣蔵)	六(其)。	
		12/19			四ツ目(住)。	
		12/21			山科(染=広作)。 ※「大阪文楽/堀江両座合併大浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1908	明治41	2/25	京都 歌舞伎座	忠 臣 蔵	勘平住家(南芳)。	
		2/27			茶屋場(総掛合 由良之助/おかる/平右衛門-源/さの/鑊=竹三郎、客の籤引により決定)。 ※大阪文楽・堀江両座合併若手連。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1908	明治41	4/11	名古屋 末広座	忠 臣 蔵	勘平腹切の段(絹=団丈)。	
		4/16			七段目(惣掛合ひ)。 ※「大阪堀江座大浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1908	明治41	5/25~29	京都 南座	仮名手本忠 臣蔵 大序より 両国橋まで	大序 鶴ヶ岡(津路、他八人)、桃の井屋敷(口 小国、切 司)、殿中(中 三笠、切 菅)、裏門(静)、扇ヶ谷(長子)、城渡し(寿)、二ツ玉(角)、勘平住家(中 鑊、切 春子)、一力(大隅・長子・伊達・春子)。 ※堀江座一座。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	高野師直(兵三)、桃井若狭之助(玉市)、塩谷判官(亀松)、加古川本蔵(東吉)、妻戸無瀬(玉松)、娘小浪(亀松)、大星力弥(玉市)、早野勘平(玉松)、おかる(亀松)、斧九太夫(清吉)、大星由良之助(兵吉)、与市兵衛(玉松)、斧定九郎(玉松)、母おかや(冠四)、寺岡平右衛門(玉松)、妻おいし(政亀)。
△ 1908	明治41	7/13	名古屋 御園座	忠 臣 蔵	勘平腹切(源=勝太郎)。	
		7/14			裏門(柴=助八)。 ※大阪文楽一座。素浄瑠璃。竹本撰津大掾名古屋一世一代。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1908	明治41	8/6	京都 南座	忠 臣 蔵	殿中(小国)。	
		8/10			六(組栄)。 ※大隅太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1908	明治41	8/23	中 座	(仮名手本 忠臣蔵)	判官切腹(長子)、勘平切腹(伊達)、山科(大隅)。 ※竹本大隅太夫・豊沢団平一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1908	明治41	9/12	京都 南 座	忠 臣 蔵	九（越路＝吉兵衛）。一力茶屋場（掛合 由良之助－越路・伴内－源・重太郎－常子・喜太八－柴・力弥－むら・おかる－南部・弥五郎－南勢・九太夫－さの・平右衛門－七五三）。 ※越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1908	明治41	12/8	名古屋 御 園 座	（仮名手本 忠臣蔵）	勘平腹切（南勢）。 ※「大阪文楽・堀江合併大浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1908	明治41	12/14	東京 歌舞伎座	（仮名手本 忠臣蔵）	勘平腹切（越見）。	
		12/15			裏門（南芳）。	
		12/17			勘平切腹（源）。 ※竹本摂津大掾一座。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	
△ 1908	明治41	12/24	京都 歌舞伎座	忠 臣 蔵	六（広見＝勝平）。 ※大阪文楽若手一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1909	明治42	2/17	京都 南 座	忠 臣 蔵	六（和）。	
		2/20			裏門（南芳）。 ※文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1909	明治42	7/23	名古屋 千 歳 座	忠 臣 蔵	裏門（栄＝龍市）。	
		7/27			殿中（小国）。	
		7/29			（仮名手本 忠臣蔵） 七（惣掛合）。 ※竹本伊達太夫一座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1909	明治42	8/17	名古屋 御 園 座	忠 臣 蔵	殿中（南芳）。 ※大阪文楽座、越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1909	明治42	8/20	京都 岩 神 座	（仮名手本 忠臣蔵）	九（染）。 ※大阪文楽座、染太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1909	明治42	9/4	京都 南 座	（仮名手本 忠臣蔵）	六（鶴尾）。	
		9/7		忠 臣 蔵 （源）。 ※大阪文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。		
△ 1909	明治42	9/12	京都 国 華 座	（仮名手本 忠臣蔵）	四（柳適＝大之助）。	
		9/13			判官切腹（柳適＝大之助）。	
		9/15			四（三根＝団七）。 ※東阪合同浄瑠璃会。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1909	明治42	11/1~	御霊文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目迄	大序 鶴ヶ岡兜改めのだん（南次、源路、南登、柴、富次、文次、南芳、文字子、富子）、恋歌のだん（かけ合 喜・広・須廣・染代・谷登・越可）、桃の井館のだん（口 越見、奥 むら）、大手先のだん（津国、常子）、殿中刃傷のだん（切 時）、裏門のだん（富）、塩谷判官館の段（切 染）、霞ヶ関のだん（谷）、山崎街道のだん（口 淀）、二ツ玉の段（奥 源）、早野勘平住家のだん（中 古靱、切文、七五三）、祇園一力のだん（由良之介一撰津大掾・力弥一葉・重太郎一文・弥五郎一時・喜多八一むら・仲居一越喜・亭主一鶴尾・仲居一津留・伴内一古靱・九太夫一七五三・仲居一常子・おかる一南部・平右工門一越路）、道行恋初旅（染・叶・越喜・淀・越見）、山科閑居のだん（中 南部、切 撰津大掾）。 ※「十一月一日ヨリ十二月七日マデ卅六日間」（『文楽興行記録書入手帖』）、「卅七日間」（『古靱太夫床年譜』）。 ※「衣裳は三越呉服店が新意匠になる物を用ひ大道具は未だ曾用ひざる奇抜の新工夫を利用してほとんど幕なしのドンデン返しにて御客様方更に御退屈を感ずる事なき様に注意致しました」（番付口上）。 ※桐竹紋十郎は病後の為、茶屋場の由良之助のみ勤める。また、11月10日四代桐竹門造没（『吉田栄三自伝』に拠る）。	高野師直（門造）、桃の井若狭之介（三左衛門）、塩谷判官（助太郎）、顔世御前（琴糸）、加古川本蔵（助太郎）、妻となせ（栄三）、娘小浪（玉七）、大星力弥（玉子）、鷺坂伴内（紋三）、早野勘平（玉治郎）、女房おかる（三左衛門）、斧九太夫（三吾）、大星由良之介（紋十郎）、百姓与一兵衛（玉治郎）、斧定九郎（玉治郎）、母おかや（紋之助）、寺岡平右工門（玉治）、妻おいし（玉五郎）。
1910	明治43	1/2~	堀 江 座	仮名手本忠臣蔵 大序より 両国橋まで	大序（小野、三、小苗、司喜、雛栄、菅子、小司、若葉、東、早稲、小幾、明石、菅尾、蒼、的、春次、春日、一三五、雛子、小藤、美島、春代）、鶴ヶ岡のだん（三、隅栄、隅登、生栄）、桃の井屋敷のだん（口 栄、中 組栄、若狭之介一隅・本蔵一大嶋、此所人形出遣いにて御覧に入申候）、殿中のだん（口 敷嶋、中 三笠=*吉作、切長子=*八助）、裏門のだん（静=*仙之助）、扇ヶ谷のだん（切春子=*新左衛門）、城明渡しのだん（絹=*団丈、此所人形出遣いにて御覧に入申候）、山崎街道二ツ玉のだん（口 薫、奥 雛=*猿治郎、此所人形出遣い三役早替りにて御覧に入申候 吉田玉造）、勘平住家の段（中 鑢=*団丸、切 伊達=*吉三郎）、一力茶屋のだん（由良之介一春子・平右工門一錦・重太郎一菅・弥五郎一角・仲居一里・亭主一薫・九太夫一長子・力弥一組栄・仲居一隅の・仲居一栄・喜多八一三笠・伴内一鑢・おかる一伊達=*団平、此所人形出遣いにて御覧に入申候）、道行旅路の嫁入（シテ 菅・ワキ角・ツレ 静・隅の・栄=*新左衛門・他、此所人形出遣いにて御覧に入申候）、山科のだん（中 雛、切 大隅=*団平）、天川屋のだん（中 里、切 大嶋）、両国橋のだん（小国、此路、長浜、初音）。 ※角書「高野師直／塩谷判官」。	高野師直（兵三）、桃の井若狭之介（玉吉）、塩谷判官（文五郎）、顔世御前（小兵吉）、加古川本蔵（駒十郎）、妻戸無瀬（玉造）、娘小浪（文五郎）、大星力弥（玉吉）、鷺坂伴内（小兵吉）、早野勘平（玉造）、おかる（文五郎）、斧九太夫（清吉）、大星由良之介（兵吉）、百姓与市兵衛（玉造）、斧定九郎（玉造）、母おかや（冠四）、寺岡平右工門（駒十郎）、妻お石（政亀）、天川屋儀兵へ（政亀）、女房おその（小兵吉）。
△ 1910	明治43	2/4	名古屋千歳座	（仮名手本忠臣蔵）	殿中（鳴子）。	
		2/7		忠 臣 蔵	二つ玉（鳴子）。 ※呂大夫一座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1910	明治43	2/16	京都 明 治 座	忠 臣 蔵	殿中（源路）。	
		2/18			三（文字子）。 ※大阪文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1910	明治43	5/14	東京 牛 込 亭	忠 臣 蔵	勘平腹切の段（殿母＝松吉）。	
△ 1910	明治43	7/2	名古屋 末 広 座	忠 臣 蔵	裏門（栄＝龍市）。	
		7/6			松の間（三＝団市）。 ※大隅太夫・団平一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1910	明治43	8/4	京都 南 座	（仮名手本 忠臣蔵）	勘平切腹（静＝団六）。	
		8/6			山科（越路＝吉兵衛）。 ※文楽一座、越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1910	明治43	8/15	京都 国 華 座	忠 臣 蔵	扇谷段（津＝寛二郎）。 ※越路太夫・津太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1910	明治43	8/18	京都 歌 舞 伎 座	忠 臣 蔵	裏門（明石）。	
		8/20			殿中（南芳）。	
		8/24			勘平切腹（鶴夫）。 ※南部太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1910	明治43	9/2	京都 岩 神 座	忠 臣 蔵	裏門（明石）。 ※南部太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1910	明治43	10/19	京都 明 治 座	（仮名手本 忠臣蔵）	勘平切腹（静）。 ※大阪文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1910	明治43	12/12	名古屋 御 園 座	忠 臣 蔵	勘平切腹の段（静）。	
		12/13			殿中の段（文子（ママ））。 ※大阪文楽座、越路太夫・七五三太夫・古鞠太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1911	明治44	3/22	名古屋 御 園 座	（仮名手本 忠臣蔵）	勘平切腹（鶴尾）。	
		3/27		忠 臣 蔵 （惣掛合 由良之助一時・重太郎－南芳・弥五郎－明石・喜太八－南 治・力弥－南登・おかる－南部・仲居－福・亭主－源路・伴内－鶴 尾・九太夫－淀・平右衛門－鍬＝猿糸）。 ※竹本南部太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。		
△ 1911	明治44	7/7	京都 歌 舞 伎 座	（仮名手本 忠臣蔵）	殿中（南次＝吉右）。 ※文楽一座、越路一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1911	明治44	8/10 8/17	浪 花 座	忠 臣 蔵	勘平切腹(源)。 九(越路)。 ※文楽座連中による「浄瑠璃大会」の内。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△ 1911	明治44	9/7	京 都 南 座	忠 臣 蔵	山科(越路)。 ※文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1911	明治44	9	東 京 有 楽 座	(仮名手本 忠臣蔵)	道行旅路嫁入。 ※芸能調査室外題カードに拠る。	
△ 1911	明治44	10/7 10/11	名 古 屋 末 広 座	忠 臣 蔵	六ツ目(三笠=団二郎)。 裏門(伊佐=吉四郎)。四(長子=八助)。 ※大阪堀江座大浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1911	明治44	12/17	名 古 屋 御 園 座	忠 臣 蔵	六ツ目(鶴尾)。 ※越路太夫・南部太夫一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
1912	明治45	5/13~	御霊文楽座	仮名手本忠 臣蔵 大序より 両国橋勢揃 ひ迄	大序 鶴ヶ岡兜改めの段(めばゑ、松、三滝、越穂、源路)、恋歌の だん(師直-源路・若狭之介-小富・顔世-喜)、桃の井邸のだん (口 越代/光、奥 むら)、大下馬先の段(毎日かわり 越見/越 喜)、殿中刃傷の段(切 古靱)、裏門のだん(常子)、塩谷判官館 の段(切 染=広作)、霞ヶ関のだん(谷)、山崎街道の段(口 鶴)、二ツ玉のだん(奥 富)、早野勘平住家のだん(中 源、切 越 路=吉兵衛)、祇園一力のだん(由良之介-染・力弥-富・重太郎- むら・弥五郎-浪花・喜多八-鶴尾・仲居-越見・九太夫-叶・伴内 -源・仲居-鶴・亭主-常子・おかる-南部・平右工門-越路)、道 行恋初旅(南部・古靱・鶴尾・光・越代)、山科閑居のだん(中 叶、切 撰津大掾)、両国橋勢揃のだん(綱尾、越喜、路久)。 ※豊竹古靱太夫音声を痛め、「道行恋初旅」のみ竹本源太夫が代演 (『古靱太夫床年譜』に拠る)。 ※忠臣蔵九段目、竹本撰津大掾一世一代(『義太夫年表 明治 篇』)。	高野師直(文三)、桃井若狭之介(玉治 郎)、塩谷判官(栄三)、顔世御前(琴 糸)、加古川本蔵(栄三)、妻となせ(栄 三)、娘小浪(三左衛門)、大星力弥(玉 七)、鷺坂伴内(紋三)、早野勘平(玉治 郎)、こし元おかる(栄三)、斧九太夫(玉 五郎)、大星由良之介(多為蔵)、百姓与市 兵へ(琴糸)、斧定九郎(多為蔵)、母おか や(亀三郎)、寺岡平右工門(文三)、妻お いし(玉五郎)、天川屋義平(福寿軒)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1913	大正2	1/2~	近 松 座	仮名手本忠臣蔵 大序鶴ヶ岡より 大切敵討まで	鶴ヶ岡兜改メのだん（口 栄、次 里、奥 絹）、桃ノ井邸のだん（中 米＝仙市、切 菅＝助三郎）、足利殿中のだん（中 薫＝猿吉、次 三 笠＝団勇、切 大嶋＝源吉）、裏門のだん（角＝新造）、扇谷判官切腹の段（切 長子＝八助）、城明渡しのだん（琴）、山崎街道二ツ玉のだん（口 組栄＝広市、奥 綴＝吉作・ツレ 小円・胡弓 新之助、此所人形出遣ひ早替りにて御覧に入候 吉田玉造）、勘平切腹のだん（中 雛＝力松、切 春子＝新左衛門）、一力茶屋のだん（由良之介－大隅・九太夫－大嶋・重太郎－錦・喜多八－静・仲居－明石・仲居－春治・仲居－社・仲居－春栄・おかる－伊達・仲居－雛栄・仲居－小 司・仲居－雛子・力弥－組栄・亭主－三笠・弥五郎－綴・伴内－雛・平右衛門－春子＝助三郎、此所人形出遣ひにて御覧に入候）、道行旅路の嫁入のだん 引抜 祝春駒（シテ 菅・ワキ 角・ツレ 静・里・ 栄・明石・雛子・春治・社・小 司・菅尾・初音＝新左衛門・竹三郎・徳太郎・団勇・龍太郎・他二名、此所人形出遣ひにて御覧に入候）、山科のだん（中 錦＝新造、切 大隅＝団平）、両国橋より討入敵討のだん（琴・敷嶋・雛子・明石・春治＝団市）。 ※角書「高野師直／塩谷判官」。 ※三味線は『浄瑠璃雑誌』第113号に拠る。 ※「二月五日打上」（『義太夫年表 大正篇』）。 ※「（桃の井邸）米大（ママ）夫の欠勤で、栄大（ママ）夫が勤め居れり。（足利殿中）兵三の師直近来小廻りが仕憎いとて烏帽子素袍を脱して遣ひしが（中略）今回は着せた。（城開渡し）琴太夫欠勤にて何者が代り役するやら簾内なれば不明。（山崎街道）「立別れてぞ」で浅黄を切て落とすと、稲村に松の木、石地藏と云ふ道具で、早替りをする為め、本文を少し変て定九郎が立て居る（中略）。定九郎は江戸弁の方で、当時は俄浄瑠璃として重きを置ぬ様に成て有る。（勘平切腹）一文字やが表札見て「京都府乙訓郡山崎村百三十番地百姓与一兵衛同居早野勘平」杯とは是は余程前年文楽座にて始めて入れて宜しく無いと定評極り其後本家の文楽でも云はぬに、大正二年の今日況して近松座に於て、滑稽物で無きに右の如き不都合な事を入れるとは雛の品位に関するから抜て貰ひたい。（一力茶屋）大隅の由良之助は（中略）段切丈け、長子が代り勤む。（道行）「熱田の社あれかとよ」でチョン木頭に連れ富士が砕けて二見の岩となる、それへ春駒二人出て踊り這入と次に酒屋丁稚と下女が出て焼芋の取合で踊り狂ひ這入ると、元の戸奈（ママ）瀬小浪が出で七里の渡し帆を上げてとなり、日の出になる。（討入）師直の行衛が知れぬを勘平の幽霊が出て柴部家を教へる、是は本文にも無いのであれば廃して貰ひたし」（『浄瑠璃雑誌』第113号）。	高野師直（兵三）、桃井若狭之介（玉市）、塩谷判官（文五郎）、顔世御前（小兵吉）、加古川本蔵（駒十郎）、妻戸無瀬（玉造）、娘小浪（文五郎）、大星力弥（玉市）、鷺坂伴内（小兵吉）、早野勘平（玉造）、おかる（文五郎）、斧九太夫（清吉）、大星由良之助（兵吉）、百性与市兵へ（玉造）、斧定九郎（玉造）、母かや（冠四）、寺岡平右衛門（駒十郎）、妻お石（政亀）。
△ 1913	大正2	2/14	京都南 座	忠 臣 蔵	七ツ目（総掛合 由良ノ助－大隅・平右衛門－春子・おかる－伊達・九太夫－錦・伴内－雛・三人侍－組栄・静・燕）。 ※大隅一派、大阪近松座引越し。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1913	大正2	2/25	名古屋 末 広 座	(仮名手本 忠臣蔵)	三(明石)。 ※大隅太夫・団平、伊達太夫・徳太郎、錦太夫・仙市、ほか。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1913	大正2	11/5 11/7	名古屋 帝 国 座	(仮名手本 忠臣蔵)	六(小国)。 六(朝日)。 ※竹本伊達太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1913	大正2	11/23	京都 明 治 座	(仮名手本 忠臣蔵)	六(古靱)。 ※文楽一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1913	大正2	12/4 12/6	東京 新 富 座	(仮名手本 忠臣蔵)	六(鶴尾)。 殿中(文字子)。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△ 1913	大正2	12/5 12/8	東京 明 治 座	(仮名手本 忠臣蔵)	勘平切腹(三=団市)。 裏門(玉=団造)。 ※近松座、錦・団平、静・源吉一座。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△ 1913	大正2	12/5 12/6 12/7 12/8	名古屋 新 守 座	(仮名手本 忠臣蔵)	殿中(力)。 裏門(高昇)。 七(掛合)。 四(錦)。 ※「義太夫大会」の内。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
1914	大正3	3/26~	御霊文楽座	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目まで	大序 鶴ヶ岡八幡宮兜改メのだん(南海、めばゑ、南治、小町、三 滝)、恋歌のだん(和、路久、喜、九重、小富、源路)、桃井邸のだ ん(口 越見、鶴尾、奥 富)、大下馬先きのだん(口 英、光、奥 谷)、殿中刃傷のだん(切 古靱=*清六)、裏門のだん(静=*芳 之介)、塩谷判官切腹のだん(切 津)、霞ヶ関のだん(むら)、山 崎街道のだん(口 録)、ニツ玉のだん(奥 呂)、早野勘平住家のだ ん(中 源=*勝市、切 南部)、祇園一力のだん(由良之介-越路・ 力弥-常子・重太郎-静・弥五郎-録・喜多八-淀・仲居-文字子・ 九太夫-呂・伴内-叶・仲居-光・仲居-鶴・一力亭主-越代・一日 替り おかると伊達・平右衛門-古靱/／おかる-南部・平右衛門- 津=*清六/＊友治郎)、道行恋の初旅(叶・源・越喜・鶴尾・源路 =*寛治郎・*勝市・他)、山科閑居のだん(中 時、切 越路=吉兵 衛)。 ※「五月三日打上」(『義太夫年表 大正篇』)。	高野武蔵守師直(多為蔵)、桃井若狭之介 (玉治郎)、塩谷判官高貞(文三)、顔世御 前(三吾)、加古川本蔵(文三)、妻戸無瀬 (栄三)、娘小浪(政亀)、大星力弥(玉 吉)、鶯(ママ)阪伴内(紋三)、早野勘平 (玉治郎)、こし元おかる(栄三)、斧九太 夫(玉五郎)、大星由良之介(多為蔵)、百 性市兵衛(琴糸)、斧定九郎(駒十郎)、 与市兵衛女房(玉五郎)、寺岡平右衛門(玉 治郎)、妻お石(玉七)。
△ 1914	大正3	5/9	京都 岩 神 座	(仮名手本 忠臣蔵)	六(小国)。 ※大阪文楽座、録太夫・団六ほか。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1914	大正3	7/1	京都 南 座	(仮名手本 忠臣蔵)	勘平内(鶴尾)。	
		7/7			鶴ヶ岡(掛合)、松切(むら)、大手先(文字子)、殿中(古靱)、裏門(綾登)、扇ヶ谷(津)、山崎街道(掛合)、身売(源)、勘平切腹(南部)、一力茶屋(掛合 由良之助-越路・力弥-古靱・重太郎-綾登・弥五郎-源路・喜太八-文字子・仲居-い・津花・南次・亭主-むら・伴内-鶴尾・九太夫-八十・おかる-南部・平右衛門-津=吉兵衛、寛次郎)。 ※大阪文楽座、越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1914	大正3	7/24	名古屋 御 園 座	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九段目まで	大序 鶴ヶ岡(い、南海、南次)、桃井館松切(越代)、殿中刃傷(むら)、裏門(源路)、判官切腹(源)、二つ玉(定九郎・弥五郎-常子・与市兵衛・勘平-鶴尾)、お軽身売(古靱)、財布の連判(南部)、一力茶屋(掛合 由良之助-越路・力弥-常子・重太郎-鶴尾・喜多八-源路・弥五郎-越代・おかる-南部・九太夫-むら・伴内-源・平右衛門-古靱)、山科閑居(越路)。 ※『御園座七十年史』に拠る。	(不明)
△ 1914	大正3	8/7	東京 新 富 座	(仮名手本 忠臣蔵)	四(津=綱造)。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△ 1914	大正3	8/17	名古屋 末 広 座	(仮名手本 忠臣蔵)	勘平切腹(三=団市)。	
		8/18			三(玉=団造)。 ※竹本錦太夫・豊沢団平一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1915	大正4	2/1~		(仮名手本 忠臣蔵)	※近松座。女義太夫が人形入りにて興行。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	師直(兵三)、判官(玉市)、本蔵(清吉)、戸無瀬(小兵吉)、伴内(清吉)、勘平(玉市)、おかる(小兵吉)、九太夫(冠四)、由良之助(兵吉)、定九郎(小兵吉)、おかや(冠四)、平右衛門(玉市)。
△ 1915	大正4	7/18	名古屋 御 園 座	忠 臣 蔵	六段目(鶴尾)。 ※越路太夫一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1915	大正4	10/23~	御霊文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序より 敵討の段まで	大序 鶴ヶ岡兜改メのだん（い、南海、めばゑ、南路、三滝）、恋歌のだん（越穂、路久、喜、九重、小富、源路）、桃井邸のだん（口英、奥 呂）、大下馬先のだん（口 和、奥 淀）、殿中刃傷のだん（切 叶）、裏門のだん（駒）、扇ヶ谷のだん（切 古鞆=*清六）、霞ヶ関のだん（谷、綾登）、山崎街道のだん（口 越代=*広太郎、奥 源=*勝市）、早野勘平住家のだん（中 静=*燕四/*徳太郎、切 伊達=吉三郎）、祇園一力のだん（由良之介-津・力弥-古鞆・重太郎-録・弥五郎-静・喜太八-八十・仲居-文字子・九太夫-伊達・伴内-源・仲居-鶴尾・一力亭主-越見・おかる-南部・平右衛門-越路=*友次郎、*清六）、弥作鎌腹のだん（中 八十=*勝七、切 津=*綱蔵）、道行恋の初旅（南部・録・越見・鶴尾・源路=*寛治郎・*叶・*勝市・*団六・*友之介・*小綱）、山科閑居のだん（中 時、切 越路=吉兵衛）、敵討のだん（綱尾、鶴、九重、文字子、越穂）。 ※御大典記念興行。 ※「山科閑居のだん」後半、竹本源太夫が代りを勤めた日あり（『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る）。 ※「この時、新しい試みとして、八つ目の「道行」の中に、引抜きに、常磐津の「柱立万歳」を入れました」（『吉田栄三自伝』）。	高野武蔵守師直（駒十郎）、桃井若狭之介（玉治郎）、塩谷判官（文三）、顔世御前（政亀）、加古川本蔵（文三）、妻戸無瀬（栄三）、娘小浪（文五郎）、大星力弥（玉七）、鷺坂伴内（玉治郎）、早野勘平（玉蔵）、こし元おかる（文五郎）、斧九太夫（駒十郎）、大星由良之介（多為蔵）、百性と市兵へ（琴糸）、斧定九郎（文三）、勘平ノ母（駒十郎）、寺岡平右工門（栄三）、妻お石（玉蔵）、天川屋儀平（福寿軒）。
△	1915	大正4	12/15~ 16 12/17	名古屋 末 広 座	（仮名手本忠臣蔵） 八 道行（掛合）。 六（達見）。 ※12月17日の演目は素浄瑠璃。 ※竹本伊達太夫一座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	（不明）
△	1916	大正5	5/10	名古屋 末 広 座	（仮名手本忠臣蔵） 六（明石）。 ※竹本春子太夫・鶴沢寛六等外十数名の大一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△	1916	大正5	7/1 7/3 7/6 7/7	京都 南 座	忠 臣 蔵 勘平切腹之場（綾登=吉童）。 判官切腹の段（津=友次郎）。 勘平切腹（古鞆=清六）。 裏門（常子=友平）。 ※大阪文楽座、竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△	1916	大正5	7/12 7/15	浪 花 座	（仮名手本忠臣蔵） 三（明石）。 四（錦）。 ※近松座。素浄瑠璃。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△	1916	大正5	8/2	京都 明 治 座	（仮名手本忠臣蔵） 勘平切腹（弥（ママ））。 ※弥国太夫カ。 ※竹本朝太夫一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1916	大正5	12/10	東京 歌舞伎座	忠 臣 蔵 大序より 九段目まで 通し	茶屋場（由良之助一津・力弥一常子・十太郎一古靱・弥五郎一源・仲居一徳・おかる一南部・仲居一津花・南次・亭主一源路・伴内一鶴尾・九太夫一むら・平右衛門一越路＝寛治郎、友治郎）。 ※文楽座、竹本越路太夫一座。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	
△ 1917	大正6	5/1	名古屋 末 広 座	（仮名手本 忠臣蔵）	三（徳＝新吉）。 ※豊竹古靱太夫・鶴沢清六一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1917	大正6	7/10	名古屋 末 広 座	（仮名手本 忠臣蔵）	六（春次）。	
		7/13			六（松重＝庄造）。 ※近松座、竹本錦太夫・竹本角太夫一行。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1917	大正6	7/11	京都 南 座	（仮名手本 忠臣蔵） 忠 臣 蔵 通し	扇ヶ谷（津＝友次郎）。	
		7/15			鶴ヶ岡（掛合）、松切（むら＝友之助）、大手先（常子＝友平）、殿中（八十＝吉五郎）、扇ヶ谷（源＝勝市）、二つ玉（定九郎＝源路・勘平＝常子・弥五郎＝津花）、身売（伊達＝吉三郎）、財布連判（津＝友次郎）、山科（越路＝吉兵衛）、一力（掛合 由良之助一津・力弥一常子・重太郎＝源路・弥五郎＝津花・喜太八＝松・おかる＝伊達・仲居＝伊達栄・亭主＝むら・伴内＝八十・九太夫＝源・平右衛門＝越路）。 ※竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1917	大正6	7/20	名古屋 蓬 座	（仮名手本 忠臣蔵）	六（春次＝兵之助）。 ※竹本錦太夫・竹本角太夫・三味線 竹沢団六・豊沢兵吉。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1917	大正6	10/26~	御霊文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序より 仇討の段まで	大序 鶴ヶ岡兜改めのだん（伊達男、つばめ、南枝、陸路、富栄、津若、越登、源福、小町、津花）、恋歌のだん（高野師直一源路・顔世御前一越穂・若狭之助一小富）、桃の井邸のだん（口 英、奥 菅）、大下馬先のだん（口 常子、奥 八十）、殿中刃傷のだん（切 源＝勝市）、裏門のだん（越見＝広太郎／友之助）、扇ヶ谷のだん（切 津＝友治郎）、霞ヶ関のだん（弥＝歌助／団六）、山崎街道のだん（口 越代＝友平／友造）、ニツ玉のだん（奥 淀＝燕四）、早野勘平住家のだん（中 駒＝吉五郎、切 伊達＝吉三郎）、祇園一力のだん（由良之助一津・伴内一源・重太郎一菅・喜多八一淀・弥五郎一越代・仲居一常子・九太夫一叶・仲居一和・一力亭主一鶴・力弥一八十・平右衛門一弥・おかる一伊達＝清六）、道行恋初旅（南部・源・越見・英・源路＝広作・寛次郎・吉三郎・吉五郎・他二名）、山科閑居のだん（中 駒＝勇造、切 越路＝吉兵衛）、天川屋のだん（中 鶴尾、切 叶）、仇討のだん（鶴尾・谷登・九重・三滝・南次）。 ※三味線は『浄瑠璃雑誌』第173号に拠る。 ※「殿中刃傷のだん」3日目より竹本源太夫休演、竹本英太夫代役（『浄瑠璃雑誌』第173号に拠る）。 ※「道行恋初旅」竹本南部太夫の代役、竹本菅太夫（『義太夫年表 大正篇』に拠る）。 ※「十一月二十五日打上」（『義太夫年表 大正篇』）。	高野武蔵守師直（文三）、桃井若狭之助（玉治郎）、塩谷判官高貞（栄三）、顔世御前（玉七）、加古川本蔵（文三）、妻戸無瀬（栄三）、娘小浪（文五郎）、大星力弥（政亀）、鷺坂伴内（紋三）、早野勘平・獵人勘平（玉蔵）、こし元おかる・女房おかる（文五郎）、斧九太夫（玉五郎）、大星由良之助（玉蔵）、百性と市兵衛（冠四）、斧定九郎（玉治郎）、与市兵衛女房（玉五郎）、寺岡平右衛門（栄三）、妻お石（玉七）、天川屋儀平（文三）、女房おその（玉七）。
△ 1917	大正6	12/10	東京歌舞伎座	（仮名手本忠臣蔵）	六（源＝勝市）。 ※大阪文楽座浄瑠璃一座。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	
1918	大正7	1/2~	京都竹豊座	仮名手本忠臣蔵 大序より 山科の段まで	大序 鶴ヶ岡兜改メのだん（角栄、島の、多見、久米、亀、鳴尾、三島、時次）、恋歌のだん（松重）、桃の井屋敷のだん（口 春美、中伊達見、切 組栄）、大下馬先のだん（口 南登、奥 春日）、殿中刃傷のだん（切 大嶋）、裏門のだん（三好＝*喜代造）、扇ヶ谷のだん（切 角＝*鱗糸）、城明渡しのだん（春雄＝*広治）、山崎街道のだん（口 古金＝*喜代之助、奥 薫＝*団二郎、此処人形出遣イ早替御覧二入候 定九郎／与市兵衛／勘平 吉田辰五郎）、早野勘平住家のだん（中 春次＝*新之助、切 時＝*八助）、祇園一力のだん（由良之助一時・伴内一大嶋・力弥一春若・弥五郎一三好・亭主一伊達見・仲居一松重・平右衛門一錦・仲居一時次・仲居一春美・喜多八一古金・重太郎一春雄・九太夫一海老・おかる一角＝*兵吉）、道行恋初旅（組栄・薫・春次・南登・角勢＝*弥七・*槌之助・*団二郎・*喜市・*芳造・*庄造・*宗吉）、山科閑居のだん（中 操＝*小兵、切 春子＝*新左衛門）。 ※「一月二十六日迄」（『義太夫年表 大正篇』）。	高野師直（瓢寿呂）、桃井若狭之助（辰十郎）、塩谷判官（紋太郎）、顔世御前（玉米）、加古川本蔵（玉松）、妻戸無瀬（小兵吉）、娘小浪（紋太郎）、大星力弥（扇太郎）、鷺坂伴内（松江）、早野勘平（辰五郎）、こし元おかる・女房おかる（小兵吉）、斧九太夫（三郎）、大星由良之助（辰五郎）、斧定九郎（辰五郎）、母おかや（兵三）、寺岡平右衛門（玉松）、妻お石（玉米）。
△ 1918	大正7	7/7	北 劇 場	忠 臣 蔵	六（大島）。 ※文楽座太夫連による「涼み浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1918	大正7	7/20	名古屋 御園座	(仮名手本 忠臣蔵)	勘平切腹(源)。	
		7/不明			判官切腹(津)。 ※竹本越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※20日興行分は『近代歌舞伎年表 名古屋篇』、この項は『御園座七十年史』に拠る。	
△ 1918	大正7	12/1	名古屋 千歳座	(仮名手本 忠臣蔵)	勘平切腹(陸路)。	
		12/5			桃井館(陸路)、殿中(師直-陸路・□□-つばめ・若狭之助-越登・□□-越名)、裏門の段(□)、扇ヶ谷(つばめ)、ニツ玉(定九郎-陸路・与一兵衛-清・勘平-越名・おか[不可知](越□)、勘平切腹(越名)、[不可知](由良之助-つばめ・□九大夫-□路・力弥-清・亭主-つばめ・仲居-越名・おかる-越登・重太郎-陸路・弥五郎-清・喜田八-越□・伴内-清・平右衛門-□名)。 ※大阪文楽座青年浄瑠璃、研声会一座。 ※『近代歌舞伎年表 名古屋篇』に拠る。	
△ 1918	大正7	12/3	東京 歌舞伎座	(仮名手本 忠臣蔵)	四(津=友治郎)。	
		12/10			六(源=勝市)。 ※大阪文楽座、竹本越路太夫一座。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	
△ 1919	大正8	7/13	京都 南座	(仮名手本 忠臣蔵)	勘平腹切(源=勝市)。 ※大阪文楽座引越、竹本越路太夫。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
1919	大正8	10/31~	御霊文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序より 仇討のдан迄	大序 鶴ヶ岡兜改めのだん(多満、陸路、弥須、南枝、富栄、越登、辰、源福、越名、つばめ)、恋歌のだん(師直-つばめ・顔世-辰・若狭の助-越登)、桃井邸のだん(口 源路、奥 菅)、大下馬先のだん(口 小富、奥 町)、殿中刃傷のだん(切 源=*勝市)、裏門のだん(八十)、扇ヶ谷のだん(切 弥=*吉弥)、霞ヶ関のだん(和泉)、山崎街道のだん(口 一日かわり 英/越代、奥 静)、勘平住家のだん(中 駒=*錦糸、切 津)、祇園一力のだん(由良之助-津・力弥-常子・重太郎-菅・喜太八-静・弥五郎-和泉・仲居-越名・おかる-南部・仲居-越登・亭主-越代・九大夫-弥・伴内-八十・仲居-豊島・平右衛門-古靱=*清六)、道行恋初旅(南部・源・町・英・越名=*寛治郎・他)、山科閑居のだん(中 古靱=*燕四、切 越路=吉兵衛)、仇討のだん(かけ合 源路・常子・豊島)。 ※「二十九日間、十一月二十八日打上」(『義太夫年表 大正篇』)。	高野師直(玉治郎)、桃井若狭之助(栄三)、塩谷判官(文三)、顔世御前(玉八)、加古川本蔵(玉治郎)、妻となせ(栄三)、娘小浪(文五郎)、大星力弥(玉七)、鷺坂伴内(紋三)、早野勘平・獵人勘平(玉蔵)、こし元おかる・女房おかる(文五郎)、斧九大夫(玉五郎)、大星由良之助(玉蔵)、百姓与市兵衛(文三)、斧定九郎(玉治郎)、勘平の母(琴糸)、寺岡平右衛門(栄三)、妻お石(玉五郎)。
△ 1919	大正8	12/10	東京 歌舞伎座	(仮名手本 忠臣蔵)	四(津=友治郎)。	
		12/11			六(八十=友平)。 ※大阪文楽座浄瑠璃大一座。 ※『歌舞伎座百年史』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1920	大正9	8/3	京都 南 座	忠 臣 蔵	裏門（豊島）。	
		8/7			扇谷（津）。 ※大阪文楽座引越、越路太夫一座。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
1920	大正9	11/14~	京都 竹 豊 座	仮名手本忠臣蔵 大序より 敵討まで	大序 鶴ヶ岡のだん（富久、多見、角路、千嶋）、桃の井屋敷のだん（春若、松重、明石）、大下馬先のだん（千嶋、嶋菊）、殿中刃傷のだん（薫）、裏門のだん（南登）、扇ヶ谷のだん（大嶋）、城明渡しのだん（角路）、山崎街道のだん（松重）、ニツ玉のだん（春次=*宗三郎）、身売のだん（一日替り 三好/明石=*喜市）、財布連判のだん（若）、祇園一力のだん（由良之介-簾-九太夫-大嶋-弥五郎-三好-喜多八-明石-仲居-南登-仲居-千嶋-おかる-一角-仲居-多見-亭主-嶋菊-力弥-春若-重太郎-春次-伴内-越-平右工門-錦）、道行恋初旅（越-三好-南登-松重-千嶋）、雪こかしのだん（南登）、山科隠家のだん（角、簾）、敵討のだん（角路、千嶋=*六三郎）。	高野師直（兵十郎）、桃の井若狭之介（兵次）、塩谷判官（冠造）、顔世御前（兵次）、加古川本蔵（玉松）、妻戸無瀬（小兵吉）、娘小浪（扇太郎）、大星力弥（富十郎）、鷺坂伴内（富十郎）、早野勘平（玉松）、おかる（扇太郎）、斧九太夫（兵十郎）、大星由良之助（小兵吉）、与一兵衛（兵三）、定九郎（兵十郎）、母おかや（源二郎）、寺岡平右衛門（玉松）、妻お石（三郎）。
△ 1920	大正9	11/14	東京 有 楽 座	（仮名手本忠臣蔵）	六（静=芳之助）。 ※名流演奏会。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
1921	大正10	1/2~	御霊文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序より 道行のだん迄	大序 鶴ヶ岡兜改メのだん（呂智、雀、津駒、清、淀路、陸路、弥須、富栄、越登、辰、源福）、恋歌のだん（一日かわり 越穂/鏡/越名、小富/三滝/つばめ）、桃井邸のだん（口 嶋、奥 菅）、大下馬先のだん（口 源路、奥 相生）、殿中刃傷のだん（切 弥=*吉弥）、裏門のだん（静=*徳太郎/*団六）、扇ヶ谷のだん（切津）、霞ヶ関のだん（八十）、山崎街道のだん（口 淀）、ニツ玉のだん（奥 駒）、早野勘平住家のだん（中 源=*勝市、切 一日かわり 伊達=*吉三郎/南部=*寛治郎）、祇園一力のだん（由良之助-津-力弥-津花改メ 文-重太郎-鑊-喜太八-八十-弥五郎-淀-仲居おまつ-津国-仲居-三滝-九太夫-叶-伴内-源-仲居おたけ-和泉-仲居-常子-亭主-鶴尾-平右工門-一日かわり 弥-おかる-伊達/平右工門-一日かわり 古鞠-おかる-南部=吉兵衛）、道行恋の初旅（叶-鑊-町-常子-越名）。 ※「二十九日間、一月三十日打上」（『義太夫年表 大正篇』）。 ※興業中1月29日、吉田玉五郎歿。	高野武蔵守師直（辰五郎）、桃井若狭之助（玉治郎）、塩谷判官高貞（文三）、顔世御前（玉七）、加古川本蔵（文三）、妻となせ（栄三）、娘小なみ（文五郎）、大星力弥（養助）、鷺坂伴内（紋三）、星（ママ）野勘平（玉蔵）、こし元おかる（文五郎）、斧九太夫（玉五郎）、大星由良之助（玉蔵）、百姓与市兵衛（玉五郎）、斧定九郎（辰五郎）、勘平の母（辰五郎）、寺岡平右衛門（栄三）。
△ 1921	大正10	7/9	京都 南 座	忠 臣 蔵	勘平内（鶴尾=清二郎）。	
		7/11			（仮名手本忠臣蔵） 判官切腹（弥=吉弥）。 ※大阪文楽一座引越し。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1921	大正10	7/28	中 座	（仮名手本忠臣蔵）	判官切腹の段（弥=吉弥）。 ※文楽座による「浄瑠璃大会」の内。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△ 1922	大正11	8/1	浪 花 座	忠 臣 蔵	六段目（相生=友之助）。 ※文楽座連中による「浄瑠璃大会」の内。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1922	大正11	8/10 8/11	京都 南 座	(仮名手本 忠臣蔵)	勘平切腹(相生=友之助)。 判官切腹(古靱=新左衛門)。 ※文楽座引越し、津太夫・古靱太夫ほか。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1922	大正11	12/7	東京 新 富 座	(仮名手本 忠臣蔵)	勘平切腹(静=吉弥)。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△ 1923	大正12	7/8カ～ 11	東京 新 富 座	忠 臣 蔵	道行。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	(不明)
△ 1923	大正12	8/21～23	京都 南 座	忠 臣 蔵 道行	恋の初旅(源・鏝・源路・文・辰=絃阿弥・猿糸・団六・猿二郎・猿 太郎・叶太郎・勝造)。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	戸無瀬(玉蔵)、小浪(文五郎)。
1923	大正12	10/5～	御霊文楽座	仮名手本忠 臣蔵 大序より 九ツ目まで	大序 鶴ヶ岡のだん(千鳥・津若・駒登・照・雀・南枝・淀路・播 路・亀久・呂智・陸路・富栄=*兵市)、恋歌のだん(辰・源福・ 文・越名・三滝・小富=*友作)、刃傷のだん(切 静=*吉弥)、 裏門のだん(和泉=*友造、相生=*友之助、島=*広太郎)、扇ヶ 谷のだん(切 弥=*仙糸)、霞ヶ関のだん(鶴尾=*芳之助)、二 ツ玉のだん(八十=*歌助)、勘平住家のだん(中 駒=*燕四、切 古靱=徳太郎改め 清六)、祇園一力のだん(由良之助一弥・力弥一 綾・九太夫一静・仲居一越穂・仲居一文・重太郎一淀・喜多八一和 泉・弥五郎一源路・仲居一越登・仲居一越名・亭主一小富・伴内一八 十・おかる一鏝・平右衛門一源=*吉兵衛)、道行恋の旅路(叶・ 鏝・町・島・つばめ=新左衛門・*猿糸・*団六・*猿二郎・*友 若・*新三郎)、山科閑居のだん(中 源=*勝市、切 津=*友次 郎)。 ※「二十七日間、三十一日打上げ」(『義太夫年表 大正篇』)。 ※「山科閑居のだん・切」を竹本叶太夫と鶴沢叶で勤めた日あり (『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る)。	高野師直(辰五郎)、桃の井若狭之助(玉 八)、塩谷判官高貞(文三)、顔世御前(玉 七)、加古川本蔵(文三)、妻となせ(栄 三)、娘小浪(文五郎)、大星力弥(簗 助)、鷺坂伴内(玉松)、早野勘平(玉 蔵)、こし元おかる(文五郎)、斧九太夫 (琴糸)、大星由良之助(玉蔵)、百姓与市 兵衛(冠四)、斧定九郎(玉次郎)、勘平の 母(琴糸)、寺岡平右衛門(栄三)、妻おい し(政亀)。
△ 1924	大正13	2/28	竹本伊達太夫 宅	(仮名手本 忠臣蔵)	山科(つばめ=清二郎)。 ※大序会。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割	
1924	大正13	7/1~6	御霊文楽座	仮名手本忠臣蔵	大序 鶴ヶ岡のどん(陸路、亀久、播路、浜子、淀路、雀、駒登、駒尾、弥生、伊達喜、津矢、春若=勝造、新吉、稲丸、仙松、寛若、吉房、叶七、吉虎、吉貞、団伊三、友吉、清福)、恋歌のどん(かけ合陸路・呂智・播路=勝造/亀久・浜子・淀路=新吉)、大手下馬先のどん(亀久=八造/播路=兵市、千駒=清一/陸路=吉左)、殿中刃傷のどん(越穂=広太郎/富=八助)、裏門のどん(辰=吉一郎/呂智=綱之助)、扇ヶ谷判官切腹のどん(相生=友之助/和泉=猿太郎、つばめ=勝平/鶴尾=芳之助)、山崎街道のどん(綾=猿二郎/越穂=玉勝)、二ツ玉のどん(源路=友平/鏡=小綱)、身売のどん(富=友造/つばめ=友之助)、勘平切腹のどん(島=浅造/源路=友若、和泉=芳之助/島=勝平)、祇園一力茶屋のどん(由良の助=鶴尾/和泉・九大夫=島/源路・力弥=呂智/雀・重太郎=富/鏡・仲居=亀久/播路・仲居=伊達喜/駒登・おかる=越登/越名・仲居=駒尾/弥生・喜太八=播路/千駒・弥五郎=浜子/浜路・伴内=越穂/辰・亭主=つばめ/三滝・平右衛門=鏡/相生=歌助/錦糸)、道行恋の初旅(越名・越登・越穂・陸路・津矢=団六・錦糸・寛市・友二・新三郎・団二郎/越登・越名・綾・辰・春若=団六・歌助・友衛門・喜代之助・叶太郎・清丸)。 ※第3回向上会。	高野師直(一日替り 玉幸/玉徳/紋太郎)、桃井若狭之助(一日替り 文作/文之助)、塩谷判官(一日替り 簀助/扇太郎)、顔世御前(一日替り 文作/文之助)、加古川本蔵(文治)、妻戸無瀬(一日替り 簀助/扇太郎)、娘小浪(一日替り 簀助/扇太郎)、大星力弥(一日替り 玉市/松江)、鷺坂伴内(一日替り 文作/文之助)、早野勘平(一日替り 玉幸/玉徳/紋太郎)、おかる(一日替り 簀助/扇太郎)、斧九大夫(兵松)、大星由良之助(一日替り 玉幸/玉徳/紋太郎)、与市兵衛(兵松)、斧定九郎(一日替り 玉市/松江)、勘平の母(玉市)、寺岡平右衛門(一日替り 玉幸/玉徳/紋太郎)。	
△	1924	大正13	8/5	四国小松島	(仮名手本忠臣蔵)	松切(雀)。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△	1924	大正13	8/18	京都南座	忠臣蔵	裏門(辰=団伊三)。 殿中之段(陸路=団二郎)。 ※大阪文楽。素浄瑠璃。津太夫紋下清六改名披露。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
		8/20					
	1924	大正13	9/1~	京都新京極文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序より 道行迄	大序 鶴ヶ岡のどん(駒尾、弥生、春若=清丸、友吉、小庄)、恋歌のどん(かけ合 亀久・播路・淀路=新三郎)、殿中刃傷のどん(富=八助)、裏門のどん(呂智=友工門)、扇ヶ谷のどん(つばめ=勝平)、二ツ玉のどん(鏡=八助)、身売のどん(越名=友平)、勘平切腹のどん(和泉=友之助)、一力茶屋のどん(由良の助=和泉・九大夫=富・力弥=春若・重太郎=亀久・仲居=雀・仲居=駒尾・おかる=越登・仲居=弥生・喜多八=播路・弥五郎=淀路・亭主=越名・伴内=つばめ・平右衛門=鏡=新左衛門)、道行恋の初旅(越名・越登・呂智・亀久・駒尾=仙糸・勝平・友之助・友工門・清丸・小庄)。	高野師直(兵十郎)、若狭之助(紋太郎)、塩谷判官(扇太郎)、顔世御前(簀助)、加古川本蔵(松江)、戸無瀬(小兵吉)、娘小浪(扇太郎)、大星力弥(文治)、鷺坂伴内(文作)、早野勘平(玉徳)、腰元おかる・女房お軽・おかる(簀助)、斧九大夫(兵十郎)、大星由良之助(紋太郎)、与市兵衛(兵松)、斧定九郎(松江)、母おかや(三郎)、寺岡平右衛門(玉幸)。
△	1924	大正13	11/10	粉浜豊竹古鞆太夫宅	(仮名手本忠臣蔵)	六(豆)。九(つばめ)。 ※古鞆門人研究会。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△	1924	大正13	11/25	堀江演舞場	(仮名手本忠臣蔵)	道行(戸奈瀬=弥生・小浪=長子・ツレ 弥常・長浜・弥代=八造・団伊三・竹弥・仁平・吉子)。 ※六代目竹本弥太夫追善浄瑠璃会。 ※『浄瑠璃雑誌』第237号に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1925	大正14	8/12 8/13	中 座	忠 臣 蔵	刃傷（陸路＝新三郎）。 裏門（照＝団伊三）。 ※文楽座連中による「涼み浄瑠璃」の内。 ※『近代歌舞伎年表 大阪篇』に拠る。	
△ 1925	大正14	12/6カ	高知	（仮名手本 忠臣蔵）	四（米）。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△ 1926	大正15	1/28 1/30	京都 京 都 座	忠 臣 蔵	四段目 扇ヶ谷の段（浜子＝清丸）。 三段目 殿中刃傷の段（駒尾＝吉房）。 ※大阪文楽座、竹本文字太夫・竹本相生太夫ほか。素浄瑠璃。竹本文 字太夫襲名披露。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
1926	大正15	3/1～	御霊文楽座	仮名手本忠 臣蔵 大序より 仇討迄	大序 鶴ヶ岡兜改めのだん（鷹、伊達喜、弥生、駒尾、駒登、照、淀 路、浜子、播路、亀久、陸路、長子、千駒、辰、源福）、恋歌のだん （師直一越穂・顔世一綾・若狭の助一長子＝*清二郎）、桃井邸のだ ん（口 源路＝*寛市／越名、切 角＝*猿糸）、大手下馬先のだん （口 富＝*猿太郎、奥 鏡／嶋＝*浅造）、殿中刃傷のだん（切 静 ＝*吉弥）、裏門のだん（文字＝*勝平）、扇ヶ谷のだん（切 叶＝ *叶）、霞ヶ関のだん（鶴尾）、山崎街道のだん（口 相生＝*友平 ／和泉）、二ツ玉のだん（奥 鑊＝*新左衛門）、勘平住家のだん （中 駒＝*才治、切 土佐＝吉三郎）、祇園一力のだん（由良之助一 津・力弥一常子・重太郎一静・喜太八一相生・弥五郎一鏡・仲居一 綾・おかる一土佐・仲居一越名・亭主一嶋・九太夫一鑊・伴内一文 字・仲居一越穂・平右衛門一古靱＝*友次郎）、道行恋の初旅（源・ 角・町・越登・陸路＝*仙糸・*清六・*友造・*友若・*清丸）、 山科閑居のだん（中 駒＝*勝市、切 津＝道八）、仇討のだん（かけ 合 三滝・辰・千駒・源福・播路）。 ※角書「高野師直／塩谷判官」。 ※「二十一日打上」（『義太夫年表 大正篇』）。 ※竹本津太夫休演のため、「祇園一力のだん」代役は（由良之助一 静・重太郎一相生・喜太八一鏡・弥五郎一源路・平右衛門一源）、 「山科閑居のだん」は中日頃豊竹駒太夫が代演（『義太夫年表 大正 篇』欄外記事に拠る）。	高野師直（辰五郎）、桃井若狭の助（扇太 郎）、塩谷判官（文三）、顔世御前（玉 七）、加古川本蔵（文三）、妻となせ（栄 三）、娘小浪（文五郎）、大星力弥（簗 助）、鷺坂伴内（玉松）、早野勘平（玉 蔵）、こし元おかる・女房おかる（文五 郎）、斧九太夫（辰五郎）、大星由良之助 （玉蔵）、親与一兵衛（玉次郎）、斧定九郎 （玉松）、与一兵衛女房（玉七）、寺岡平右 衛門（栄三）、妻お石（政亀）。
△ 1926	大正15	6/8	文具倶楽部	（仮名手本 忠臣蔵）	六（雛女＝雛三郎）。四（春次＝竹弥）。 ※近松会発会。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△ 1926	大正15	6/23 6/25 6/28	京都 南 座	仮名手本忠 臣蔵 （仮名手本 忠臣蔵）	裏門の段（辰＝団伊三）。勘平切腹の段（相生＝友之助）。 勘平切腹の段（鏡＝市之助）。 殿中刃傷（源路＝清二郎）。 ※文楽座引越し、豊竹古靱太夫・竹本土佐太夫ほか。素浄瑠璃。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
△ 1926	大正15	7/11	富田林 塚 屋	（仮名手本 忠臣蔵）	六（雛女＝雛三郎）。 ※近松会第2回。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1926	大正15	7/21	徳島 新 富 座	(仮名手本 忠臣蔵)	三(駒尾)。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
△ 1926	大正15	9/27	堺 龍 神 座	(仮名手本 忠臣蔵)	四(春次)。 ※近松会。門造一座の人形入。 ※『義太夫年表 大正篇』欄外記事に拠る。	
1927	昭和2	4/1~19	弁 天 座	仮名手本忠 臣蔵 大序より 七ツ目まで	大序 鶴ヶ岡兜始めの段(春若、静尾、駒司、三津、源左、源喜、源賀、長、武蔵、源平、叶美、常子、源子、小松、鷹、伊達喜、照、弥生、駒尾、駒登、淀路=稲丸、他)、恋歌の段(かけ合 播路・亀久・陸路・長子・千駒・辰・源福=友作・他)、殿中刃傷の段(切文字=勝平)、裏門の段(つばめ=勝市)、扇ヶ谷の段(切 叶=叶)、霞ヶ関の段(綾=八助/広太郎)、山崎街道の段(口 相生/町=歌助/友之助/友造)、二ツ玉の段(奥 角=猿糸)、勘平住家の段(中 駒=才治、切 土佐=吉兵衛)、祇園一力の段(由良之助一津・力弥-つばめ・重太郎-相生・喜多八-和泉・弥五郎-島・仲居一綾・おかる一朝・仲居一越名・亭主一鏡・九太夫一大隅・伴内一文字・仲居一源路・平右衛門一源=松太郎)。 ※千穂楽は『松竹関西演劇誌』に拠る。	高野師直(玉松)、桃井若狭之助(玉徳)、塩谷判官(玉次郎)、顔世御前(紋十郎)、加古川本蔵(伝之助)、大星力弥(紋太郎)、鷺坂伴内(扇太郎)、早野勘平(政亀)、こし元おかる・遊女おかる(文五郎)、斧九太夫(門造)、大星由良之助(栄三)、親与一兵衛(兵十郎)、斧定九郎(玉幸)、勘平の母(冠四)、寺岡平右衛門(玉次郎)。
△ 1927	昭和2	8/26	東京 歌舞伎座	仮名手本忠 臣蔵	裏門の段(辰=新三郎)。	
		8/30		忠 臣 蔵	六ツ目 身売の段(貴鳳=猿糸)。	
		9/1			九段目(津=叶)。 ※8月26日・9月1日の演目は『松竹百年史』、8月30日の演目は『義太夫年表 昭和篇』に拠る。	
△ 1927	昭和2	12/11	東京 宮 戸 座	忠 臣 蔵	六ツ目(米子=新之丞)。 ※大日本義太夫因会大会。 ※『浄瑠璃雑誌』第265号に拠る。	
1927	昭和2	12/21 12/22	浪 花 座	忠 臣 蔵	殿中刃傷の段(駒尾=才太郎)。 勘平切腹の段(駒尾=才太郎)。 ※若手素浄瑠璃。	
△ 1928	昭和3	3/7~8	神戸 八千代座	仮名手本忠 臣蔵	道行恋の初旅(掛合)。 ※大阪文楽座巡業(3月1~20日、神戸・名古屋・広島)の内。 ※「神戸新聞」(2月26・28~29日・3月1~6日の記事、2月28~29日・3月1~8日の広告)に拠る。	(不明)
△ 1928	昭和3	3/14~ 15カ	名古屋 御 園 座	仮名手本忠 臣蔵	道行恋の初旅(越名・鏡・辰・隅栄・津磨・小金・室戸=友之助・友衛門・勝三郎・団伊三・市之助・道造)。 ※『御園座七十年史』に拠るが、番付は14~15日上演の二の替りまでで「十日より六日間日延べなし」とある。	小浪(紋十郎)。
△ 1928	昭和3	5/2~6	博多 大博劇場	仮名手本忠 臣蔵	大序から討入りまで通し。 ※大阪文楽座巡業(4月下旬~5月、九州)の内。人形は吉田玉次郎、吉田玉松、桐竹紋十郎、小川弥三郎の出演。 ※「大阪毎日新聞西部毎日」北九州版(4月29日)、「同」福岡版(5月1・6日)に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1928	昭和3	6/1~16	弁 天 座	仮名手本忠臣蔵 大序より 九段目まで	大序 鶴ヶ岡兜改めの段（佐久、津磨、文字栄、泉代、隅尾、駒司、源左、源喜、源賀、長、武蔵、源平、叶美、常子、小松、伊達喜、照、隅栄、駒尾、駒登、淀路＝稲丸、他）、恋歌の段（かけ合 播路・亀久・陸路・長子・千駒・辰・源福＝友作・他）、桃井邸の段（口 越名＝綱右衛門／猿太郎／友衛門／清二郎、奥 つばめ＝勝市）、殿中刃傷の段（切 大隅＝道八）、裏門の段（相生／和泉＝歌助／友之助／友造／八助／友平／友若）、扇ヶ谷の段（切 古鞆＝清六）、霞ヶ関の段（綾＝広太郎／猿二郎）、山崎街道の段（口 鏡＝団六）、二ツ玉の段（奥 文字＝勝平・胡弓 福太郎／小庄／友駒）、早野勘平住家の段（中 駒＝才治、切 土佐＝吉兵衛）、祇園一力の段（由良之助＝古鞆・力弥＝つばめ・重太郎＝和泉・喜太八＝相生・弥五郎＝富・仲居＝播路・おかる＝鑠・仲居＝綾・仲居＝辰・亭主＝源路・九太夫＝貴鳳・伴内＝鏡・平右衛門＝大隅＝新左衛門／道八）、道行恋の初旅（源・島・越名・源路・千駒・長子＝仙糸・芳之助・浅造・寛市・叶太郎＝吉左）、山科閑居の段（中 鑠＝新左衛門、切 津＝友治郎）。 ※千種楽は『文楽興行記録昭和篇』に拠る。	高野師直（門造）、桃井若狭之助（玉幸）、塩谷判官（文五郎）、顔世御前（玉七）、加古川本蔵（玉次郎）、妻戸無瀬（文五郎）、娘小浪（紋十郎）、大星力弥（扇太郎）、鷺坂伴内（玉徳）、星（ママ）野勘平（栄三）、おかる（文五郎）、斧九太夫（玉次郎）、大星由良之助（栄三）、与市兵衛（玉七）、定九郎（紋太郎）、与市兵衛女房（冠四）、寺岡平右衛門（玉松）、妻お石（政亀）。
△	昭和3	6/24	神戸 八千代座	忠 臣 蔵	殿中（文字栄＝勝芳）。	
		6/25		（仮名手本忠臣蔵）	六（長）。 ※若手幹部連の素浄瑠璃。 ※「神戸新聞」（6月23～25日の記事、6月23～26日の広告）に拠る。	
△	昭和3	7/18	神戸 八千代座	忠 臣 蔵	裏門（常子）。 ※文楽中堅花形の大一座。素浄瑠璃。 ※「神戸新聞」（7月12・14～15・17～18日の記事、7月12～18日の広告）に拠る。	
1928	昭和3	7/26~30	東京 明 治 座	仮名手本忠臣蔵	刃傷の段（つばめ＝勝市）、裏門の段（辰＝勝三郎）、扇ヶ谷の段（大隅＝道八）、二ツ玉の段（相生＝芳之助・胡弓 小庄）、勘平住家の段（中 越名＝友衛門、切 古鞆＝清六）、一力茶屋の段（由良之助＝古鞆・力弥＝つばめ・おかる＝朝・平右衛門＝大隅・亭主＝小松＝松太郎）、両国橋引揚（小松）。	高師直（門造）、塩谷判官（玉松）、早野勘平（栄三）、おかる（文五郎）、大星由良之助（栄三）、寺岡平右衛門（玉松）。
1928	昭和3	8/18	浪 花 座	仮名手本忠臣蔵	殿中の段（隅栄＝福太郎）。	
		8/19		忠 臣 蔵	裏門の段（常子＝小庄）。	
		8/22		仮名手本忠臣蔵	勘平住家の段（千駒＝兵市）。	
		8/23		忠 臣 蔵	勘平住家の段（和泉＝友造）。 ※文楽座若手素浄瑠璃。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割	
1928	昭和3	11/15~18	京都南座	仮名手本忠臣蔵 大序より 両国橋引揚 まで	鶴ヶ岡兜改めの段（カケ合 辰・播路・常子・小松・津磨・佐久・小金＝団伊三・市之助）、殿中刃傷の段（切 文字＝勝平）、裏門の段（越名＝友衛門）、扇ヶ谷の段（切 古靱＝清六）、霞ヶ関の段（播路＝団伊三・市之助）、山崎街道の段（辰＝勝三郎／団二郎）、二ツ玉の段（つばめ＝勝市・胡弓 小庄／新之助）、身売の段（相生＝歌助）、勤平切腹の段（切 土佐＝吉兵衛）、祇園一力茶屋の段（由良之助一津・力弥一常子・重太郎一つばめ・喜多八一越名・弥五郎一播路・仲居一小松・おかる一土佐・仲居一文字栄・仲居一小金・亭主一辰・九太夫一鏡・伴内一相生・平右衛門一古靱＝団六／友之助／清六）、道行旅路の嫁入（鑊・鏡・越名・辰・文字栄・小金・津磨＝新左衛門・団六／友之助・友衛門・勝三郎・小庄／友駒／清若）、山科閑居の段（中 文字＝勝平、切 津＝友次郎）、両国橋引揚げの段（播路・常子・小松・佐久・文字栄・小金・相寿＝勝三郎／団二郎）。	高野師直（門造）、桃の井若狭之助（玉幸）、塩谷判官（玉松）、顔世御前（扇太郎）、加古川本蔵（玉次郎）、妻戸無瀬（文五郎）、娘小浪（紋十郎）、大星力弥（紋太郎）、鷺坂伴内（玉市）、早野勘平（栄三）、こし元おかる・娘おかる・おかる（文五郎）、斧九太夫（玉次郎）、大星由良之助（栄三）、百姓与市兵衛（兵十郎）、斧定九郎（玉幸）、与市兵衛女房（玉七）、寺岡平右衛門（玉松）、妻お石（政亀）。	
△	1928	昭和3	12/5	東京三越ホール	（仮名手本忠臣蔵） 勤平住家（君＝吉松郎）。 ※第2回浄瑠璃研究会。 ※『浄瑠璃世界』第300号、『浄瑠璃雑誌』第275号に拠る。		
△	1929	昭和4	1/11~13	神戸八千代座	仮名手本忠臣蔵 大序より 両国橋勢揃 ひまで	大序 鶴ヶ岡兜改めの段、恋歌の段、桃井邸の段、下馬先進物の段、殿中刃傷の段、裏門の段、扇ヶ谷の段、霞関の段、山崎街道の段、二ツ玉の段、勤平住居の段、祇園一力の段、道行旅路嫁入、山科閑居の段、両国橋勢揃ひの段。 ※「神戸新聞」（1月11~13日の記事、1月11~12日の広告）に拠る。	
△	1929	昭和4	1/25以降 3月以前	東京共楽座	（仮名手本忠臣蔵） ※『浄瑠璃雑誌』第278号に拠る。		
△	1929	昭和4	2/4~22	地方公演 （山陽・九州）	（仮名手本忠臣蔵） 一力（力弥一小松）。 ※『義太夫年表 昭和篇』備考に拠る。		
	1929	昭和4	4/1~10	八千代座	仮名手本忠臣蔵 大序より 七つ目まで	大序 鶴ヶ岡兜改めの段（津喜、おぼこ、相寿、加賀、小金、宮、佐久、津磨、文字栄、隅尾、駒司、源左、源喜、源賀、長、源平、叶美、常子、小松、伊達喜、照、隅栄、駒尾、駒登）、恋歌の段（淀路・播路・亀久・陸路・長子・千駒・辰・源福）、桃井邸の段（口富、奥 島）、下馬先進物の段（和泉）、殿中刃傷の段（切 文字＝勝平）、裏門の段（相生）、扇ヶ谷の段（切 大隅＝道八）、霞ヶ関の段（綾）、山崎街道の段（口 越名）、二つ玉の段（奥 鏡＝団六）、勤平住家の段（中 つばめ＝勝市、切 津＝叶）、祇園一力の段（由良之助一土佐・力弥一小松／常子・重太郎一和泉・喜太八一島・弥五郎一越名・仲居一陸路・おかる一鑊・仲居一亀久・仲居一隅栄・亭主一源路・九太夫一貴鳳・伴内一相生・平右衛門一古靱＝新左衛門／吉兵衛）。	高野師直（門造）、桃井若狭之助（玉幸）、塩谷判官（玉松）、顔世御前（扇太郎）、加古川本蔵（玉次郎）、妻戸無瀬（文五郎）、娘小浪（紋十郎）、大星力弥（紋太郎）、鷺坂伴内（玉市）、早野勘平（栄三）、こし元おかる（文五郎）、斧九太夫（玉七）、大星由良之介（栄三）、百姓与市兵衛（兵十郎）、斧定九郎（玉幸）、与市兵衛女房（玉七）、寺岡平右衛門（玉松）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1929	昭和4	4/16	浜松 浜 松 座	(仮名手本 忠臣蔵)	勘平住家(叶美=小庄)。	
		4/18	豊橋 東 雲 座		勘平切腹の段(叶美=小庄)。	
		4/20		忠 臣 蔵	勘平住家の段(辰=勝三郎)。 ※大阪文楽座巡業(4月16~22日、東海)の内。 ※「参陽新報」(4月14~20日)、「新朝報」(4月14~15・17・20日)、「豊橋新報」(4月14・16~20日の記事、4月16日の広告)、「豊橋日日新聞」(4月14~20日の記事、4月16日の広告)に拠る。	
△ 1929	昭和4	6/3~4	名古屋 御 園 座	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入(島・越名・隅栄・津磨・相寿/小金=浅造・友衛門・勝三郎・新之助・道次郎/勝芳)。	妻戸無瀬(政亀)、娘小浪(扇太郎)。
		6/7	豊橋 東 雲 座		道行旅路の嫁入。	
		6/13~14	神戸 八千代座		道行旅路の嫁入(掛合 島・越名・隅栄・津磨・相寿=浅造・友衛門・勝三郎・新之助・道次郎)。 ※大阪文楽座巡業(6月1~19日、東海・山陽)の内。 ※豊橋・東雲座の興行は「参陽新報」(5月26・29・31日・6月1~4・6~7日の記事、6月4・6日の広告)、「新朝報」(5月26・29・31日・6月1~5日の記事、6月4日の広告)、「豊橋新報」(5月24・26・29・31日・6月2・4~7日の記事、6月4・6日の広告)、「豊橋日日新聞」(5月29・31日・6月1~7日の記事、6月3・6日の広告)に拠る。神戸・八千代座の興行は「神戸新聞」(6月10~15日の記事、6月9~15日の広告)に拠る。	
△ 1929	昭和4	6/23	天王寺河堀口 武藤氏旧宅	(仮名手本 忠臣蔵)	四(春次=力松)。 ※春陽会発会式。 ※『浄瑠璃雑誌』第281号に拠る。	
1929	昭和4	7/10~13	東京 新橋演舞場	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入(つばめ・越名・辰・播路・隅栄・小松=勝市・友衛門・勝三郎・団伊三・友駒・新之助)。	妻戸無瀬(政亀)、娘小浪(紋十郎)。
△ 1929	昭和4	8/8	長崎 南 座	忠 臣 蔵	六段目(春次=宗吉)。 ※竹本角太夫一行巡業(7月25日~8月14日、山陽・九州)の内。 ※「長崎日日新聞」(8月7~8日)、『浄瑠璃雑誌』第282号に拠る。	
△ 1929	昭和4	9/14~15	神戸 八千代座	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入(島・源路・辰・隅栄・津磨=浅造・友衛門・団伊三・小庄・勝芳)。	戸無瀬(政亀)、娘小浪(扇太郎)。
		9/21	高松 聚 楽 座		道行旅路の嫁入り(島・源路・他)。 ※大阪文楽座巡業(9月7~23日、名古屋・神戸・高松)の内。 ※神戸・八千代座の興行は「神戸新聞」(9月11~15・17~18日の記事、9月13~19日の広告)に拠る。高松・聚楽座の興行は「香川新報」(9月19~23日の記事、9月20~21・23日の広告)に拠る。	
△ 1929	昭和4	9/19	岡崎 松 栄 座	(仮名手本 忠臣蔵)	六(駒尾=友駒)。 ※竹本陸路太夫一行巡業(9月18~21日・10月1~3日、東海・近畿)の内。 ※『浄瑠璃雑誌』第284号に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1929	昭和4	12/1~4	東京 新橋演舞場	仮名手本忠 臣蔵	祇園一力の段（由良之助一津・力弥一津磨／文字栄・重太郎一越名・喜太八一播路・弥五郎一隅栄・おかる一鑿・仲居一隅尾・亭主一津磨／文字栄・九太夫一文字・伴内一和泉・仲居一おぼこ・平右衛門一大隅＝友次郎、新左衛門）。	おかる（文五郎）、斧九太夫（門造）、大星由良之助（栄三）、寺岡平右衛門（玉松）。
△ 1929	昭和4	12/20	東京 三越ホール	裏表忠臣蔵	第一 殿中、第二 弥作鎌腹、第三 ニツ玉、第四 勘平切腹、第五 本蔵下郎、第六 赤垣出立、第七 一力茶屋場。 ※第12回浄瑠璃研究会。 ※『浄瑠璃雑誌』第286号に拠る。	
△ 1930	昭和5	3/21	浅草 並木倶楽部	（仮名手本 忠臣蔵）	一力茶屋場（総掛合）。 ※竹本津賀栄改め二代目鶴沢紋教の改名披露会。 ※『浄瑠璃雑誌』第289号に拠る。	
△ 1930	昭和5	3/29	浅草 並木倶楽部	（仮名手本 忠臣蔵）	殿中刃傷（米子＝文之助）。 ※第1回浄瑠璃研声会。 ※『浄瑠璃雑誌』第289・290号に拠る。	
△ 1930	昭和5	4/8	豊竹古鞆太夫 宅	仮名手本忠 臣蔵	九段目（つばめ＝清二郎）。 ※燕巢会。 ※『浄瑠璃雑誌』第290号に拠る。	
△ 1930	昭和5	4/21	東京 三越ホール	（仮名手本 忠臣蔵）	判官切腹（君＝桑造）。 ※第16回浄瑠璃研究会。 ※『浄瑠璃雑誌』第290号に拠る。	
△ 1930	昭和5	8/17	東京 東京劇場	忠 臣 蔵	六ツ目 勘平切腹の段（文＝友衛門）。	
		8/19		仮名手本忠 臣蔵	勘平腹切の段（文字＝勝平）。	
		8/20		（仮名手本 忠臣蔵）	裏門（播路＝小庄）。	
		8/23		裏門（辰＝団伊三）。		
		8/25		仮名手本忠 臣蔵	勘平腹切の段（津＝友次郎）、一力茶屋の段（総掛合 由良助一津・力弥一宮・重太郎一文・喜多八一辰・弥五郎一播路・おかる一鑿・仲居一相寿・同一おぼこ・亭主一文字栄・伴内一文字・九太夫一相生・平右衛門一古鞆＝猿糸、清六）。 ※素浄瑠璃。 ※20日と23日の役割は『浄瑠璃雑誌』第295号に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1930	昭和5	11/1~ 12/1	四ツ橋文楽座	仮名手本忠臣蔵 鶴ヶ岡兜改めより 一力茶屋の段迄	鶴ヶ岡兜改めより恋歌の段迄（足利直義一町・塩谷判官一つばめ・顔世御前一南部・桃井若狭之助一浪花・高野師直一和泉=叶/団六）、桃井邸の段（口 長子/陸路=寛市/友作/友二、切 文字=勝平）、下馬先進物の段（島=友造/友平）、殿中刃傷の段（切 駒=重造）、裏門の段（相生=歌助/芳之助/友之助）、扇ヶ谷の段（切 津=友次郎）、霞ヶ関の段（綾=友若/猿太郎）、山崎街道の段（源路/文=綱右衛門/友衛門）、二ツ玉の段（つばめ=勝市・胡弓 友太郎/小綱）、身売の段（南部=吉弥）、勘平切腹の段（切 古鞠=清六）、祇園一力の段（由良之助一土佐・力弥一さの・重太郎一長尾・喜多八一富・弥五郎一文・仲居一千駒・おかる一鑿・仲居一亀久・仲居一播路・亭主一辰・九太夫一貴鳳・伴内一鏡・平右衛門一大隅=新左衛門/道八、吉兵衛）。 ※千穂楽は『文楽興行記録昭和篇』に拠る。 ※豊竹古鞠太夫11月16~24日休演のため、竹本土佐太夫が代演（『浄瑠璃雑誌』第297号に拠る）。	高野師直（小兵吉）、桃井若狭之助（紋十郎）、塩谷判官（玉松）、顔世御前（文五郎）、加古川本蔵（玉治郎）、妻戸無瀬（扇太郎）、娘小浪（文之助）、大星力弥（紋太郎）、鷺坂伴内（紋十郎）、早野勘平（栄三）、腰元おかる（文五郎）、斧九太夫（門造）、大星由良之助（栄三）、百姓与市兵衛（門造）、斧定九郎（玉幸）、百姓与市兵衛女房（玉七）、寺岡平右衛門（玉松）。
△ 1930	昭和5	11/25~ 26	京都華頂会館	忠 臣 蔵	身売の段。 ※京都仏教護国団主催。 ※「大阪朝日新聞」京都版（11月25日）に拠る。	（不明）
△ 1930	昭和5	12/7	文具倶楽部	（仮名手本忠臣蔵）	勘平住家（春次=竹弥）。 ※第8回近松会。 ※『浄瑠璃雑誌』第298号に拠る。	
1931	昭和6	1/1~25	四ツ橋文楽座	仮名手本忠臣蔵 道行旅路の嫁入より 山科閑居まで	道行旅路の嫁入（鑿・和泉・鏡・浪花/文・千駒/亀久/播路・駒尾/照/小松/隅寿/おぼこ=新左衛門・猿糸・歌助・寛市・叶太郎/友作・市之助/仁平/新之助/新一郎/広二/歌作/新八）、山科閑居の段（中 貴鳳=八助・広太郎、切 土佐=吉兵衛）。 ※千穂楽は『文楽興行記録昭和篇』に拠る。	加古川本蔵（玉松）、妻戸無瀬（文五郎）、娘小浪（紋十郎）、大星力弥（紋太郎）、大星由良之助（栄三）、妻お石（小兵吉）。
△ 1931	昭和6	4/3	広島豊屋町演舞場 〈竹本座〉	（仮名手本忠臣蔵）	四（春治）。	
		4/10	博多柳座 〈竹本座〉		四（春次）。 ※竹本角太夫一行巡業（4月3~12日、広島・博多）の内。 ※『浄瑠璃雑誌』第301号に拠る。	
△ 1931	昭和6	7/7	船場ビルディング	（仮名手本忠臣蔵）	殿中（駒司=吉季）。勘平住家（駒尾=友太郎）。 ※浄曲研究会。 ※『浄瑠璃雑誌』第303号に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1931	昭和6	7/24~26	東京 明治座	仮名手本忠 臣蔵	鶴ヶ岡兜改の段（陸路・隅栄・津磨・佐久・宮＝市之助／広二）、殿 中刃傷の段（相生＝芳之助）、裏門の段（文＝友衛門）、扇ヶ谷の段 （切 大隅＝道八）、霞ヶ関の段（隅栄＝道造）、山崎街道の段（陸 路＝福太郎／吉男）、二ツ玉の段（つばめ＝広助・胡弓 吉貞／綱 治）、身売の段（南部＝吉弥）、勘平切腹の段（切 土佐＝吉兵 衛）、祇園一力の段（由良之助＝津・力弥＝津磨／宮・重太郎＝南 部・喜多八＝文・弥五郎＝陸路・仲居＝佐久・おかる＝土佐・仲居＝ 相寿／越名・仲居＝土佐子／津和・亭主＝隅栄・伴内＝鏡・九太夫＝ 相生・平右衛門＝大隅＝吉兵衛／綱造）、道行旅路の嫁入（録・つば め・文・隅栄・佐久／越名＝新左衛門・広助・芳之助・吉左・吉貞・ 道造／綱治）、山科閑居の段（中 つばめ＝広助、切 津＝綱造）、両 国橋引揚の段（陸路・隅栄・津磨・宮・相寿＝友衛門／吉左）。	高野師直（門造）、桃井若狭之助（政亀）、 塩谷判官（玉松）、顔世御前（扇太郎）、加 古川本蔵（玉次郎）、妻戸奈（ママ）瀬（文 五郎）、娘小浪（紋十郎）、大星力弥（紋太 郎）、鷺坂伴内（紋十郎）、早野勘平（栄 三）、腰元おかる・娘おかる（文五郎）、斧 九太夫（玉幸）、大星由良之助（栄三）、百 姓与市兵衛（門造）、斧定九郎（玉幸）、与 市兵衛女房（玉七）、寺岡平右衛門（玉 松）、妻お石（小兵吉）。
1931	昭和6	12/11~ 13	東京 明治座	仮名手本忠 臣蔵	鶴ヶ岡兜改の段（辰・播路・叶美・津磨／佐久・宮／越名＝団伊 三）、桃井邸の段（奥 相生＝清二郎）、殿中刃傷の段（切 録＝新左 衛門）、裏門の段（南部＝吉弥）、扇ヶ谷の段（切 古靱＝清六）、 霞ヶ関の段（播路＝広二／清若）、山崎街道の段（文＝綱右衛門）、 二ツ玉の段（鏡＝広助・胡弓 綱治）、身売の段（つばめ＝仙糸）、 勘平切腹の段（切 津＝綱造）、祇園一力の段（由良之助＝津・力弥 ＝つばめ・九太夫＝鏡・重太郎＝鏡・弥五郎＝文・喜多八＝南部・お かる＝土佐・亭主＝辰／播路・仲居＝駒尾・仲居＝津磨／宮・仲居＝ 好／土佐子・伴内＝相生・平右衛門＝古靱＝吉兵衛、綱造）。	高師直（門造）、桃井若狭之助（兜改・刃傷 ＝光之助、桃井邸＝文之助）、塩谷判官（玉 松）、顔世御前（文五郎）、加古川本蔵（玉 次郎）、大星力弥（紋太郎）、鷺坂伴内（紋 十郎）、早野勘平（栄三）、腰元おかる・娘 おかる（文五郎）、斧九太夫（玉幸）、大星 由良之助（栄三）、百姓与市兵衛（門造）、 斧定九郎（玉幸）、与市兵衛女房（玉七）、 寺岡平右衛門（玉松）。
△ 1931	昭和6	12/26	日本橋倶楽部 〈竹本座〉	仮名手本忠 臣蔵	大序の段（師直＝仙松・判官＝新三郎・若狭之助＝竜市・直義＝富太 郎・顔世＝新吉＝吉子）、三段目（滝＝仙松）、同 裏門（勘平＝竜 市・おかる＝吉子・伴内＝富平＝竜二郎）、四段目（栄＝富平）、二 ツ玉（浪花津＝新吉）、身売（鷹＝団弥）、勘腹（前 生島＝仙松、 奥 薫＝新三郎）、七段目 一力茶屋場（由良之助＝新造・九太夫＝新 三郎・重太郎＝吉子・喜多八＝団弥・亭主＝栄・おかる＝富・仲居＝ 多ぜい・力弥＝竜二郎・弥五郎＝鷹・伴内＝新吉・平右衛門＝竜市＝ 前 仙松、奥 富平）。 ※満州事変派遣将士慰問金募集演芸会。 ※『浄瑠璃雑誌』第307・308号に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1932	昭和7	4/1~29	四ツ橋文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序より 山科閑居まで	大序 兜改の段（直義公一源路・塩谷判官一町・若狭之助一長尾・顔世御前一文・高野師直一文字=芳之助）、下馬先進物の段（鏡=友之助/友平）、殿中刃傷の段（切 大隅=道八）、裏門の段（一日替 町=綱右衛門/吉左//源路=友衛門/寛市）、扇ヶ谷の段（切 古靱=清六）、霞ヶ関の段（綾=広太郎）、二ツ玉の段（文字=勝平・胡弓 福太郎/友駒/勝芳）、身売の段（駒=重造）、勘平切腹の段（切 土佐=吉兵衛）、祇園一力の段（由良之助一日替 相生/つばめ・重太郎一富・喜太八一文・弥五郎一辰・仲居一隅栄・おかる一日替 南部/小春・仲居一文字栄・亭主一播路・九太夫一貴鳳・伴内一陸路・平右衛門一日替 相生/つばめ=吉弥/団六）、道行旅路の嫁入（綴・呂・南部・綾・一日替 千駒/喜久・小松/津磨/文字栄/佐久/宮=新左衛門・叶・団六・八助・叶太郎/友作/友二・喜代之助/団伊三/吉男）、山科閑居の段（中 長尾=八助、切 津=綱造）。 ※千種楽は『文楽興行記録昭和篇』に拠る。 ※4月10日、「祇園一力の段」NHKラジオ舞台中継（『文楽興行記録昭和篇』）。	高野師直（門造）、桃井若狭之助（扇太郎）、塩谷判官（玉松）、顔世御前（紋十郎）、加古川本蔵（玉次郎）、妻戸無瀬（文五郎）、娘小浪（紋十郎）、大星力弥（紋太郎）、鷺坂伴内（扇太郎）、早野勘平（栄三）、腰元おかる・娘おかる（文五郎）、斧九太夫（玉七）、大星由良之助（栄三）、百姓与市兵衛（門造）、斧定九郎（玉幸）、百姓与市兵衛女房（玉七）、平右衛門（玉松）、妻お石（政亀）。
1932	昭和7	4/17	四ツ橋文楽座	仮名手本忠臣蔵	勘平切腹の段（切 相生=芳之助）。 ※特別マチネー。	早野勘平（栄三）、与市兵衛女房（玉七）。
△	1932	昭和7	5/1	四ツ橋文楽座	（仮名手本忠臣蔵） 勘平切腹の段（古靱=清六）。 ※NHK舞台中継。 ※四ツ橋文楽座筋書（昭和7年7月）に拠る。	
△	1932	昭和7	5/5 5/7	名古屋 御園座	忠 臣 蔵 （仮名手本忠臣蔵） 裏門（さの=新太郎）。 勘平住家（陸路=団二郎）。 ※竹本綴太夫一行巡業（5月4~14日、東海）の内。文楽座の若手による素浄瑠璃。 ※「新愛知」（5月1・3~8日）、『浄瑠璃雑誌』第312号、『御園座七十年史』に拠る。	
1932	昭和7	5/16~18	東京 東京劇場	仮名手本忠臣蔵	勘平切腹の段（中 文=友造、切 津=綱造）。	早野勘平（栄三）、娘おかる（紋十郎）、与市兵衛女房（玉七）。
△	1932	昭和7	6/11	博多 大博劇場	仮名手本忠臣蔵 大序 兜改めの段（直義公一陸路・顔世一文・若狭之助一播路・判官一小春・師直一鏡=清二郎）、殿中刃傷の段（呂=叶）、裏門の段（毎日替 南部=吉弥//小春=団六）、扇ヶ谷の段（切 大隅=道八）、二ツ玉の段（鏡=友衛門）、身売の段（綴=新左衛門）、勘平切腹の段（切 古靱=清六）、祇園一力の段（由良之助一相生/つばめ・重太郎一陸路・喜多八一津の子・弥五郎一隅栄・仲居一長・おかる一南部/小春・仲居一越名・亭主一小松・九太夫一淀路・伴内一播路・平右衛門一相生/つばめ）、道行（戸無瀬一綴・小浪一呂・ツレ播路・叶美・英=新左衛門・ツレ 清二郎・団二郎・新太郎・友花・綱治）、山科閑居の段（中 文=友造、切 津=綱造）。 ※大阪文楽座巡業（6月4~15日、山陽・九州）の内。6月6日広島・寿座、6月13日熊本・旭座、6月15日若松・旭座で同公演あり。 ※『浄瑠璃雑誌』第313号に拠る。	師直（門造）、若狭之助（光之助）、判官（玉松）、顔世（紋十郎）、本蔵（玉治郎）、力弥（紋太郎）、伴内（扇太郎）、勘平（栄三）、おかる（文五郎）、九太夫（玉七）、由良之助（栄三）、与一兵衛（門造）、定九郎（玉幸）、母親（玉七）、平右衛門（玉松）、お石（政亀）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1932	昭和7	6/19	北陽演舞場	(仮名手本忠臣蔵)	勘平切腹(駒尾=広二)。 ※花菱会。 ※『文楽興行記録昭和篇』では北新地演舞場での公演とする。 ※『浄瑠璃雑誌』第312・313号に拠る。	
1932	昭和7	6/27~28	京都南座	仮名手本忠臣蔵 大序より九段目まで	大序 兜改めの段(直義公-陸路・顔世御前-文・若狭之助-播路・塩谷判官-小春・高野師直-鏡=団伊三)、殿中刃傷の段(鳥改め呂=叶)、裏門の段(小春=団六)、扇ヶ谷の段(切 大隅=道八)、二ツ玉の段(鏡=友衛門)、身売の段(越名改め 南部=吉弥)、勘平切腹の段(切 古靱=清六)、祇園一力の段(由良之助-相生/つばめ・重太郎-陸路・喜太八-津の子・弥五郎-隅栄・仲居一長・おかる-越名改め 南部/小春・仲居-越名・亭主-小松・九太夫-淀路・伴内-播路・平右衛門-相生/つばめ=吉弥、団六)、道行旅路の嫁入(録・鳥改め 呂・播路・叶美・英=新左衛門・清二郎・団二郎・新太郎・友花・綱治)、山科閑居の段(中文=友造、切 津=綱造)。	高野師直(門造)、桃井若狭之助(光之助)、塩谷判官(玉松)、顔世御前(紋十郎)、加古川本蔵(玉次郎)、妻戸無瀬(文五郎)、娘小浪(紋十郎)、大星力弥(紋太郎)、鷺坂伴内(扇太郎)、早野勘平(栄三)、こし元おかる・娘おかる・おかる(文五郎)、斧九太夫(玉七)、大星由良之助(栄三)、百姓与市兵衛(門造)、斧定九郎(玉幸)、与市兵衛女房(玉七)、寺岡平右衛門(玉松)、妻お石(政亀)。
1932	昭和7	10/24 10/26 10/28	東京 東京劇場	仮名手本忠臣蔵	勘平切腹の段(相生=芳之助)。 裏門の段(辰=道造)。 七段目 茶屋場の段(総掛合 由良之助-古靱・力弥-宮・重太郎-辰・弥五郎-佐久・喜多八-土佐見・仲居-松・おかる-土佐・仲居-三重・仲居-相次・亭主-隅若・伴内-文・九太夫-相生・平右衛門-大隅=吉兵衛)。 ※大阪文楽座義太夫一座。素浄瑠璃。	
△ 1932	昭和7	12/3	広島 寿座	仮名手本忠臣蔵	祇園一力の段(由良之助-相生・おかる-小春・平右衛門-つばめ=清二郎)。 ※大阪文楽座若手連巡業(12月1~13日、山陽・九州)の内。12月13日長崎・みなみ座(役割不明)で同公演あり。 ※「中国新聞」(11月27日の記事、11月23・30日の広告)、『浄瑠璃雑誌』第318号、「長崎日日新聞」(12月6~13日)に拠る。	
△ 1932	昭和7	12/13 12/14	四ツ橋文楽座	忠 臣 蔵	七ツ目(由良之助-団六・力弥-津の子・矢間-駒尾・千崎-文字栄・喜多八-駒司・亭主-歌助・仲居-伴太郎・お軽-綱造・仲居-綱延)。 七ツ目(由良之助-勝平・力弥-津の子・矢間-津咲・千崎-駒司・喜多八-文字栄・亭主-友造・仲居-綱延・お軽-広助・仲居-友太郎・伴内-歌助・九太夫-団六・平右衛門-綱造=前 広二、後 綱治)。 ※英彦山国立公園運動寄附公演。 ※『浄瑠璃雑誌』第319号に拠る。	
△ 1932	昭和7	12/15	京都 京都市公会堂	忠 臣 蔵	殿中刃傷から勘平切腹まで。 ※「大阪朝日新聞」京都版(12月12日)に拠る。	
△ 1932	昭和7	12/19	今治 和泉座	(仮名手本忠臣蔵)	六(津磨=綱延)。 ※竹本津太夫一行巡業(12月16~24日、四国)の内。12月23日高松・大衆座で同公演あり。 ※「海南新聞」(12月16日)、「香川新報」(12月20日)、『浄瑠璃雑誌』第319号に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1933	昭和8	1/1~22	四ツ橋文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序より 道行迄	大序 兜改めの段（足利直義公一町・高野師直一鏡・塩谷判官一南部・桃井若狭之助一小春・顔世御前一呂／つばめ＝叶／仙糸）、殿中刃傷の段（切 駒＝団六）、裏門の段（相生＝友衛門／清二郎／呂＝叶／つばめ＝仙糸）、扇ヶ谷の段（切 古靱＝友次郎）、山崎街道の段（富＝友平／寛市／文＝友二／吉左）、二ツ玉の段（大隅＝道八・胡弓 福太郎／友駒／綱治）、身売の段（相生＝芳之助／綱右衛門／呂＝叶／つばめ＝仙糸）、勤平切腹の段（切 津＝綱造）、一力茶屋の段（由良之助一津・力弥一さの／津の子・重太郎一文字・喜太八一和泉・弥五郎一相生・仲居一綾・おかる一土佐・仲居一浪花・仲居一播路・亭主一長尾／貴鳳・伴内一大隅・九太夫一綴・平右衛門一古靱＝吉兵衛、綱造）、道行旅路の嫁入（綴・南部・小春・源路・辰／干駒／長子／陸路・駒尾／隅栄／小松／叶美／駒司・津磨／文字栄／佐久／宮／好／越名／土佐子／津咲＝新左衛門・吉弥・広助・歌助／勝平・広太郎／友之助／八助／友造・猿二郎／友若／叶太郎／友作／喜代之助・団伊三／団二郎／新太郎／広二／勝芳・仙三郎／吉季／猿若／清茂／市松／猿一郎／綱延／小重／広夫）。 ※千種楽は『文楽興行記録昭和篇』に拠る。 ※1月3日「一力茶屋の段」NHKラジオ舞台中継。	高野師直（門造）、桃井若狭之助（光之助）、塩谷判官（玉松）、顔世御前（扇太郎）、加古川本蔵（玉次郎）、妻戸無瀬（文五郎）、娘小浪（紋十郎）、大星力弥（紋太郎）、鷺坂伴内（紋十郎）、早野勤平（栄三）、腰元おかる・娘おかる・おかる（文五郎）、斧九太夫（門造）、大星由良之助（栄三）、百姓与市兵衛（小兵吉）、斧定九郎（玉幸）、与市兵衛女房（玉七）、平右衛門（玉松）。
△	昭和8	2/2	松屋町鳳来館 〈竹本座〉	（仮名手本忠臣蔵）	勤平住家（滝）。	
		2/19	鶴橋劇場 〈竹本座〉		勤平住家（鷹）。 ※竹本座巡業（2月1～19日、大坂）の内。 ※『浄瑠璃雑誌』第320号に拠る。	
△	昭和8	2/20	松屋町実業会館	忠 臣 蔵	殿中（佐久＝仙三郎）。 ※若手会。桐竹門造指導乙女人形入。 ※『浄瑠璃雑誌』第321号に拠る。	
△	昭和8	6/26	高知 堀 詰 座	忠 臣 蔵	殿中（佐久＝勝芳）。 ※竹本土佐太夫一行巡業（6月22～26日、高知）の内。 ※『浄瑠璃雑誌』第325号に拠る。	
△	昭和8	7/4~6	東京 東京劇場	仮名手本忠臣蔵	道行旅路の嫁入（小浪一小春・戸無瀬一鏡・辰・叶美・越名＝重造・吉左・団二郎・新太郎・市松）。	母戸無瀬（扇太郎）、娘小浪（紋十郎）。
△	昭和8	7/14~	地方公演 （九州）	（仮名手本忠臣蔵）	殿中（津の子＝綱治）。一力茶屋（掛合 由良之助一長尾・力弥一津の子・重太郎一津磨・弥五郎一津喜・おかる一文・亭主一町・仲居一加津栄・喜多八一町子・伴内一播路・平右衛門一貴鳳＝歌助）。 ※竹本津太夫一行巡業。 ※『浄瑠璃雑誌』第325号に拠る。	
△	昭和8	8/19	紀州田辺 常 磐 座	忠 臣 蔵	三段目（津の子＝綱治）。 ※「紀伊新報」（8月12日）、『浄瑠璃雑誌』第326号に拠る。	
△	昭和8	11/16	中央公会堂	忠 臣 蔵	道行旅路の嫁入（南部・源路・他＝吉弥・重造・八造・喜代之助・他）。 ※赤十字デー。 ※『浄瑠璃雑誌』第328号に拠る。	（文五郎）、（紋十郎）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1933	昭和8	11/24	京都 岡崎公会堂	(仮名手本 忠臣蔵)	四(西喜=猿二郎)。 ※文楽座人形浄瑠璃会。桐竹門造人形入。 ※「大阪朝日新聞」京都版(11月9日)、「京都日出新聞」(11月23 ~24日)、『浄瑠璃雑誌』第328号に拠る。	
△ 1933	昭和8	12/5~14	ラジオ放送	仮名手本忠 臣蔵	【6日】二段目(角=広助)。 【8日】四段目(錦=竜助)。 【9日】五段目(都=桑造)。 【11日】八段目 道行旅路の嫁入(小浪=津賀・戸無瀬=米・ツレ 朝 見・巴=吉作・新次郎・桑造・新造・松四郎)。 ※仮名手本忠臣蔵の舞台・浄瑠璃を通して一段ずつラジオ放送。 ※『浄瑠璃雑誌』第328号に拠る。	
1933	昭和8	12/16~ 17	東京 歌舞伎座	仮名手本忠 臣蔵	鶴ヶ岡兜改めの段(直義公=小春・判官=一呂・顔世御前=南部・若狭 之助=相生/つばめ・師直=和泉=重造)、殿中刃傷の段(切 文字 =勝平)、裏門の段(文=友衛門)、扇ヶ谷の段(切 古鞆=清 六)、霞ヶ関の段(隅栄=勝芳)、二ツ玉の段(鏝=新左衛門・胡弓 綱延)、身売の段(駒=団六)、勘平切腹の段(切 津=綱造)、祇 園一力の段(由良之助=和泉・重太郎=辰・喜太八=叶美・弥五郎= 津磨/常子・仲居=好・おかる=南部・仲居=駒若・仲居=越名・亭 主=宮/小松・伴内=播路・九太夫=長尾・平右衛門=相生/つばめ =吉弥)。	師直(門造)、若狭之助(扇太郎)、判官 (玉松)、顔世(文五郎)、本蔵(玉次 郎)、力弥(紋太郎)、伴内(紋十郎)、勘 平(栄三)、おかる(文五郎)、九太夫(門 造)、大星(栄三)、与市兵衛(小兵吉)、 定九郎(玉幸)、女房(玉七)、平右衛門 (玉松)。
△ 1933	昭和8	12/18	大手前国民会 館	忠 臣 蔵	三(津喜=猿若)。一力茶屋場の段(由良之助=一町・九太夫=源路・ 重太郎=千駒・喜多八=津喜・亭主=広・おかる=角・仲居=大勢・ 力弥=猿若・弥五郎=駒尾・伴内=竹・平右衛門=貴鳳・他=前 歌 助、後 広助)。 ※第1回花菱会。 ※『浄瑠璃雑誌』第329号に拠る。	
△ 1934	昭和9	2/24	茨木町 日 吉 座	忠 臣 蔵	四(毛受輝頭=吉季)。六 勘腹(駒尾=友駒)。 ※豊竹千駒太夫亡父津田一声並びに幼時の師匠故土口軒の追善浄瑠璃 会。桐竹門造指導人形入。 ※『浄瑠璃雑誌』第330・331号に拠る。	
△ 1934	昭和9	3/24 3/25	長浜 日比劇場	(仮名手本 忠臣蔵)	六(駒尾=友十郎)。 殿中(叶美=新太郎)。 ※まこと改め竹本松栄太夫披露会。桐竹門造指導少女人形入。 ※『浄瑠璃雑誌』第332号に拠る。	
△ 1934	昭和9	3/29	福井 加賀屋座	(仮名手本 忠臣蔵)	勘平切腹(駒尾=新太郎)。 ※桐竹門造指導少女人形入。 ※『浄瑠璃雑誌』第332号に拠る。	
△ 1934	昭和9	4/23	北摂止一村 寺院	忠 臣 蔵	六段目(駒尾)。 ※竹本陸路太夫一行巡業(4月23~27日・5月15日、北摂)の内。陸路 太夫亡父米田亀蔵追善のため故人の縁故地方を巡業。4月26日北摂東 能勢村・余野扇家、4月27日北摂高山・西野儀三郎方、5月15日北摂下 音羽・青年会館で同公演あり。 ※『浄瑠璃雑誌』第334号に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割	
△ 1934	昭和9	5/28	厚狭町 厚狭クラブ	(仮名手本 忠臣蔵)	六(生野=勝之介)。 ※竹本陸路太夫一行巡業(5月23~30日、山口)の内。5月29日小野田町・須恵座で同公演あり。 ※『浄瑠璃雑誌』第334号に拠る。		
△ 1934	昭和9	6/14	丹後峯山町 震災記念館	仮名手本忠 臣蔵	六ツ目(生野)。 ※陸路太夫家内の亡父田村英追善浄瑠璃会。 ※『浄瑠璃雑誌』第334号に拠る。		
△ 1934	昭和9	7/25~ 8/15	地方公演 (満州)	(仮名手本 忠臣蔵)	六(文喜=富平)。殿中(文喜=富平)。 ※竹本叶太夫一行巡業。7月26日大連・検番ホール(六)、7月27日大連・検番ホール(殿中)、8月4日奉天・演芸館(六、三味線不明)、8月6日撫順・公会堂(殿中、三味線不明)で同公演あり。 ※『浄瑠璃雑誌』第335号に拠る。		
△ 1934	昭和9	9/14	東京 木村屋別館	(仮名手本 忠臣蔵)	三(益=好造)。 ※鶴沢司好発起勉強会。 ※『浄瑠璃雑誌』第335号に拠る。		
△ 1934	昭和9	9/15	堀江演舞場本 館	(仮名手本 忠臣蔵)	六(駒司=広二)。 ※花菱会。 ※『浄瑠璃雑誌』第335号に拠る。		
△ 1934	昭和9	10/26	京城 公会堂	忠 臣 蔵	六(文喜=富平)。 ※『浄瑠璃雑誌』第336号に拠る。		
	1934	昭和9	11/1~	四ツ橋文楽座	仮名手本忠 臣蔵 大序より 光明寺焼香 の段まで	大序 鶴ヶ岡兜改めの段(直義公-淀路・顔世御前-竹・塩谷判官-隅栄/小松・桃井若狭之助-叶美/宮・高野師直-千駒=八造/団二郎)、桃井邸の段(源路=寛市/陸路=喜代之助、相生=広助/呂=叶/つばめ=仙糸)、下馬先進物の段(和泉=清二郎/鏡=吉左)、殿中刃傷の段(鑢=新左衛門)、裏門の段(相生=広助/呂=叶/つばめ=仙糸)、花籠の段(相生=広助/呂=叶/つばめ=仙糸)、判官切腹の段(大隅=道八)、霞ヶ関の段(辰=八助)、山崎街道の段(富=友平/むら=猿二郎)、二ツ玉の段(文字=勝平・胡弓 綱延)、身売の段(駒=団六)、勘平切腹の段(古鞆=清六)、祇園一力の段(由良之助-津・力弥-さの/津の子・重太郎-大隅・喜多八-文字・弥五郎-呂・仲居-むら・おかる-土佐・仲居-陸路・仲居-播路・亭主-小春・伴内-相生・九太夫-鑢・平右衛門-古鞆=友次郎)、道行旅路の嫁入(妻戸無瀬-つばめ・娘小浪-小春・ツレ 源路・播路・駒尾・常子/土佐子/駒若/駒司・町=吉弥・重造・友衛門・叶太郎・友作・団伊三/広二・友花/吉季・友三郎/綱治/勝之介)、山科閑居の段(長尾=友造、土佐=吉兵衛、津=綱造)、光明寺焼香の段(由良之助-和泉・重太郎-鏡・平右衛門-貴鳳/辰・諸士-津磨・諸士-越名=芳之助)。	高野師直(門造)、桃井若狭之助(扇太郎)、塩谷判官(玉松)、顔世御前(政亀)、加古川本蔵(玉次郎)、妻戸無瀬(文五郎)、娘小浪(紋十郎)、大星力弥(紋太郎)、鷺坂伴内(紋十郎)、早野勘平(栄三)、腰元おかる・娘おかる(文五郎)、斧九太夫(玉幸)、大星由良之助(栄三)、百姓与市兵衛(多三郎)、斧定九郎(玉市)、与市兵衛女房(小兵吉)、寺岡平右衛門(玉松)、妻お石(政亀)。
△ 1934	昭和9	11/23 11/24	和歌山 紀 国 座	(仮名手本 忠臣蔵)	三(叶美=仙三郎)。 道行(掛合)。 ※桐竹門造指導乙女人形入。 ※『浄瑠璃雑誌』第337号に拠る。		

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割	
1934	昭和9	12/21~23	東京 歌舞伎座	仮名手本忠臣蔵	祇園一力茶屋の段（由良之助一津・力弥一津の子・重太郎一大隅・喜太八一つばめ・弥五郎一小春・仲居一竹・おかる一土佐・仲居一駒尾・仲居一隅栄・亭主一辰／播路・伴内一相生・九太夫一鑿・平右衛門一古靱＝吉兵衛、綱造）、道行旅路の嫁入（娘小浪一鑿・妻戸無瀬一つばめ・辰・竹・小松・叶美・土佐子＝新左衛門・重造・吉左・新太郎・綱治・市松・猿一郎）、山科閑居の段（中 相生＝広助、土佐＝吉兵衛、津＝綱造）。	加古川本蔵（玉次郎）、妻戸無瀬（文五郎）、娘小浪（紋十郎）、大星力弥（紋太郎）、伴内（玉幸）、おかる（文五郎）、九太夫（門造）、大星由良之助（栄三）、平右衛門（玉松）、妻お石（政亀）。	
1935	昭和10	4/6~15	四ツ橋文楽座	仮名手本忠臣蔵	【6~9日】道行旅路の嫁入（小浪一むら・戸無瀬一源路・ツレ 南部・叶美・土佐子・松島・相栄＝清二郎・団伊三・猿糸・八造・広二）、山科閑居の段（前 小春＝寛市、後 つばめ＝芳之助）。 【10~12日】道行旅路の嫁入（小浪一竹・戸無瀬一土佐見・ツレ 小春・常子・相瀬・土佐栄＝喜代之助・市之助・団二郎・吉季・新太郎）、山科閑居の段（前 源路＝友平、後 呂＝友衛門）。 【13~15日】道行旅路の嫁入（小浪一陸路・戸無瀬一播路・ツレ 源路・隅栄・津磨・越名・隅若＝吉左・勝芳・友衛門・仙三郎・友三郎）、山科閑居の段（前 南部＝重造、後 相生＝団六）。 ※若手連特別興行。	加古川本蔵（玉次郎）、妻戸無瀬（文五郎）、娘小浪（紋十郎）、大星力弥（紋太郎）、大星由良之助（栄三）、妻お石（小兵吉）。	
△	1935	昭和10	5/24	福井 加賀屋座	忠 臣 蔵 大序より 七ツ目迄	鶴ヶ岡兜改め（直義一吉・師直一駒尾・桃井一徳・判官・顔世一駒司＝勝之介）、殿中（駒司＝徳若）、裏門（吉＝勝之介）、扇ヶ谷（陸路＝徳若）、二ツ玉（駒尾＝勝之介）、身壳（貴鳳＝徳若）、勘腹（長尾＝吉房）、一力茶屋場（由良之助一貴鳳・おかる一陸路・平右衛門一長尾・他総動員＝吉房）。 ※竹本陸路太夫一行巡業（5月24日～、北陸）の内。 ※『浄瑠璃雑誌』第340号に拠る。	
1935	昭和10	7/12~14	東京 明 治 座	仮名手本忠臣蔵	祇園一力の段（由良之助一和泉・重太郎一隅栄・喜太八一津の子・弥五郎一叶美・仲居一相瀬・おかる一南部・仲居一越名・亭主一小松・伴内一辰・九太夫一播路・平右衛門一つばめ＝吉弥）、道行旅路嫁入（妻戸無瀬一呂・娘小浪一小春・ツレ 辰・津磨・土佐子・越名＝叶・芳之助・猿太郎改め 猿糸・友衛門・団二郎・綱延）。	妻戸無瀬（扇太郎）、娘小浪（紋十郎）、鷺坂伴内（文作）、おかる（紋十郎）、斧九太夫（小兵吉）、大星由良之助（栄三）、寺岡平右衛門（玉幸）。	
1935	昭和10	7/24~25	満州 大連劇場	仮名手本忠臣蔵	道行旅路の嫁入（小春・源路・辰・播路・津の子＝芳之助・友衛門・団二郎・綱治・友三郎）。	妻戸無瀬（扇太郎）、娘小浪（光之助）。	
△	1935	昭和10	浪 花 座	（仮名手本忠臣蔵）	身壳（千駒＝友駒）。 六（富＝喜代之助）。 一力（掛合＝友治郎）。 ※文楽若手浄瑠璃会納涼浄瑠璃。 ※「大阪毎日新聞」（8月21日の広告）、『浄瑠璃雑誌』第342号に拠る。		
1935	昭和10	9/23~24	京 都 南 座	仮名手本忠臣蔵	一力茶屋茶屋の段（由良之助一文字・力弥一常子・重太郎一南部・喜太八一源路・弥五郎一辰・おかる一小春・仲居一越名・仲居一相瀬・亭主一隅栄・九太夫一呂・伴内一相生・平右衛門一つばめ＝勝平、重造）。	大星力弥（紋太郎）、鷺坂伴内（紋十郎）、傾城おかる（文五郎）、斧九太夫（門造）、大星由良之助（栄三）、寺岡平右衛門（玉蔵）。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1935	昭和10	11/1~20	四ツ橋文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序鶴ヶ岡兜改より道行の段まで	大序 鶴ヶ岡兜改より恋歌の段（足利直義公－相生・高野師直－呂・顔世御前－小春・桃井若狭之助－つばめ・塩谷判官－和泉＝重造／猿糸）、桃井邸の段（口 竹＝団二郎／／播路＝団伊三／／辰＝八造、奥 和泉＝団六／弥三郎）、大下馬先の段（口 陸路／むら＝友衛門／寛市、奥 源路／長尾＝友造／友平）、殿中刃傷の段（切 文字＝勝平）、裏門の段（南部＝吉弥）、扇ヶ谷の段（切 津＝綱造）、霞ヶ関の段（貴鳳＝叶太郎）、山崎街道の段（口 千駒＝喜代之助／／富＝吉左）、二ツ玉の段（奥 呂＝叶・胡弓 仙三郎／勝之助）、身売の段（中 駒＝清二郎）、早野勘平住家の段（切 古靱＝重造／猿糸）、祇園一力の段（由良之助－大隅・力弥－さの／津の子・重太郎－和泉・喜多八－源路・弥五郎－陸路・仲居－叶美・おかる－南部／小春・仲居－津磨・仲居－常子・亭主－隅栄・伴内－呂・九太夫－文字・平右衛門－相生／つばめ＝友次郎、道八）、道行旅路の嫁入（鑢・相生／つばめ・南部／小春・小松／叶美・津磨／常子＝新左衛門・仙糸／広助・団六／弥三郎・叶太郎／友作・鶴太郎／友駒／市之助／新太郎／広二・勝芳／吉季／綱治／綱延／一郎右衛門）。 ※竹田出雲掾百八十年忌記念。 ※千種楽は『浄瑠璃雑誌』第343号に拠る。	高野師直（小兵吉）、桃井若狭之助（扇太郎）、塩谷判官（玉蔵）、顔世御前（政亀）、加古川本蔵（玉次郎）、妻戸無瀬（文五郎）、娘小浪（紋十郎）、大星力弥（紋太郎）、鷺坂伴内（紋十郎）、早野勘平（栄三）、こし元おかる・娘おかる・おかる（文五郎）、斧九太夫（門造）、大星由良之助（栄三）、百姓与市兵衛（玉七）、斧定九郎（玉幸）、与市兵衛女房（玉次郎）、寺岡平右衛門（玉蔵）。
△	1935	昭和10	12/5~6	名古屋御園座	仮名手本忠臣蔵 大序（辰）、刃傷（つばめ、相生）、裏門（辰）、判官切腹（古靱）、城明渡し（隅栄）、山崎街道（小松、津の子）、二ツ玉（相生、つばめ）、身売り（呂）、勘平腹切り（鑢）、祇園一力（大隅・小春・呂・つばめ・相生）、道行（南部・小春）、山科閑居（津）、引揚げ（掛合）。 ※『御園座七十年史』、「新愛知」（11月21・24・26~30日の記事、11月25・28日の広告）に拠る。	判官（玉蔵）、顔世（政亀）、本蔵（玉次郎）、戸無瀬（文五郎）、小浪（紋十郎）、伴内（紋十郎）、勘平（栄三）、おかる（文五郎）、九太夫（玉七）、由良之助（栄三）、与市兵衛（玉七）、おかや（玉次郎）、平右衛門（玉蔵）、お石（政亀）。
△	1935	昭和10	12/8	豊橋東雲座	仮名手本忠臣蔵 全通し 大序 兜改め、殿中刃傷の段、裏門の段、扇ヶ谷の段、霞ヶ関の段、山崎街道の段、二ツ玉の段、身売の段、勘平腹切りの段、一力茶屋、道行、山科閑居の段、両国引揚げの段。 ※「豊橋日日新聞」（12月2~7日の記事、12月6日の広告）に拠る。	（不明）
	1936	昭和11	1/1~26	中 座	仮名手本忠臣蔵 旅路の嫁入（呂・小春・辰・隅栄・叶美＝友衛門・団二郎・清二郎・道造・友三郎・綱延）。 ※歌舞伎公演。文楽座若手連中。	
	1936	昭和11	5/1~15	京都南 座	仮名手本忠臣蔵 旅路の嫁入（呂・源路・辰・駒若・相栄＝友衛門・吉左・仙三郎・友三郎・清友）。 ※歌舞伎公演。文楽座若手特別出演。	
	1936	昭和11	5/17~24	神戸松竹劇場	仮名手本忠臣蔵 旅路の嫁入（呂・源路・辰・駒若・相栄＝友衛門・吉左・仙三郎・友三郎・清友）。 ※歌舞伎公演。文楽座若手特別出演。	
	1936	昭和11	7/24~27	東京歌舞伎座	仮名手本忠臣蔵 道行旅路の嫁入（呂・和泉・播路・津の子・駒若／相瀬＝叶・寛市・喜代之助・新太郎・市松・一郎右衛門）、山科閑居の段（中 陸路＝友駒、切 鑢＝新左衛門、大隅＝広助）。	加古川本蔵（玉蔵）、妻戸無瀬（文五郎）、娘小浪（紋十郎）、大星力弥（光之助）、大星由良之助（栄三）、妻お石（小兵吉）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割	
1936	昭和11	7/31~ 8/2	東京 歌舞伎座	仮名手本忠 臣蔵	祇園一力の段（由良之助一和泉・力弥一津の子・重太郎一源路・喜太 八一陸路・弥五郎一隅栄・仲居一相栄・おかる一伊達・仲居一相瀬・ 亭主一土佐子・伴内一播路・九太夫一長尾・平右衛門一相生=団六、 重造）。 ※屋間特別興行。	大星力弥（紋司）、鷺坂伴内（文作）、傾城 おかる（紋十郎）、斧九太夫（紋太郎）、大 星由良之助（光之助）、寺岡平右衛門（玉 幸）。	
△	1936	昭和11	10/10	釜山 釜山劇場 〈新義座〉	仮名手本忠 臣蔵	勘平腹切。 ※大阪文楽新義座巡業（10月10日~12月中旬、大陸・九州・中国・四 国）の内。 ※「大阪朝日新聞」朝鮮版（10月6日）に拠る。	
△	1936	昭和11	12/11	上海 上海東劇	忠 臣 蔵 通し	三段目（隅若=新之助）、判官切腹（陸路=徳若）、山崎街道二ツ玉 の段（与一兵衛一隅若・定九郎一吉・勘平一徳=市三郎）、身売り （市=吉右）、一力茶屋場の段（由良之助一陸路・力弥一徳・おかる 一呂竹・九太夫一隅若・平右衛門一隅栄=市三郎）。 ※呂竹・市三郎は素義。市太夫・吉太夫・徳太夫・宗太夫は三味線弾 き。 ※竹本陸路太夫一行巡業。上海皇軍慰問公演。 ※『浄瑠璃雑誌』第356号に拠る。	
△	1937	昭和12	1/19	豊橋 豊橋劇場 〈新義座〉	（仮名手本 忠臣蔵）	勘平腹切りの段。 ※『浄瑠璃雑誌』第357号、「豊橋日日新聞」（1月14~19日）に拠 る。	
		1/27	盛岡 盛岡劇場 〈新義座〉	仮名手本忠 臣蔵	殿中刃傷。 ※「岩手日報」（1月27・29日の記事、1月20・26~27日の広告）に拠 る。		
		2/6	新潟 新潟劇場 〈新義座〉	仮名手本忠 臣蔵	※「新潟新聞」（1月24日）に拠る。		
		2/16	徳島	仮名手本忠 臣蔵	殿中刃傷の段（津磨=綱延）。		
		2/17	温泉劇場 〈新義座〉	勘平切腹の段（小松=勝芳）。 ※「徳島毎日新聞」（2月9・15~18日）に拠る。			
		2/27	上高瀬 松竹座 〈新義座〉	仮名手本忠 臣蔵	※新義座巡業（1月19日~3月中旬、東海・関東・東北・北陸・四国・ 中国）の内。乙女人形入。 ※「香川新報」（3月2日）に拠る。		
△	1937	昭和12	2/20	淀橋倶楽部	（仮名手本 忠臣蔵）	九（掛合 戸奈（ママ）瀬一香伯・小浪一松尾武市・下女りん一松尾 湊・お石一湊=猿三郎）。 ※宇知和会例会。 ※『浄瑠璃時報』第177号に拠る。	
△	1937	昭和12	2/25	ラジオ放送	誠忠義士銘 一伝	勘平切腹の段（古靱=清六）。 ※「大阪朝日新聞」「東京朝日新聞」（2月25日）に拠る。	
△	1937	昭和12	3/23~	地方公演 （中国）	忠 臣 蔵	道行（戸奈（ママ）瀬一和泉・小浪一伊達・ツレ さの・隅栄・常 子）。 ※『浄瑠璃雑誌』第359号に拠る。	（不明）
		3/25	山口 山 口 座	仮名手本忠 臣蔵	八ツ目 嫁入旅路の段（録・和泉・伊達=新左衛門）。 ※竹本録太夫一行巡業の内。 ※「防長新聞」（3月24日）、『浄瑠璃時報』第180号に拠る。	（不明）	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1937	昭和12	3/29	大紙倶楽部	(仮名手本忠臣蔵)	六(駒尾=友太郎)。七ツ目(掛合 由良之助-千駒・九太夫-播路・伴内-辰・おかる-竹・重太郎-駒尾・喜多八-駒若・弥五郎-長尾・平右衛門-陸路=団伊三)。 ※競義会。乙女人形入。 ※『浄瑠璃雑誌』第359号に拠る。	
△ 1937	昭和12	3/29	京都朝日会館	仮名手本忠臣蔵	九段目 山科閑居の段(総掛合)。 ※国粹古典芸術鑑賞会主催「文楽浄瑠璃の夕」。 ※「大阪朝日新聞」京都版(3月29日の記事、3月28日の広告)に拠る。	
△ 1937	昭和12	4/2	東京飛行会館	(仮名手本忠臣蔵)	六(松=扇之助)。 ※日本帝都義太夫因会春季公演大会。 ※『浄瑠璃雑誌』第362号、『浄瑠璃時報』第179号に拠る。	
△ 1937	昭和12	4/5	彦根大正館 (新義座)	(仮名手本忠臣蔵)	勘平住家(小松=勝之介)。 ※4月7日垂井劇場、4月8日美濃町・小倉座、4月9日郡上八幡・郡上八幡劇場、4月13日多治見・豊岡劇場、4月16日飯田市・大松座で同公演あり。 ※『浄瑠璃時報』第181号に拠る。	
		4/6	長浜日比劇場 (新義座)		殿中(津磨=綱延)。 ※大阪新義座巡業(4月4~28日、東海・関東)の内。乙女人形入。4月10日竹鼻・八千代座、4月12日瀬戸劇場(三味線不明)、4月15日岐阜・付知劇場、4月17日飯田市・大松座、4月20日名古屋・中座、4月27日静岡・若竹座で同公演あり。 ※『浄瑠璃時報』第181号、「名古屋新聞」(4月18・20日)に拠る。	
△ 1937	昭和12	4/27	堀江演舞場	忠 臣 蔵	六ツ目。 ※松崎松重翁三回忌追善浄瑠璃会。文楽座人形入素義浄瑠璃。	勘平(玉徳)、母親(利男)。
△ 1937	昭和12	5/5	東京帝国ホテル演舞場 (新義座)	(仮名手本忠臣蔵)	殿中(津磨=綱延)。 ※『浄瑠璃時報』第182号に拠る。	
△ 1937	昭和12	5/8	岡山岡山劇場 (新義座)	仮名手本忠臣蔵	勘平切腹の段(小松=勝之介)。 ※「山陽中国合同新聞」(5月7・9日)に拠る。	
△ 1937	昭和12	6/7	八戸錦座 (新義座)	(仮名手本忠臣蔵)	殿中(津磨)。	
		6/25	石動末広座 (新義座)		勘平切腹(小松)。 ※大阪新義座巡業(6月1~末、関東・東北・上越・北陸・東海)の内。乙女人形入。 ※『文楽興行記録昭和篇』書込みに拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1937	昭和12	6/15	浅草 並木倶楽部	仮名手本忠 臣蔵	由良之助閑居（由良之助一巴・お石一紋教・力弥一津賀昇・下女りん 一津賀重・戸無瀬一小津賀・小浪一団雀・本蔵一津賀＝三平）。 ※第1回恩志会。 ※『浄瑠璃時報』第183・185・186号に拠る。	
1937	昭和12	6/17～20	東京 明治座	仮名手本忠 臣蔵	鶴ヶ岡兜改めの段（足利直義公一辰・高師直一隅栄・顔世御前一宮・ 桃井若狭之助一土佐子・塩谷判官一相瀬＝一郎右衛門／市松）、桃の 井邸の段（中 播路＝新太郎、切 大隅＝団六改め 寛治郎）、大下馬 先の段（口 長尾＝吉左、奥 呂＝叶）、殿中刃傷の段（切 古靱＝清 六）、裏門の段（伊達＝重造）、扇ヶ谷の段（切 津＝綱造）、霞ヶ 関の段（長尾＝吉左）、山崎街道の段（口 辰＝喜代之助）、二つ玉 の段（奥 相生＝道八・胡弓 吉蔵）、身売の段（鏝＝新左衛門）、勘 平切腹の段（切 土佐＝吉兵衛）、祇園一力茶屋の段（由良之助一 津・力弥一さの・重太郎一大隅・喜太八一相生・弥五郎一源路改め 源・仲居一辰・おかる一土佐・仲居一播路・仲居一宮・亭主一隅栄・ 伴内一呂・九太夫一鏝・平右衛門一古靱＝綱造、吉兵衛）、道行旅路 の嫁入（娘小浪一伊達・妻戸無瀬一源路改め 源・ツレ 播路・松島／ 土佐栄・土佐夫＝友次郎・吉弥・喜代之助・友駒／寛若・清若／清友 ／吉季／市松）。	高師直（栄三）、桃井若狭之助（玉幸）、塩 谷判官（玉蔵）、顔世御前（政亀）、加古川 本蔵（門造）、妻戸無瀬（文五郎）、娘小浪 （紋十郎）、大星力弥（栄三郎）、鷺坂伴内 （光之助）、早野勘平（紋十郎）、こし元お かる・娘おかる・傾城おかる（文五郎）、斧 九太夫（門造）、大星由良之助（栄三）、百 姓与市兵衛（紋太郎）、斧定九郎（玉幸）、 与市兵衛女房（玉七）、寺岡平右衛門（玉 蔵）。
△ 1937	昭和12	7/19	台北 栄 座 〈新義座〉	（仮名手本 忠臣蔵）	殿中（津磨）。 ※大阪新義座巡業（7月19日～8月2日、台湾・山陰）の内。桐竹門造 指導乙女人形入。7月22日台南・宮古座、7月23日高雄座、7月25日虎 尾交遊クラブ、7月27日基隆劇場で同公演あり。 ※『浄瑠璃雑誌』第364号、「台湾日日新報」（7月20日）、「大阪毎 日新聞」台湾版（7月22日）、「文楽興行記録昭和篇」書込みに拠 る。	
△ 1937	昭和12	9/27	京都 朝日会館	忠 臣 蔵	三段目 殿中の段。 ※国粹古典芸術鑑賞会主催「文楽浄瑠璃の夕」。 ※「大阪朝日新聞」京都版（9月27日）に拠る。	
△ 1937	昭和12	10/27	浅草 並木倶楽部	仮名手本忠 臣蔵	山科閑居の段（由良之助一殿母・力弥一巖・お石一香伯・りん一扇 賀・小浪一朝見・戸奈（ママ）瀬一湊・本蔵一津賀＝前 猿蔵、後 猿 三郎）。 ※日本帝都義太夫因会慰問会。 ※『浄瑠璃雑誌』第365・366号、『浄瑠璃時報』第193・194号、『太 棹』第90号に拠る。	
△ 1937	昭和12	11/16	ラジオ放送	仮名手本忠 臣蔵	判官切腹の段（駒＝清二郎）。 ※「大阪朝日新聞」「東京朝日新聞」（11月16日）、『太棹』第91号 に拠る。	
△ 1937	昭和12	11/28	京都 朝日会館	忠 臣 蔵	六段目 勘平切腹の段（隅若＝寛六）。七段目 茶屋場の段（大切掛合 由良之助一大隅・おかる一伊達・平右衛門一源＝重造）。 ※古典芸術鑑賞会主催「文楽浄瑠璃の夕」。 ※「大阪朝日新聞」京都版（11月12・19日）に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1937	昭和12	12/1~10	北陽演舞場	仮名手本忠臣蔵 大序兜改めより 祇園一力の段まで	大序 兜改めより恋歌の段（足利直義公一むら・高野師直一辰ノ播路・顔世御前一さのノ宮・桃井若狭の助一常子・塩谷判官一隅若一新太郎ノ友花ノ重次郎ノ一郎右衛門）、殿中刃傷の段（高野師直一長尾・塩谷判官一源・桃井若狭の助一富・加古川本蔵一干駒一寛市）、裏門の段（伊達一友衛門）、花籠の段（切 文字一広助）、判官切腹の段（切 大隅一寛治郎）、霞ヶ関の段（播路一新太郎ノ友花ノ重次郎ノ一郎右衛門）、山崎街道の段（源一友平）、二ツ玉の段（駒一清二郎ノ一鑲一新左衛門・胡弓 吉蔵）、身売の段（和泉一友造）、早野勘平切腹の段（切 鑲一新左衛門ノ一駒一清二郎）、祇園一力の段（由良之助一鑲一重太郎一辰・喜太八一さの・弥五郎一松島・仲居一常子・おかる一伊達・仲居一土佐夫・亭主一隅若・伴内一宮・九太夫一干駒・平右衛門一太隅一重造）。 ※千鶴楽は『浄瑠璃時報』第196号に拠る。 ※12月10日「山崎街道の段」（源一友平）、「二ツ玉の段」（駒一清二郎）、「身売の段」（文字一友造）ラジオ中継放送（「大阪朝日新聞」「東京朝日新聞」（12月10日）、『太棹』第92号に拠る）。	高野師直（栄三）、桃井若狭之助（政亀）、塩谷判官（玉蔵）、顔世御前（紋十郎）、加古川本蔵（紋太郎）、大星力弥（栄三郎）、鷺坂伴内（玉次郎）、早野勘平（紋十郎）、こし元おかる・娘おかる・傾城おかる（文五郎）、斧九太夫（小兵吉）、大星由良之助（栄三）、百姓与市兵衛（玉七）、斧定九郎（玉市）、与市兵衛女房（小兵吉）、寺岡平右衛門（玉幸）。
△	1938	昭和13	1/29	東京 東京劇場	忠 臣 蔵	茶屋場（由良之助一相生・おかる一伊達・平右衛門一呂一道八）。 ※大阪文楽座義太夫若手花形特別公演。 ※『浄瑠璃雑誌』第368号、「東京朝日新聞」（1月26日の広告）に拠る。
△	1938	昭和13	3/14 3/16	東京 鈴木演芸場	（仮名手本忠臣蔵）	殿中（さくら一桑造）。 四（さくら一桑造）。 ※第3回義太夫会。 ※『太棹』第94号に拠る。
△	1938	昭和13	3/28	東京 歌舞伎座	仮名手本忠臣蔵	三段目 殿中刃傷の段（師直一さくら・判官一麗・若狭之助一扇賀・伴内・本蔵一里一延左衛門）。一力茶屋場（由良之助一近衛・おかる一浪花・平右衛門一弥国一道之助）。 ※竹本津賀太夫引退披露。 ※『浄瑠璃雑誌』第368・369号、『太棹』第93・94号に拠る。
△	1938	昭和13	5/26 5/27	東京 仁寿講堂 〈新義座〉	（仮名手本忠臣蔵） 忠 臣 蔵	九（叶一観西翁）。 殿中（師直一隅栄一判官一叶美・若狭之助一越名一勝芳）、裏門（越名一綱延）、判官館（叶一寛西翁）、二つ玉（陸路一徳若）、身売（南部一勝平）、勘平切腹（角一吉五郎）、一力茶屋（由良之助一葉一おかる一南部・平右衛門一陸路・九太夫一葉美一観西翁）。 ※大阪新義座巡業（5月25日～、関東・東海道）の内。 ※『太棹』第94・95号、「東京朝日新聞」（5月13日）に拠る。
△	1938	昭和13	6/1	ラジオ放送	仮名手本忠臣蔵	山科の段（津一綱造）。 ※「奥 本蔵の出より段切りまで」放送。 ※「大阪朝日新聞」「東京朝日新聞」「満州日日新聞」「京城日報」（6月1日）、『太棹』第98号に拠る。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1938	昭和13	6/19 6/20	高知 堀 詰 座	忠 臣 蔵	勘平住家（隅若＝重次郎）。 殿中（隅若＝重次郎）。 ※大阪文楽人形浄瑠璃大一座。 ※『浄瑠璃雑誌』第371号、「高知新聞」（6月13・15～16・19～23日）に拠る。	（不明） （不明）
1938	昭和13	7/11～13	東京 新橋演舞場	仮名手本忠 臣蔵	殿中刃傷の段（呂＝叶）、裏門の段（伊達＝友衛門）、花籠の段（つばめ改 織＝団二郎改 団六）、判官切腹の段（切 大隅＝広助）、霞ヶ関の段（長尾＝一郎右衛門）、身売の段（相生＝道八）、早野勘平住家の段（切 古靱＝清六）、祇園一力茶屋の段（由良之助－相生・重太郎－竹・喜太八－さの・弥五郎－宮・おかる－伊達・亭主－隅若・伴内－相瀬・九太夫－播路・平右衛門－織＝友衛門）、道行恋の初旅（鑿・呂・辰・さの・松島＝新左衛門・寛治郎・吉左・新太郎・吉季／友三郎・清友／一郎右衛門）、山科閑居の段（中 長尾＝吉左、切 津＝綱造）、両国橋勢揃ひの段（辰・さの・宮・隅若・相瀬＝団伊三）。	高野師直（門造）、桃井若狭之助（文作）、塩谷判官（紋十郎）、顔世御前（政亀）、加古川本蔵（玉蔵）、妻戸無瀬（文五郎）、娘小浪（紋十郎）、大星力弥（栄三郎）、鷺阪伴内（玉徳）、早野勘平（栄三）、腰元おかる・娘おかる・おかる（文五郎）、斧九太夫（紋太郎）、大星由良之助（栄三）、与市兵衛女房（玉七）、寺岡平右衛門（玉幸）、妻お石（政亀）。
△ 1938	昭和13	8/12～13	京都 南 座	仮名手本忠 臣蔵 大序兜改め より 祇園一力茶 屋まで	大序 兜改めより恋歌の段（足利直義公－辰・高野師直－長尾・顔世御前－播路・桃井若狭之助－常子・塩谷判官－相瀬＝吉季／一郎右衛門）、殿中刃傷の段（長尾＝一日替 広助／寛治郎）、裏門の段（伊達＝友衛門）、扇ヶ谷の段（切 文字＝吉左）、霞ヶ関の段（相瀬＝友三郎、清友）、二ツ玉の段（源＝広助・胡弓 清友）、身売の段（一日替 相生＝道八／織＝団六）、早野勘平切腹の段（一日替 相生＝道八／織＝団六）、祇園一力茶屋の段（由良之助－文字・重太郎－源・喜多八－相瀬・弥五郎－辰・おかる－伊達・亭主・仲居－常子・伴内－播路・九太夫－長尾・平右衛門－一日替 相生／織＝寛治郎）。 ※『浄瑠璃雑誌』第373号、『昭和の南座 資料編（上）』、「京都日日新聞」（8月9・11～12日）に拠る。	高野師直（栄三）、桃井若狭之助（政亀）、塩谷判官（玉蔵）、顔世御前（文五郎）、鷺坂伴内（門造）、早野勘平（紋十郎）、おかる（文五郎）、大星由良之助（栄三）、百姓与市兵衛（門造）、斧定九郎（玉市）、与市兵衛女房（政亀）、寺岡平右衛門（玉幸）。
1938	昭和13	10/5～11	大阪歌舞伎座	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（相生・織・浪・駒若・相瀬＝道八・団六・吉季・友三郎・清友・喜代之助）。 ※歌舞伎公演。文楽座太夫三味線特別出演。	
1938	昭和13	10/7～	四ツ橋文楽座	仮名手本忠 臣蔵 大序より 祇園一力茶 屋の段まで	大序 兜改めより恋歌の段（足利直義公－和泉・高野師直－長尾・顔世御前－源・桃井若狭之助－竹・塩谷判官－宮／常子＝喜代之助／八造）、殿中刃傷の段（切 大隅＝広助）、裏門の段（源＝吉弥）、判官切腹の段（切 駒＝清二郎）、霞ヶ関の段（播路＝喜代之助／八造）、二ツ玉の段（和泉＝重造／友衛門・胡弓 吉蔵）、身売の段（鑿＝新左衛門）、早野勘平住家の段（切 津＝綱造）、祇園一力茶屋の段（由良之助－大隅・重太郎－富・喜太八－千駒・弥五郎－さの・仲居－松島・おかる－伊達・仲居－宮・仲居－常子・伴内－播路・九太夫－長尾・平右衛門－呂＝叶）。	高野師直（玉幸）、桃井若狭之助（栄三郎）、塩谷判官（紋十郎）、顔世御前（文五郎）、加古川本蔵（玉次郎）、大星力弥（栄三郎）、鷺坂伴内（門造）、早野勘平（栄三）、腰元おかる・娘おかる・傾城おかる（文五郎）、斧九太夫（紋太郎）、大星由良之助（栄三）、百姓与市兵衛（紋太郎）、斧定九郎（玉市）、与市兵衛女房（小兵吉）、寺岡平右衛門（玉蔵）。
△ 1938	昭和13	10/26	京都 朝日会館	忠 臣 蔵	八ツ目 旅路の嫁入（掛合 源・伊達・隅若・大隅＝八造・友衛門・重造・寛六・吉蔵）。 ※国粹古典芸術鑑賞会主催「第5回秋季文楽浄瑠璃の夕」。 ※「京都日日新聞」（10月21日）、「大阪朝日新聞」京都版（10月26日）に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1938	昭和13	11/27	北陽演舞場 〈新義座〉	忠 臣 蔵	光明寺の段（掛合 荒木弾正一隅栄・飯田多聞守一越名・大星由良之助一葉美＝勝芳）。 ※『浄瑠璃雑誌』第376号、「大阪毎日新聞」（11月26日）に拠る。	
1939	昭和14	1/1～22	四ツ橋文楽座	仮名手本忠臣蔵 道行旅路の嫁入より山科閑居の段まで	道行旅路の嫁入の段（鑊／駒・伊達・竹・松島・相瀬＝新左衛門／清二郎・吉左・喜代之助・新太郎・友三郎）、山科閑居の段（前 駒＝清二郎／／鑊＝新左衛門、後 大隅＝広助）。 ※千種楽は「大阪朝日新聞」（1月21日）に拠る。	加古川本蔵（玉蔵）、妻戸無瀬（文五郎）、娘小浪（紋十郎）、大星力弥（栄三郎）、大星由良之助（栄三）、女房お石（小兵吉）。
△ 1939	昭和14	1/25	東京 日本橋倶楽部	忠 臣 蔵	勘平住家（柚＝松市郎）。 ※東京南北座初春興行。 ※『浄瑠璃雑誌』第377号、『太棹』第101号に拠る。	勘平（国五郎）。
△ 1939	昭和14	2/6～7	京都 南 座	仮名手本忠臣蔵 大序兜改めより両国橋勢揃ひ	兜改め（文、辰＝清友）、刃傷（文字＝吉左）、裏門（伊達＝友衛門）、扇ヶ谷（鑊＝新左衛門）、霞ヶ関（播路＝一郎右衛門）、二ツ玉（和泉＝友衛門）、身売（織＝団六）、勘平切腹（古鞆＝重造）、茶屋場（鑊・大隅・文字・伊達＝広助）、八段目 道行（駒・織＝清二郎・団六）、山科閑居（中 長尾＝新太郎、切 津＝綱造）、両国橋（若手掛合）。 ※『昭和の南座 資料編（上）』、「京都日出新聞」（2月6・8日の記事、2月4日の広告）、「京都日日新聞」（2月7日の記事、2月4日の広告）に拠る。	判官（紋十郎）、顔世（政亀）、本蔵（玉蔵）、戸無瀬（文五郎）、小浪（紋十郎）、勘平（栄三）、おかる（文五郎）、由良之助（栄三）、おかや（政亀）、お石（小兵吉）。
△ 1939	昭和14	2/15カ	神戸 松竹劇場	仮名手本忠臣蔵	大序兜改めより両国橋勢揃ひまで。 ※竹本織太夫・竹沢団六襲名披露文楽座人形浄瑠璃総引越興行。 ※「神戸新聞」（2月9・14～15日の記事、2月7日の広告）に拠る。	（不明）
△ 1939	昭和14	2/21	博多 大博劇場	仮名手本忠臣蔵	大序 兜改めより恋歌の段（総掛合）、三段目 殿中刃傷の段（文字＝吉左）、裏門の段（伊達＝友衛門）、四段目 扇ヶ谷の段（鑊＝新左衛門）、霞ヶ関の段（播路＝一郎右衛門）、五段目 二つ玉の段（和泉＝友衛門）、六段目 身売の段（織＝団六）、勘平切腹の段（古鞆＝重造）、七段目 祇園一力茶屋の段（由良之助＝大隅・おかる＝伊達・平右衛門＝鑊）、八段目 道行旅路の嫁入（戸無瀬＝駒・小浪＝織・他掛合）、九段目 山科閑居の段（中 長尾＝新太郎、切 津＝綱造）、両国橋勢揃ひの段（若手総掛合）。 ※文楽座一行巡業（2月17～23日、山陽・九州）の内。 ※「九州日報」（2月19・21～23・25日）に拠る。	本蔵（玉蔵）、戸無瀬（文五郎）、小浪（紋十郎）、勘平（栄三）、おかる（文五郎）、由良之助（栄三）、お石（小兵吉）。
△ 1939	昭和14	4/29	ラジオ放送	仮名手本忠臣蔵	一力茶屋場（掛合 由良之助＝大隅・お軽＝駒・平右衛門＝織＝広助、清二郎）。 ※「大阪朝日新聞」「東京朝日新聞」（4月29日）、『太棹』第104号に拠る。	
△ 1939	昭和14	6/23	東京 日本橋倶楽部	（仮名手本忠臣蔵）	四（殿母＝良造）。 ※日本帝都義太夫因会男子部春季大会。 ※『太棹』第105号、『浄瑠璃月報』第13号に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1939	昭和14	9/26	ラジオ放送	仮名手本忠臣蔵	山科の段（叶＝友造）。 ※「大阪朝日新聞」「東京朝日新聞」（9月26日）、『太棹』第108号に拠る。	
△ 1939	昭和14	9/28	東京日本橋倶楽部	忠 臣 蔵	三段目 殿中（浪江＝猿若）、裏門（松江＝猿平）、四段目（浪花＝猿平）、五段目（巴＝猿喜知）、六段目 身売（駒登＝松四郎）、勘平住家（双葉＝辰六）、勘平切腹（都＝亀造）、七段目（おかる＝浪花・由良之助＝双葉・九太夫＝駒登・平右衛門＝巴）。 ※東京浄瑠璃人形芝居南北座秋季特別公演。 ※『太棹』第108号に拠る。	師直（高瀬弦之丞）、判官（池田三国）、勘平（国五郎）、おかる（池田三国）、定九郎（高瀬弦之丞）、由良之助（高瀬弦之丞）、由良之助（国五郎）、平右衛門（国五郎）。
1939	昭和14	12/1～	四ツ橋文楽座	仮名手本忠臣蔵	鶴ヶ岡兜改より恋歌の段（足利直義公＝さの／宮・高野師直＝駒若／相瀬・顔世御前＝津磨／越名・桃井若狭之助＝松島／英・塩谷判官＝松島／英＝清友）、下馬先進物の段（富＝叶太郎／友十郎）、殿中刃傷の段（和泉＝叶）、裏門の段（さの＝友若／／津磨＝寛若／／宮＝友太郎）、道行旅路の嫁入（妻戸無瀬＝相生／織・娘小浪＝南部／伊達・ツレ 辰／播路・さの／津磨・駒若／相瀬・松島／英＝重造／友衛門＝八造／団六＝団伊三／新太郎・清友・一郎右衛門＝竜市／吉蔵）、山科閑居の段（前 相生＝清二郎／／織＝団六、後 呂＝新左衛門）。	高野師直（栄三）、桃井若狭之助（紋太郎）、塩谷判官（門造）、顔世御前（光之助）、加古川本蔵（玉蔵）、妻戸無瀬（文五郎）、娘小浪（紋十郎）、大星力弥（文二郎）、鷺阪伴内（玉徳）、早野勘平（玉幸）、こし元おかる（光之助）、大星由良之助（栄三）、妻お石（政亀）。
△ 1939	昭和14	12/3～15	地方公演（九州）	忠 臣 蔵	六段目（隅若＝広若）。 ※大阪文楽座、竹本大隅太夫・豊沢広助一行巡業。乙女人形入。12月3日大分・大分劇場（三味線不明）、12月5日中津・蓬萊館（役割不明）、12月13～14日博多・大博劇場（13日の役割不明）で同公演あり。 ※『浄瑠璃雑誌』第385号、「豊州新報」（12月1・3日）、「大分新聞」（12月3・5日）、「大阪朝日新聞」大分版（12月5日）、「福岡日日新聞」（12月11～13・25日の記事、12月10日の広告）、「九州日報」（12月13・15日）に拠る。	
△ 1939	昭和14	12/14	東京日本橋倶楽部	（仮名手本忠臣蔵）	四（津弥＝新造）。 ※日本帝都義太夫因会大会。 ※『太棹』第109・110号に拠る。	
△ 1940	昭和15	5/2	ラジオ放送	仮名手本忠臣蔵	六段目 勘平内の段（大隅＝広助）。 ※「大阪朝日新聞」「東京朝日新聞」（5月2日）、『太棹』第115号、『浄瑠璃雑誌』第390号に拠る。	
△ 1940	昭和15	5/9	東京日本橋倶楽部	（仮名手本忠臣蔵）	七（掛合 由良之助＝駒登・お軽＝浪花・平右衛門＝弥国＝紋左衛門）。 ※日本義太夫因会春季大会。 ※『太棹』第114号に拠る。	
△ 1940	昭和15	6/5	東京日本橋倶楽部	忠 臣 蔵	勘平住家（歳＝美之助）。 ※東京浄瑠璃人形芝居南北座春季公演。 ※『浄瑠璃雑誌』第389号、『太棹』第114・115号に拠る。	勘平（国五郎）、おかや（池田三国）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1940	昭和15	8/1~4	東京 明治座	仮名手本忠 臣蔵 大序兜改め より 祇園一力茶 屋の段まで	大序 兜改めより恋歌の段（足利直義公一津磨・高師直一富・顔世御 前一宮・桃井若狭之助一駒若・塩谷判官一松島／英＝喜代之助）、殿 中刃傷の段（相生＝吉五郎、織＝団六）、裏門の段（伊達＝友衛 門）、扇ヶ谷の段（切 大隅＝広助）、霞ヶ関の段（隅若＝一郎右衛 門）、二ツ玉の段（文＝八造・胡弓 勝芳）、身売の段（呂＝吉 左）、勘平切腹の段（切 駒＝清二郎）、祇園一力茶屋の段（由良之 助一大隅・力弥一越名・重太郎一富・喜太八一文・弥五郎一駒若・仲 居一英・おかる一伊達・仲居一宮・仲居一松島・亭主一隅若・伴内一 播路・九太夫一呂・平右衛門一一日替 相生／織＝前 吉五郎／団六、 後 友衛門）。	高師直（栄三）、桃井若狭之助（光之助）、 塩谷判官（玉蔵）、顔世御前（文五郎）、加 古川本蔵（玉徳）、大星力弥（栄三郎）、鷺 坂伴内（文作）、早野勘平（紋十郎）、腰元 おかる・娘おかる・傾城おかる（文五郎）、 斧九太夫（小兵吉）、大星由良之助（栄 三）、百姓与市兵衛（紋太郎）、斧定九郎 （玉幸）、与市兵衛女房（小兵吉）、寺岡平 右衛門（玉蔵）。
△	1940	昭和15	8/18	東京 明治座	（仮名手本 忠臣蔵） 本蔵下屋敷、道行旅路の嫁入、山科閑居。 ※マチネー。 ※『浄瑠璃雑誌』第393号に拠る。	
△	1940	昭和15	9/21	東京 新橋演舞場	仮名手本忠 臣蔵 裏門の段（播路、常子、駒若＝友太郎）。	
		9/26カ		（仮名手本 忠臣蔵） 九（津＝寛治郎）。 ※大阪文楽浄瑠璃一座。素浄瑠璃。 ※「朝日新聞（東京）」（9月20～22・25～27日の広告）、「報知新 聞」（9月20～27日の広告）、「東京日日新聞」（9月25日の記事、9 月22日の広告）、『太棹』第118号、『浄瑠璃雑誌』第394・395号に 拠る。		
△	1940	昭和15	10/8	東京 日本橋倶楽部	（仮名手本 忠臣蔵） 六（歳＝美之助）。 ※日本義太夫因会男子部秋季大会。 ※『太棹』第119号、『浄瑠璃雑誌』第394号に拠る。	
△	1940	昭和15	11/9	ラジオ放送	仮名手本忠 臣蔵 九段目 山科の段（大隅＝広助）。 ※「朝日新聞（大阪）」「朝日新聞（東京）」（11月9日）、『太 棹』第121号に拠る。	
	1941	昭和16	6/1~22	四ツ橋文楽座	忠 臣 蔵 本蔵下邸の 段より 道行の段ま で 加古川本蔵下邸の段（中 さの＝新太郎／常子＝友三郎／津磨＝ 清友／宮＝一郎右衛門、前 文字＝新左衛門、後 呂＝仙糸・琴 仙 三郎／綱延）、道行旅路の嫁入（妻戸無瀬一角／叶・娘小浪一南部／ 伊達・ツレ 長尾／三滝・隅若／叶美／越名・松島／呂賀／織子・伊 勢／千駒＝広助／寛治郎・重造／友衛門・叶太郎／友作／団伊三・友 太郎／吉蔵／団作／徳若・仙松／勝之介／扇之助・重造／友衛門）。 ※千種楽は『文楽興行記録昭和篇』書入れに拠る。	桃井若狭之助（紋十郎）、加古川本蔵（門 造）、妻戸無瀬（文五郎）、娘小浪（紋十 郎）。
	1941	昭和16	11/29~ 12/3	東京 新橋演舞場	忠 臣 蔵 道行旅路の嫁入（妻戸無瀬一伊達／南部・娘小浪一七五三・播路／常 子・津磨／叶美・松島／南次・長尾＝綱造・勝平／重造・八造・清 友・一郎右衛門・団作／仙松）、加古川本蔵下邸の段（中 宮＝団伊 三／司＝友花、前 和泉＝叶、後 文字改メ 住＝喜代之助・琴 綱 延）。	桃井若狭之助（紋十郎）、加古川本蔵（玉 造）、妻戸無瀬（文作）、娘小浪（光之 助）。
△	1941	昭和16	12/8	ラジオ放送	仮名手本忠 臣蔵 三段目 殿中刃傷の段（大隅＝清二郎）。 ※「朝日新聞（大阪）」「朝日新聞（東京）」（12月8日）に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1942	昭和17	4/10	浅草 並木倶楽部	(仮名手本 忠臣蔵)	六(卯=和孝)。 ※日本義太夫因会春季大会。 ※『太棹』第134号、『浄瑠璃月報』第42号に拠る。	
△ 1942	昭和17	5/30	堀江演舞場	忠 臣 蔵	勘平切腹の段、一力茶屋場の段。 ※大阪産業報国会芦原支部産業戦士慰安人形浄瑠璃会。素義の語りに 文楽座吉田文五郎・桐竹紋十郎一行が人形出遣いにて出演。 ※『文楽芸術』第9・10号に拠る。	力弥(紋司)、伴内(亀松)、勘平(玉 助)、おかる(紋十郎)、九太夫(文五 郎)、由良之助(玉助)、母親(紋太郎)、 平右衛門(玉市)。
△ 1942	昭和17	5/31	ラジオ放送	仮名手本忠 臣蔵	四段目 扇ヶ谷判官切腹の段(古靱=清六)。 ※「朝日新聞(大阪)」「朝日新聞(東京)」(5月31日)に拠る。	
1942	昭和17	7/26~28	東京 新橋演舞場	仮名手本忠 臣蔵 大序兜改め より 祇園一力茶 屋の段まで	大序 兜改めより恋歌の段(足利直義公一つばめ・高野師直一司・顔 世御前一雛・桃井若狭助一津磨・塩谷判官一松島=友衛門/吉左)、 殿中刃傷の段(相生=吉五郎/呂=仙糸)、裏門の段(南部=重造 /伊達=勝平)、扇ヶ谷の段(切 古靱=清六)、霞ヶ関の段(津 磨=一郎右衛門)、二ツ玉の段(七五三=綱造・胡弓 清友)、身売 の段(織=団六)、勘平切腹の段(前 相生=吉五郎/呂=仙糸、 切 大隅=清二郎)、祇園一力茶屋の段(由良之助一大隅・力弥一宮 /越名/呂賀・重太郎一相生・喜太八一織・弥五郎一伊達/南部・仲 居一宮・おかる一南部/伊達・仲居一越名・仲居一呂賀・亭主一隅 若・伴内一七五三・九太夫一呂・平右衛門一古靱=前 清六、後 勝平 /重造)。	高野師直(門造)、桃井若狭助(光之助)、 塩谷判官(玉蔵改メ 玉造)、顔世御前(文作 改め 亀松)、加古川本蔵(紋太郎)、大星力 弥(栄三郎)、鷺坂伴内(玉蔵改メ 玉造)、 早野勘平(紋十郎)、腰元おかる・娘おか る・おかる(文五郎)、斧九太夫(門造)、 大星由良之助(栄三)、百姓与市兵衛(政 亀)、斧定九郎(玉幸改メ 玉助)、与市兵衛 女房(小兵吉)、寺岡平右衛門(玉幸改メ 玉 助)。
△ 1942	昭和17	10/28	京都 朝日会館	忠 臣 蔵	七ツ目 茶屋場の段(掛合 由良之助一源・おかる一雛・平右衛門一司 =仙三郎)。 ※国粋古典芸術鑑賞会主催「第13回秋季文楽浄瑠璃の夕」。 ※「朝日新聞(大阪)」京都版(10月25~26日の広告)に拠る。	
1942	昭和17	12/11~ 15	東京 新橋演舞場	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入(七五三・雛・司・隅若・松島=綱造・重造・喜代之 助改め 吉三郎・綱延改め 錦糸・団伊三・団作)、山科閑居の段(加 古川本蔵一大隅・妻戸無瀬一織・娘小浪一南部・下女りん一呂賀・大 星力弥一つばめ・妻お石一相生・大星由良之助一住=前 観西翁、後 清二郎)。	加古川本蔵(玉造)、妻戸無瀬(道行=政 亀、山科閑居=文五郎)、娘小浪(紋十 郎)、大星力弥(紋司)、大星由良之助(玉 助)、女房お石(亀松)。
1943	昭和18	1/1~	四ツ橋文楽座	仮名手本忠 臣蔵 殿中刃傷の 段より 祇園一力茶 屋の段	殿中刃傷の段(高野師直一長尾・塩谷判官一三滝・桃井若狭之助・茶 道珍才・加古川本蔵一役毎日替 千駒/司=清八)、裏門の段(隅若 =錦糸/呂賀=友花)、花籠の段(住=吉三郎/呂=仙糸)、塩 谷判官切腹の段(住=吉三郎/呂=仙糸)、霞ヶ関の段(松島=仙 松/清広)、二ツ玉の段(七五三=綱造・胡弓 勝太郎/錦糸)、身 売の段(文=友衛門/八造)、早野勘平切腹の段(切 重=広助)、 祇園一力茶屋の段(由良助一住/呂・重太郎一富・喜太八一三滝・弥 五郎一文字・仲居一呂賀・おかる一南部/伊達・仲居一松島・亭主一 隅若・伴内一司・九太夫一干駒・平右衛門一浜=新左衛門)。 ※「七段目を四十五分に短縮」(「毎日新聞(大阪)」(1月21 日)、『浄瑠璃雑誌』第417号に拠る)。	高野師直(門造)、桃井若狭助(紋司)、塩 谷判官(紋十郎)、顔世御前(小兵吉)、加 古川本蔵(多三郎)、大星力弥(紋司)、鷺 坂伴内(栄三郎)、早野勘平(玉助)、腰元 おかる・娘おかる・傾城おかる(紋十郎)、 斧九太夫(紋太郎)、大星由良助(玉助)、 百姓与市兵衛(兵次)、斧定九郎(玉徳)、 与市兵衛女房(小兵吉)、寺岡平右衛門(光 之助)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1943	昭和18	2/28~	四ツ橋文楽座	仮名手本忠臣蔵	道行旅路の嫁入（娘小浪－南部・妻戸無瀬－雛・ツレ 富／三滝／隅若・富／三滝／隅若・呂賀＝重造・友衛門・八造・新太郎・仙松・友造／友平）。 ※吉田光之助改メ三代吉田光造襲名披露。	妻戸無瀬（栄三）、娘小浪（光之助改め 光造）。
△ 1943	昭和18	4/4	ラジオ放送	仮名手本忠臣蔵	四段目 花籠の段（住＝吉三郎）。 ※「朝日新聞（大阪）」「朝日新聞（東京）」（4月4日）に拠る。	
△ 1943	昭和18	4/25	兵庫 亀岡館	仮名手本忠臣蔵	六ツ目（春弥＝吉丸）。 ※竹本敷島太夫記念碑除幕式および出征軍人遺家族慰安の浄瑠璃会。源之丞一座人形入。 ※『浄瑠璃雑誌』第418・420号に拠る。	
△ 1943	昭和18	5/7	浅草 並木倶楽部	（仮名手本忠臣蔵）	六（卯＝美之助）。九（近衛＝松四郎）。 ※大日本義太夫因会春季大会。 ※『太棹』第144号、『浄瑠璃月報』第67号に拠る。	
1943	昭和18	7/31~ 8/4	東京 新橋演舞場	仮名手本忠臣蔵 鶴ヶ岡兜改めより 祇園一力茶屋まで	鶴ヶ岡兜改めの段（足利直義公－つばめ・高師直－千駒・顔世御前－越名・桃井若狭助－津磨・塩冶判官－松島＝団六）、下馬先進物の段（千駒／つばめ＝友衛門）、殿中刃傷の段（呂＝仙糸）、裏門の段（早野勘平－浜・腰元おかる－越名・鷺坂伴内－隅若＝重造）、花籠の段（相生＝吉五郎）、塩冶判官切腹の段（切 大隅＝清二郎）、霞ヶ関の段（松島＝団伊三）、二つ玉の段（七五三＝綱造・胡弓 錦糸）、身売の段（伊達＝喜左衛門）、早野勘平切腹の段（切 古鞆＝清六）、祇園一力茶屋の段（由良助－古鞆・力弥－浜・重太郎－伊達・喜太八－七五三・弥五郎－津磨・仲居－越名・おかる－南部・仲居－隅若・仲居－松島・亭主－千駒／つばめ・伴内－相生・九太夫－呂・平右衛門－織＝観西翁）。	高師直（門造）、桃井若狭助（光造）、塩冶判官（玉助）、顔世御前（亀松）、加古川本蔵（玉市）、大星力弥（紋司）、鷺坂伴内（光造）、早野勘平（紋十郎）、腰元おかる・娘おかる・遊女おかる（文五郎）、斧九太夫（門造）、大星由良助（栄三）、百姓与市兵衛（紋太郎）、斧定九郎（亀松）、与市兵衛女房（政亀）、寺岡平右衛門（玉助）。
△ 1943	昭和18	9/14	東京 すゞ本	（仮名手本忠臣蔵）	勘平腹切（卯＝紋四郎）。 ※義太夫鍊成道場義太夫会。 ※『浄瑠璃月報』第77号、『太棹』第148号に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1943	昭和18	9/24~26	神戸 松竹劇場	仮名手本忠 臣蔵 殿中刃傷の 段より 道行まで	殿中刃傷の段（高野師直－陸路改め 七五三・塩谷判官－つばめ・桃 井若狭之助－宮・茶道珍才・加古川本蔵－松島＝重造）、裏門の段 （早野勘平－津の子改め 浜・腰元おかる－越名・鷺坂伴内－隅若／ むら改め 八十＝友花改め 燕三・吉季改め 市治郎・勝芳改め 勝太 郎）、花籠の段（文字改め 住＝喜代之助改め 吉三郎）、判官切腹の 段（切 大隅＝清二郎）、霞ヶ関の段（むら改め 八十＝団伊三）、二 つ玉の段（陸路改め 七五三＝綱造・胡弓 綱延改め 錦糸）、身売の 段（後 織＝団六）、勘平切腹の段（切 古鞠＝清六）、祇園一力茶屋 の段（由良之助－文字改め 住・重太郎－雛・喜太八－津の子改め 浜・弥五郎－松島・仲居－宮・おかる－南部・仲居－越名・亭主－む ら改め 八十・伴内－隅若・九太夫－千駒・平右衛門－相生＝吉五 郎）、道行旅路の嫁入（伊達・雛・津磨・宮／越名・松島＝勝平改め 喜左衛門・友衛門・綱延改め 錦糸・友花改め 燕三／勝芳改め 勝太 郎・一郎右衛門・団作／清広・団伊三）。 ※この興行中に吉田栄三郎応徴（『文楽興行略年表』に拠る）。 ※桃井若狭之助を桐竹紋太郎、「身売の段」の三味線を野沢吉五郎に 訂正した公演チラシ類あり。	高野師直（門造）、桃井若狭之助（栄三 郎）、塩谷判官（紋十郎）、顔世御前（文作 改め 亀松）、加古川本蔵（兵次）、妻戸無瀬 （文作改め 亀松）、娘小浪（光之助改め 光 造）、大星力弥（紋司）、鷺坂伴内（光之助 改め 光造）、早野勘平（紋十郎）、腰元おか る・娘おかる・傾城おかる（文五郎）、斧九 太夫（門造）、大星由良之助（栄三）、百姓 与市兵衛（多三郎）、斧定九郎（玉幸改め 玉 助）、与市兵衛女房（紋太郎）、寺岡平右衛 門（玉幸改め 玉助）。
△ 1943	昭和18	10/2	浅草 並木倶楽部	忠 臣 蔵 三段目より 八段目まで	三段目（卯＝絃吾）、四段目（駒登＝和孝）、五段目（巴＝松市 郎）、六段目（朝見＝猿喜知・胡弓 絃吾）、七段目（由良之助－駒 登・力弥－卯・平右衛門－朝見・お軽－巴＝扇之助）、八段目（小浪 －巴・となせ－卯・ツレ 駒登・朝見＝芳太郎・ツレ 美之助・和孝・ 絃吾・松市郎・猿喜知）。 ※義太夫古曲発表会。 ※『太棹』第148号、『浄瑠璃月報』第76号に拠る。	
△ 1943	昭和18	10/16	東京 すゞ本	（仮名手本 忠臣蔵）	四（桜＝辰六）。 ※第2回義太夫錬成道場。 ※『浄瑠璃月報』第78・79号、『太棹』第149号に拠る。	
△ 1944	昭和19	1/15~17	東京 寿々本	（仮名手本 忠臣蔵）	七（由良之助－浪花・おかる－緑・平右衛門－都＝新造）。 ※義太夫特選会。 ※『浄瑠璃月報』第83号に拠る。	
1944	昭和19	2/1~	四ツ橋文楽座	仮名手本忠 臣蔵 道行旅路の 嫁入の段よ り 山科閑居の 段まで	道行旅路の嫁入（娘小浪－伊達・妻戸無瀬－呂／南部・ツレ 津磨／ 宮・隅若／司・津磨／宮＝喜左衛門・友衛門／松之輔・燕三・勝太 郎・友衛門／松之輔・猿二郎）、山科閑居の段（前 呂＝仙糸／／南 部＝寛治郎、後 織＝清二郎）。	加古川本蔵（玉助）、戸無瀬（紋十郎）、娘 小浪（栄三郎）、大星力弥（紋司）、大星由 良之助（栄三）、妻お石（小兵吉）。
1945	昭和20	1/1~25	四ツ橋文楽座	仮名手本忠 臣蔵	祇園一力茶屋の段（由良之助－大隅・力弥－津磨・重太郎－呂・喜太 八－源・弥五郎－浜・仲居－松島・おかる－伊達・仲居－八十・仲居 －呂和・亭主－富／司・伴内－富／司・九太夫－重・平右衛門－相生 ＝前 清八、後 吉五郎／喜左衛門）。	大星力弥（文枝）、鷺坂伴内（玉徳）、傾城 おかる（紋十郎）、斧九太夫（門造）、大星 由良之助（玉助）、寺岡平右衛門（亀松）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1945	昭和20	9/13~16	京都 南 座	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入りの段(掛合)。 ※『昭和の南座 資料編(上)』、『文楽人形の芸術』、「京都新聞」(8月27~28・30~31日・9月1・6~7・12~13日の広告)に拠る。	(不明)
1945	昭和20	10/5~12	朝日会館	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入(娘小浪一日替り 南部/伊達・母戸無瀬一浜・富・松島=仙糸・広助・一郎右衛門・新三郎・一日替り 寛治郎/喜左衛門)。	戸無瀬(亀松)、小浪(栄三郎)。
△ 1945	昭和20	10/23~ 30	京都 京 都 座	道行旅路嫁 入	※歌舞伎公演。文楽座太夫三味線特別出演。 ※『近代歌舞伎年表 京都篇』に拠る。	
1945	昭和20	11/2~7	朝日会館	仮名手本忠 臣蔵	祇園一力茶屋の段(由良之助一織・おかる一伊達・平右衛門一つばめ/浜・九太夫一松島=喜左衛門)。	おかる(栄三郎)、九太夫(駒三郎)、由良之助(玉助)、平右衛門(光造)。
1946	昭和21	2/1~24	四ツ橋文楽座	旅路の嫁入	道行の段(小浪一和・戸無瀬一織/伊達・つばめ・宮・隅若・司・南都・千駒=松之輔・団六・友十郎・市治郎・錦糸・吉蔵・寛弘・勝太郎・八造・猿二郎)。 ※文楽座復興第1回記念。 ※千種楽は「朝日新聞(大阪)」(2月20日の広告)に拠る。	戸無瀬(光造)、小浪(栄三郎)。
△ 1946	昭和21	3/28	京都 西洞院にしき	(仮名手本 忠臣蔵)	鶴ヶ岡(織=団六)、桃の井館(伊達=喜左衛門)、大下馬先(浜=重造)、刃傷(古靱=清六)、裏門(雛=団六)。 ※第2回古靱を聴く会。 ※『文楽興行記録昭和篇』書入れに拠る。	
1946	昭和21	3/31~ 4/14	京都 南 座	旅路の嫁入	道行の段(小浪一和・戸無瀬一浜・ツレ 隅若・松島・駒尾=松之輔・八造・友十郎・新三郎・猿二郎)。	母戸無瀬(光造)、娘小浪(栄三郎)。
1946	昭和21	6/6~	京都 南 座	下の巻 旅路の嫁入	(織・浜・和・隅寿=団六・八造・新三郎・叶太郎・猿二郎・松之輔)。 ※歌舞伎公演。文楽座太夫三味線特別出演。	
△ 1947	昭和22	4/27	京都 西洞院にしき	(仮名手本 忠臣蔵)	扇ヶ谷から城明渡し(古靱=清六)、山崎街道(つばめ=市治郎)、勘平切腹(古靱=清六)。 ※第13回古靱を聴く会。 ※『文楽興行記録昭和篇』書入れに拠る。	
△ 1947	昭和22	4/29	京都 知恩院境内源 光院	(仮名手本 忠臣蔵)	山科閑居(織=団六)。 ※春秋会。 ※『文楽興行記録昭和篇』に拠る。	
△ 1947	昭和22	10/5	箱根 環 翠 楼	(仮名手本 忠臣蔵)	殿中(松島=新三郎)。 ※『文楽興行記録昭和篇』に拠る。	
△ 1947	昭和22	10/24	ラジオ放送	旅路嫁入	(雛)。 ※「朝日新聞」「読売新聞」(10月24日)に拠る。	
1948	昭和23	1/28	京都 西洞院にしき	仮名手本忠 臣蔵	殿中刃傷の段(松島=新三郎)。 ※山城を聴く会第3次第5回。	
△ 1948	昭和23	2/29	京都 西洞院にしき	(仮名手本 忠臣蔵)	下馬先、殿中、裏門(綱=弥七)、判官切腹(綱=弥七)。 ※第14回幕間友の会。忠臣蔵研究会。 ※『幕間』(昭和23年3月号)に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1948	昭和23	4/1~	四ツ橋文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序兜改めの段より九段目まで	大序 兜改めより恋歌の段まで（足利直義公一浜・高野師直一七五三・顔世御前一宮・桃井若狭之助一越名・塩谷判官一松島＝勝太郎／市治郎／錦糸）、殿中刃傷の段（七五三＝広助）、裏門の段（越名＝仙松改め 仙二郎）、花籠の段（雛＝重造／つばめ＝友衛門）、塩谷判官切腹の段（住＝吉五郎改め 吉兵衛／相生＝清二郎）、霞ヶ関の段（松島＝友十郎）、二つ玉の段（浜＝寛治郎・胡弓 寛弘）、身売の段（住＝吉五郎改め 吉兵衛／相生＝清二郎）、早野勘平腹切りの段（山城少掾＝清六）、祇園一力茶屋の段（由良之助一山城少掾・力弥一古住・重太郎一雛／つばめ・喜太八一隅若・弥五郎一司・仲居一織部・おかる一伊達・仲居一織の・仲居一相次・亭主一富・伴内一松・九太夫一源・平右衛門一大隅＝吉五郎改め 吉兵衛）、道行旅路の嫁入（娘小浪一松・妻戸無瀬一呂／綱・ツレ 古住・織部・呂賀＝綱造・松之輔／弥七・勝太郎／市治郎／錦糸・一郎右衛門・新三郎）、山科閑居の段（前 呂＝松之輔／綱＝弥七、後 大隅＝清八）。 ※九代野沢吉五郎改め八代野沢吉兵衛・豊沢仙松改め三代豊沢仙二郎襲名披露。 ※50日間（『文楽興行記録昭和篇』書入れに拠る）。	高野師直（光造）、桃井若狭之助（玉男）、塩谷判官（紋十郎）、顔世御前（紋司）、加古川本蔵（玉市）、妻戸無瀬（紋十郎）、娘小浪（光造）、大星力弥（紋之助）、鷺坂伴内（玉徳）、早野勘平（紋十郎）、腰元おかる・女房おかる・遊女おかる（文五郎）、斧九太夫（玉市）、大星由良之助（玉助）、百姓与市兵衛（兵次）、斧定九郎（玉助）、与市兵衛女房（紋太郎）、寺岡平右衛門（亀松）、妻お石（紋司）。
1948	昭和23	5/1~20	四ツ橋文楽座	仮名手本忠臣蔵 大序兜改めの段より九段目山科閑居の段まで	大序 兜改めより恋歌の段まで（足利直義公一呂／綱・高師直一住／相生・顔世御前一源／雛・桃井若狭之助一七五三・塩谷判官一隅若＝松之輔／弥七）、殿中刃傷の段（大隅＝清八）、裏門の段（隅若＝市治郎）、扇ヶ谷の段（山城少掾＝清六）、霞ヶ関の段（隅若＝市治郎）、二つ玉の段（七五三＝重造／友衛門・胡弓 寛弘）、身売の段（源＝勝太郎／雛＝錦糸）、早野勘平腹切りの段（呂＝松之輔／綱＝弥七）、祇園一力茶屋の段（大星由良之助一つばめ・大星力弥一織部・矢間重太郎一源／雛・竹森喜太八一富・千崎弥五郎一松島・仲居一相次・遊女おかる一松・仲居一織の・仲居一呂賀・亭主一宮・鷺坂伴内一古住・斧九太夫一司・寺岡平右衛門一浜＝前 寛治郎、後 綱造）、道行旅路の嫁入（娘小浪一越名・妻戸無瀬一宮・織の・相次・呂賀＝吉兵衛／清二郎・叶太郎／友十郎・仙二郎・団作・寛弘・勝太郎／錦糸）、山科閑居の段（前 伊達＝喜左衛門、後 住＝吉兵衛／相生＝清二郎）。 ※4月公演の総配役を変更（「朝日新聞（大阪）」（4月29日の広告）に拠る）。 ※千種楽は『松竹百年史』に拠る。	高師直（玉助）、桃井若狭之助（紋司）、塩谷判官（光造）、顔世御前（紋之助）、加古川本蔵（殿中＝兵次、山科閑居＝玉助）、妻戸無瀬（光造）、娘小浪（紋司）、大星力弥（光次）、鷺坂伴内（紋昇）、早野勘平（亀松）、腰元おかる・女房おかる・遊女おかる（文五郎）、斧九太夫（玉徳）、大星由良之助（紋十郎）、与市兵衛（兵次）、斧定九郎（玉徳）、与市兵衛女房（紋太郎）、寺岡平右衛門（玉助）、妻お石（亀松）。
1948	昭和23	7/30	京都西洞院にしき	誠忠義士銘一伝	お軽身売の段（中 越名＝市治郎）、勘平切腹の段（切 山城少掾＝清六）。 ※山城会第4次第3回。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1948	昭和23	8/14~21	京都 南 座	仮名手本忠臣蔵	大序 兜改めより恋歌の段（直義公－浜・師直－七五三・顔世御前－宮・若狭之助－越名・判官－松島＝勝太郎／市治郎／錦糸）、殿中刃傷の段（七五三＝友衛門）、裏門の段（越名＝叶太郎）、扇ヶ谷の段（大隅＝清八）、霞ヶ関の段（松島＝燕三）、二ツ玉の段（浜＝寛治郎・胡弓 寛弘）、身売の段（一日替り 雛／つばめ＝清二郎）、勤平切腹の段（山城少掾＝清六）、一力茶屋の段（由良之助－山城少掾・力弥－古住・重太郎－雛／つばめ・喜太八－隅若・弥五郎－司・仲居－織部・おかる－伊達・仲居－織の・亭主－富・仲居－相次・伴内－松・九太夫－源・平右衛門－相生＝弥七改め 藤四郎・喜左衛門）、道行旅路の嫁入（小浪－松・戸無瀬－呂／綱・古住・織部・呂賀＝綱造・松之輔／弥七・勝太郎／市治郎／錦糸・一郎右衛門・新三郎・寛弘）、山科閑居の段（前 呂＝松之輔／綱＝弥七、後 住＝吉五郎改め 吉兵衛）。 ※番付には「十三日より二十日まで」とあるが、私鉄ストのため14～21日（『義太夫年表 昭和篇』に拠る）。	高野師直（光造）、桃井若狭之助（玉男）、塩谷判官（亀松）、顔世御前（紋司）、加古川本蔵（玉市）、妻戸無瀬（紋十郎）、娘小浪（光造）、大星力弥（紋之助）、鷺坂伴内（玉徳）、早野勘平（紋十郎）、腰元おかる・女房おかる・遊女おかる（文五郎）、斧九太夫（玉市）、大星由良之助（玉助）、百姓与市兵衛（兵次）、斧定九郎（玉助）、与市兵衛女房（紋太郎）、寺岡平右衛門（亀松）、妻お石（紋司）。
1948	昭和23	9/17~24	東京 東京劇場	仮名手本忠臣蔵	大序 兜改めより恋歌の段まで（直義公－雛／浜・師直－七五三・顔世御前－宮・若狭之助－越名・判官－松島＝勝太郎／市治郎／錦糸）、殿中刃傷の段（七五三＝広助）、裏門の段（越名＝叶太郎）、扇ヶ谷の段（大隅＝清八）、霞ヶ関の段（松島＝燕三）、二ツ玉の段（雛／浜＝友衛門・胡弓 寛弘）、身売の段（源／つばめ＝清二郎）、勤平切腹の段（山城少掾＝清六）、一力茶屋の段（由良之助－山城少掾・力弥－古住・重太郎－源／つばめ・喜太八－隅若・弥五郎－司・仲居－呂賀・おかる－伊達・仲居－織の・仲居－相次・亭主－織部・伴内－松・九太夫－雛／浜・平右衛門－相生＝前 清六、後 喜左衛門）、道行旅路の嫁入の段（小浪－松・戸無瀬－呂／綱・古住・織部・呂賀＝綱造・松之輔／弥七・勝太郎・市治郎・錦糸・新三郎・団作）、山科閑居の段（前 呂＝松之輔／綱＝弥七、後 住＝吉五郎改め 吉兵衛）。	高野師直（玉徳）、桃井若狭之助（玉男）、塩谷判官（亀松）、顔世御前（紋司）、加古川本蔵（玉市）、妻戸無瀬（紋十郎）、娘小浪（光造）、大星力弥（紋之助）、伴内（光造）、早野勘平（紋十郎）、おかる・女房おかる・傾城おかる（文五郎）、斧九太夫（玉市）、大星由良之助（玉助）、百姓与一兵衛（兵次）、斧定九郎（玉助）、与一兵衛女房（紋太郎）、寺岡兵（ママ）右衛門（亀松）、女房お石（紋司）。
1948	昭和23	10/9~11/25	大阪歌舞伎座	旅路の嫁入	（松・浜・越名＝松之輔・八造・清友・叶太郎）。 ※歌舞伎公演。文楽太夫三味線特別出演。	
1948	昭和23	12/11~17	神戸 八千代座	仮名手本忠臣蔵 大序兜改めの段より 祇園一力茶屋の段まで	大序 兜改めより恋歌の段（足利直義公－隅若＝新三郎／清友）、殿中刃傷の段より裏門の段まで（浜＝八造）、扇ヶ谷の段（相生＝綱造）、霞ヶ関の段（相次＝新三郎）、二ツ玉の段（隅若＝新三郎／清友）、身売の段（雛＝八造）、早野勘平腹切の段（大隅＝清八）、祇園一力茶屋の段（由良之助－相生・力弥・重太郎・おかる－雛・九太夫・弥五郎－隅若・喜多八・仲居・亭主－相次・伴内・平右衛門－浜＝松之輔、広助）。	高野師直（玉市）、桃井若狭之助（和夫）、塩谷判官（亀松）、顔世御前（紋司）、加古川本蔵（万次郎）、大星力弥（光次）、鷺坂伴内（紋司）、早野勘平（光造）、腰元おかる・女房おかる・傾城おかる（文五郎）、斧九太夫（兵次）、大星由良之助（玉助）、百姓与市兵衛（登一）、斧定九郎（玉助）、与市兵衛女房（兵次）、寺岡平右衛門（亀松）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1948	昭和23	12/19~21	地方公演 (四国)	仮名手本忠臣蔵	大序 兜改めより恋歌の段、殿中刃傷の段、裏門の段、塩谷判官切腹の段、二ツ玉の段、身売の段、早野勘平腹切の段、祇園一力茶屋の段、道行旅路の嫁入。 ※12月19日徳島・堀江聖天座、12月20日香川・昭栄座、12月21日香川・丸亀劇場での公演を含む。 ※「徳島民報」(12月17日の広告)、「四国新聞」(12月18・20日の広告)に拠る。	(不明)
△ 1949	昭和24	1/16	浜松 江東劇場 (組合)	仮名手本忠臣蔵	道行 八ツ目。 ※組合派巡業の内。1月18日愛知県知多市・喜楽座で同公演あり。 ※「浜松民報」(1月15日の広告)、知多市・喜楽座看板の写真に拠る。	
1949	昭和24	4/15	淡路 湊 劇場 (因会)	仮名手本忠臣蔵	祇園一力茶屋の段(大星由良之助-大隅・大星力弥・亭主-相次・矢間重太郎-相生・たけ森喜太八・鷺坂伴内-隅若・千崎弥五郎・斧九太夫-雛・遊女おかる-松・寺岡平右衛門-浜=清八)。	大星力弥(光次)、鷺坂伴内(紋司)、遊女おかる(文五郎)、斧九太夫(玉市)、大星由良之助(玉助)、寺岡平右衛門(亀松)。
		4/16			殿中刃傷の段(浜=八造)、裏門の段(雛=清友)、塩谷判官切腹の段(相生=松之輔)、二ツ玉の段(隅若=新三郎)、身売の段(松=八造)、早野勘平切腹の段(大隅=清八)、祇園一力茶屋の段(大星由良之助-大隅・大星力弥・亭主-相次・矢間重太郎-相生・たけ森喜太八・鷺坂伴内-隅若・千崎弥五郎・斧九太夫-雛・遊女おかる-松・寺岡平右衛門-浜=清八)、道行旅路の嫁入(娘小浪-雛・妻戸無瀬-浜・相次=八造・清友・新三郎・清好)、加古川本蔵下邸の段(相生=松之輔)。 ※淡路巡業の内。	高師直(玉市)、桃井若狭之助(殿中刃傷=和夫、本蔵下邸=玉男)、塩谷判官(亀松)、顔世御前(紋司)、加古川本蔵(殿中刃傷=万次郎、本蔵下邸=玉市)、妻戸無瀬(亀松)、娘小浪(紋司)、大星力弥(光次)、鷺坂伴内(紋司)、早野勘平(光造)、腰元おかる・女房おかる・遊女おかる(文五郎)、斧九太夫(玉市)、大星由良之助(玉助)、与市兵衛(登一)、斧定九郎(玉助)、与市兵衛女房(兵次)、寺岡平右衛門(亀松)。
1949	昭和24	5/7~12	東京 有 楽 座 (因会)	忠 臣 蔵	一力茶屋の段(大星由良之助-山城少掾・大星力弥・矢間重太郎-松・千崎弥五郎・亭主-隅若・竹森喜多八-相次・遊女おかる-雛・斧九太夫-相生・鷺坂伴内-浜・寺岡平右衛門-大隅=前 清六、後 清八)、道行旅路の嫁入(娘小浪-松・戸無瀬-雛・ツレ 隅若・相次=広助・八造・新三郎・清友・清好)。 ※「一力茶屋の段」を別狂言に差し替え、「道行旅路の嫁入」の戸無瀬を豊竹山城少掾、豊沢広助の代わりに鶴沢清六・野沢松之輔とある異版プログラムあり。 ※吉田文五郎休演のため、妻戸無瀬を吉田玉男が代演(『吉田玉男文楽藝話』に拠る)。	妻戸無瀬(文五郎)、娘小浪(光造)、大星力弥(光次)、鷺坂伴内(紋司)、遊女おかる(文五郎)、斧九太夫(兵次)、大星由良之助(玉助)、寺岡平右衛門(亀松)。
△ 1949	昭和24	5/14	松江 出雲劇場 (組合)	仮名手本忠臣蔵	祇園一力茶屋の段。 ※「島根新聞」西部版(5月6・13日の広告)に拠る。	
△ 1949	昭和24	6/20~21	神戸 湊川神社儀式 殿七生館 (組合)	(仮名手本忠臣蔵)	一力茶屋(由良之助-住・おかる-伊達・平右衛門-呂)。 ※「神戸新聞」(6月21日)に拠る。	(不明)

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割	
1949	昭和24	8~9/16	地方公演 (北海道・東北・静岡) 〈因会〉	忠 臣 蔵	道行旅路の嫁入の段(娘小浪一松・妻戸無瀬一山城少掾・宮・織の・相次=清六・松之輔・八造・清友・新三郎)。 ※9月12日仙台・東北劇場での公演を含む。 ※千種楽は「京都新聞」(9月13日)に拠る。	妻戸無瀬(亀松)、娘小浪(紋司)。	
1949	昭和24	9/12~14	松坂屋会館 〈組合〉	仮名手本忠臣蔵	一力茶屋(由良之助一呂・力弥一古住・九太夫一源・おかる一越名・重太郎一富・弥五郎一松島・喜多八一英・仲居一呂賀・平右衛門一七五三=清二郎)。	力弥(紋二郎)、おかる(紋之助)、九太夫(紋太郎)、由良之助(紋十郎)、平右衛門(紋昇)。	
△	1949	昭和24	10/9	宇治山田市 平和座 〈組合〉	仮名手本忠臣蔵	道行の段。 ※伊勢路巡業(10月7~9日)の内。 ※「夕刊三重」(10月8日の広告)に拠る。	(不明)
1949	昭和24	11/6	京都 祇園会館 〈組合〉	(仮名手本忠臣蔵)	山科。 ※故五代桐竹門造追福浄瑠璃大会。人形入。		
△	1950	昭和25	3/6	長崎市 西日本会館 〈組合〉	仮名手本忠臣蔵	八段目 旅路の嫁入。 ※九州巡業(15日間)の内。 ※「長崎日日新聞」(3月3日の広告)に拠る。	(不明)
1950	昭和25	3/19~23	東京 新橋演舞場 〈因会〉	仮名手本忠臣蔵	大序 兜改めより恋歌の段(足利直義公一松・高野師直一浜・顔世御前一宮・桃井若狭之助一相次・塩谷判官一織の=新三郎/清友)、殿中刃傷の段(切 相生=松之輔)、裏門の段(松=八造)、扇ヶ谷の段(切 山城少掾=弥七)、霞ヶ関の段(弘=新三郎/清友)、二ツ玉の段(斧定九郎一綱・百姓与市兵衛一隅若・早野勘平一浜=豊助・胡弓 寛弘)、身売の段(雛=広助)、勘平切腹の段(切 大隅=清八)、祇園一力茶屋の段(由良之助一山城少掾・力弥一織の・重太郎一綱・喜太八一雛・弥五郎一隅若・仲居一織の・仲居一相次・おかる一松・仲居一弘・亭主一宮・伴内一浜・九太夫一相生・平右衛門一大隅=前 豊助、後 清八)、道行旅路の嫁入(娘小浪一雛・母戸無瀬一浜・ツレ 織部・織の=広助・八造・新三郎・清友)、山科閑居の段(切 前 綱=弥七、後 相生=松之輔)。	高野師直(玉市)、桃井若狭之助(和夫)、塩谷判官(光造)、顔世御前(紋司)、加古川本蔵(三段目=常次、九段目=玉市)、母戸無瀬(光造)、娘小浪(紋司)、大星力弥(光次)、鷺坂伴内(玉男)、早野勘平(亀松)、腰元おかる・娘おかる・傾城おかる(文五郎)、斧九太夫(常次)、大星由良之助(玉助)、百姓与市兵衛(登一)、斧定九郎(玉助)、与市兵衛女房(兵次)、寺岡平右衛門(亀松)、女房お石(玉男)。	
1950	昭和25	4/1~26	四ツ橋文楽座 〈因会〉	仮名手本忠臣蔵	祇園一力茶屋の段(由良之助一山城少掾・力弥一宮・重太郎一綱・喜太八一雛・弥五郎一隅若・仲居一織の・おかる一松・仲居一弘・仲居一相次・亭主一織部・伴内一相生・九太夫一大隅・平右衛門一浜改メ津=前 豊之助改メ 豊助、後 寛治郎)。 ※五代竹本浜太夫改め四代竹本津太夫、豊沢豊之助改め豊沢豊助、三代吉田光造改め二代吉田栄三、吉田和夫改め吉田文雀襲名披露。 ※千種楽は『松竹百年史』に拠る。	大星力弥(和夫改め 文雀)、鷺坂伴内(玉男)、傾城おかる(文五郎)、斧九太夫(兵次)、大星由良之助(玉助)、寺岡平右衛門(光造改め 栄三)。	
△	1950	昭和25	4/1~2	高知 堀 詰 座 〈組合〉	忠 臣 蔵	一力茶屋の段。 ※高知・北陸巡業の内。4月12日富山・富山座、4月18日金沢市・北国第一劇場で同公演あり。 ※「高知新聞」(4月2日の記事、3月28日・4月2日の広告)、「富山新聞」(4月6・12日の広告)、「北陸夕刊」(4月10日の広告)、「石川新聞」(4月16日の記事、4月17日の広告)、「北国新聞」(4月11・17日の広告)に拠る。	(不明)

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1950	昭和25	5/1	石巻 岡田劇場 〈組合〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋の段。 ※東北・北海道巡業の内。 ※5月5～6日函館・宝劇場、5月11日小樽・松竹映画劇場、5月13日帯 広・帯広劇場で同公演あり。 ※「石巻新聞」（4月30日の広告）、「石巻日日新聞」（4月28日の広 告）、「函館新聞」（4月30日の記事、5月5～6日の広告）、『三和会 公演控』、『文楽因会三和会興行記録』、「北海タイムス」（5月9日 の記事、5月3・9日の広告）、「北海道新聞（札幌市内）」（5月12日 の広告）に拠る。	（不明）
1950	昭和25	5/12～	地方公演 （北陸・東 海・伊勢） 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	祇園一力茶屋の段（由良之助一山城少掾・力弥一宮・重太郎一綱・喜 太八一雛・弥五郎一隅若・仲居一織の・おかる一松・仲居一弘・仲居 一相次・亭主一織部・伴内一相生・九太夫一隅・平右衛門一浜改め 津＝前 豊之助改め 豊助、後 寛治郎）。 ※5月12～13日新潟市・宝塚劇場での公演を含む（「新潟日報」（5月 8日の広告）、『幕間』（昭和25年7月号）に拠る）。	力弥（和夫改め 文雀）、鷺坂伴内（玉男）、 傾城おかる（文五郎）、斧九太夫（兵次）、 大星由良之助（玉助）、寺岡平右衛門（光造 改め 栄三）。
1950	昭和25	5/31	東京 三越劇場 〈組合〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（住・伊達・つばめ・越名・源＝綱造・吉兵衛・喜左 衛門・友衛門・清二郎・叶太郎）。 ※第5回三越名人会。	
1950	昭和25	6/7～12	東京 三越劇場 〈組合〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（娘小浪一越名・母戸無瀬一司・ツレ 松島・古住・ 呂賀・源＝吉兵衛・勝太郎・吉三郎・喜左衛門・叶太郎・市治郎・猿 二郎）。	戸無瀬（紋昇）、小浪（紋之助）。
1950	昭和25	7/6～	地方公演 （東北・中 部） 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入の段（娘小浪一松・母戸無瀬一綱・ツレ 織部・相次 ＝八造・新三郎・友十郎・寛弘）。 ※豊竹山城少掾休演。竹本綱太夫が代演し、又代わりに母戸無瀬を豊 竹河内太夫が代った模様（『文楽興行記録昭和篇』に拠る）。	妻戸無瀬（栄三）、娘小浪（紋司）。
1950	昭和25	8/20～27	名古屋 御 園 座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋の段（由良之助一相生・力弥・喜多八一織部・重太郎一雛・ 弥五郎一宮・亭主一弘・おかる一松・仲居一織の・仲居一相次・伴内 一長子・九太夫一河内・平右衛門一浜改め 津＝前 豊之助改め 豊 助、後 松之輔）。	力弥（和夫改め 文雀）、伴内（紋司）、おか る（亀松）、九太夫（兵次）、由良之助（玉 助）、平右衛門（玉市）。
1950	昭和25	10/21	兵庫 兵庫県立加古 川東高等学校 講堂 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入。 ※兵庫県立加古川東高等学校体育会主催「文楽観賞会」。	（不明）
1950	昭和25	11/1～8	三越劇場 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（小浪一源／七五三・戸なせ一源／七五三・松島・古 住・呂賀・伊達路＝清二郎・叶太郎／吉三郎・勝太郎／錦糸・一郎右 衛門・仙二郎・団作・猿二郎）。	母戸無瀬（紋昇）、娘小浪（紋之助）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1950	昭和25	11/4~19	四ツ橋文楽座 〈因会〉	仮名手本忠臣蔵 大序兜改めの段より 祇園一力の段まで	大序 兜改めより恋歌の段まで（足利直義公一宮・高野師直一織の・顔世御前一織部・桃井若狭之助一相次・塩谷判官一弘＝寛弘）、大星力弥上使の段（長子＝友十郎）、桃井邸松切の段（静＝八造）、下馬先進物の段（織部／織の＝新三郎）、殿中刃傷の段（津＝寛治郎）、裏門の段（松＝豊助）、扇ヶ谷塩谷判官切腹の段（相生＝松之輔）、霞ヶ関城明渡しの段（相次＝新三郎）、山崎街道の段（宮＝清友）、二ツ玉の段（河内＝豊助・胡弓 寛弘）、身売の段（雛＝広助）、早野勘平切腹の段（綱＝弥七）、祇園一力茶屋の段（大星由良之助一犬隅・大星力弥一織部／織の・矢間重太郎一雛・竹森喜太八一河内・千崎弥五郎一長子・仲居一織の／織部・おかる一松・仲居一相次・亭主一弘・鷺坂伴内一静・斧九太夫一相生・寺岡平右衛門一綱＝清八）。 ※千種楽は『幕間』（昭和25年12月号）に拠る。 ※吉田玉助休演のため、由良之助の四段目を吉田玉男が、七段目を桐竹紋太郎が代演（『吉田玉男文楽藝話』、『人形有情 吉田玉男文楽芸談聞き書き』に拠る）。	高野師直（玉助）、桃井若狭之助（玉男）、塩谷判官（栄三）、顔世御前（紋司）、加古川本蔵（玉市）、妻戸無瀬（常次）、娘小浪（文雀）、大星力弥（光次）、鷺坂伴内（紋司）、早野勘平（亀松）、こし元おかる・娘おかる・おかる（文五郎）、斧九太夫（兵次）、大星由良之助（玉助）、百姓与市兵衛（登一）、斧定九郎（玉男）、与市兵衛女房（兵次）、寺岡平右衛門（玉市）。
1951	昭和26	1/15	西宮 日芸会館 〈三和会〉	仮名手本忠臣蔵	道行旅路嫁入りの段（小浪一越名・戸無瀬一つばめ・古住・呂賀・伊達＝清二郎・市治郎・燕三・勝太郎・猿二郎）。	戸無瀬（紋昇）、小浪（紋之助）。
1951	昭和26	3/3~18	四ツ橋文楽座 〈因会〉	仮名手本忠臣蔵	道行旅路の嫁入（雛・宮／長子・織部・相次・十九・宮／長子＝広助・友十郎・寛弘・新三郎・錦糸）、山科閑居の段（切 綱＝弥七、相生＝松之輔）。 ※千種楽は『松竹百年史』に拠る。	加古川本蔵（玉市）、戸無瀬（道行＝文五郎、山科閑居＝亀松）、娘小浪（玉五郎）、大星力弥（光次）、大星由良之助（玉助）、妻お石（玉男）。
1951	昭和26	3/23	西 元 寺 〈因会〉	仮名手本忠臣蔵	殿中刃傷の段（十九＝弥七）。 ※文楽の青年太夫、三味線の勉強会「双葉会」第1回公演。	
△ 1951	昭和26	7/28	岐阜 岐阜市公会堂 〈因会〉	（仮名手本忠臣蔵）	旅路の嫁入。 ※『文楽興行記録昭和篇』に拠る。	（不明）
1951	昭和26	10/29	山本能楽堂 〈因会〉	仮名手本忠臣蔵	三段目 殿中刃傷の段（十九＝寛弘）。 ※大阪春秋会第1回研究会。	
1951	昭和26	12/5~9	東京 三越劇場 〈三和会〉	仮名手本忠臣蔵	大序 兜改めの段（直義公一古住・判官一松島・若狭之助一伊達路・顔世一呂賀・師直一司＝猿二郎）、三段目 殿中刃傷の段（七五三＝叶太郎）、裏門の段（松島＝市治郎）、四段目 判官切腹の段（切 住＝勝太郎）、霞ヶ関の段（伊達路＝一郎右衛門）、五段目 山崎街道二ツ玉の段（司＝燕三・胡弓 勝平）、六段目 おかる身売の段（源＝吉三郎）、勘平切腹の段（切 若＝綱造）、七段目 祇園一力の段（由良之助一若・九太夫一七五三・力弥一呂賀・重太郎一古住・おかる一伊達・弥五郎一松島・喜多八一伊達路・伴内一司・平右衛門一住＝綱造）、八段目 道行旅路の嫁入（戸無瀬一源・小浪一呂賀・ツレ 松島・伊達路＝吉三郎・勝太郎・仙二郎・団作・猿治郎）、九段目 山科閑居の段（前 伊達＝喜左衛門、後 つばめ＝市治郎）。 ※吉田玉徳改め五代吉田辰五郎襲名披露。	高野師直（玉徳改め 辰五郎）、桃井若狭之助（勘十郎）、塩谷判官（紋十郎）、顔世御前（国秀）、加古川本蔵（三段目＝要助、九段目＝勘十郎）、母戸無瀬（紋十郎）、娘小浪（紋之助）、大星力弥（紋二郎）、鷺坂伴内（作十郎）、早野勘平（紋十郎）、おかる（紋之助）、斧九太夫（四段目＝要助、七段目＝駒三郎）、大星由良之助（玉徳改め 辰五郎）、与市兵衛（駒三郎）、斧定九郎（勘十郎）、母親（国秀）、寺岡平右衛門（勘十郎）、お石（国秀）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割	
1951	昭和26	12/6~16	四ツ橋文楽座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	祇園一力茶屋の段（由良之助一相生・力弥一織部・重太郎一長子・喜 太八一織の・弥五郎一十九・仲居一相次・おかる一松・仲居一弘・亭 主一相次／弘・伴内一宮・九太夫一河内・平右衛門一津＝前 広助、 後 清八）。	大星力弥（光次）、鷺坂伴内（文雀）、遊女 おかる（文五郎）、斧九太夫（兵次）、大星 由良之助（玉助）、寺岡平右衛門（亀松）。	
1951	昭和26	12/10~ 17	地方公演 （関東・東 海） 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	殿中松の間判官刃傷の段（高野師直一松島・塩谷判官一古住・桃井若 狭之助一伊達路・加古川本蔵一呂賀＝一郎右衛門、団作）、裏門の段 （司＝猿二郎）、扇ヶ谷塩治判官切腹の段（前 つばめ＝市治郎、後 住＝勝太郎）、お軽身売の段（伊達＝喜左衛門）、早野勘平切腹の段 （若＝燕三）、祇園一力茶屋場の段（大星由良之助一若・大星力弥一 呂賀・仲居一美津・仲居一勝・矢間重太郎一司・千崎弥五郎一松島・ 竹森喜多八一伊達路・仲居一叶美・亭主一喜代・寺岡平右衛門一つば め・お軽一伊達＝前 叶太郎、後 喜左衛門）、本蔵下屋敷の段（住＝ 勝太郎・琴 勝平）、道行旅路嫁入りの段（娘小浪一古住・母戸無瀬 一呂賀・ツレ 松島・伊達路＝叶太郎・市治郎・燕三・一郎右衛門・ 団作・勝平）。	高野師直（玉徳改め 辰五郎）、桃井若狭之助 （三段目＝紋之助、本蔵下屋敷＝勘十郎）、 塩谷判官（勘十郎）、顔世御前（国秀）、加 古川本蔵（三段目＝要助、本蔵下屋敷＝玉徳 改め 辰五郎）、母戸無瀬（紋十郎）、娘小浪 （紋之助）、大星力弥（四段目＝紋二郎、七 段目＝紋弥）、鷺坂伴内（作十郎）、早野勘 平（紋十郎）、おかる（三・六段目＝紋之 助、七段目＝紋十郎）、斧九太夫（四段目＝ 要助、七段目＝駒三郎）、大星由良之助（玉 徳改め 辰五郎）、母親（国秀）、寺岡平右衛 門（勘十郎）。	
1951	昭和26	12/18	三島 東海劇場 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	大序 兜改めの段（直義公一古住・判官一松島・若狭之助一伊達路・ 顔世一呂賀・師直一司＝猿二郎）、三段目 殿中刃傷の段（七五三＝ 叶太郎）、裏門の段（松島＝市治郎）、四段目 判官切腹の段（切 住 ＝勝太郎）、霞ヶ関の段（伊達路＝一郎右衛門）、五段目 山崎街道 二つ玉の段（司＝燕三・胡弓 勝平）、六段目 おかる身売の段（源＝ 吉三郎）、勘平切腹の段（切 若＝綱造）、七段目 祇園一力の段（由 良之助一若・九太夫一七五三・力弥一呂賀・重太郎一古住・おかる一 伊達・弥五郎一松島・喜多八一伊達路・伴内一司・平右衛門一住＝綱 造）、八段目 道行旅路の嫁入（戸無瀬＝源・小浪一呂賀・ツレ 松 島・伊達路＝吉三郎・勝太郎・仙二郎・団作・猿治郎）、九段目 山 科閑居の段（前 伊達＝喜左衛門、後 つばめ＝市治郎）。 ※吉田玉徳改め五代吉田辰五郎襲名披露。	高野師直（玉徳改め 辰五郎）、桃井若狭之助 （勘十郎）、塩谷判官（紋十郎）、顔世御前 （国秀）、加古川本蔵（三段目＝要助、九段 目＝勘十郎）、母戸無瀬（紋十郎）、娘小浪 （紋之助）、大星力弥（紋二郎）、鷺坂伴内 （作十郎）、早野勘平（紋十郎）、おかる （紋之助）、斧九太夫（四段目＝要助、七段 目＝駒三郎）、大星由良之助（玉徳改め 辰五 郎）、与市兵衛（駒三郎）、斧定九郎（勘十 郎）、母親（国秀）、寺岡平右衛門（勘十 郎）、お石（国秀）。	
△	1951	昭和26	12/19	藤枝 旭 光 座 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	三段目、四段目、六段目、七段目、道行、本蔵下屋敷。 ※『三和会公演控』、『文楽因会三和会興行記録』に拠る。	
△	1951	昭和26	12/26	ラジオ放送 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	鶴ヶ岡兜改めの段（綱・織・他）。 ※「朝日新聞」「毎日新聞」（12月26日）に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割	
1952	昭和27	1/9~16	三越劇場 〈三和会〉	仮名手本忠臣蔵	殿中刃傷の段（松島＝一郎右衛門／友若）、裏門の段（古住＝仙二郎／団作）、扇ヶ谷判官切腹の段（前 司＝猿二郎、後 伊達＝市治郎）、霞ヶ関城明渡しの段（伊達路＝一郎右衛門／団作）、ニツ玉の段（七五三＝燕三・胡弓 勝平）、おかる身売の段（源＝叶太郎）、勘平住家の段（切 住＝勝太郎）、一力茶屋の段（由良之助一住・力弥一伊達路・仲居一住代・亭主一喜久・九太夫一七五三・おかる一伊達・伴内一勝・重太郎一司・弥五郎一松島・喜多八一呂賀・平右衛門一つばめ＝喜左衛門）、道行旅路の嫁入の段（小浪一呂賀・戸無瀬一古住・ツレ 松島・伊達路・源＝吉三郎・燕三・一郎右衛門／友若・仙二郎／団作・勝平・勝太郎）、山科閑居の段（切 若＝綱造）。 ※吉田玉徳改め五代吉田辰五郎襲名披露。 ※「山科閑居」は六つの人形で十八人出演しているが人形遣いは十六人、若手の太夫、三味線を出すか（『幕間』（昭和27年2月号））。	高野武蔵守師直（玉徳改め 辰五郎）、桃井若狭之助（紋二郎）、塩谷判官高定（勘十郎）、顔世御前（国秀）、加古川本蔵（三段目＝紋之丞、九段目＝勘十郎）、母戸無瀬（紋十郎）、娘小浪（紋之助）、大星力弥（紋二郎）、鷺坂伴内（作十郎）、早野勘平（紋十郎）、おかる（三・六段目＝紋之助、七段目＝紋十郎）、斧九太夫（駒三郎）、大星由良之助（玉徳改め 辰五郎）、与市兵衛（駒三郎）、斧定九郎（勘十郎）、母親（国秀）、寺岡平右衛門（勘十郎）、お石（国秀）。	
△	1952	昭和27	1/12	ラジオ放送 〈三和会〉	仮名手本忠臣蔵	（呂賀、他）。 ※「毎日新聞」（1月12日）に拠る。	
	1952	昭和27	2/16~	和歌山 白水座 〈三和会〉	仮名手本忠臣蔵	殿中刃傷の段（松島＝友若）、裏門の段（古住＝猿二郎）、判官切腹の段（つばめ＝市治郎）、ニツ玉の段（司＝燕三・胡弓 勝平）、おかる身売の段（伊達＝喜左衛門）、勘平住家の段（住＝勝太郎）、一力茶屋の段（由良之助一住・力弥一伊達路・仲居一源・九太夫一古住・おかる一伊達・重太郎一司・弥五郎一松島・喜多八一呂賀・平右衛門一つばめ＝喜左衛門）、道行旅路の嫁入の段（小浪一呂賀・戸無瀬一古住・ツレ 伊達路・松島＝吉三郎・市治郎・一郎右衛門・団作・勝平・友若）、本蔵下邸の段（源＝叶太郎・琴 勝平）。	高野武蔵守師直（玉徳改め 辰五郎）、桃井若狭之助（三段目＝紋二郎、本蔵下邸＝勘十郎）、塩谷判官高定（勘十郎）、顔世御前（国秀）、加古川本蔵（三段目＝紋之丞、本蔵下邸＝辰五郎）、母戸無瀬（紋十郎）、娘小浪（紋之助）、大星力弥（紋二郎）、鷺坂伴内（作十郎）、早野勘平（紋十郎）、おかる（三・六段目＝紋之助、七段目＝紋十郎）、斧九太夫（駒三郎）、大星由良之助（玉徳改め 辰五郎）、与市兵衛（駒三郎）、斧定九郎（勘十郎）、母親（国秀）、寺岡平右衛門（勘十郎）。
△	1952	昭和27	5/18	兵庫 兵庫県立加古川東高等学校講堂 〈三和会〉	忠 臣 蔵	殿中刃傷、裏門、判官切腹、勘平住家、一力茶屋の場。 ※人形浄瑠璃鑑賞会。 ※「神戸新聞」東播版（5月15日）、『三和会公演控』、『文楽因会三和会興行記録』に拠る。	（不明）
	1952	昭和27	5/22~24	名古屋 松坂屋ホール 〈三和会〉	仮名手本忠臣蔵 殿中刃傷より 山科閑居まで	殿中刃傷の段（松島＝一郎右衛門）、裏門の段（古住＝勝太郎）、判官切腹の段（前 司＝猿二郎、後 伊達＝市治郎）、城開渡しの段（伊達路＝団作）、山崎街道の段（七五三＝燕三・胡弓 勝平）、おかる身売の段（源＝叶太郎）、勘平住家の段（切 住＝勝太郎）、一力茶屋の段（由良之助一住・力弥一伊達路・九太夫一七五三・仲居一勝・おかる一伊達・仲居一住代・重太郎一司・弥五郎一松島・喜多八一呂賀・平右衛門一つばめ＝喜左衛門）、道行旅路嫁入（小浪一呂賀・戸なせ一古住・松島・伊達路・源＝叶太郎・燕三・団作・勝平・猿二郎）、山科閑居の段（切 若＝綱造）。 ※五代吉田辰五郎襲名披露。	師直（玉徳改め 辰五郎）、若狭之助（紋二郎）、判官（勘十郎）、顔世（国秀）、本蔵（三段目＝紋之丞、九段目＝勘十郎）、戸なせ（紋十郎）、小浪（紋之助）、力弥（紋二郎）、伴内（作十郎）、勘平（紋十郎）、おかる（三・六段目＝紋之助、七段目＝紋十郎）、九太夫（駒三郎）、由良之助（玉徳改め 辰五郎）、与一兵衛（駒三郎）、定九郎（勘十郎）、母親（国秀）、平右衛門（勘十郎）、お石（国秀）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1952	昭和27	7/9~13	東京 新橋演舞場 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	祇園一力茶屋の段（由良之助一綱・力弥一織部・重太郎一相生・喜多八一宮・弥五郎一長子・仲居一弘・おかる一松・仲居一十九・仲居一弘・亭主一織の・伴内一雛・九太夫一河内・平右衛門一津＝清六）。	大星力弥（光次）、鷺坂伴内（文雀）、遊女おかる（亀松）、斧九太夫（兵次）、大星由良之助（光次）、寺岡平右衛門（玉市）。
1952	昭和27	7/14~19	東京 新橋演舞場 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	大序 鶴ヶ岡兜改めの段（足利直義公一山城少掾・高師直一綱・顔世御前一松・桃井若狭之助一相生／津・塩谷判官一津／南部＝藤蔵）。	高師直（玉助）、桃井若狭之助（亀松）、塩谷判官（玉市）、顔世御前（文五郎）。
1952	昭和27	8/20~24	四ツ橋文楽座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	祇園一力茶屋の段。 ※女義太夫合同公演に文楽座人形特別出演。	傾城おかる（栄三）、由良之助（玉助）、寺岡平右衛門（玉市）。
1952	昭和27	9/12~21	中 座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	祇園一力茶屋の段（由良之助一相生・力弥一織部・重太郎一静・喜多八一多満・弥五郎一十九・仲居一弘・おかる一南部・仲居一十九・仲居一亭主一相次・伴内一長子・九太夫一河内・平右衛門一津＝松之輔、清八）。	大星力弥（文雀）、鷺坂伴内（玉五郎）、遊女おかる（亀松）、斧九太夫（兵次）、大星由良之助（玉助）、寺岡平右衛門（栄三）。
1952	昭和27	9/24	呉 本願寺会館 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵 殿中刃傷よ り 一力茶屋ま で	殿中刃傷の段（松島＝猿二郎）、裏門の段（呂賀＝一郎右衛門、団作）、塩谷判官館の段（つばめ＝勝太郎）、おかる身売りの段（古住＝叶太郎）、早野勘平住家の段（若＝市治郎）、一力茶屋場の段（由良之助一若・力弥一伊達路・おかる一伊達・九太夫一松島・平右衛門一七五三＝喜左衛門）。	（不明）
1952	昭和27	9/27	山口 旧防府商業学 校講堂 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	殿中刃傷の段（松島＝猿二郎）、裏門の段（呂賀＝団作）、判官切腹の段（つばめ＝勝太郎）、おかる身売りの段（源＝叶太郎）、勘平切腹の段（若＝市治郎）、祇園一力茶屋の段（由良之助一住・力弥一伊達路・仲居一住代・亭主一喜久・九太夫一七五三・おかる一伊達・伴内一勝・重太郎一司・弥五郎一松島・喜多八一呂賀・平右衛門一つばめ＝喜左衛門）、本蔵下屋敷の段（住＝勝太郎・琴友若）、道行旅路嫁入の段（小浪一呂賀・戸無瀬一古住・ツレ 松島・伊達路・源＝吉三郎・燕三・一郎右衛門／友若・仙二郎／団作・勝平・勝太郎）。	師直（辰五郎）、若狭之助（三段目＝紋二郎、本蔵下屋敷＝紋十郎）、塩谷判官（勘十郎）、顔世御前（紋之丞）、本蔵（三段目＝要助、本蔵下屋敷＝辰五郎）、母戸無瀬（紋十郎）、娘小浪（紋之助）、大星力弥（紋二郎）、鷺坂伴内（作十郎）、早野勘平（紋十郎）、おかる（三・六段目＝紋之助、七段目＝紋十郎）、斧九太夫（駒三郎）、大星由良之助（辰五郎）、母親（国秀）、寺岡平右衛門（勘十郎）。
1952	昭和27	10/3~22	四ツ橋文楽座 〈因会〉	裏表忠臣蔵	加古川本蔵下邸の段（中 相次／十九＝寛弘、切 相生＝広助・琴 寛弘）、道行旅路の花嫁（娘小浪一松・母戸無瀬一雛・ツレ 長子・弘・相次／十九＝清六・八造・錦糸・新三郎・清好・清友）、山科閑居の段（切 綱＝弥七）、弥作鎌腹の段（津＝寛治郎）。 ※山科閑居「九段目は綱太夫が受持つ。一人で語るのは先代津太夫以来、十数年ぶり」（「朝日新聞（大阪）」（10月22日））。おこがましく云々の山城の口上書つき。	加古川本蔵（玉市）、母戸無瀬（道行＝文五郎、山科＝亀松）、娘小浪（道行＝栄三、山科＝紋太郎）、大星力弥（光次）、大星由良之助（玉助）、女房お石（玉男）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1952	昭和27	10/21	大分中津市 東映劇場 〈三和会〉	(仮名手本 忠臣蔵)	刃傷(松島=猿二郎)、裏門(呂賀=一郎右衛門/団作)、判官切腹 (つばめ=市治郎)、身売(古住=勝太郎)、勘平切腹(源=叶太 郎)、一力(由良之助-つばめ・お軽-伊達・平右衛門-七五三=喜 左衛門)。 ※10月11日熊本・歌舞伎座で同公演あり。 ※「熊本日日新聞」(10月11日の記事と広告)、『文楽興行記録昭和 篇』書入れに拠る。	(不明)
		11/3	徳島 歌舞伎座 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋の段。 ※九州・四国巡業の内。10月30日高知・高知市中央公民館、10月31日 高知・後免町日の出座で同公演あり。 ※「高知新聞」(10月15・29~30日の広告)、「徳島民報」(11月2 日の広告)、「徳島新聞」(11月2・4日)に拠る。	(不明)
△ 1952	昭和27	11/5	ラジオ放送 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	(雛、他)。 ※「朝日新聞」「毎日新聞」(11月5日)に拠る。	
△ 1952	昭和27	11/7	奈良 奈良県立郡山 高等学校講堂 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	※文楽人形浄瑠璃第4回公演。 ※「奈良日日新聞」(11月8日)に拠る。	
△ 1952	昭和27	11/12	ラジオ放送 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	(つばめ、他)。 ※「朝日新聞」「毎日新聞」(11月12日)に拠る。	
△ 1952	昭和27	11/19	ラジオ放送 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	(綱、他)。 ※「朝日新聞」「毎日新聞」(11月19日)に拠る。	
△ 1952	昭和27	11/26	ラジオ放送 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	(住、他)。 ※「朝日新聞」「毎日新聞」(11月26日)に拠る。	
	昭和27	11/29	東京 三越劇場 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋の段(由良之助-若・おかる-伊達・平右衛門-つばめ=喜 左衛門)。 ※第35回三越名人会。	
△ 1952	昭和27	12/10	ラジオ放送 〈三和会〉	忠 臣 蔵	祇園一力茶屋(伊達・若)。 ※「朝日新聞」「読売新聞」(12月10日)に拠る。	
△ 1952	昭和27	12/17	ラジオ放送 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の花嫁(松=清六)。 ※「朝日新聞」「毎日新聞」(12月17日)に拠る。	
△ 1952	昭和27	12/24	ラジオ放送 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	山科閑居(若=綱造・他)。 ※「朝日新聞」「毎日新聞」(12月24日)に拠る。	
△ 1952	昭和27	12/30	ラジオ放送 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	山科閑居の段(津、他)。 ※「朝日新聞」「毎日新聞」(12月30日)に拠る。	
	昭和28	4/1~25	東京 歌舞伎座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	八段目 道行旅路の嫁入(妻戸無瀬-相生・長子・相次・弘・娘小浪 -松=清六・松之輔・八造・清友・新三郎・清好)。 ※歌舞伎公演。文楽座連中出演。	
△ 1953	昭和28	9/5	ラジオ放送 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	四段目 判官切腹の段(山城少掾=藤蔵)。 ※「朝日新聞」「毎日新聞」(9月5日)に拠る。	
	昭和28	9/26	四ツ橋文楽座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	山科閑居の段。 ※人形浄瑠璃素義会。	加古川本蔵(玉市)、母戸無瀬(亀松)、娘 小浪(玉五郎)、大星力弥(光次)、大星由 良之助(玉助)、女房お石(玉男)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1953	昭和28	10/25～ 26	姫路 姫路公会堂 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	殿中刃傷の段から一力茶屋の段まで（由良之助－住・おかる－伊達）、本蔵下邸の段。 ※「神戸新聞」姫路版（10月24・27日）、『三和会公演控』、『文楽因会三和会興行記録』に拠る。	おかる（紋十郎）、由良之助（辰五郎）。
△ 1953	昭和28	10/31	横浜 横浜海員会館 ホール 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋。 ※「神奈川新聞」（10月23日）に拠る。	
△ 1953	昭和28	12/30	ラジオ放送 〈因会〉	忠 臣 蔵	九段目 山科跡仕舞の段（雛＝錦糸）。 ※「朝日新聞」「毎日新聞」（12月30日）に拠る。	
△ 1954	昭和29	3/20	ラジオ放送 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	六段目 勘平切腹の段（山城少掾＝藤蔵）。 ※「朝日新聞」「毎日新聞」（3月20日）に拠る。	
1954	昭和29	5/1～20	四ツ橋文楽座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵 大序兜改め の段より 山科閑居の 段まで	大序 兜改めより恋歌の段（足利直義－織の・高野師直－静／長子・顔世御前－南部・桃井若狭助－十九・塩谷判官－伊達路＝豊助）、大下馬先進物の段（静＝吉三郎）、殿中刃傷の段（切 相生＝松之輔／津＝寛治郎）、扇ヶ谷判官切腹の段（切 相生＝松之輔／津＝寛治郎）、霞ヶ関城明渡しの段（伊達路＝清好）、旅路の花聳（おかる／勘平－伊達／松・伴内－雛・織部・弘＝清六・八造・清友・新三郎・清好）、山崎街道二ツ玉の段（長子＝錦糸・胡弓 清治）、身売りの段（宮改め 和佐＝清八）、勘平切腹の段（切 山城少掾＝藤蔵）、一力茶屋の段（由良之助－山城少掾・力弥－綱子・重太郎－相生・喜太八－長子・弥五郎－静・仲居－弘・おかる－伊達・仲居－相次・仲居－伊達路・亭主－織部・伴内－南部・九太夫－雛・平右衛門－津＝前 藤蔵、後 寛治郎）、道行旅路の嫁入（娘小浪－宮改め 和佐・戸無瀬－雛・織の・織部・十九・津の子・相子＝広助・八造・友十郎・寛弘・団二郎・藤二郎・喜八郎）、山科閑居の段（切 綱＝弥七）。 ※豊竹宮太夫改め五代竹本和佐太夫襲名披露。 ※千種楽は『松竹百年史』に拠る。 ※鶴沢清六＝作曲・山村若＝振付・釘町久磨治（ママ）＝装置（「旅路の花聳（落人）」）。 ※5月19日「一力茶屋の段」ラジオ放送（「朝日新聞（大阪）」「毎日新聞（大阪）」（5月19日）に拠る。	高野師直（玉助）、桃井若狭之助（紋太郎）、塩谷判官（亀松）、顔世御前（玉五郎）、加古川本蔵（玉市）、戸無瀬（栄三）、娘小浪（玉五郎）、大星力弥（文昇）、鷺坂伴内（玉男）、早野勘平（栄三）、おかる（道行＝玉五郎、六・七段目＝文五郎）、斧九太夫（兵次）、大星由良之助（玉助）、百姓与市兵衛（淳造）、斧定九郎（光次）、与市兵衛女房（紋太郎）、寺岡平右衛門（亀松）、女房お石（玉男）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1954	昭和29	5/21	四ツ橋文楽座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	大序 兜改めの段（直義一相生・師直一綱・顔世一伊達・若狭之助一 津・塩谷判官一長子＝豊助）、殿中刃傷の段（師直一綱子・判官一津 の子・若狭之助一相子・本蔵一南部＝松之輔）、扇谷判官切腹の段よ り霞ヶ関の段まで（十九＝寛治郎）、山崎街道二ツ玉の段（相次＝錦 糸・胡弓 清治）、身売の段（弘＝新三郎）、勘平切腹の段（織の＝ 藤蔵）、道行旅路の嫁入（娘小浪一織部・母戸無瀬一伊達路・南部・ 相次・弘・十九・津＝寛弘・弥七・団二郎・寛治郎・藤二郎・八造・ 清友・吉三郎）。 ※第4回文楽座因会若手勉強会。 ※「兜改め」～「刃傷」は素浄瑠璃。四段目の大星由良之助の左は吉 田玉助、六段目の早野勘平の左は吉田栄三。	塩谷判官（文雀）、顔世御前（光次）、母戸 無瀬（文昇）、娘小浪（文雀）、大星力弥 （玉幸）、早野勘平（光次）、女房おかる （小玉）、大星由良之助（玉昇）、百姓与市 兵衛（淳造）、斧定九郎（玉昇）、与市兵衛 女房（紋太郎）。
1954	昭和29	6/1～6	東京 三越劇場 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋の段（由良之助一若・力弥一若子・重太郎一住・弥五郎一 源・喜多八一つばめ・おかる一呂賀・仲居一三和・仲居一小松・九太 夫一松島・平右衛門一古住＝燕三）。	大星力弥（紋寿）、おかる（紋十郎）、斧九 太夫（紋市）、大星由良之助（辰五郎）、寺 岡平右衛門（勘十郎）。
1954	昭和29	6/16～20	東京 新橋演舞場 〈因会〉	落人	（お軽／勘平一伊達／松・伴内一雛＝清六・清友・新三郎・清好）。 ※鶴沢清六＝作曲、山村若＝振付。	伴内（玉男）、勘平（栄三）、おかる（玉五 郎）。
1954	昭和29	9/30～ 10/4	四ツ橋文楽座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	祇園一力茶屋の段。 ※人形浄瑠璃女義太夫大顔合せ特別公演。	遊女おかる（玉五郎）、大星由良之助（玉 助）、寺岡平右衛門（栄三）。
1955	昭和30	1/8～13	三越劇場 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋の段（由良之助一つばめ・重太郎一住・弥五郎一若・喜多八 一源・力弥一小松・おかる一呂・仲居一若子・伴内一松島・九太夫一 三和・平右衛門一古住＝前 猿二郎、後 燕三）。	力弥（紋弥）、伴内（紋二郎）、おかる（紋 之助）、九太夫（紋市）、大星由良之助（辰 五郎）、平右衛門（勘十郎）。
1955	昭和30	2/9～13	東京 三越劇場 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	裏門（勘平一小松・おかる一三和・伴内一若子＝勝平）。 ※第2回三和会若手勉強会。	伴内（紋寿）、勘平（紋弥）、おかる（勘之 助）。
1955	昭和30	5/25～26	和歌山 和歌山市民会 館 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋の段（由良之助一相生・力弥一相子・重二（ママ）郎一織 の・喜多八一十九・弥五郎一伊達路・おかる一雛・仲居一相子・亭主 一相次・伴内一織部・九太夫一南部・平右衛門一津＝吉三郎、寛治 郎）。	大星力弥（玉幸）、鷺坂伴内（玉市）、遊女 おかる（栄三）、斧九太夫（兵次）、大星由 良之助（玉助）、寺岡平右衛門（玉男）。
1955	昭和30	6/22	新潟 新潟劇場 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋（由良之助一つばめ・力弥一小松・おかる一呂・九太夫一松 島・平右衛門一古住＝勝太郎）。	力弥（紋弥）、おかる（紋之助）、九太夫 （紋之丞）、由良之助（辰五郎）、平右衛門 （勘十郎）。
1955	昭和30	7/6～8	名古屋 御 園 座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（相生・雛・織部・弘・相子＝松之輔・八造・清友・ 新三郎・団二郎・藤二郎）。	戸無瀬（文五郎）、娘小浪（栄三）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1955	昭和30	9	地方公演 (東海・他) 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	兜改めより恋歌(直義一弘・師直一織の・顔世一織部・若狭之助一十 九・判官一伊達路=新三郎)、刃傷(津=寛弘)、裏門(南部=錦 糸)、判官切腹(切綱=弥七)、霞ヶ関(伊達路=団二郎)、ニツ 玉(織の=清友)、身売(雛=八造)、勘平切腹(切山城少掾=藤 蔵)、弥作鎌腹(津=寛弘)、一力(由良之助一山城少掾・力弥一織 部・重太郎一織の・喜多八一弘・弥五郎一十九・おかる一伊達・亭 主・仲居一伊達路・伴内一南部・九太夫一雛・平右衛門一綱=藤蔵、 弥七)、道行(南部・雛・弘・伊達路=清友・錦糸・新三郎・団二 郎・藤二郎)。	師直(玉助)、若狭之助(玉男)、判官(亀 松)、顔世(玉五郎)、本蔵(常次)、戸無 瀬(亀松)、小浪(玉五郎)、力弥(文 昇)、伴内(玉市)、勘平(栄三)、おかる (裏門・一力=文五郎、身売=玉五郎)、九 太夫(兵次)、由良之助(玉助)、与市兵衛 (淳造)、定九郎(玉助)、与市兵衛女房 (常次)、平右衛門(亀松)。
1955	昭和30	11/7	東京 新橋演舞場 〈合同〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋の段(大星由良助一山城少掾・大星力弥一織部・間(ママ) 重太郎一雛・竹森喜多八一織の・千崎弥五郎一十九・おかる一伊達・ 亭主一弘・仲居一伊達路・伴内一松・九太夫一綱・平右衛門一津=寛 治郎、藤蔵)。 ※芸術祭合同公演。	大星力弥(玉幸)、伴内(玉五郎)、おかる (前=文五郎、後=亀松)、九太夫(玉 市)、大星由良助(玉助)、平右衛門(玉 男)。
1955	昭和30	11/10~ 24	四ツ橋文楽座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	祇園一力茶屋の段(由良之助一綱・力弥一綱子・重太郎一織の・弥五 郎一弘・喜多八一十九・仲居一津の子・おかる一松・仲居一相次・仲 居一相子・亭主一伊達路・伴内一和佐・九太夫一静・平右衛門一津= 前 寛治郎、後 清六)。 ※四ツ橋文楽座訣別興行。 ※竹田出雲200年祭記念。	大星力弥(光次)、鷺坂伴内(玉男)、遊女 おかる(栄三)、斧九太夫(兵次)、大星由 良之助(玉助)、寺岡平右衛門(亀松)。
1955	昭和30	12/20~ 21	神戸 繊維会館 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋の段(由良之助一綱・力弥一綱子・重太郎一織の・喜多八一 織部・弥五郎一伊達路・仲居一弘・仲居一津の子・仲居一相子・おか る一伊達・亭主一相次・伴内一和佐・九太夫一静・平右衛門一相生= 弥七、八造)。	力弥(小玉)、伴内(玉五郎)、おかる(栄 三)、九太夫(兵次)、大星由良之助(玉 助)、平右衛門(亀松)。
1956	昭和31	1/29~30	奈良 天理教館 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋の段(大星由良之助一綱・大星力弥一織部・矢間重太郎一織 部・竹森喜多八一織の・千崎弥五郎一伊達路・遊女おかる一伊達・亭 主一相次・鷺坂伴内一和佐・斧九太夫一静・寺坂(ママ)平右衛門一 津=前 弥七、後 寛治)。	力弥(玉昇)、伴内(玉市)、おかる(亀 松)、九太夫(兵次)、由良之助(玉助)、 平右衛門(玉男)。
1956	昭和31	2/14~19	京都 祇園甲部歌舞 練場 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入(娘小浪一織部・母戸無瀬一織の・伊達路・相子=広 助・清友改メ 徳太郎・清好・藤二郎・団二郎)。	母戸無瀬(玉男)、娘小浪(玉五郎)。
1956	昭和31	2/26	姫路 姫路市公会堂 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋(由良之助一つばめ・重太郎一松島・弥五郎一常子・喜多八 一真砂・おかる一源・九太夫一小松・力弥一貴代・平右衛門一古住= 前 猿二郎、後 叶太郎)。	力弥(紋弥)、おかる(紋之助)、九太夫 (小紋)、由良之助(辰五郎)、平右衛門 (勘十郎)。
1956	昭和31	3/10	福岡 大博劇場 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋の段(由良之助一つばめ・重太郎一松島・弥五郎一常子・喜 多八一真砂・おかる一源・九太夫・仲居一小松・力弥一貴代・平右衛 門一古住=前 猿二郎、後 叶太郎)。	大星力弥(紋弥)、おかる(紋十郎)、父九 太夫(小紋)、大星由良之助(辰五郎)、寺 岡平右衛門(勘十郎)。
1956	昭和31	5/2~	道頓堀文楽座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入(雛・伊達・長子・和佐・南部・静・相次・織部・十 九・弘・相子・伊達路=清八・広助・豊助・八造・吉三郎・猿糸・徳 太郎・錦糸・団六・清好・団二郎・藤二郎)。	母戸無瀬(栄三)、娘小浪(文五郎)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1956	昭和31	6/17~21	東京 東横ホール 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（娘小浪－南部・母戸無瀬－織の・弘・十九・伊達路 ＝藤蔵・錦糸・清好・藤二郎・豊助）。	母戸無瀬（栄三）、娘小浪（玉五郎）。
1956	昭和31	6/29~30	中央公会堂 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋（由良之助－綱／相生・力弥－綱子／相子・重太郎－相生／ 綱・弥五郎－十九／織の・喜多八－松／津・おかる－伊達／松・仲居 －相子／十九・仲居－織部／弘・仲居－玉丸・亭主－相次／伊達路・ 伴内－弘／和佐・九太夫－長子／静・平右衛門－津／雛＝広助／清 八、寛治／清六）。	力弥（玉幸）、伴内（栄三）、おかる（前＝ 文五郎、後＝玉五郎）、九太夫（玉市）、由 良之助（玉助）、平右衛門（玉昇）。
1956	昭和31	11/3~27	道頓堀文楽座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	大序 兜改めより恋歌の段（足利直義公－伊達・高師直－津・顔世御 前－松・桃井若狭助－相生・塩谷判官－綱＝清八）、二段目 桃井邸 の段（相生＝松之輔）、三段目 殿中刃傷の段（津＝寛治）、裏門の 段（早野勘平－南部・腰元おかる－織部・鷺坂伴内－長子・ツレ 相 子＝八造）、四段目 判官切腹の段（綱＝弥七）、霞ヶ関城明渡しの 段（静＝喜八郎・ツレ 藤二郎・藤之助）、五段目 ニツ玉の段（早野 勘平－雛・斧定九郎－織の・百姓与市兵衛－静＝広助・胡弓 団二 郎）、六段目 身売の段（毎日替り 伊達／松＝吉三郎）、勘平切腹の 段（毎日替り 伊達／松＝清六）、七段目 祇園一力茶屋の段（大星由 良助－山城少掾・大星力弥－綱子・矢間（ママ）重太郎－静・竹森喜 太八－織の・千崎弥五郎－長子・仲居－伊達路・おかる－伊達・仲居 －相次・仲居－津の子・仲居－相子・鷺坂伴内－和佐・斧九太夫－ 雛・寺岡平右衛門－津＝前 清八、後 藤蔵）、八段目 道行旅路の嫁 入（松・雛・南部・織部・弘＝清六・吉三郎・徳太郎・新三郎・清 好・清治）、引拔 三人座頭（座頭福の市－相生・座頭徳の市－静・ 座頭玉の市－織の＝広助・猿糸・錦糸）、九段目 山科閑居の段（中 和佐＝猿糸、前 綱＝弥七、後 津＝寛治）、十段目 天河屋の段（伊 達＝松之輔・ツレ 団六）、十一段目 義士引揚の段（大星由良助－長 子・桃井若狭助－織の・大星力弥－津の子・原郷右衛門－弘・千崎弥 五郎－十九・矢間（ママ）重太郎－伊達路・諸士－相次＝豊助）。 ※「初代吉田栄三十三回忌追善」（筋書）。	高師直（玉助）、桃井若狭助（玉男）、塩谷 判官（亀松）、顔世御前（玉五郎）、加古川 本蔵（玉市）、妻戸無瀬（栄三）、小浪（玉 五郎）、大星力弥（玉昇）、鷺坂伴内（東太 郎）、早野勘平（栄三）、おかる（裏門～一 力〈前〉＝文五郎、一力〈後〉＝玉五郎）、 斧九大夫（兵次）、大星由良助（玉助）、百 姓与市兵衛（兵次）、斧定九郎（玉男）、与 市兵衛女房（常次）、寺岡平右衛門（亀 松）、妻お石（玉男）、天河屋義平（亀 松）、女房おその（常次）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1956	昭和31	12/17~ 23	東京 東横ホール 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵 通し狂言	鶴ガ岡兜改めより恋歌の段まで（足利直義一伊達・高師直一津・顔世御前一松・桃井若狭之助一相生・塩谷判官一綱一藤蔵）、松伐りの段（相生＝松之輔）、殿中刃傷の段（津＝寛治）、裏門の段（早野勘平一南部・腰元おかる一織部・鷺坂伴内一和佐・家来一相子＝八造）、塩谷判官切腹の段（綱＝弥七）、霞ヶ関城明渡しの段（静＝錦糸・ツレ 藤二郎・藤之助）、二ツ玉の段（早野勘平一雛・斧定九郎一織の・与市兵衛一静＝豊助・胡弓 団二郎）、身売りの段（毎日替り 伊達／松＝吉三郎）、早野勘平切腹の段（毎日替り 伊達／松＝清六）、祇園一力茶屋の段（大星由良之助一相生・大星力弥一綱子・矢間重太郎一静・竹森喜多八一織の・千崎弥五郎一織部・仲居一伊達路・おかる一伊達・仲居一相次・仲居一相子・鷺坂伴内一和佐・斧九太夫一雛・寺岡平右衛門一津＝前 松之輔、後 藤蔵）、道行旅路の嫁入（松・雛・南部・織部・弘＝清六・吉三郎・徳太郎・錦糸・新三郎・清好）、引抜 三人座頭（福之市一相生・徳の市一静・玉の市一織の＝猿糸・錦糸・団六）、山科閑居の段（中 和佐＝猿糸、前 綱＝弥七、後 津＝寛治）、天河屋の段（伊達＝松之輔・ツレ 団六）、義士勢揃いの段（大星由良之助一和佐・桃井若狭之助一織の・大星力弥一相子・原郷右衛門一弘・千崎弥五郎一織部・矢間重太郎一伊達路・諸士一相次＝豊助）。	高師直（玉助）、桃井若狭之助（玉男）、塩谷判官（亀松）、顔世御前（玉五郎）、加古川本蔵（玉市）、妻戸無瀬（栄三）、娘小浪（玉五郎）、大星力弥（玉昇）、鷺坂伴内（東太郎）、早野勘平（栄三）、腰元おかる・娘おかる・おかる（裏門～一力〈前〉＝文五郎、一力〈後〉＝玉五郎）、斧九大夫（兵次）、大星由良之助（玉助）、百姓与市兵衛（兵次）、斧定九郎（玉男）、与市兵衛女房（常次）、寺岡平右衛門（亀松）、妻お石（玉男）、天河屋義平（亀松）、女房おその（常次）。
1957	昭和32	3/5~14	三越劇場 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（小浪一古住・戸無瀬一小松・ツレ 三和・常子・松島＝叶太郎・仙次郎・団作・八助・友若・市治郎・猿二郎）。	戸無瀬（勘十郎）、小浪（紋之助）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1957	昭和32	9/1~25	道頓堀文楽座 〈合同〉	仮名手本忠 臣蔵	大序 兜改めより恋歌の段（足利直義公-山城少掾・高師直-相生・顔世御前-土佐・桃井若狭助-松・塩谷判官-住=藤蔵）、二段目 大星力弥上使の段（織部/織の=錦糸）、加古川本蔵松切の段（津=寛治）、三段目 大下馬先進物の段（南部=徳太郎/古住=市治郎）、腰元おかる文使ひの段（源=叶太郎/難=八造）、松の間殿 中刃傷の段（綱=弥七）、道行旅路の花髻〈落人〉（腰元おかる-松・早野勘平-つばめ・鷺坂伴内-織の・織部・十九/弘・小松=清六・喜左衛門・吉三郎・徳太郎・新三郎・清好・藤之助）、四段目 花籠の段（土佐=松之輔）、石堂右馬之丞上使の段（住=勝太郎）、塩谷判官切腹の段（若=燕三）、霞ヶ関城明け渡しの段（静=喜八郎/長子=仙二郎）、五段目 山崎街道出会の段（早野勘平-和佐・千崎弥五郎-静=豊助）、二ツ玉の段（相生=松之輔・胡弓 清治）、六段目 身売りの段（津=寛治/つばめ=喜左衛門）、早野勘平住家の段（綱=弥七）、七段目 祇園一力茶屋の段（大星由良之助-前 住、後 綱・大星力弥-南部・矢間重太郎-つばめ/津・竹森喜多八-津/つばめ・千崎弥五郎-難・仲居-相次・仲居-相子・おかる-松・仲居-松子・仲居-常子・仲居-津の子・仲居-弘・鷺坂伴内-源・斧九太夫-相生・寺岡平右衛門-若=前 清八、後 清六）、八段目 道行旅路の嫁入（娘小浪-土佐・母戸無瀬-難・ツレ織部・十九・伊達路・津の子/相子=藤蔵・八造・燕三・団六・勝平・団二郎/藤二郎・猿二郎）、九段目 山科閑居の段（前 若=勝太郎、後 つばめ=喜左衛門/津=寛治）、大詰 光明寺焼香の段（大星由良助-長子・大星力弥-弘・寺岡平右衛門-織の・矢間重太郎-松島・諸士-三和=徳太郎/市治郎）。 ※鶴沢清六=作曲・山村若=振付（「道行旅路の花髻」）。	高師直（辰五郎）、桃井若狭之助（玉男）、塩谷判官（亀松）、顔世御前（文五郎事 難波掾）、加古川本蔵（玉市）、妻戸無瀬（二・九段目=紋十郎、八段目=栄三）、娘小浪（二・九段目=玉五郎、八段目=文五郎事 難波掾）、大星力弥（紋之助）、鷺坂伴内（玉五郎）、早野勘平（紋十郎）、腰元おかる・娘おかる・おかる（栄三）、斧九太夫（兵次）、大星由良助（玉助）、百姓与市兵衛（淳造）、斧定九郎（勘十郎）、与市兵衛女房（常次）、寺岡平右衛門（亀松）、女房お石（玉男）。
1957	昭和32	11/26	東京 三越劇場 〈合同〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（土佐・難/源・古住/織部・小松/伊達路=清六/藤蔵・八造/叶太郎・清好/燕三・勝平/団六・団二郎/藤二郎）、山科閑居の段（中 織の=団六/古住=燕三、前 綱=弥七/若=勝太郎、後 つばめ=喜左衛門/津=寛治）。 ※芸術祭文楽合同公演。	本蔵（玉市）、戸無瀬（栄三/紋十郎）、小浪（道行=難波掾/亀松、九段目=紋之助/玉五郎）、力弥（紋二郎/東太郎）、由良之助（玉助）、お石（玉男/勘十郎）。
1958	昭和33	2/4~6	姫路 やまと会館 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋（由良之助-住・力弥-常子・おかる-源・九太夫-松島・平右衛門-古住=叶太郎）。	力弥（紋寿/勘之助）、おかる（紋之助）、九太夫（紋市）、由良之助（辰五郎）、平右衛門（勘十郎）。
1958	昭和33	11/1~23	道頓堀文楽座 〈合同〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の花髻〈落人〉（おかる-土佐・勘平-松・伴内-津・ツレ小松・津の子=清六・八造・燕三・市治郎・清好・勝平）、山崎街道の段（静/織の=清八）、二ツ玉の段（相生=松之輔・胡弓 藤二郎）、身売りの段（津=寛治）、勘平切腹の段（若=勝太郎）、祇園一力茶屋の段（由良助-山城少掾・力弥-織部・重太郎-静・喜多八-古住・弥五郎-十九・仲居-伊達路・おかる-土佐・仲居-小松・仲居-津の子・伴内-南部・九太夫-相生・平右衛門-綱=前 弥七、後 藤蔵）。	大星力弥（紋二郎）、鷺坂伴内（玉五郎）、早野勘平（紋十郎）、腰元おかる・女房おかる（栄三）、遊女おかる（文五郎事 難波掾）、九太夫（辰五郎）、大星由良助（玉助）、百姓与市兵衛（国秀）、定九郎（勘十郎）、与市兵衛女房（辰五郎）、寺岡平右衛門（亀松）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1958	昭和33	11/24~25	神戸 神戸新聞会館 〈合同〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の花婿〈落人〉（おかる一土佐・勘平一松・伴内一津・ツレ小松・津の子＝清六・八造・燕三・市治郎・清好・勝平）、山崎街道の段（静／織の＝清八）、二ツ玉の段（相生＝松之輔・胡弓 藤二郎）、身売りの段（津＝寛治）、勘平切腹の段（若＝勝太郎）、祇園一力茶屋の段（由良助一山城少掾・力弥一織部・重太郎一静・喜多八一古住・弥五郎一十九・仲居一伊達路・おかる一土佐・仲居一小松・仲居一津の子・伴内一南部・九太夫一相生・平右衛門一綱＝前 弥七、後 藤蔵）。	大星力弥（紋二郎）、鷺坂伴内（玉五郎）、早野勘平（紋十郎）、腰元おかる・女房おかる（栄三）、遊女おかる（文五郎事 難波掾）、九太夫（辰五郎）、大星由良助（玉助）、百姓与市兵衛（国秀）、定九郎（勘十郎）、与市兵衛女房（辰五郎）、寺岡平右衛門（亀松）。
1959	昭和34	3/15~18	京都 南 座 〈合同〉	仮名手本忠 臣蔵	祇園一力茶屋の段（由良之助一相生・九太夫一古住・おかる一土佐・伴内一弘・平右衛門一津＝寛治）。	鷺坂伴内（作十郎）、遊女おかる（亀松）、斧九太夫（辰五郎）、大星由良之助（玉助）、寺岡平右衛門（栄三）。
1959	昭和34	5/2~26	大阪新歌舞伎 座 〈因会〉	仮名手本大 忠 臣 蔵	八段目 道行旅路の嫁入（雛・和佐・長子・相子＝八造・徳太郎・錦糸・新三郎）。 ※歌舞伎公演。文楽座大夫三味線特別出演。	
1959	昭和34	11/13~16	東京 新橋演舞場 〈合同〉	仮名手本忠 臣蔵	祇園一力茶屋の段（由良之助一綱・おかる一土佐・平右衛門一津・九太夫一弘＝弥七）。	傾城おかる（前＝難波掾、後＝玉五郎）、斧九太夫（国秀）、大星由良之助（玉助）、寺岡平右衛門（玉男／勘十郎）。
1960	昭和35	1/1~24	道頓堀文楽座 〈合同〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の花婿〈落人〉（おかる一土佐／松・勘平一つばめ／津・鷺坂伴内一織の・ツレ 小松・津の子＝松之輔・吉三郎・徳太郎／錦糸・市治郎・勝平・叶太郎）、祇園一力茶屋の段（大星由良之助一若・大星力弥一織の・矢間重太郎一南部・竹森喜多八一十九・千崎弥五郎一弘／伊達路・仲居一小松・おかる一松・仲居一津の子・仲居一相子・鷺坂伴内一静・斧九太夫一相生・寺岡平右衛門一津／つばめ＝前 喜左衛門、後 寛治）。	大星力弥（紋二郎）、鷺坂伴内（玉五郎）、早野勘平（玉男）、腰元おかる（栄三）、遊女おかる（紋十郎）、斧九太夫（辰五郎）、大星由良之助（玉助）、寺岡平右衛門（亀松）。
1960	昭和35	1/25	道頓堀文楽座 〈合同〉	仮名手本忠 臣蔵	祇園一力茶屋の段（大星由良之助一文字・大星力弥一若子・矢間重太郎一津・竹森喜多八一つばめ・千崎弥五郎一松・仲居一津弥・おかる一小松・仲居一松香・鷺坂伴内一相子・斧九太夫一伊達路・寺岡平右衛門一十九＝前 清治、後 団二郎）。 ※文楽座人形浄瑠璃若手勉強発表会。	大星力弥（勘之助）、鷺坂伴内（一暢）、おかる（文雀）、斧九太夫（玉之助）、大星由良之助（東太郎）、寺岡平右衛門（前＝玉幸、後＝小玉）。
1960	昭和35	1/26~27	道頓堀文楽座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の花婿〈落人〉、祇園一力茶屋の段。 ※文楽座人形浄瑠璃・女義太夫大合同公演。	鷺坂伴内（玉昇）、早野勘平（東太郎）、腰元おかる（文雀）、遊女おかる（亀松）、斧九太夫（兵次）、大星由良之助（玉助）、寺岡平右衛門（玉男）。
1960	昭和35	2/21~25	東京 新橋演舞場 〈合同〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（娘小浪一土佐・母戸無瀬一古住改め 文字・織の・伊達路・相子＝藤蔵・吉三郎・燕三・団六・藤二郎・叶太郎）、山科閑居の段（切 綱＝弥七）。	加古川本蔵（玉市）、母戸無瀬（道行＝栄三、山科＝紋十郎）、娘小浪（道行＝難波掾、山科＝玉五郎）、大星力弥（紋二郎）、大星由良之助（玉助）、妻お石（玉男）。
△ 1960	昭和35	10/25	奈良 天理教館 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	一力茶屋。 ※『文楽興行記録昭和篇』欄外記事に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1960	昭和35	11/3~	道頓堀文楽座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	大序 兜改めより恋歌の段（足利直義一相生・高師直一津・顔世御前 一土佐・桃井若狭助一大隅・塩谷判官一織の=重造）、三段目 文使 いの段（南部=錦糸）、松の間殿中刃傷の段（相生=重造）、裏門の 段（織の=徳太郎）、四段目 扇ヶ谷判官切腹の段（津=寛治）、霞 ヶ関城明け渡しの段（弘／伊達路=新三郎／団六）、五段目 ニツ玉 の段（勘平一長子・定九郎一十九・与市兵衛一弘／伊達路=吉三郎・ 胡弓 藤二郎）、六段目 身売りの段（土佐=藤蔵／松改め 春子= 松之輔）、勘平切腹の段（土佐=藤蔵／松改め 春子=松之輔）、 七段目 祇園一力茶屋の段（由良助一相生・力弥一綱子・重太郎一長 子・喜多八一弘／伊達路・弥五郎一津の子／相子・おかる一土佐・仲 居一津弥・仲居一松香・伴内一十九・九太夫一大隅・平右衛門一津= 前 重造、後 寛治）、八段目 道行旅路の嫁入（小浪一土佐・戸無瀬 一松改め 春子・南部・弘／伊達路・津弥／松香=藤蔵・松之輔・団 六・団二郎・藤二郎・錦糸）、九段目 山科閑居の段（中 長子=新三 郎、切 綱=弥七）。 ※豊竹松太夫改メ三代竹本春子太夫襲名披露。	高師直（玉助）、桃井若狭助（東太郎）、塩 谷判官（栄三）、顔世御前（玉男）、加古川 本蔵（玉市）、妻戸無瀬（栄三）、娘小浪 （玉五郎）、大星力弥（文雀）、鷺坂伴内 （文昇）、早野勘平（亀松）、腰元おかる （玉五郎）、娘おかる（文五郎事 難波 掾）、遊女おかる（前=難波掾、後=玉五 郎）、斧九太夫（兵次）、大星由良助（玉 助）、百姓与市兵衛（兵次）、斧定九郎（玉 昇）、与市兵衛女房（兵次）、寺岡平右衛門 （玉男）、妻お石（玉男）。
1961	昭和36	4/8~11	京都 南 座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（娘小浪一南部・母戸無瀬一織の・ツレ 津の子・津 弥・松香=吉三郎・徳太郎・錦糸・団六・藤二郎）、山科閑居の段 （前 土佐=藤蔵、後 相生=重造）。	加古川本蔵（玉市）、女房戸無瀬（毎日替 亀 松／栄三）、娘小浪（道行〈前〉=文五郎事 難波掾、道行〈後〉~山科閑居=玉五郎）、 大星力弥（玉昇）、大星由良之助（玉助）、 妻お石（玉男）。
1961	昭和36	4/22	東京 美術倶楽部 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	山科閑居（若=重造）、裏門（若子=勝平）。	
△ 1961	昭和36	4/27	兵庫カ 大野劇場 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	勘平切腹（つばめ=喜左衛門）。 ※『文楽興行記録昭和篇』欄外記事に拠る。	勘平（紋十郎）、母（国秀）。
1961	昭和36	6/27~ 7/2	東京 三越劇場 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（小浪一源・戸無瀬一文字・若子・小松／松島=叶太 郎・市治郎／燕三・団作／仙次郎・勝平／団作・勝之輔・猿二郎）。 ※紋二郎改メ三代吉田襄助襲名披露。	戸無瀬（紋十郎）、小浪（紋二郎改メ 襄 助）。
1962	昭和37	1/26~ 2/4	道頓堀文楽座 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の花聳（腰元おかる一南部・早野勘平一十九・鷺坂伴内一伊 達路・ツレ 津弥・松香=重造・吉三郎・新三郎・団二郎・清治）。 ※三世鶴沢清六=作曲・山村若=振付。	鷺坂伴内（東太郎）、早野勘平（玉男）、腰 元おかる（玉五郎）。
1962	昭和37	2/9~10	御堂会館 〈因会〉	道行旅路の 嫁入	（南部・織の・綱子=錦糸・団六・新三郎）。 ※歌舞伎公演。文楽座大夫三味線特別出演。	
1962	昭和37	3/26~29	御堂会館 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（源・文字・松島・若子=叶太郎・勝平・仙次郎・団 作・市治郎）。 ※紋二郎改メ三代吉田襄助襲名披露。初代野沢喜左衛門・二代鶴沢寛 治郎・四代野沢勝市追善。	母戸無瀬（紋十郎）、娘小浪（紋二郎改メ 襄 助）。
1962	昭和37	10/24	東京 本 牧 亭 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	山科閑居（若=猿之助）。 ※豊竹若大夫会。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1962	昭和37	12/8	名古屋 愛知文化講堂 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵	殿中刃傷の段（織の＝錦糸）、裏門の段（伊達路＝団六）、二ツ玉の段（十九＝徳太郎・胡弓 寛弘）、おかる身売の段（南部＝吉三郎）、早野勘平切腹の段（相生＝重造）、祇園一力茶屋の段（由良之助＝相生・力弥＝相子・重太郎＝織の・喜多八＝十九・弥五郎＝伊達路・おかる＝土佐・仲居＝津弥・仲居＝松香・伴内＝南部・九太夫＝大隅・平右衛門＝津＝前 寛治、後 藤蔵）。 ※『昭和37年度人形浄瑠璃因協会年報』に拠る。	高師直（玉市）、桃井若狭之助（小玉）、塩谷判官（玉男）、加古川本蔵（兵次）、大星力弥（一暢）、鷺坂伴内（玉五郎）、早野勘平（亀松）、おかる（栄三）、斧九太夫（淳造）、大星由良助（玉助）、百姓与市兵衛（淳造）、斧定九郎（玉昇）、与市兵衛女房（常次）、寺岡平右衛門（東太郎）。
1962	昭和37	12/10～ 16	地方公演 （四国） 〈因会〉	仮名手本忠 臣蔵 通し狂言	殿中刃傷の段（十九＝団六）、裏門の段（相子＝団二郎）、二ツ玉の段（伊達路＝新三郎）、身売の段（春子＝吉三郎）、勘平切腹の段（土佐＝藤蔵）、祇園一力茶屋の段（大星由良之助＝津・大星力弥＝津弥／松香・矢間重太郎・竹森喜多八・千崎弥五郎＝伊達路・仲居＝津弥・おかる＝南部・仲居＝松香・鷺坂伴内＝相子・斧九太夫＝十九・寺岡平右衛門＝織の＝前 錦糸、後 徳太郎）。 ※『昭和37年度人形浄瑠璃因協会年報』は「身売の段」の三味線を野沢錦糸とする。	高野師直（玉昇）、桃井若狭之助（一暢）、塩谷判官（文雀）、加古川本蔵（兵次）、大星力弥（一暢）、鷺坂伴内（小玉）、早野勘平（玉男）、おかる（玉五郎）、斧九太夫（兵次）、大星由良之助（玉市）、百姓与市兵衛（淳造）、斧定九郎（玉昇）、与市兵衛女房（常次）、寺岡平右衛門（東太郎）。
1962	昭和37	12/24	東京 本 牧 亭 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	大序 兜改めの段（若＝重造）、三段目 殿中刃傷の段（若子＝広若）、六段目 勘平住家の段（若＝重造）。 ※豊竹若大夫会。	
△ 1963	昭和38	2/22～ 3/9	地方公演 （関東） 〈三和会〉	仮名手本忠 臣蔵	旅路の嫁入（文字・小松・松島＝燕三・仙次郎・勝平・広若）。 ※『文楽興行記録昭和篇』欄外記事に拠る。	戸無瀬（紋十郎）、小浪（簗助）。
1963	昭和38	10/28～ 11/15	地方公演 （東北・北海道）	仮名手本忠 臣蔵	二ツ玉の段（相子／小松＝団二郎）、勘平切腹の段（相生＝重造）、祇園一力茶屋の段（由良之助＝つばめ・伴内・力弥・重太郎＝相子・弥五郎・九太夫＝小松・喜多八＝津弥／松香・おかる＝文字・仲居＝松香／津弥・平右衛門＝津＝喜左衛門）、道行旅路の嫁入（小浪＝織・戸無瀬＝文字・ツレ 相子／小松・津弥／松香＝勝太郎・徳太郎・勝平・団二郎・団作）。 ※（財）文楽協会誕生記念。	妻戸無瀬（亀松）、娘小浪（清十郎）、大星力弥（簗助）、鷺坂伴内（勘十郎）、早野勘平（紋十郎）、遊女おかる（亀松）、斧九太夫（作十郎）、大星由良之助（玉助）、百姓与市兵衛（作十郎）、斧定九郎（勘十郎）、与市兵衛女房（国秀）、寺岡平右衛門（玉男）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1963	昭和38	11/19~21	京都 祇園会館	仮名手本忠臣蔵 通し狂言	大序 兜改めの段（足利直義公一源・高師直一十九・顔世御前一小松・桃井若狭助一綱子・塩谷判官一津弥・ツレ 松香=叶太郎）、下馬先進物の段（綱子=団二郎）、殿中刃傷の段（相生=重造）、裏門の段（南部=燕三）、花籠の段（春子=松之輔）、判官切腹の段（綱=弥七）、霞ヶ関の段（伊達路=猿二郎）、山崎街道の段（十九=団六）、二ツ玉の段（文字/織=藤蔵・団二郎）、身売りの段（南部=錦糸/徳太郎）、勘平切腹の段（若=勝太郎）、祇園一力茶屋の段（大星由良助一相生・大星力弥一相子・矢間重太郎一源・竹森喜多八一伊達路・千崎弥五郎一小松・おかる一土佐・仲居一松香・一力亭主一松島・鷺坂伴内一十九・斧九太夫一大隅・寺岡平右衛門一織/文字=重造）、道行旅路の嫁入（娘小浪一春子・母戸無瀬一南部・ツレ小松・津弥・松香=吉三郎・徳太郎/錦糸・勝平・団二郎・団作）、山科閑居の段（口 大隅=新三郎、前 つばめ=喜左衛門、後 津=寛治）、両国橋の段（大星由良助一十九・桃井若狭助一伊達路・大星力弥一相子・原郷右衛門一大隅・千崎弥五郎一小松・矢間重太郎一松島・諸士一松香=勝平）。 ※（財）文楽協会京都第2回公演。	高師直（勘十郎）、桃井若狭助（玉男）、塩谷判官（兜改め=一暢、刃傷=清十郎、判官切腹=紋十郎）、顔世御前（兜改め=文雀、判官切腹=清十郎）、加古川本蔵（玉市）、母戸無瀬（紋十郎）、娘小浪（道行=栄三、山科閑居=玉五郎）、大星力弥（花籠~霞ヶ関=文昇/紋寿、一力茶屋=紋弥、山科閑居~両国橋=文昇）、鷺坂伴内（玉昇）、早野勘平（亀松）、腰元おかる・娘おかる・おかる（栄三）、斧九太夫（辰五郎）、大星由良助（玉助）、百姓与市兵衛（辰五郎）、斧定九郎（勘十郎）、与市兵衛女房（国秀）、寺岡平右衛門（一力茶屋=亀松、両国橋=玉幸）、女房お石（玉男）。
1963	昭和38	12/3~22	朝 日 座	仮名手本忠臣蔵 通し狂言	大序 兜改めの段（足利直義公一源・高師直一十九・顔世御前一小松・桃井若狭助一綱子・塩谷判官一津弥・ツレ 松香=叶太郎）、下馬先進物の段（綱子=団二郎）、殿中刃傷の段（相生=重造）、裏門の段（南部=燕三）、花籠の段（春子=松之輔）、判官切腹の段（綱=弥七）、霞ヶ関の段（伊達路=猿二郎）、山崎街道の段（十九=団六）、二ツ玉の段（文字/織=藤蔵・胡弓 団二郎）、身売りの段（南部=錦糸/徳太郎）、勘平切腹の段（若=勝太郎）、祇園一力茶屋の段（大星由良助一相生・大星力弥一相子・矢間十太郎一源・竹森喜多八一伊達路・千崎弥五郎一小松・おかる一土佐・仲居一松香・一力亭主一松島・鷺坂伴内一十九・斧九太夫一大隅・寺岡平右衛門一織/文字=吉三郎改め 吉兵衛）、道行旅路の嫁入（小浪一春子・戸無瀬一南部・ツレ 小松・津弥・松香=松之輔・徳太郎/錦糸・勝平・団二郎・広若）、山科閑居の段（口 大隅=新三郎、前 つばめ=喜左衛門、後 津=寛治）、両国橋の段（由良助一十九・若狭助一伊達路・力弥一相子・郷右衛門一大隅・弥五郎一小松・十太郎一松島・諸士一松香=勝平）。 ※吉三郎改め九世野沢吉兵衛襲名披露。	高師直（勘十郎）、桃井若狭助（玉男）、塩谷判官（兜改め=一暢、刃傷=清十郎、切腹=紋十郎）、顔世御前（兜改め=文雀、花籠~判官切腹=清十郎）、加古川本蔵（玉市）、母戸無瀬（紋十郎）、娘小浪（道行=栄三、山科閑居=玉五郎）、大星力弥（花籠~判官切腹=文昇/紋寿、一力茶屋=紋弥、山科閑居~両国橋=文昇）、鷺坂伴内（玉昇）、早野勘平（亀松）、腰元おかる・娘おかる・おかる（栄三）、斧九太夫（辰五郎）、大星由良助（玉助）、百姓与市兵衛（辰五郎）、斧定九郎（勘十郎）、与市兵衛女房（国秀）、寺岡平右衛門（亀松）、妻お石（玉男）。
△ 1964	昭和39	11/21	信愛女学院	（仮名手本忠臣蔵）	裏門の段。 ※『昭和39年度人形浄瑠璃因協会年報』に拠る。	
1964	昭和39	11/23~29	地方公演 （関東）	お軽と勘平一仮名手本忠臣蔵より一	裏門の段（若子=団二郎）、二ツ玉の段（相子=重造・胡弓 勝之輔）、身売りの段（南部=徳太郎）、勘平切腹の段（津=寛治）、祇園一力茶屋の段（由良助一若・おかる一南部・九太夫一相子・平右衛門一織=勝太郎）。	鷺坂伴内（文昇）、早野勘平（裏門=勘十郎）、二ツ玉~勘平切腹=紋十郎）、腰元おかる（玉五郎）、女房おかる・遊女おかる（栄三）、斧九太夫（国秀）、大星由良助（玉助）、百姓与市兵衛（淳造）、斧定九郎（玉昇）、与市兵衛女房（国秀）、寺岡平右衛門（玉男）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割	
1964	昭和39	12/4~12	地方公演 (北九州・山陽・神戸)	お軽と勘平 一仮名手本 忠臣蔵より 一	裏門の段(小松=勝平)、二ツ玉の段(伊達路=錦糸・胡弓 寛弘)、身売りの段(十九=団六)、勘平切腹の段(つばめ=喜左衛門)、一力茶屋の段(由良助=つばめ・おかる=春子・九太夫=伊達路・平右衛門=文字=吉兵衛)。	鷺坂伴内(玉幸)、早野勘平(裏門=勘十郎、二ツ玉~切腹=紋十郎)、腰元おかる(文雀)、女房おかる・遊女おかる(亀松)、斧九太夫(辰五郎)、大星由良助(玉男)、百姓与市兵衛(常次)、斧定九郎(玉男)、与市兵衛女房(国秀)、寺岡平右衛門(勘十郎)。	
△	1964	昭和39	12/13	神戸 国際会館	お軽と勘平 一	裏門、二ツ玉、身売り、勘平切腹、一力茶屋。 ※『上演狂言でつづる文楽の十五年』に拠る。	
1965	昭和40	3/5~14	地方公演 (山陽・九州)	お軽と勘平 一仮名手本 忠臣蔵より 一	裏門の段(小松=勝平)、二ツ玉の段(大隅=燕三・胡弓 清治)、身売りの段(源=叶太郎)、勘平切腹の段(つばめ=喜左衛門)、祇園一力茶屋の段(由良助=つばめ・おかる=土佐・九太夫=伊達路・平右衛門=十九=吉兵衛)。	鷺坂伴内(玉幸)、早野勘平(裏門=勘十郎、二ツ玉~勘平切腹=紋十郎)、腰元おかる(玉五郎)、女房おかる・遊女おかる(栄三)、斧九太夫(常次)、大星由良助(玉市)、百姓与市兵衛(常次)、斧定九郎(玉昇)、与市兵衛女房(常次)、寺岡平右衛門(玉男)。	
1965	昭和40	5/15~16	名古屋 愛知文化講堂	仮名手本忠 臣蔵 通し狂言	大序 鶴ヶ岡兜改めの段(足利直義公=綱・高師直=津・顔世御前=土佐・桃井若狭助=つばめ・塩谷判官=春子=弥七)、二段目 加古川本蔵松切りの段(伊達路=燕三)、三段目 大下馬先進物の段(大隅=叶太郎)、松の間刃傷の段(相生=重造)、裏門の段(南部=徳太郎)、四段目 扇ヶ谷塩谷判官切腹の段(綱=弥七)、霞ヶ関城明渡しの段(相子=団二郎)、五段目 山崎街道二ツ玉の段(織=吉兵衛)、六段目 身売りの段(源=叶太郎)、早野勘平住家の段(若=勝太郎)、七段目 祇園一力茶屋の段(大星由良助=相生・大星力弥=相子・矢間重太郎=伊達路・竹森喜多八=松香・千崎弥五郎=津弥・遊女おかる=土佐・仲居=小春・一力亭主=若子・鷺坂伴内=源・斧九太夫=大隅・寺岡平右衛門=織=前 重造、後 吉兵衛)、八段目 道行旅路の嫁入(春子=南部・若子=相子=松之輔・徳太郎=団二郎・勝之輔)、九段目 山科閑居の段(前 つばめ=喜左衛門、後 津=寛治)、大詰 光明寺焼香の段(大星由良助=伊達路・大星力弥=松香・寺岡平右衛門=相子・矢間重太郎=若子・諸士=津弥・諸士=若治=燕三)。	高師直(勘十郎)、桃井若狭助(大序=亀松、二・三段目=玉男)、塩谷判官(大序・四段目=紋十郎、三段目=清十郎)、顔世御前(栄三)、加古川本蔵(二・三段目=辰五郎、九段目=勘十郎)、妻戸無瀬(栄三)、娘小浪(玉五郎)、大星力弥(四・七段目=紋弥、九・十一段目=文昇)、鷺坂伴内(玉昇)、早野勘平(亀松)、腰元おかる(簗助)、娘おかる・遊女おかる(紋十郎)、斧九太夫(国秀)、大星由良助(四・十一段目=玉男、七段目=栄三、九段目=紋十郎)、百姓与市兵衛(常次)、斧定九郎(勘十郎)、与市兵衛女房(国秀)、寺岡平右衛門(亀松)、妻お石(玉男)。	
△	1965	昭和40	5/29	神戸 神戸海員会館	仮名手本忠 臣蔵	※『昭和40年度人形浄瑠璃因協会年報』に拠る。	
1965	昭和40	9/18~21	地方公演 (四国)	お軽と勘平 一仮名手本 忠臣蔵より 一	裏門の段(相子=団二郎)、二ツ玉の段(大隅=徳太郎・胡弓 勝之輔)、身売りの段(南部=吉兵衛)、勘平切腹の段(織=弥七)、祇園一力茶屋の段(由良助=津・お軽=南部・平右衛門=十九・九太夫=津弥=勝太郎)。	鷺坂伴内(玉幸)、早野勘平(裏門=清十郎、二ツ玉~勘平切腹=紋十郎)、腰元お軽(文雀)、女房お軽・遊女お軽(亀松)、斧九太夫(玉之助)、大星由良助(辰五郎)、百姓与市兵衛(淳造)、斧定九郎(作十郎)、与市兵衛女房(常次)、寺岡平右衛門(勘十郎)。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1965	昭和40	12/23	竹本綱太夫宅	仮名手本忠臣蔵	大序（小松＝勝平）、進物（津弥＝勝之輔）、殿中刃傷（伊達路＝団二郎）、裏門（松香＝清治）。 ※大序会第3回。 ※『昭和40年度人形浄瑠璃因協会年報』に拠る。	
1966	昭和41	2/15	朝 日 座	仮名手本忠臣蔵	刃傷の段（津＝勝太郎）、判官切腹の段より霞ヶ関の段（つばめ＝弥七）。 ※渡米送別公演前夜祭。	高師直（勘十郎）、桃井若狭助（文雀）、塩谷判官（栄三）、顔世御前（紋十郎）、加古川本蔵（玉昇）、大星力弥（文昇）、大星由良助（玉男）。
△ 1966	昭和41	3/8～4/9	アメリカ公演 （ホノルル・ ニューヨー ク・サンフラ ンシスコ・ロ スアンゼル ス）	仮名手本忠臣蔵	刃傷、判官切腹、城明渡し。 ※『上演狂言でつづる文楽の十五年』、『昭和40年度人形浄瑠璃因協会年報』に拠る。	
1967	昭和42	2/22	東京 三越劇場	仮名手本忠臣蔵	勘平切腹の段（文字＝重造）。 ※豊竹若大夫を慰さめる素浄るりの会。	
1967	昭和42	5/4～28	東京 歌舞伎座	仮名手本忠臣蔵	【4～15日】八段目 道行旅路嫁入（綱・南部・織・十九・松香＝弥七・錦糸・清治・勝之輔・松之輔）。 【16～27日】八段目 道行旅路嫁入（綱・南部・咲・小松・松香＝弥七・徳太郎・団二郎・勝之輔・松之輔）。 【28日】八段目 道行旅路嫁入（南部・織・十九・松香＝松之輔・錦糸・清治・勝之輔）。 ※歌舞伎公演。文楽座大夫三味線特別出演。	
1967	昭和42	6/2～4	京都 弥栄会館	道行旅路の嫁入	（戸無瀬一土佐・小浪一小松・小春・松香＝吉兵衛・叶太郎・団六・勝平・勝之輔）。 ※京都文楽会第1回自主公演。	母戸無瀬（玉男）、娘小浪（箋助）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1967	昭和42	12/10~24	東京 国立劇場小劇場	仮名手本忠臣蔵 通し狂言	大序 鶴ヶ岡兜改めの段(直義-源・師直-伊達路・顔世-小松・若狭-咲・判官-小春=勝平)、二段目 桃井館本蔵松切の段(織=燕三)、三段目 足利館大下馬先進物の段(相子=清治)、腰元おかる文使いの段(十九=団六)、殿中刃傷の段(相生=重造)、裏門の段(咲=清治)、四段目 花籠の段(文字=錦糸)、判官切腹の段(綱=弥七)、霞ヶ関の段(松香=勝之輔)、五段目 山崎街道出合の段(相子=勝平)、二つ玉の段(十九=叶太郎・胡弓 勝之輔)、六段目 身売りの段(若子改め 呂=重造)、早野勘平切腹の段(春子=勝太郎)、七段目 祇園一力茶屋の段(由良助-越路/津・おかる-土佐・平右衛門-文字/織・十太郎-十九・喜太八-伊達路・弥五郎-小松・力弥-呂・九太夫-大隅・伴内-咲・一力亭主-源・仲居-小春=吉兵衛)、八段目 道行旅路の嫁入(小浪-南部・戸無瀬-小松・伊達路・松香・小春=松之輔・徳太郎・団二郎・清治・勝之輔)、九段目 雪転しの段(大隅=団六)、山科閑居の段(前 越路=喜左衛門、後 津=寛治)、大詰 光明寺焼香の段(由良助-相子・力弥・平右衛門-松香・十太郎・諸士-小春=団二郎)。 ※豊竹若子太夫改め五世豊竹呂太夫襲名披露。 ※竹本源太夫休演のため、「鶴ヶ岡兜改めの段」直義を竹本南部太夫が、「祇園一力茶屋の段」一力亭主を竹本相子太夫が代演。	高師直(亀松)、桃井若狭助(文雀)、塩谷判官(栄三)、顔世御前(清十郎)、加古川本蔵(勘十郎)、母戸無瀬(紋十郎)、娘小浪(簗助)、大星力弥(文昇)、鷺坂伴内(玉昇)、早野勘平(紋十郎)、腰元おかる・女房おかる・遊女おかる(栄三)、斧九太夫(作十郎)、大星由良助(玉男)、百姓与市兵衛(国秀)、斧定九郎(辰五郎)、与市兵衛女房(玉五郎)、寺岡平右衛門(亀松)、妻お石(玉五郎)。
1968	昭和43	1/2~16	朝 日 座	仮名手本忠臣蔵 通し狂言	三段目 殿中刃傷の段(十九=吉兵衛)、裏門の段(呂/小松=団六)、四段目 花籠の段(文字=錦糸)、塩谷判官切腹の段(綱=弥七)、霞ヶ関城明渡しの段(松香/小春=団二郎)、五段目 二ツ玉の段(伊達路=叶太郎・勝之輔)、六段目 身売りの段(咲=徳太郎)、勘平切腹の段(津=寛治)、七段目 祇園一力茶屋の段(大星由良助-相生・大星力弥-呂・矢間十太郎-十九・千崎弥五郎-小松・竹森喜多八-伊達路・一力亭主-源・仲居-相子・斧九太夫-大隅・鷺坂伴内-咲・おかる-土佐・仲居-松香・仲居-小春・寺岡平右衛門-文字/織=重造)。	高師直(勘十郎)、桃井若狭助(簗助)、塩谷判官(栄三)、顔世御前(玉五郎)、加古川本蔵(淳造)、大星力弥(文昇)、鷺坂伴内(玉昇)、早野勘平(紋十郎)、腰元おかる・娘おかる・おかる(栄三)、斧九太夫(花籠~判官切腹=常次、一力茶屋=作十郎)、大星由良助(玉男)、百姓与市兵衛(国秀)、斧定九郎(辰五郎)、与市兵衛女房(玉五郎)、寺岡平右衛門(亀松)。
1968	昭和43	1/17~18	朝 日 座	仮名手本忠臣蔵	殿中刃傷の段(相子=清治)、裏門の段(小春=勝之輔)、塩谷判官切腹より霞ヶ関城明渡しの段(伊達路=団六)、二ツ玉の段(織=勝之輔)、身売りの段(松香=清治)、勘平切腹の段(呂=勝平)、祇園一力茶屋の段(大星由良助-十九・大星力弥-英・矢間十太郎-春子・千崎弥五郎-南部・竹森喜多八-文字・一力亭主-織・斧九太夫-越路・鷺坂伴内-津・おかる-小松・寺岡平右衛門-咲=団二郎)。 ※第3回文楽若手向上会。	高師直(小玉)、桃井若狭助(文昇)、塩谷判官(紋寿)、顔世御前(一暢)、加古川本蔵(玉之助)、大星力弥(切腹~明渡し=勘寿、一力茶屋=紋十郎)、鷺坂伴内(刃傷~裏門=小玉/玉幸、一力茶屋=小紋)、早野勘平(裏門=一暢、二ツ玉~切腹=紋弥)、おかる(裏門=紋寿、身売り~一力茶屋=文昇)、斧九太夫(玉之助)、大星由良助(切腹~明渡し=玉昇、一力茶屋=簗助)、斧定九郎(玉幸)、与市兵衛女房(玉五郎)、寺岡平右衛門(玉幸/小玉)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1968	昭和43	1/19~ 20・22	朝 日 座	仮名手本忠 臣蔵	刃傷の段（十九=団六）、判官切腹の段（綱/文字=弥七）、霞ヶ関の段。 ※大阪労音公演。 ※『上演狂言でつづる文楽の十五年』、国立劇場上演資料集〈403〉に拠る。	師直（勘十郎）、判官（紋十郎）、由良之助（玉男）。
△ 1968	昭和43	4/29~ 5/22	ヨーロッパ公 演 （フランス・ ベルギー・イ タリア・ドイ ツ・イギリス）	仮名手本忠 臣蔵	三段目 殿中刃傷の段（十九=吉兵衛）、四段目 判官切腹より霞ヶ関城明渡しの段（津=弥七）。 ※パリ・オデオン座、ベルリン・アカデミー・デル・キュンステ、ハンプルグ・ミュージック・ホール、ロンドン・オールドヴィッチ劇場で公演。 ※『文楽ヨーロッパ公演1968』に拠る。	高師直（勘十郎）、桃井若狭助（文雀）、塩谷判官（栄三）、顔世御前（紋十郎）、加古川本蔵（玉男）、大星力弥（文昇）、大星由良助（玉男）。
1969	昭和44	5/6~8	京都 弥栄会館	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（戸無瀬=十九・小浪=相子・ツレ 緑・伊達路=吉兵衛・叶太郎・団六・勝平）。 ※京都文楽会第3回自主興行。	母戸無瀬（亀松）、娘小浪（簗助）。
1969	昭和44	11/14~ 16	京都 弥栄会館	仮名手本忠 臣蔵	裏門の段（嶋=団六）、山崎街道の段（相子=団二郎）、二ツ玉の段（伊達路=吉兵衛・胡弓 勝之輔）、身売りの段（咲=徳太郎）、勘平切腹の段（津=寛治）、祇園一力茶屋の段（大星由良之助=相生・大星力弥=緑・矢間十太郎=咲・竹森喜多八=嶋・千崎弥五郎=一力亭主=英・遊女おかる=南部・仲居=緑・鷺坂伴内=相子）。 ※京都文楽会第4回自主興行。	大星力弥（一暢）、鷺坂伴内（簗助）、早野勘平（裏門=山崎街道=清十郎、二ツ玉=切腹=紋十郎）、腰元おかる（文雀）、娘おかる・遊女おかる（栄三）、斧九太夫（作十郎）、大星由良之助（玉男）、百姓与市兵衛（国秀）、斧定九郎（玉昇）、与市兵衛女房（玉五郎）、寺岡平右衛門（亀松）。
1970	昭和45	4/23~ 5/4	地方公演 （北陸・関 東）	仮名手本忠 臣蔵	裏門の段（相子=勝之輔）、二ツ玉の段（伊達路=勝平・胡弓 勝之輔）、身売りの段（小松=勝太郎）、勘平切腹の段（越路=弥七）、祇園一力茶屋の段（おかる=文字・由良助=嶋・九太夫=英・平右衛門=十九=吉兵衛）。	鷺坂伴内（紋弥）、早野勘平（裏門=簗助、二ツ玉=切腹=玉男）、腰元お軽（清十郎）、女房お軽・遊女お軽（栄三）、斧九太夫（玉幸）、大星由良助（清十郎）、百姓与市兵衛（作十郎）、斧定九郎（玉幸）、与市兵衛女房（文雀）、寺岡平右衛門（玉昇）。
1970	昭和45	9/24~ 10/4	地方公演 （関東・東 海）	仮名手本忠 臣蔵	裏門の段（相子=勝之輔/清治）、二ツ玉の段（伊達路=叶太郎・胡弓 勝之輔/清治）、身売りの段（松香=燕三）、勘平切腹の段（津=勝太郎/清六）、祇園一力茶屋の段（由良助=文字/織・おかる=南部・九太夫=緑・平右衛門=相子=松之輔）。	鷺坂伴内（紋寿）、早野勘平（裏門=清十郎、二ツ玉=切腹=玉男）、腰元お軽（文昇）、女房お軽・遊女お軽（亀松）、斧九太夫（玉之助）、大星由良助（勘十郎）、百姓与市兵衛（辰五郎）、斧定九郎（小玉）、与市兵衛女房（国秀）、寺岡平右衛門（玉昇）。
1970	昭和45	12/1~18	地方公演 （山陽・九 州・近畿）	仮名手本忠 臣蔵	裏門の段（嶋=道八）、山崎街道より二ツ玉の段（小松=勝平・胡弓 勝之輔/団二郎）、身売りの段（相子=団二郎/勝之輔）、勘平切腹の段（津=団六）、祇園一力茶屋の段（大星由良助=文字・遊女おかる=南部・斧九太夫=緑・寺岡平右衛門=小松=勝太郎）。	鷺坂伴内（紋寿）、早野勘平（亀松）、腰元おかる・娘おかる・遊女おかる（簗助）、斧九太夫（小紋）、大星由良助（栄三）、百姓与市兵衛（文昇）、斧定九郎（玉幸）、与市兵衛女房（玉五郎）、寺岡平右衛門（勘十郎）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 1971	昭和46	1/30	三越劇場	仮名手本忠臣蔵	祇園一力茶屋。 ※鶴沢寛八後援会主催、第3回素浄瑠璃公演。 ※『昭和45年度人形浄瑠璃因協会年報』に拠る。	
1972	昭和47	10/7~22	朝 日 座	仮名手本忠臣蔵 通し狂言	大序 鶴ヶ岡兜改めの段（松香・緑・津駒・貴・三輪=叶太郎）、恋歌の段（師直-伊達路・顔世御前-嶋・若狭助-英=勝之輔）、二段目 桃井館本蔵松切の段（相生=重造）、三段目 下馬先進物の段（緑=道八）、腰元おかる文使いの段（松香=錦糸）、松の間殿中刃傷の段（伊達路=吉兵衛）、裏門の段（英=弥七）、四段目 花籠の段（小松/咲=松之輔）、塩谷判官切腹の段（咲/小松=松之輔）、霞ヶ関城明渡しの段（貴/三輪=清友/寛平）、五段目 山崎街道出合の段（津駒=叶太郎）、二ツ玉の段（小松/咲=燕三・胡弓 清治/団二郎）、六段目 身売りの段（呂=勝平）、早野勘平切腹の段（十九=喜左衛門）、七段目 祇園一力茶屋の段（三回忌に因んで 由良助-越路・力弥-英/緑・十太郎-十九・喜多八-咲/小松・弥五郎-伊達路・仲居-貴・おかる-嶋・仲居-三輪・亭主-相生・伴内-織・九太夫-文字・平右衛門-津=団六）、八段目 道行旅路の嫁入（娘小浪-南部・母戸無瀬-呂・ツレ 松香・貴・三輪=弥七・勝平・団二郎・清治・勝之輔・清友・寛平）、九段目 山科閑居の段（中 相生=団二郎/清治、前 文字=寛治、後 織=勝太郎）。 ※二世桐竹紋十郎三回忌追善。	高師直（亀松）、桃井若狭助（作十郎）、塩谷判官（文昇）、顔世御前（小玉）、加古川本蔵（玉男）、母戸無瀬（文雀）、娘小浪（紋寿/一暢）、大星力弥（一暢/紋寿）、鷺坂伴内（紋弥）、早野勘平（玉昇）、おかる（簗助）、斧九太夫（作十郎）、大星由良助（清十郎）、百姓与市兵衛（国秀）、斧定九郎（紋弥）、与市兵衛女房（玉五郎）、寺岡平右衛門（勘十郎）、妻お石（栄三）。
1972	昭和47	12/9	朝 日 座	仮名手本忠臣蔵	裏門の段（伊達路=団六）、二ツ玉の段（小松=燕三）、身売りの段（嶋=勝平）、早野勘平切腹の段（越路=喜左衛門/津=寛治）、祇園一力茶屋の段（由良助-津/越路・力弥-緑/英・十太郎-相生・喜多八-松香・弥五郎-英/緑・仲居-津駒・おかる-南部・仲居-貴・仲居-三輪・平右衛門-文字=寛治/喜左衛門）。 ※大阪府民劇場。	大星力弥（一暢）、鷺坂伴内（簗助）、早野勘平（亀松）、腰元おかる（文昇）、女房おかる・遊女おかる（簗助）、斧九太夫（小紋）、大星由良助（玉男）、百姓与市兵衛（辰五郎）、斧定九郎（玉昇）、与市兵衛女房（玉五郎）、寺岡平右衛門（勘十郎）。
△ 1973	昭和48	1/31	名古屋 愛知文化講堂	仮名手本忠臣蔵	※労音公演。 ※『上演狂言でつづる文楽の十五年』、『昭和47年度人形浄瑠璃因協会年報』に拠る。	
1973	昭和48	2/19	東京 国立劇場小劇場	仮名手本忠臣蔵	裏門の段。 ※文楽研修生による第1回試演会。竹沢弥七=指導。素浄瑠璃。	
△ 1973	昭和48	6/18	朝 日 座	仮名手本忠臣蔵	裏門の段。 ※文楽研修生による第2回試演会。桐竹勘十郎=指導。 ※「文楽研修生発表会」パンフレット（昭和49年3月）に拠る。	
△ 1973	昭和48	8/18~22	地方公演 （近畿）	仮名手本忠臣蔵	※青少年芸術劇場。 ※『上演狂言でつづる文楽の十五年』に拠る。	
1973	昭和48	9/25	東京 国立劇場小劇場	仮名手本忠臣蔵	裏門の段。 ※文楽研修生による第3回試演会。野沢勝太郎=指導。素浄瑠璃。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1974	昭和49	10/4~6	京都 京都府立文化 芸術会館	仮名手本忠 臣蔵	下馬先進物の段（小松＝勝平）、松の間殿中刃傷の段（十九＝吉兵衛）、塩谷判官切腹の段（織＝弥七）、霞ヶ関城明渡しの段（織の＝弥三郎／勝矢／喜久三郎）。	高師直（玉昇）、桃井若狭助（簀助）、塩谷判官（清十郎）、顔世御前（紋寿）、加古川本蔵（玉幸）、大星力弥（一暢）、鷺坂伴内（玉松）、早野勘平（小玉）、腰元おかる（文昇）、大星由良助（玉男）。
1974	昭和49	12/3~25	東京 国立劇場大劇 場	仮名手本忠 臣蔵	八段目 道行旅路の嫁入（南部・嶋・松香・南司＝松之輔・吉兵衛／錦糸・勝平・松也／浅造）。 ※第69回歌舞伎公演。文楽座特別出演。	
1974	昭和49	12/6~7	名古屋 中日劇場	仮名手本忠 臣蔵	下馬先進物の段（小松＝団二郎）、殿中刃傷の段（十九＝錦糸）、塩谷判官切腹の段（文字＝弥七）、霞ヶ関城明渡しの段（文字栄＝弥三郎）。	高師直（勘十郎）、桃井若狭助（簀助）、塩谷判官（清十郎）、顔世御前（紋寿）、加古川本蔵（玉幸）、大星力弥（一暢）、鷺坂伴内（玉昇）、早野勘平（小玉）、腰元おかる（文昇）、大星由良助（玉男）。
1975	昭和50	4/18~ 5/1	朝 日 座	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（娘小浪＝嶋・母戸無瀬＝相生・ツレ 緑・貴／三輪・南司／津国＝燕三・団二郎・勝之輔・清介・弥三郎／松也）。	母戸無瀬（文雀）、娘小浪（一暢）。
1975	昭和50	6/22~ 7/6	地方公演 （近畿・中 国・九州）	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（娘小浪＝小松／嶋・母戸無瀬＝相生・ツレ 緑・三輪＝勝平・勝司・喜久三郎・浅造）。	母戸無瀬（文雀）、娘小浪（紋寿）。
△ 1975	昭和50	10/18	二ツ井戸 自 安 寺	仮名手本忠 臣蔵	殿中刃傷の段（緑＝清友）。裏門の段（三輪＝清友）。 ※若葉会。 ※朝日座筋書（昭和51年1月）に拠る。	
1975	昭和50	12/1~2	名古屋 中日劇場	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（娘小浪＝嶋・母戸無瀬＝小松・ツレ 英・緑・津駒＝団六・団二郎・寛平・清友・浅造）。	母戸無瀬（文雀）、娘小浪（一暢）。
1976	昭和51	7/9~25	朝 日 座	仮名手本忠 臣蔵	二ツ玉の段（伊達路＝叶太郎・胡弓 浅造）、身売りの段（嶋＝道八）、早野勘平切腹の段（津＝勝太郎）、祇園一力茶屋の段（大星由良之助＝文字・力弥＝津駒・十太郎＝松香・喜多八＝英・弥五郎＝緑・仲居＝南司・おかる＝南部・仲居＝文字栄・亭主＝相生・伴内＝咲・九太夫＝伊達路・平右衛門＝織／十九＝吉兵衛）。	大星力弥（簀太郎）、鷺坂伴内（紋寿）、早野勘平（玉昇）、おかる（簀助）、斧九太夫（作十郎）、大星由良之助（玉男）、百姓与市兵衛（作十郎）、斧定九郎（小玉）、与市兵衛女房（玉五郎）、寺岡平右衛門（清十郎）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1976	昭和51	12/4~18	東京 国立劇場小劇場	仮名手本忠臣蔵 通し狂言	大序 鶴ヶ岡兜改めの段(津国・文字栄・南司・三輪・貴=燕太郎、八介・弥三郎・浅造・松也)、恋歌の段(師直一松香・顔世御前一英・若狭助一津駒=勝司)、二段目 桃井館力弥上使の段(緑=清介)、同 本蔵松切の段(小松=勝平)、三段目 足利館大手馬先進物の段(英=清友)、同 おかる文使いの段(呂/咲=団二郎)、同 殿中刃傷の段(十九=団六)、同 裏門の段(嶋=清治)、四段目 塩谷館判官切腹の段(文字=燕三)、同 明渡しの段(三輪=浅造)、五段目 山崎街道出合の段(松香=清介)、同 二つ玉の段(伊達路=叶太郎)、六段目 勘平住家身売りの段(小松=重造)、同 腹切の段(越路=清治)、七段目 祇園一力茶屋の段(由良助一織・力弥一緑・十太郎一呂/咲・喜太八一英・弥五郎一三輪・仲居一文字栄・おかる一嶋・仲居一南司・一力亭主一松香・伴内一相生・九太夫一伊達路・平右衛門一咲/呂=錦糸)、八段目 道行旅路の嫁入(南部・十九・貴・津国・文字栄=道八・清治・勝司・弥三郎・松也)、九段目 山科雪転しの段(相生=団二郎)、同 閑居の段(津=吉兵衛)、十一段目 花水橋引揚の段(由良助一緑・若狭助一津駒・貴=清友)。 ※国立劇場開場10周年記念。 ※桐竹勘十郎12~18日休演のため、加古川本蔵を吉田玉昇が、与市兵衛女房を桐竹紋寿が代演。	高師直(作十郎)、桃井若狭助(玉松)、塩谷判官(亀松)、顔世御前(文昇)、加古川本蔵(勘十郎)、妻戸無瀬(清十郎)、娘小浪(一暢/紋寿)、大星力弥(紋寿/一暢)、鷺坂伴内(文雀)、早野勘平(玉男)、腰元おかる・女房おかる・遊女おかる(簗助)、斧九太夫(作十郎)、大星由良助(玉男)、百姓与市兵衛(玉松)、斧定九郎(玉幸)、与市兵衛女房(勘十郎)、寺岡平右衛門(玉昇)、妻お石(文雀)。
1977	昭和52	11/2~5	京都 京都府立文化芸術会館	仮名手本忠臣蔵 通し狂言	大序 鶴ヶ岡兜改めより恋歌の段(直義公一英・高師直一相生・顔世御前一嶋・塩谷判官一咲・若狭助一小松=勝司)、三段目 足利館殿中刃傷の段(咲=勝太郎)、同 裏門の段(呂=団六)、四段目 塩谷館判官切腹の段(文字=燕三)、同 明渡しの段(津国=燕太郎)、五段目 山崎街道出合の段(松香=清友)、同 二つ玉の段(伊達路=叶太郎)、六段目 勘平住家身売りの段(小松=勝平)、同 腹切の段(越路=清治)、七段目 祇園一力茶屋の段(由良助一織・力弥一緑・十太郎一松香・喜太八一文字栄・弥五郎一南司・仲居一津駒・おかる一嶋・仲居一文字登・一力亭主一三輪・伴内一相生・九太夫一伊達路・寺岡平右衛門一十九=錦糸)、八段目 道行旅路の嫁入(小浪一南部・戸無瀬一呂・ツレ 津駒・三輪・南司=道八・団二郎・松也・浅造・八介)、九段目 山科雪転しの段(松香=清介)、同 閑居の段(津=吉兵衛)、十一段目 花水橋引揚の段(由良助一緑・若狭助一津駒・文字栄=弥三郎)。	高師直(勘十郎)、桃井若狭助(小玉)、塩谷判官(清十郎)、顔世御前(亀松)、加古川本蔵(三段目=紋寿、九段目=勘十郎)、妻戸無瀬(八段目=亀松、九段目=清十郎)、娘小浪(文雀)、大星力弥(一暢)、鷺坂伴内(玉松)、早野勘平(玉男)、腰元おかる・女房おかる・遊女おかる(簗助)、斧九太夫(作十郎)、大星由良助(玉男)、百姓与市兵衛(玉松)、斧定九郎(玉幸)、与市兵衛女房(玉五郎)、寺岡平右衛門(玉昇)、妻お石(紋寿)。
△ 1977	昭和52	11/6	京都 毎日ホール	仮名手本忠臣蔵	兜改めより恋歌の段(三輪=清介)、裏門の段(南司=弥三郎)、身売りの段(英=清友)。 ※文楽若手による素浄瑠璃の会。若葉会第2回京都公演。 ※朝日座筋書(昭和53年1月)に拠る。	
1978	昭和53	2/26	東京 国立劇場小劇場	仮名手本忠臣蔵	裏門の段(研修生=浅造)。 ※第4期研修生第1回試演会。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1978	昭和53	9/30~ 10/17	朝 日 座	仮名手本忠 臣 蔵 通し狂言	大序 鶴ヶ岡兜改めの段（文字登、南司、文字栄、津国、三輪＝錦 弥、八介、燕太郎、弥三郎、浅造）、恋歌の段（師直＝松香・若狭助 一英・顔世御前＝津駒＝勝司）、二段目 桃井館本蔵松切の段（相生 ＝勝平）、三段目 下馬先進物の段（松香＝清友）、腰元おかる文使 いの段（嶋＝団二郎）、松の間殿中刃傷の段（伊達路＝重造）、裏門 の段（小松＝勝平）、四段目 塩谷館判官切腹の段（越路＝清治）、 霞ヶ関城明渡しの段（津国＝錦弥）、五段目 山崎街道出合の段（緑 ＝清介）、二ツ玉の段（咲＝叶太郎・胡弓 燕太郎）、六段目 身売りの 段（呂＝団六）、早野勘平腹切の段（文字＝錦糸）、七段目 祇園 一力茶屋の段（大星由良助＝織・力弥＝英・十太郎＝呂・喜多八＝ 緑・弥五郎＝津駒・仲居＝貴・おかる＝嶋・仲居＝三輪・亭主＝松 香・伴内＝咲・九太夫＝伊達路・平右衛門＝十九＝燕三）、八段目 道行旅路の嫁入（娘小浪＝南部・母戸無瀬＝小松・ツレ 貴・三輪・ 南司・文字登＝道八・団二郎・清友・清介・浅造・八介）、九段目 山科雪転しの段（相生＝勝司）、山科閑居の段（津＝吉兵衛）、十 一段目 花水橋引揚の段（由良助＝緑・若狭助＝津駒・文字栄＝弥三 郎）。 ※（財）文楽協会創立15周年記念。	高師直（亀松）、桃井若狭助（小玉）、塩谷 判官（玉昇）、顔世御前（文昇）、加古川本 蔵（勘十郎）、母戸無瀬（清十郎）、娘小浪 （一暢／紋寿）、大星力弥（紋寿／一暢）、 鷺坂伴内（文雀）、早野勘平（玉男）、腰元 おかる・女房おかる・遊女おかる（簗助）、 斧九太夫（玉昇）、大星由良助（玉男）、百 姓与市兵衛（作十郎）、斧定九郎（玉幸）、 与市兵衛女房（玉五郎）、寺岡平右衛門（勘 十郎）、妻お石（文雀）。
1979	昭和54	2/25	東京 国立劇場小劇 場	仮名手本忠 臣 蔵	裏門の段（英＝研修生）。 ※第5期文楽研修生第1回試演会。	
△ 1979	昭和54	8/19	道頓堀リンデ ンビル	仮名手本忠 臣 蔵	裏門の段（貴＝清介）。 ※若葉会第6回大阪公演。 ※朝日座筋書（昭和54年7月）に拠る。	
△ 1979	昭和54	8/26	京都 京都府立文化 芸術会館	仮名手本忠 臣 蔵	裏門の段（貴＝清介）。 ※若葉会第4回京都公演。 ※朝日座筋書（昭和54年7月）に拠る。	
1980	昭和55	10/10~ 26	朝 日 座	仮名手本忠 臣 蔵	道行旅路の嫁入（娘小浪＝南部・母戸無瀬＝嶋・ツレ 松香・南司・ 津梅＝団六・清友・吉之助・燕太郎・八介・燕二郎・団治）。	母戸無瀬（亀松）、娘小浪（紋寿／一暢）。
△ 1981	昭和56	6/1	東京 国立劇場小劇 場	仮名手本忠 臣 蔵	裏門の段。 ※第7期文楽研修生第2回試演会。 ※「第7期文楽研修生発表会」パンフレット（昭和57年3月）、研修資 料に拠る。	
1981	昭和56	12/8~20	東京 国立劇場小劇 場	仮名手本忠 臣 蔵	五段目 山崎街道出合の段（津駒＝浅造）、同 二ツ玉の段（相生＝勝 司・胡弓 団治／燕二郎）、六段目 勘平住家身売の段（呂／咲＝錦 弥）、同 腹切の段（咲＝清介／呂＝清友）、七段目 祇園一力茶屋 の段（由良助＝伊達路・力弥＝貴・十太郎＝三輪・喜多八＝緑／英・ 弥五郎＝津国・仲居＝津梅・仲居＝文字栄／南司・おかる＝小松・亭 主＝千歳・伴内＝織・九太夫＝文字・平右衛門＝英／緑＝前 勝平、 後 清治）、八段目 道行旅路の嫁入（娘小浪＝嶋・母戸無瀬＝松香・ 南司・文字栄＝団七・清友／清介・吉之助・八介・燕二郎／団治）。	母戸無瀬（文昇）、娘小浪（簗太郎／和 生）、大星力弥（清之助）、鷺坂伴内（一暢 ／紋寿）、早野勘平（玉松／小玉）、女房お かる・遊女おかる（紋寿／一暢）、斧九太夫 （簗助／文雀）、大星由良助（玉男／清十 郎）、百姓与市兵衛（作十郎）、斧定九郎 （玉女）、与市兵衛女房（文雀／簗助）、寺 岡平右衛門（玉幸）。

	西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△	1981	昭和56	12/21	東京 国立劇場小劇場	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入。 ※第7期文楽研修生第4回試演会。 ※「第7期文楽研修生発表会」パンフレット（昭和57年3月）、研修資料に拠る。	
	1982	昭和57	5/31	東京 国立劇場小劇場	仮名手本忠 臣蔵	裏門の段（文字久＝団治）。 ※文楽若手発表会。素浄瑠璃。	
	1982	昭和57	11/14～ 30	地方公演 （北海道・東北・関東・東 海）	仮名手本忠 臣蔵	身売りの段（相生＝団治）、勘平切腹の段（切 文字＝勝平）。 ※11月30日は大阪府民劇場。 ※桐竹紋寿休演のため、女房おかるを桐竹勘寿が代演。	早野勘平（清十郎）、女房おかる（紋寿）、 与市兵衛女房（玉松）。
	1983	昭和58	2/28	東京 国立劇場小劇場	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路嫁入（小浪－南都・戸無瀬－文字久・ツレ 織美＝錦弥・燕 二郎・団治）。 ※文楽若手発表会。	母戸無瀬（勘寿）、娘小浪（簗太郎）。
△	1983	昭和58	5/23	東京 銀座ガスホー ル	仮名手本忠 臣蔵	殿中刃傷の段（緑＝団七）、裏門の段（津駒＝燕二郎）。 ※人形浄るり一楽会主催「よくわかる浄瑠璃の基本シリーズその2 素浄瑠璃の会」。 ※『人形浄るり一楽会の五年間』に拠る。	
	1983	昭和58	9/19	東京 国立劇場小劇場	仮名手本忠 臣蔵	殿中刃傷の段（津国＝清友）、裏門の段（研修生＝浅造）。 ※文楽若手発表会・第8期文楽研修生発表会。素浄瑠璃。	
	1983	昭和58	11/5～8	京都 京都府立文化 芸術会館	仮名手本忠 臣蔵 お軽と勘平	松の間殿中刃傷の段（伊達路＝清友）、裏門の段（津駒＝燕二郎／ 貴＝錦弥）、二ツ玉の段（緑＝浅造・胡弓 清二郎）、身売りの段 （嶋＝勝司）、勘平切腹の段（切 津＝団七）、祇園一力茶屋の段 （由良助－文字・力弥－千歳／津梅・十太郎－相生・喜多八－三輪・ 弥五郎－貴／津駒・仲居－文字栄・仲居－文字久・おかる－南部・仲 居－織美・仲居－南都・亭主－松香・伴内－咲／呂・九太夫－伊達 路・平右衛門－呂／咲＝前 勝平、後 叶太郎）。 ※桐竹勘十郎5・7～8日休演のため、早野勘平を吉田簗太郎が代演 （『文楽』第2号に拠る）。	高師直（亀松）、桃井若狭助（一暢）、塩谷 判官（文雀）、加古川本蔵（玉也）、大星力 弥（簗太郎）、鷺坂伴内（紋寿）、早野勘平 （勘十郎）、腰元おかる（簗助）、斧九太夫 （作十郎）、大星由良助（玉男）、百姓与市 兵衛（作十郎）、斧定九郎（玉幸）、与市兵 衛女房（文雀）、寺岡平右衛門（文吾）。
	1984	昭和59	7/30	国立文楽劇場	仮名手本忠 臣蔵	裏門の段（織美＝清二郎）。 ※第9期文楽研修生発表会。	鷺坂伴内（玉也）、早野勘平（玉輝）、腰元 おかる（清之助）。
	1984	昭和59	11/9～25	国立文楽劇場	道行旅路の 嫁入	（小浪－小松・戸無瀬－呂・貴・三輪・文字栄／南司・南都／南寿＝ 勝平・清介・弥三郎・八介・団治・清二郎）。	戸無瀬（文昇）、小浪（紋寿）。
△	1984	昭和59	12/3～24	名古屋 中日劇場	仮名手本忠 臣蔵	道行旅路の嫁入（小浪－小松・戸無瀬－呂・貴・三輪・文字栄／南 司・南都／南寿＝勝平・清介・弥三郎・八介・団治・清二郎）。 ※『国立文楽劇場十年史』、『文楽』第3号に拠る。	戸無瀬（文昇）、小浪（紋寿）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1985	昭和60	1/3~24	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵 通し狂言	大序 鶴が岡兜改めの段(南寿、織美、南都、文字久、千歳、津国=清二郎、団治、燕二郎、錦弥)、恋歌の段(師直-松香・若狭助-貴・顔世-三輪=清友)、三段目 下馬先進物の段(千歳=浅造)、腰元おかる文使いの段(津駒=燕二郎)、松の間殿中刃傷の段(十九=勝平)、裏門の段(英=錦弥)、四段目 花籠の段(呂=清介)、塩谷判官切腹の段(切 越路=清治)、霞が関城明渡しの段(文字栄=清二郎)、五段目 山崎街道出合いの段(津梅=弥三郎)、二つ玉の段(相生=叶太郎)、六段目 身売りの段(小松=富助)、早野勘平腹切の段(切 津=団七)、七段目 祇園一力茶屋の段(由良助-文字・力弥-南都・十太郎-緑・喜多八-貴・弥五郎-津梅・仲居-文字久・おかる-南部・仲居-南寿・亭主-三輪・伴内-咲・九太夫-相生・平右衛門-織=前 錦糸、後 燕三)、十一段目 光明寺焼香の段(由良助-津国・力弥-南司・平右衛門-織美・十太郎・義士-南寿=八介)。 ※竹本津太夫4~6日休演のため、「早野勘平腹切の段」を竹本織太夫が代演。竹本緑太夫休演のため、「祇園一力茶屋の段」十太郎を竹本津駒太夫が代演。	高師直(作十郎)、桃井若狭助(一暢)、塩谷判官(文雀)、顔世御前(文昇)、加古川本蔵(亀松)、大星力弥(和生)、鷺坂伴内(紋寿)、早野勘平(勘十郎)、腰元おかる・女房おかる・遊女おかる(簗助)、斧九太夫(作十郎)、大星由良助(玉男)、百姓与市兵衛(玉幸)、斧定九郎(文吾)、与市兵衛女房(玉五郎)、寺岡平右衛門(玉幸)。
△ 1985	昭和60	5/27	東京銀座ラ・ポラ	仮名手本忠臣蔵	勘平腹切の段(住=富助)。 ※花暦銀座邦楽名人会。素浄瑠璃。 ※『文楽』第4号に拠る。	
1986	昭和61	3/29	国立文楽劇場小ホール	仮名手本忠臣蔵	三段目 下馬先進物の段(南都=団治)、殿中刃傷の段(津国=浅造)、裏門の段(文字久=団治)、六段目 身売りの段(津梅=浅造)、勘平腹切の段(津駒=燕二郎)。 ※第4回若手向上素浄瑠璃の会。	
1988	昭和63	1/27	国立文楽劇場小ホール	仮名手本忠臣蔵	身売りの段(貴=清二郎)。 ※第6回若手向上素浄瑠璃の会。 ※鶴沢清二郎休演のため、鶴沢清友が代演。	
1988	昭和63	3/17	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	裏門の段。 ※第12期文楽研修生発表会。素浄瑠璃。	
1988	昭和63	12/6~18	東京国立劇場小劇場	仮名手本忠臣蔵	三段目 下馬先進物の段(松香=燕二郎)、殿中刃傷の段(師直-嶋/呂・判官-英・若狭助-緑・本蔵-三輪・大名-文字久/南都=富助/清治)、四段目 塩谷判官切腹の段(伊達=清介)、同 明渡しの段(文字栄/呂勢=浅造)、八段目 道行旅路の嫁入(小浪-小松・戸無瀬-相生・ツレ 津駒・貴・津国・千歳/津梅=団七・錦弥・弥三郎・八介・団治・清二郎/清太郎)、九段目 山科閑居の段(前 呂=清治//嶋=富助、後 咲=清友)。	高師直(玉幸)、桃井若狭助(玉女)、塩谷判官(一暢)、顔世御前(清之助)、加古川本蔵(文吾)、母戸無瀬(文昇)、娘小浪(簗太郎/和生)、大星力弥(和生/簗太郎)、鷺坂伴内(玉輝)、早野勘平(亀次)、大星由良助(玉松)、妻お石(紋寿)。
1989	平成1	2/22	国立文楽劇場小ホール	仮名手本忠臣蔵	裏門の段(津梅=燕二郎)。 ※第7回若手向上素浄瑠璃の会。	
1989	平成1	5/24~28	東京ラフォーレミュージアム原宿	おかると勘平 - 仮名手本忠臣蔵より	足利館裏門の段(勘平-千歳・おかる-呂勢=団治)、山崎街道の段(英=燕二郎)、与市兵衛住家の段(津駒=錦弥、呂=清介)、光明寺の段(緑・ツレ 津駒・千歳・文字久・呂勢=弥三郎)。 ※第3回原宿文楽。	塩谷判官(紋寿)、早野勘平(文雀)、腰元おかる(一暢)、大星由良助(玉松)、百姓与市兵衛(玉也)、斧定九郎(玉女)、与市兵衛女房(紋寿)、寺岡平右衛門(一暢)。
1990	平成2	2/28	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	裏門の段(千歳=清二郎)。 ※第13期文楽研修修了発表会・文楽既成者研修発表会。	鷺坂伴内(玉志)、早野勘平(若玉)、腰元おかる(清之助)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1990	平成2	6/8~29	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	(午前) 祇園一力茶屋の段 (由良助-相生・力弥-貴・おかる-小松・平右衛門-緑・十太郎・九太夫-松香・喜多八・伴内-津国・弥五郎・亭主-津梅・仲居-文字栄/呂勢・仲居-南都/文字久=燕二郎)。	大星力弥(玉英)、鷺坂伴内(一暢)、遊女おかる(簗助)、斧九太夫(作十郎)、大星由良助(文吾)、寺岡平右衛門(簗太郎/玉女)。
					(午後) 祇園一力茶屋の段 (由良助-伊達・力弥-貴・おかる-嶋・平右衛門-英・十太郎・九太夫-松香・喜多八・伴内-三輪・弥五郎・亭主-千歳・仲居-南都/文字久・仲居-文字栄=清友)。 ※第7回文楽鑑賞教室。	大星力弥(文司)、鷺坂伴内(紋寿)、遊女おかる(文雀)、斧九太夫(作十郎)、大星由良助(玉男)、寺岡平右衛門(玉幸)。
1990	平成2	12/1	島之内キリスト教会	仮名手本忠臣蔵	裏門の段(呂勢=清太郎)、身売りの段(南都=団吾)。 ※若手素浄瑠璃の会。	
1991	平成3	2/28	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	二ツ玉の段(研修生=弥三郎)。 ※第14期文楽研修生発表会・文楽既成者研修発表会。	百姓与市兵衛(玉輝)、斧定九郎(勘緑)。
1991	平成3	3/1~25	地方公演 (近畿・東海・関東・中国・九州)	仮名手本忠臣蔵	二ツ玉の段(定九郎-三輪・与市兵衛-津国・勘平-文字久=団治)、身売りの段(緑=清二郎)、勘平腹切の段(切 住=錦弥)。	早野勘平(簗助)、女房おかる(和生)、百姓与市兵衛(作十郎)、斧定九郎(文吾)、与市兵衛女房(紋寿/一暢)。
1992	平成4	1/28	国立文楽劇場 小ホール	仮名手本忠臣蔵	身売りの段(貴=団吾)。 ※第10回若手向上素浄瑠璃の会。	
1992	平成4	2/8~23	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	八段目 道行旅路の嫁入(嶋・咲・津国・南都=団六・富助・団治・団市)。 ※第4回歌舞伎公演。文楽座特別出演。	
1992	平成4	11/1	東京 国立劇場小劇場	仮名手本忠臣蔵	勘平切腹の段(十九=錦弥)。 ※第4回文楽素浄瑠璃の会(第75回邦楽公演)。	
1993	平成5	6/26	富田林 旧杉山邸	小浪と戸無瀬	道行旅路の嫁入(小浪-千歳・戸無瀬-嶋・ツレ 津国=清介・団治・清二郎・喜一郎)。	戸無瀬(簗助)、小浪(簗太郎)。
△ 1993	平成5	6/27	能勢 浄るリシアター	小浪と戸無瀬	道行旅路の嫁入(小浪-嶋・戸無瀬-千歳・ツレ 津国・他=清介・他)。 ※国立文楽劇場第50回文楽公演解説書(平成6年4月)に拠る。	戸無瀬(簗助)、小浪(簗太郎)。
1993	平成5	6/27	国立文楽劇場 小ホール	仮名手本忠臣蔵	殿中刃傷の段(松香=団市)。 ※第12回若手向上素浄瑠璃の会。	
△ 1994	平成6	9/26	東京 飯田屋ホール	仮名手本忠臣蔵	殿中の段(新=団市)。 ※若手素浄瑠璃の会。 ※「国立文楽劇場友の会会報」62(平成6年9月)に拠る。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1994	平成6	11/5~27	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵 通し狂言	大序 鶴が岡兜改めの段(咲甫、新、呂勢、南都=清志郎、団市、喜一郎、団吾)、恋歌の段(師直=松香・顔世=貴・若狭助=津国=弥三郎)、二段目 桃井館本蔵松切の段(小松=喜左衛門)、三段目 下馬先進物の段(三輪=清二郎)、腰元おかる文使いの段(津駒=団治)、殿中刃傷の段(咲=喜左衛門/呂=団七)、裏門の段(千歳=燕二郎)、四段目 花籠の段(緑=錦弥)、塩谷判官切腹の段(伊達=清介)、城明渡しの段(始=団市)、五段目 山崎街道出合いの段(津国=清太郎)、二つ玉の段(相生=団七・胡弓 団吾)、六段目 身売りの段(嶋=錦弥)、早野勘平腹切の段(切 住=燕三)、七段目 祇園一力茶屋の段(由良助=住・力弥=呂勢・十太郎=英・喜多八=緑・弥五郎=貴・仲居=新・おかる=嶋・仲居=咲甫・一力亭主=松香・伴内=咲・九太夫=相生・平右衛門=呂=団六)、八段目 道行旅路の嫁入(小浪=津駒・戸無瀬=千歳・ツレ 南都・ツレ 文字久・ツレ 文字栄=清友・燕二郎・団治・清二郎・喜一郎)、九段目 雪転しの段(英=八介)、山科閑居の段(切 織=清治、奥 十九=富助)、十一段目 花水橋引揚の段(由良助=三輪・若狭助=文字久・始=浅造)。 ※国立文楽劇場開場10周年記念。	高師直(作十郎)、塩谷判官(文雀)、桃井若狭助(玉松/文昇)、顔世御前(一暢/紋寿)、加古川本蔵(文吾)、妻戸無瀬(文雀)、娘小浪(紋寿/一暢)、鷺坂伴内(一暢/紋寿)、早野勘平(文昇/玉松)、腰元おかる・女房おかる・遊女おかる(簗助)、大星力弥(簗太郎)、斧九太夫(作十郎)、大星由良助(玉男)、百姓与市兵衛(文吾)、斧定九郎(玉女)、与市兵衛女房(玉松/文昇)、寺岡平右衛門(玉幸)、妻お石(簗助)。
△ 1994	平成6	11/28	国立文楽劇場 小ホール	仮名手本忠臣蔵	殿中の段(新=団市)。 ※若手素浄瑠璃の会。 ※「国立文楽劇場友の会会報」62(平成6年9月)に拠る。	
1994	平成6	11/30	兵庫 赤穂文化会館	仮名手本忠臣蔵	七段目 祇園一力茶屋の段(由良助=住・力弥=呂勢・十太郎=英・喜多八=緑・弥五郎=貴・仲居=新・おかる=嶋・仲居=咲甫・一力亭主=文字久・伴内=松香・九太夫=相生・平右衛門=呂=団六)、八段目 道行旅路の嫁入(小浪=津駒・戸無瀬=千歳・ツレ 南都・文字久・文字栄=清友・燕二郎・団治・清二郎・喜一郎)。	母戸無瀬(文雀)、娘小浪(一暢)、鷺坂伴内(紋寿)、遊女おかる(簗助)、斧九太夫(作十郎)、大星由良助(玉男)、寺岡平右衛門(玉幸)。
1995	平成7	6/11	能勢 浄るりシアター	仮名手本忠臣蔵	勘平腹切の段(住=燕三)。	
1995	平成7	8/25	国立文楽劇場 小ホール	仮名手本忠臣蔵	裏門の段(始=団市)。 ※若手素浄瑠璃の会。	
1996	平成8	7/5	国立文楽劇場 小ホール	仮名手本忠臣蔵	身売りの段(咲甫=清志郎)。 ※第1回七步会。	
1996	平成8	9/4	東京 鍊仙会能楽研 修所	仮名手本忠臣蔵	身売りの段(咲甫=清志郎)。 ※第1回七步会。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1996	平成8	12/4~16	東京 国立劇場小劇場	仮名手本忠 臣蔵	大序 鶴が岡兜改めの段(咲甫、始、新=清志郎、団市、団吾)、恋 歌の段(師直-緑/英・顔世御前-貴・若狭助-文字栄=八介)、二 段目 桃井館力弥上使の段(呂勢=団市)、同 本蔵松切りの段(松香 =錦弥)、三段目 下馬先進物の段(津国=団吾)、腰元おかる文使 いの段(千歳=宗助)、殿中刃傷の段(英/緑=燕二郎)、裏門の段 (津駒=弥三郎)、四段目 花籠の段(三輪=浅造)、塩谷判官切腹 の段(呂=富助)、城明渡しの段(新/始/咲甫=清志郎)。 ※国立劇場開場30周年記念。	高師直(玉幸)、桃井若狭助(簗太郎/和 生)、塩谷判官(和生/簗太郎)、顔世御前 (勘寿)、加古川本蔵(作十郎)、妻戸無瀬 (文司/清之助)、娘小浪(清三郎/和 右)、大星力弥(簗二郎/勘弥)、鷺坂伴内 (玉英/亀次)、早野勘平(玉女)、腰元お かる(清之助/文司)、斧九太夫(玉志/勘 緑)、大星由良助(玉男)。
1997	平成9	1/28~29	国立文楽劇場	仮名手本忠 臣蔵	裏門の段(研修生=燕二郎)。 ※第17期文楽研修生発表会・文楽既成者研修発表会。素浄瑠璃。	
1997	平成9	12/4~16	東京 国立劇場小劇場	仮名手本忠 臣蔵	五段目 山崎街道出合いの段(文字久=宗助)、二つ玉の段(松香= 八介・胡弓 清志郎)、六段目 身売りの段(津駒=弥三郎)、早野勘 平腹切の段(英=清友)、七段目 祇園一力茶屋の段(由良助-相 生・力弥-新/始/咲甫・十太郎-津国・喜多八-南都・弥五郎-呂 勢・仲居-始/咲甫/新・おかる-貴・仲居-咲甫/新/始・一力亭 主-文字栄・伴内-三輪・九太夫-緑・平右衛門-千歳=前 錦弥、 後 燕二郎)。	大星力弥(玉佳/一輔)、鷺坂伴内(清三郎 /幸助)、早野勘平(和生)、おかる(簗太 郎)、斧九太夫(玉也)、大星由良助(一 暢)、百姓与市兵衛(玉幸/文吾)、斧定九 郎(勘緑/玉志)、与市兵衛女房(文昇/紋 寿)、寺岡平右衛門(玉女)。
1998	平成10	1/28~29	国立文楽劇場	仮名手本忠 臣蔵	鶴が岡兜改めの段(研修生=八介)。 ※第17期文楽研修生発表会・文楽既成者研修発表会。素浄瑠璃。	
1998	平成10	6/27~28	京都 南 座	仮名手本忠 臣蔵	大序 鶴ヶ岡兜改めより恋歌の段(直義-貴・師直-千歳・顔世-呂 勢・若狭助-南都・判官-新=喜左衛門)、三段目 足利館大手馬 先進物の段(津国=清太郎)、同 腰元おかる文使いの段(三輪=八 介)、同 殿中刃傷の段(咲=清介)、同 裏門の段(千歳=宗助)、 四段目 塩谷館判官切腹の段(切 十九=清治)、同 明渡しの段(津 国=清志郎)、五段目 山崎街道出合いの段(文字久=団吾)、同 二 ツ玉の段(緑=団七・胡弓 団吾)、六段目 勘平住家身売りの段(英 =燕二郎)、同 勘平腹切の段(切 住=錦弥改め 錦糸)、七段目 祇 園一力茶屋の段(由良助-綱・力弥-始・十太郎-英・喜多八-三 輪・弥五郎-南都・仲居-新・おかる-嶋・仲居-咲甫・亭主-文字 栄・伴内-松香・九太夫-相生・平右衛門-伊達=前 清二郎、後 富 助)、八段目 道行旅路の嫁入(小浪-呂・戸無瀬-津駒・ツレ 文字 久・呂勢・咲甫=団六・清友・弥三郎・喜一郎・団市)。 ※上演250年記念。 ※鶴沢清太郎休演のため、「足利館大手馬先進物の段」を鶴沢清志 郎が代演。	高師直(玉幸)、桃井若狭助(清之助)、塩 谷判官(文昇)、顔世御前(簗太郎)、加古 川本蔵(勘緑)、母戸無瀬(文雀)、娘小浪 (和生)、大星力弥(和右)、鷺坂伴内(玉 英)、早野勘平(文雀)、腰元おかる・女房 おかる・遊女おかる(簗助)、斧九太夫(勘 寿)、大星由良助(玉男)、百姓与市兵衛 (玉幸)、斧定九郎(簗太郎)、与市兵衛女 房(文昇)、寺岡平右衛門(玉女)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
1998	平成10	11/1~23	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵 通し狂言	大序 鶴が岡兜改めの段（睦、相子、つばさ、呂茂、咲甫、始＝清志郎、団市、喜一朗）、同 恋歌の段（師直＝緑・顔世＝三輪・若狭助＝文字久＝弥三郎）、二段目 桃井館本蔵松切の段（小松＝喜左衛門）、三段目 下馬先進物の段（津国＝喜一朗）、同 腰元おかる文使の段（津駒＝宗助）、同 殿中刃傷の段（呂＝清介）、同 裏門の段（千歳＝八介）、四段目 花籠の段（緑＝弥三郎）、同 塩谷判官切腹の段（伊達＝富助）、同 城明渡しの段（咲甫＝清志郎）、五段目 山崎街道出合いの段（呂勢＝団市）、同 二つ玉の段（相生＝清友・胡弓＝清志郎）、六段目 身売りの段（英＝燕二郎）、同 早野勘平腹切の段（切 十九＝清治）、七段目 祇園一力茶屋の段（由良助＝十九・力弥＝呂勢・十太郎＝英・喜多八＝貴・弥五郎＝三輪・仲居＝始・おかる＝嶋・仲居＝新・一力亭主＝津国・伴内＝松香・九太夫＝相生・平右衛門＝咲＝団六）、八段目 道行旅路の嫁入（小浪＝津駒・戸無瀬＝千歳・ツレ 南都・文字久・新＝団七・燕二郎・宗助・清二郎・団吾）、九段目 雪転しの段（松香＝八介）、同 山科閑居の段（切前 住＝錦糸、切 後 綱＝清二郎）、十一段目 花水橋引揚の段（由良助＝貴・若狭助＝南都・文字栄＝団吾）。 ※吉田文昇休演のため、塩谷判官を吉田清三郎が代演。 ※吉田簗助休演のため、腰元おかるを吉田簗太郎が、妻お石を桐竹一暢・吉田簗太郎が代演。	高師直（作十郎）、塩谷判官（文昇）、桃井若狭助（和生）、顔世御前（一暢）、加古川本蔵（玉幸）、妻戸無瀬（文雀）、娘小浪（紋寿）、鷺坂伴内（一暢）、早野勘平（文吾）、腰元おかる・女房おかる・遊女おかる（簗助）、大星力弥（清之助）、斧九太夫（玉也）、大星由良助（玉男）、百姓与市兵衛（玉松）、斧定九郎（玉女／簗太郎）、与市兵衛女房（紋寿）、寺岡平右衛門（簗太郎／玉女）、妻お石（簗助）。
1998	平成10	12/4~16	東京国立劇場小劇場	仮名手本忠臣蔵	八段目 道行旅路の嫁入（小浪＝英・戸無瀬＝津駒・ツレ 文字栄・始＝燕二郎・清二郎・団市・清志郎）、九段目 雪転しの段（千歳＝宗助）、山科閑居の段（咲＝清介）、十段目 天河屋の段（相生＝錦糸・ツレ 清志郎）、大詰 光明寺焼香の段（由良助＝三輪・力弥＝南都・平右衛門＝新・十太郎・諸士＝咲甫＝八介）。 ※野沢松之輔＝作曲（「天河屋の段」）。 ※竹本相生太夫休演のため、「天河屋の段」を竹本千歳太夫が代演。 ※吉田簗助休演のため、母戸無瀬を桐竹一暢が代演。	加古川本蔵（玉幸）、母戸無瀬（簗助）、娘小浪（和生／簗太郎）、大星力弥（玉輝）、大星由良助（文吾）、寺岡平右衛門（玉松）、妻お石（紋寿）、玉女（簗太郎）、与市兵衛女房（玉英）。
1999	平成11	2/22	東京ブディストホール	仮名手本忠臣蔵	鶴ヶ岡兜改めの段（つばさ＝団市）、殿中刃傷の段（南都＝清志郎）。 ※花形浄瑠璃を聴く会。	
1999	平成11	11/27	国立文楽劇場小ホール	仮名手本忠臣蔵	力弥上使の段（始＝団市）、裏門の段（新＝喜一朗）。 ※第4回七步会。	
2000	平成12	1/30	横浜オオハラホール	仮名手本忠臣蔵	九段目 山科閑居の段（千歳＝燕二郎）。 ※横浜文楽同好会主催、素浄瑠璃の会。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
2000	平成12	9/9～24	東京 国立劇場小劇 場	仮名手本忠 臣蔵 通し狂言	大序 鶴が岡兜改めの段（呂茂・睦、つばさ、相子＝龍聿、清丈、清 旭、清志郎、団市）、恋歌の段（師直＝三輪・顔世＝南都・若狭助＝ 文字栄＝八介）、二段目 桃井館本蔵松切の段（英＝喜左衛門）、三 段目 下馬先進物の段（文字久＝団吾）、腰元おかる文使いの段（三 輪＝清太郎）、殿中刃傷の段（伊達＝団六）、裏門の段（呂勢＝宗 助）、四段目 花籠の段（千歳＝燕二郎）、塩谷判官切腹の段（咲＝ 富助）、城明渡しの段（始＝清志郎）、五段目 山崎街道出合いの段 （津国＝団市）、二つ玉の段（松香＝弥三郎・胡弓 団吾）、六段目 身売りの段（津駒＝清友）、早野勘平腹切の段（切 綱＝清二郎）、 七段目 祇園一力茶屋の段（由良助＝綱・力弥＝新・十太郎＝貴・喜 多八＝文字久・弥五郎＝南都・仲居＝呂勢・おかる＝嶋・仲居＝始・ 一力亭主＝文字栄・伴内＝津国・九太夫＝英・平右衛門＝呂＝清 介）、八段目 道行旅路の嫁入（小浪＝津駒・戸無瀬＝千歳・ツレ 咲 甫・呂茂／睦・つばさ／相子＝団七・燕二郎・清太郎・喜＝朗・清 旭）、九段目 雪転しの段（松香＝宗助）、山科閑居の段（切 前 住 ＝錦糸、切 後 十九＝清治）、十一段目 花水橋引揚の段（由良助＝ 新・若狭助＝始・咲甫＝喜＝朗）。 ※三代野沢喜左衛門＝補曲（「桃井館本蔵松切の段」）。 ※文化財保護法50周年記念。 ※竹沢団市休演のため、「山崎街道出合いの段」を鶴沢清志郎が代 演。「鶴が岡兜改めの段」は代演なし。豊竹呂太夫9日歿のため、 「祇園一力茶屋の段」平右衛門を竹本千歳太夫が代演。吉田作十郎休 演のため、高師直を吉田文吾が代演。吉田文昇休演のため、与市兵衛 女房を9～16日は桐竹勘寿が、17～24日は吉田玉也が代演。 ※「清丈」の「丈」は異体字。	高師直（作十郎）、塩谷判官（文雀）、桃井 若狭助（玉女／蓑太郎）、顔世御前（和 生）、加古川本蔵（玉幸）、妻戸無瀬（文 雀）、娘小浪（一暢）、鷺坂伴内（紋寿）、 早野勘平（文吾）、おかる（蓑助）、大星力 弥（文司）、斧九太夫（勘寿／玉也）、大星 由良助（玉男）、百姓与市兵衛（玉松）、斧 定九郎（玉也／勘寿）、与市兵衛女房（文 昇）、寺岡平右衛門（蓑太郎／玉女）、妻お 石（紋寿）。
2000	平成12	11/27～ 28	ドーンセンタ ー	仮名手本忠 臣蔵	殿中刃傷の段（千歳＝宗助）、裏門の段（咲甫＝清志郎）、身売りの 段（呂勢＝喜＝朗）、早野勘平腹切の段（英＝燕二郎）。 ※十色会。	高師直（亀次）、桃井若狭助（勘市）、塩谷 判官（文司）、加古川本蔵（玉翔）、鷺坂伴 内（文哉）、早野勘平（裏門＝蓑紫郎、身売 り～腹切＝幸助）、おかる（一輔）、与市兵 衛女房（勘弥）。
2001	平成13	1/30	T・Bホール	仮名手本忠 臣蔵	松の間殿中刃傷の段（相子＝団吾）。 ※文楽若手素浄瑠璃の会。	
2001	平成13	9/29～ 10/17	地方公演 （近畿・東 海・北陸・東 北・北海道）	仮名手本忠 臣蔵	三段目 下馬先進物の段（南都＝弥三郎）、殿中刃傷の段（英＝清 友）、裏門の段（勘平＝新・おかる＝咲甫・伴内＝つばさ／相子＝宗 助）、四段目 塩谷判官切腹の段（咲＝寛治）、城明渡しの段（つば さ＝清旭）、五段目 二つ玉の段（貴＝清太郎）、六段目 身売りの段 （松香＝錦糸）、早野勘平腹切の段（切 十九＝清治）、七段目 祇園 一力茶屋の段（由良助＝伊達・おかる＝津駒・平右衛門＝三輪・九太 夫＝富助、メリヤス 咲甫＝龍聿）。 ※豊竹つばさ太夫休演のため、「裏門の段」の伴内を竹本相子太夫が 全日勤め、「城明渡しの段」を豊竹咲甫太夫が代演。	高師直（玉也）、桃井若狭助（玉輝）、塩谷 判官（三段目＝清之助、四段目＝文雀）、顔 世御前（清三郎）、加古川本蔵（亀次）、大 星力弥（和右）、鷺坂伴内（勘弥）、早野勘 平（文吾）、腰元おかる・女房おかる（和 生）、遊女おかる（文雀）、斧九太夫（文 哉）、大星由良助（一暢）、百姓与市兵衛 （亀次）、斧定九郎（文司）、与市兵衛女房 （玉也）、寺岡平右衛門（玉女）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
△ 2001	平成13	10/20～24	地方公演 (中国・九州)	仮名手本忠臣蔵	五段目 二つ玉の段(貴=清太郎)、六段目 身売りの段(松香=錦糸)、早野勘平腹切の段(切 十九=清治)、七段目 祇園一力茶屋の段(由良助-伊達・おかる-津駒・平右衛門-三輪・九太夫-相子=富助)。 ※文化庁主催芸術文化総合体験事業。 ※国立文楽劇場第86回文楽公演解説書(平成14年4月)に拠る。	早野勘平(文吾)、女房おかる(和生)、遊女おかる(文雀)、斧九太夫(文哉)、大星由良助(一暢)、百姓与市兵衛(亀次)、斧定九郎(文司)、与市兵衛女房(玉也)、寺岡平右衛門(玉女)。
2002	平成14	3/2～21	地方公演 (近畿・九州・中国・東海・関東・北陸)	仮名手本忠臣蔵	三段目 下馬先進物の段(津国=清志郎)、殿中刃傷の段(松香=喜左衛門)、裏門の段(勘平-相子・おかる-睦・伴内-文字栄=喜一郎)、四段目 塩谷判官切腹の段(伊達=団七)、城明渡しの段(相子=清文)、五段目 二つ玉の段(与市兵衛-文字栄・定九郎-始・勘平-睦=団吾)、六段目 身売りの段(呂勢=宗助)、早野勘平腹切の段(切 綱=清二郎)、七段目 祇園一力茶屋の段(由良助-千歳・おかる-嶋・平右衛門-文字久・九太夫-始=清介、メリヤス呂勢=清志郎)。 ※「清文」の「文」は異体字。	高師直(勘寿)、桃井若狭助(簗二郎)、塩谷判官(三段目=文司、四段目=文雀)、顔世御前(簗一郎)、加古川本蔵(勘市)、大星力弥(和右)、鷺坂伴内(玉志郎)、早野勘平(玉女/簗太郎)、腰元おかる・女房おかる(和生)、遊女おかる(文雀)、斧九太夫(文哉)、大星由良助(文吾)、百姓与市兵衛(文司)、斧定九郎(玉輝)、与市兵衛女房(勘寿)、寺岡平右衛門(玉女/簗太郎)。
2002	平成14	5/27	東京 内幸町ホール	仮名手本忠臣蔵	六段目 身売りの段(咲甫=清志郎)。 ※京極彩子トークショー(彩の会)。	
2002	平成14	12/6～18	東京 国立劇場小劇場	仮名手本忠臣蔵	三段目 下馬先進物の段(始=清志郎)、腰元おかる文使いの段(咲甫=喜一郎)、殿中刃傷の段(松香=清友)、裏門の段(新=清太郎)、五段目 山崎街道出合いの段(南都=清植)、二つ玉の段(三輪=宗助・胡弓 団吾)、六段目 身売りの段(呂勢=燕二郎)、早野勘平腹切の段(奥 英=錦糸)。 ※吉田玉幸9～18日休演のため、高師直を吉田玉女が代演。吉田玉松休演のため、百姓与市兵衛を吉田玉也が代演。	高師直(玉幸)、桃井若狭助(和生)、塩谷判官(紋豊)、加古川本蔵(玉也)、鷺坂伴内(玉輝)、早野勘平(簗太郎)、おかる(清之助)、百姓与市兵衛(玉松)、斧定九郎(玉女)、与市兵衛女房(紋豊)。
2002	平成14	12/6～18	東京 国立劇場小劇場	仮名手本忠臣蔵	祇園一力茶屋の段(由良助-千歳・力弥-睦・十太郎-新・喜多八-始・弥五郎-咲甫・仲居-相子・おかる-津駒・仲居-つばさ・一力亭主-文字栄・伴内-津国・九太夫-貴・平右衛門-文字久=富助/清介)。 ※第34回文楽鑑賞教室。	(Aプロ)大星力弥(文司)、鷺坂伴内(亀次)、遊女おかる(紋寿)、斧九太夫(玉輝)、大星由良助(文吾)、寺岡平右衛門(簗太郎)。 (Bプロ)大星力弥(玉英)、鷺坂伴内(勘緑)、遊女おかる(和生)、斧九太夫(文司)、大星由良助(玉女)、寺岡平右衛門(玉也)。
2002	平成14	12/21	能勢 浄るりシアター	仮名手本忠臣蔵	身売りの段(咲甫=喜一郎)、早野勘平腹切の段(津駒=燕二郎)。 ※文楽「いろは座」公演。	早野勘平(玉女)、お軽(簗太郎)、与市兵衛女房(玉英)。
2004	平成16	2/7～22	東京 国立劇場小劇場	仮名手本忠臣蔵	道行旅路の嫁入(小浪-千歳・戸無瀬-呂勢・ツレ 新・始・睦・相子=清治・清友・喜一郎・清植・清文)、雪転しの段(文字久=清志郎)、山科閑居の段(切 前住=錦糸、切 後 十九=富助)。 ※「清文」の「文」は異体字。	加古川本蔵(文吾)、妻戸無瀬(文雀)、娘小浪(簗助)、大星力弥(清之助)、大星由良助(勘十郎)、妻お石(和生)。
2004	平成16	2/25	大阪市立中央 会館	仮名手本忠臣蔵	裏門の段(芳穂=龍爾)。 ※～文楽若手による～義太夫節を聴く会。 ※「芳穂」の「芳」は異体字。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
2004	平成16	5/29	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	早野勘平腹切の段（伊達＝燕二郎）。 ※第7回文楽素浄瑠璃の会（文楽劇場第26回邦楽公演）。 ※国立文楽劇場開場20周年記念。	
2004	平成16	7/3～4	京都南座	仮名手本忠臣蔵	道行旅路の嫁入（小浪＝千歳・戸無瀬＝呂勢・ツレ 新・始＝清友・宗助・喜一郎・清文）、雪転しの段（松香＝清志郎）、山科閑居の段（切前住＝錦糸、切後十九＝富助）。 ※「清文」の「丈」は異体字。	加古川本蔵（文吾）、妻戸無瀬（文雀）、娘小浪（清之助）、大星力弥（玉志）、大星由良助（玉男）、妻お石（和生）。
2004	平成16	11/6～28	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵 通し狂言	大序 鶴が岡兜改めの段（靖、希、呂茂、芳穂＝寛太郎、龍爾、龍聿、清文）、恋歌の段（師直＝津国・顔世＝南都・若狭助＝文字栄＝喜一郎）、二段目 桃井館本蔵松切の段（英＝喜左衛門）、三段目 下馬先進物の段（咲甫＝清植）、腰元おかる文使いの段（三輪＝団吾）、殿中刃傷の段（伊達＝清友）、裏門の段（呂勢＝清志郎）、四段目 花籠の段（千歳＝清治）、塩谷判官切腹の段（切十九＝富助）、城明渡しの段（相子＝清文）、五段目 山崎街道出合いの段（新＝喜一郎）、二つ玉の段（松香＝団七・胡弓 龍聿）、六段目 身売りの段（津駒＝宗助）、早野勘平腹切の段（切 綱＝清二郎）、七段目 祇園一力茶屋の段（由良助＝綱・力弥＝新・十太郎＝貴・喜多八＝南都・弥五郎＝始・仲居＝つばさ・おかる＝嶋・仲居＝睦・一力亭主＝相子・伴内＝文字久・九太夫＝松香・平右衛門＝英＝清介）、八段目 道行旅路の嫁入（小浪＝津駒・戸無瀬＝呂勢・ツレ 始・睦・呂茂＝寛治・弥三郎・清植・龍爾＝寛太郎）、九段目 雪転しの段（文字久＝清志郎）、山科閑居の段（切 住＝錦糸、奥 咲＝燕二郎）、大詰 光明寺焼香の段（由良助＝三輪・力弥＝咲甫・平右衛門＝つばさ・十太郎・諸士＝芳穂＝団吾）。 ※国立文楽劇場開場20周年特別記念。 ※三代野沢喜左衛門＝補曲（「桃井館本蔵松切の段」）。 ※「清文」の「丈」、「芳穂」の「芳」は異体字。	高師直（勘十郎）、塩谷判官（和生）、桃井若狭助（玉女）、顔世御前（簗二郎）、加古川本蔵（文吾）、妻戸無瀬（文雀）、娘小浪（清之助）、大星力弥（勘弥）、鷺坂伴内（玉也）、早野勘平（紋寿）、おかる・遊女おかる（簗助）、斧九太夫（文司）、大星由良助（四・七段目＝玉男、九段目・大詰＝玉女）、百姓与市兵衛（亀次）、斧定九郎（勘緑）、与市兵衛女房（玉英）、寺岡平右衛門（勘十郎）、妻お石（和生）。
2005	平成17	10/29	東京国立劇場小劇場	仮名手本忠臣蔵	早野勘平腹切の段（切 住＝錦糸）。 ※第17回文楽素浄瑠璃の会（第132回邦楽公演）。	
2006	平成18	1/27	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	裏門の段（新＝研修生）。 ※第21期文楽研修修了発表会。素浄瑠璃。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
2006	平成18	9/8~24	東京 国立劇場小劇 場	仮名手本忠 臣蔵 通し狂言	<p>大序 鶴が岡兜改めの段（靖、希、呂茂、芳穂＝清公、寛太郎、龍爾、龍津、清丈）、恋歌の段（師直＝津国・顔世＝貴・若狭助＝文字栄＝清尙）、二段目 桃井館本蔵松切の段（松香＝喜一郎）、三段目 下馬先進物の段（呂勢＝団吾）、殿中刃傷の段（伊達＝清治）、裏門の段（新＝清志郎）、四段目 花籠の段（英＝団七）、塩谷判官切腹の段（切 十九＝富助）、城明渡しの段（相子＝清尙）、五段目 山崎街道出合いの段（始＝清丈）、二つ玉の段（三輪＝清友・胡弓 龍爾）、六段目 身売りの段（文字久＝宗助）、早野勘平腹切の段（切綱＝清二郎）、七段目 祇園一力茶屋の段（由良助＝嶋・力弥＝睦・十太郎＝新・喜多八＝咲甫・弥五郎＝希・仲居＝芳穂・おかる＝呂勢・仲居＝靖・一力亭主＝呂茂・伴内＝南都・九太夫＝松香・平右衛門＝文字久＝清介）、八段目 道行旅路の嫁入（小浪＝津駒・戸無瀬＝三輪・つばさ＝睦・希＝寛治・喜一郎・龍津＝寛太郎・清公）、九段目 雪転しの段（咲甫＝清志郎）、山科閑居の段（切 住＝錦糸、奥咲＝燕三）、十一段目 花水橋引揚の段（由良助＝始・若狭助＝相子・つばさ＝団吾）。</p> <p>※三代野沢喜左衛門＝補曲（「桃井館本蔵松切の段」）。</p> <p>※国立劇場開場40周年記念。</p> <p>※豊竹嶋太夫休演のため、「祇園一力茶屋の段」由良助を竹本千歳太夫が代演。吉田文吾休演のため、高師直を吉田玉也が代演。</p> <p>※「清丈」の「丈」、「芳穂」の「芳」は異体字。</p>	高師直（文吾）、桃井若狭助（紋豊）、塩谷判官（和生）、顔世御前（勘弥）、加古川本蔵（玉女）、妻戸無瀬（文雀）、娘小浪（清之助）、大星力弥（簗二郎）、鷺坂伴内（文司）、早野勘平（紋寿）、おかる（勘十郎）、斧九太夫（玉也）、大星由良助（四・七段目＝簗助、九・十一段目＝勘十郎）、百姓与市兵衛（亀次）、斧定九郎（幸助）、与市兵衛女房（玉英）、寺岡平右衛門（玉女）、妻お石（和生）。
2006	平成18	12/21~ 23	福岡 博 多 座	仮名手本忠 臣蔵 通し狂言	<p>大序 鶴ヶ岡兜改めより恋歌の段（直義＝咲甫・師直＝新・顔世＝睦・若狭助＝相子・判官＝つばさ＝清尙）、三段目 足利館大手下馬先進物の段（呂勢＝清丈）、同 殿中刃傷の段（伊達＝清治）、同 裏門の段（新＝清志郎）、四段目 塩谷判官花籠の段（千歳＝団七）、同 判官切腹の段（綱＝清二郎）、同 明渡しの段（相子＝清尙）、五段目 山崎街道出合いの段（始＝清丈）、同 ニつ玉の段（三輪＝清志郎・胡弓 清丈）、六段目 勘平住家身売りの段（文字久＝宗助）、同 勘平腹切の段（切 住＝錦糸）、七段目 祇園一力茶屋の段（由良助＝嶋・力弥＝睦・十太郎＝文字久・喜多八＝新・弥五郎＝咲甫・仲居＝芳穂・おかる＝呂勢・仲居＝靖・亭主＝始・伴内＝相子・九太夫＝松香・平右衛門＝咲＝前 燕二郎改め 燕三、後 清介）。</p> <p>※「清丈」の「丈」、「芳穂」の「芳」は異体字。</p>	高師直（玉女）、桃井若狭助（清三郎）、塩谷判官（文雀）、顔世御前（勘弥）、加古川本蔵（幸助）、大星力弥（一輔）、鷺坂伴内（簗二郎）、早野勘平（和生）、腰元おかる・おかる（勘十郎）、斧九太夫（玉輝）、大星由良助（簗助）、百姓与市兵衛（勘緑）、斧定九郎（幸助）、与市兵衛女房（玉英）、寺岡平右衛門（玉女）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
2007	平成19	6/6~21	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	【6~13日午前】二つ玉の段（津国=喜一郎・胡弓 寛太郎）、身売りの段（松香=清友）、勘平腹切の段（英=錦糸）。	早野勘平（和生）、おかる（玉英）、百姓与市兵衛（勘弥）、斧定九郎（玉輝）、与市兵衛女房（紋豊）。
					【6~13日午後】二つ玉の段（南都=清志郎・胡弓 清公）、身売りの段（三輪=燕三）、勘平腹切の段（千歳=清介）。	早野勘平（勘十郎）、おかる（簗二郎）、百姓与市兵衛（亀次）、斧定九郎（玉志）、与市兵衛女房（玉也）。
					【14~21日午前】二つ玉の段（新=団吾・胡弓 清公）、身売りの段（呂勢=喜一郎）、勘平腹切の段（津駒=富助）。	早野勘平（玉女）、おかる（勘弥）、百姓与市兵衛（簗二郎）、斧定九郎（勘緑）、与市兵衛女房（玉英）。
					【14~21日午後】二つ玉の段（始=清旭・胡弓 寛太郎）、身売りの段（咲甫=宗助）、勘平腹切の段（文字久=清二郎）。 ※第24回文楽鑑賞教室。	早野勘平（清之助）、おかる（清三郎）、百姓与市兵衛（清五郎）、斧定九郎（幸助）、与市兵衛女房（文司）。
2007	平成19	6/23~24	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	身売りの段（南都/始=団吾）、勘平腹切の段（新=喜一郎）。 ※国立文楽劇場文楽既成者研修発表会・第7回文楽若手会。	早野勘平（簗二郎）、おかる（勘市）、与市兵衛女房（簗一郎）。
2007	平成19	12/21~23	福岡博多座	仮名手本忠臣蔵	八段目 道行旅路の嫁入（小浪=津駒・戸無瀬=咲甫・睦・芳穂・文字栄=寛治・清志郎・龍爾=寛太郎・清公）、九段目 雪転しの段（文字久=清旭）、山科閑居の段（切住=錦糸、切十九=富助）。 ※「芳穂」の「芳」は異体字。	加古川本蔵（玉女）、妻戸無瀬（文雀）、娘小浪（八段目=簗助、九段目=和生）、大星力弥（清五郎）、大星由良之助（勘十郎）、妻お石（清三郎）。
2009	平成21	8/8~9	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	殿中刃傷の段（芳穂=宗助）、裏門の段（希=寛太郎）。 ※第12回十色会。 ※「芳穂」の「芳」は異体字。	高師直（清五郎/幸助）、桃井若狭助（文哉/玉翔）、塩冶判官（簗紫郎/玉勢）、加古川本蔵（簗次/玉誉）、鷺坂伴内（勘弥）、早野勘平（玉勢/文哉）、おかる（紋秀/紋吉）。
2009	平成21	8/30	天満天神繁盛亭	仮名手本忠臣蔵	六段目 勘平腹切の段（英=清友）。 ※繁盛亭DEちゅうしんぐら。	
2009	平成21	12/4~16	東京国立劇場小劇場	仮名手本忠臣蔵	(Aプロ) 下馬先進物の段（南都=団吾）、殿中刃傷の段（師直=三輪・判官=始・若狭助=芳穂・本蔵=文字栄=宗助）、塩谷判官切腹の段（英=清友）、城明渡しの段（靖=寛太郎）。 ※「芳穂」の「芳」は異体字。	高師直（玉也）、桃井若狭助（文司）、塩谷判官（和生）、顔世御前（清三郎）、加古川本蔵（幸助）、大星力弥（玉勢）、鷺坂伴内（一輔）、早野勘平（紋吉）、大星由良助（勘十郎）。
					(Bプロ) 下馬先進物の段（始=清志郎）、殿中刃傷の段（師直=津国・判官=咲甫・若狭助=相子・本蔵=呂茂=喜一郎）、塩谷判官切腹の段（津駒=富助）、城明渡しの段（希=清公）。 ※第41回文楽鑑賞教室。8・11日の夜に「社会人のための文楽鑑賞教室」も実施。	高師直（玉輝）、桃井若狭助（勘緑）、塩谷判官（清十郎）、顔世御前（簗二郎）、加古川本蔵（清五郎）、大星力弥（紋秀）、鷺坂伴内（紋臣）、早野勘平（玉翔）、大星由良助（玉女）。
2010	平成22	1/26	国立文楽劇場小ホール	仮名手本忠臣蔵	裏門の段（つばさ=研修生）。 ※第24期文楽研修生発表会。素浄瑠璃。	
2010	平成22	7/3	岐阜大和町生涯学習センター	仮名手本忠臣蔵	裏門の段（芳穂=龍爾）。 ※「芳穂」の「芳」は異体字。	鷺坂伴内（玉勢）、早野勘平（幸助）、おかる（紋臣）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
2010	平成22	9/26～ 10/17	地方公演 (近畿・北 陸・関東・山 陽・東海・東 北)	仮名手本忠 臣蔵	五段目 二つ玉の段(津国=清丈・胡弓 清公)、六段目 身売りの段 (千歳=清志郎)、早野勘平腹切の段(呂勢=清治)。 ※「清丈」の「丈」は異体字。	早野勘平(玉女)、女房おかる(簗二郎)、 百姓与市兵衛(亀次)、斧定九郎(勘緑)、 与市兵衛女房(勘寿)。
2011	平成23	2/26～ 3/20	地方公演 (中国・九 州・東海・関 東・近畿)	仮名手本忠 臣蔵	二つ玉の段(相子=団吾・胡弓 錦吾)、身売りの段(つばさ/睦= 宗助)、早野勘平腹切の段(千歳=富助)。	早野勘平(和生)、女房おかる(勘弥)、百 姓与市兵衛(文哉)、斧定九郎(勘市)、与 市兵衛女房(勘寿)。
2011	平成23	6/10～23	国立文楽劇場	仮名手本忠 臣蔵	【10～12・14～16日午前・13日午後】二つ玉の段(津国=清志郎・胡 弓 錦吾)、身売りの段(呂勢=藤蔵)、早野勘平腹切の段(津駒= 燕三)。 ※吉田勘緑休演のため、斧定九郎を吉田幸助が代演。	早野勘平(勘十郎)、おかる(簗二郎)、百 姓与市兵衛(玉志)、斧定九郎(勘緑)、与 市兵衛女房(亀次)。
					【10～12・14～16日午後・13日夜】二つ玉の段(つばさ=龍爾・胡弓 清公)、身売りの段(咲甫=宗助)、早野勘平腹切の段(文字久=錦 糸)。	早野勘平(玉女)、おかる(勘弥)、百姓与 市兵衛(簗一郎)、斧定九郎(勘市)、与市 兵衛女房(文昇)。
					【17～21・23日午前・22日午後】二つ玉の段(南都=清植・胡弓 清 公)、身売りの段(三輪=団吾)、早野勘平腹切の段(英=清介)。 ※吉田勘緑休演のため、百姓与市兵衛を吉田勘市が代演。	早野勘平(和生)、おかる(清五郎)、百姓 与市兵衛(勘緑)、斧定九郎(玉志)、与市 兵衛女房(簗二郎)。
					【17～21・23日午後・22日夜】二つ玉の段(相子=清丈・胡弓 錦 吾)、身売りの段(睦=喜一朗)、早野勘平腹切の段(千歳=富 助)。 ※第28回文楽鑑賞教室。13・22日の夜に「社会人のための文楽入門」 も実施。 ※「清丈」の「丈」は異体字。	早野勘平(清十郎)、おかる(文昇)、百姓 与市兵衛(勘市)、斧定九郎(幸助)、与市 兵衛女房(勘弥)。
2012	平成24	1/26	国立文楽劇場 小ホール	仮名手本忠 臣蔵	裏門の段(小住=研修生)。 ※第25期文楽研修生発表会。素浄瑠璃。	
2012	平成24	9/4	池袋 あうるすぽっ と	仮名手本忠 臣蔵	殿中刃傷の段(相子=清植)。 ※第3回素浄瑠璃ワークショップ。	

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
2012	平成24	11/3~25	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵 通し狂言	大序 鶴が岡兜改めの段(亙、小住、咲寿、靖、希=錦吾、清公、寛太郎、龍爾)、恋歌の段(師直=津国・顔世=南都・若狭助=始=清文)、二段目 桃井館本蔵松切の段(文字久=錦糸)、三段目 下馬先進物の段(睦=清胤)、腰元おかる文使いの段(三輪=清志郎)、殿中刃傷の段(津駒=寛治)、裏門の段(咲甫=喜一郎)、四段目 花籠の段(英=清友)、塩谷判官切腹の段(切 咲=燕三)、城明渡しの段(靖=清文)、五段目 山崎街道出合の段(相子=団吾)、二つ玉の段(松香=団七・胡弓 錦吾)、六段目 身売りの段(呂勢=清治)、早野勘平腹切の段(切 源=藤蔵)、七段目 祇園一力茶屋の段(由良助=咲・力弥=睦・十太郎=津国・喜多八=文字栄・弥五郎=南都・仲居=咲寿・おかる=呂勢・仲居=小住・一力亭主=始・伴内=三輪・九太夫=松香・平右衛門=英=前 宗助、後 燕三)、八段目 道行旅路の嫁入(小浪=津駒・戸無瀬=咲甫・ツレ 希・小住・亙=宗助・清志郎・龍爾・寛太郎・清公)、九段目 雪転しの段(芳穂=喜一郎)、山科閑居の段(切 嶋=富助、奥 千歳=清介)、大詰 花水橋引揚の段(由良助=相子・若狭助=靖・咲寿=清胤)。 ※三代野沢喜左衛門=補曲(「桃井館本蔵松切の段」)。 ※竹本源太夫、4~5(「腰ふさぎ脇挟んで~」から)・9・13日休演のため、「早野勘平腹切の段」を竹本津駒太夫が代演。竹本千歳太夫休演のため、「山科閑居の段・奥」を豊竹呂勢太夫が代演。桐竹紋寿休演のため、塩谷判官を吉田清五郎が代演。吉田文雀、7・11~13・15~25日休演のため、顔世御前を吉田和生が代演。 ※「清文」の「文」、「芳穂」の「芳」は異体字。	高師直(玉也)、塩谷判官(紋寿)、桃井若狭助(幸助)、顔世御前(文雀)、加古川本蔵(勘十郎)、妻戸無瀬(和生)、娘小浪(一輔)、大星力弥(文昇)、鷺坂伴内(勘寿)、早野勘平(清十郎)、腰元おかる・女房おかる(勘弥)、おかる(七段目=簗助)、斧九太夫(文司)、大星由良助(玉女)、百姓与市兵衛(勘市)、斧定九郎(玉佳)、与市兵衛女房(簗二郎)、寺岡平右衛門(勘十郎)、妻お石(簗二郎)。
2013	平成25	1/27	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	裏門の段(小住=研修生)。 ※第25期文楽研修修了発表会。素浄瑠璃。	
2013	平成25	6/29	広島三原市芸術文化センター	仮名手本忠臣蔵	五段目 山崎街道出合いの段(希=清公)、二つ玉の段(相子=清文・胡弓 清公)、六段目 身売りの段(咲甫=清志郎)、早野勘平腹切の段(英=清介)。 ※「清文」の「文」は異体字。	早野勘平(清十郎)、女房おかる(清五郎)、百姓与市兵衛(勘市)、斧定九郎(玉佳)、与市兵衛女房(簗一郎)。
2014	平成26	11/27~28	ドーンセンター	仮名手本忠臣蔵	二つ玉の段(靖=寛太郎)、身売りの段(希=清文)、勘平腹切の段(咲甫=清志郎)。 ※第13回文楽若手自主公演「十色会」。 ※「清文」の「文」は異体字。	早野勘平(簗紫郎/玉勢)、女房おかる(紋吉/玉誉)、親与市兵衛(勘市)、斧定九郎(簗次/玉翔)、与市兵衛女房(玉佳/一輔)。
2015	平成27	1/28	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	殿中刃傷の段(研修生=清公)。 ※第26期文楽研修修了発表会。素浄瑠璃。	
2016	平成28	5/28~29	名古屋中日劇場	仮名手本忠臣蔵	二つ玉の段(芳穂=団吾・胡弓 燕二郎)、身売りの段(咲甫=清志郎)、早野勘平腹切の段(英=団七)。 ※第4回中日文楽。 ※「芳穂」の「芳」は異体字。	早野勘平(玉男)、女房おかる(勘十郎)、百姓与市兵衛(紋臣)、斧定九郎(玉佳)、与市兵衛女房(簗二郎)。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場 割 ・ 備 考	主 な 人 形 役 割
2016	平成28	8/20~21	愛媛 内子座	仮名手本忠 臣蔵	三段目 下馬先進物の段（靖＝清旭）、殿中刃傷の段（呂勢＝藤蔵）、四段目 判官切腹の段（津駒＝宗助）、城明渡しの段（亘＝清公）、五段目 山崎街道出合いの段（希＝清公）、二つ玉の段（芳穂＝団吾・胡弓 清公）、六段目 身売りの段（睦＝清志郎）、早野勘平腹切の段（英＝団七）。 ※内子座文楽第20回記念。 ※「芳穂」の「芳」は異体字。	高師直（勘十郎）、桃井若狭助（清十郎）、塩谷判官（和生）、顔世御前（簗二郎）、加古川本蔵（玉佳）、大星力弥（簗紫郎）、鷺坂伴内（一輔）、早野勘平（勘十郎）、女房おかる（清十郎）、大星由良助（玉男）、百姓与市兵衛（和生）、斧定九郎（玉男）、与市兵衛女房（簗二郎）。
2016	平成28	12/3~19	東京 国立劇場小劇 場	仮名手本忠 臣蔵	大序 鶴が岡兜改めの段（亘・小住・咲寿＝清允・燕二郎・錦吾・清公）、恋歌の段（師直一始・顔世一南都・若狭助一希＝龍爾）、二段目 桃井館本蔵松切の段（睦＝錦糸）、三段目 下馬先進物の段（希＝清公）、腰元おかる文使いの段（三輪＝喜一朗）、殿中刃傷の段（津駒＝寛治）、裏門の段（芳穂＝清旭）、四段目 花籠の段（呂勢＝宗助）、塩谷判官切腹の段（咲＝燕三）、城明渡しの段（亘＝錦吾）、五段目 山崎街道出合いの段（小住＝寛太郎）、二つ玉の段（靖＝清文、胡弓 燕次郎（3～11日）清允（12～19日））、六段目 身売りの段（咲甫＝清志郎、長唄 東音山口太郎・芳村辰三郎＝東音塚原勝利・芳村伊十治郎・東音山口聡・杵屋正観）、七段目 祇園一力茶屋の段（由良助一咲・由良助一英・力弥一咲寿・十太郎津国・喜多八一文字栄・弥五郎一南都・仲居一小住・おかる一呂勢・仲居一亘・一力亭主一始・伴内一靖・九太夫一三輪・平右衛門一咲甫＝清介・清治、長唄 東音山口太郎・芳村辰三郎＝東音塚原勝利・芳村伊十治郎・東音山口聡・杵屋正観）、八段目 道行旅路の嫁入（小浪一津駒・戸無瀬一芳穂、ツレ 靖・咲寿・亘＝清介・清志郎・清文・燕二郎・清允）、九段目 雪転しの段（松香＝喜一郎）、山科閑居の段（前 千歳＝富助、後 文字久＝藤蔵、尺八 川瀬順輔）、十段目 天河屋の段（睦＝清友）、十一段目 花水橋引揚の段（由良助一芳穂・若狭助一希・文字栄＝団吾）。 ※角書「通し狂言」。 ※三代野沢喜左衛門＝補曲（「桃井館本蔵松切の段」）、野沢松之輔＝作曲（「天河屋の段」）。 ※国立劇場開場50周年記念。 ※鶴澤寛治17・18日休演、鶴澤寛太郎代演。 ※吉田文司3～9日休演、吉田玉志代演。 ※桐竹紋寿休演、桐竹勘寿代演。 ※「芳穂」の「芳」、「清文」の「文」は異体字。	高師直（玉也）、塩谷判官・妻戸無瀬（和生）、桃井若狭助（幸助（3～11日）、玉志（12～19日））、顔世御前（文昇）、加古川本蔵（勘十郎）、娘小浪（勘弥）、力弥（玉佳）、鷺坂伴内（文司）、早野勘平（清十郎）、腰元おかる・女房おかる（一輔）、斧九太夫（勘寿）、大星由良助（玉男）、百姓与市兵衛（勘市）、斧定九郎（簗紫郎）、与市兵衛女房（紋寿）、寺岡平右衛門（勘十郎）、妻お石（簗二郎）。

平成29年6月以降の国立劇場・国立文楽劇場での公演記録

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
2017	平成29	6/9～22	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	【9～12日、14～15日 10時30分、13日は2時】、下馬先進物の段（始＝清旭）、刃傷の段（呂勢＝宗助）、塩谷判官切腹の段（呂＝清介）、城明渡しの段（咲寿＝清允）。 ※第34回文楽鑑賞教室 ※9～15日吉田勘市休演、桐竹紋秀代演。	高師直（玉也）、桃井若狭助（幸助）、顔世御前（文昇）、加古川本蔵（清五郎）、鷺坂伴内（勘市）、塩谷判官（和生）、早野勘平（勘介）、大星力弥（玉翔）、大星由良助（勘十郎）。
					【9～12日、14～15日 2時】下馬先進物の段（芳穂＝清丈）、刃傷の段（咲甫＝藤蔵）、塩谷判官切腹の段（津駒＝清友）、城明渡しの段（亘＝燕二郎）。 ※「芳穂」の「芳」、「清丈」の「丈」は異体字。 ※13日の夜に「社会人のための文楽入門」も実施。	高師直（勘十郎）、桃井若狭助（玉勢）、顔世御前（簗一郎）、加古川本蔵（文哉）、鷺坂伴内（紋秀）、塩谷判官（清十郎）、早野勘平（玉峻）、大星力弥（紋吉）、大星由良助（玉男）。
					【16～18日、20～22日 10時30分、19日は2時】下馬先進物の段（希＝龍爾）、刃傷の段（靖＝錦糸）、塩谷判官切腹の段（千歳＝富助）、城明渡しの段（小住＝燕二郎）。	高師直（玉輝）、桃井若狭助（簗紫郎）、顔世御前（一輔）、加古川本蔵（簗一郎）、鷺坂伴内（清五郎）、塩谷判官（玉男）、早野勘平（玉延）、大星力弥（玉誉）、大星由良助（和生）。
					【16～18日、20～22日 2時】下馬先進物の段（小住＝寛太郎）、刃傷の段（睦＝清志郎）、塩谷判官切腹の段（文字久＝燕三）、城明渡しの段（亘＝清允）。 ※17日の昼に「Discover BUNRAKU」も実施。 ※19日夜に「社会人のための文楽入門」も実施。	高師直（文司）、桃井若狭助（一輔）、顔世御前（紋臣）、加古川本蔵（幸助）、鷺坂伴内（玉佳）、塩谷判官（清十郎）、早野勘平（簗悠）、大星力弥（簗太郎）、大星由良助（玉也）。
2019	令和1	4/6～29	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	鶴が岡兜改めの段（碩・亘・小住・咲寿＝清允・燕二郎・錦吾・清公）、恋歌の段（師直＝津国・顔世＝南都・若狭助＝文字栄＝団吾）、桃井館力弥使者の段（芳穂＝清丈）、本蔵松切の段（三輪＝清友）、下馬先進物の段（小住＝寛太郎）、腰元おかる文使いの段（希＝清旭）、殿中刃傷の段（呂勢＝清治）、裏門の段（睦＝勝平）、花籠の段（藤＝団七）、塩谷判官切腹の段（咲＝燕三）、城明渡しの段（碩＝清允）。 ※26日竹本三輪太夫休演、豊竹睦太夫代演。 ※26日鶴澤清治休演、鶴澤藤蔵代演。 ※17～29日吉田文哉休演、吉田簗一郎代演。 ※「芳穂」の「芳」、「清丈」の「丈」は異体字。 ※国立文楽劇場開場三十五周年記念 ※「日本博」参画プロジェクト（第一部）	高師直（勘十郎）、塩谷判官（和生）、桃井若狭助（文昇）、顔世御前（簗紫郎）、加古川本蔵（玉輝）、妻戸無瀬（簗一郎）、娘小浪（紋臣）、鷺坂伴内（文司）、早野勘平（玉佳）、腰元おかる（一輔）、大星力弥（玉翔）、斧九太夫（文哉）、大星由良助（玉男）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
2019	令和1	7/20~8/5	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	山崎街道出合いの段（小住＝勝平）、二つ玉の段（靖＝錦糸 胡弓 燕二郎）、身売りの段（咲＝燕三）、早野勘平腹切の段（呂勢＝清治）、祇園一力茶屋の段（由良助＝呂・力弥＝咲寿・十太郎＝津国・喜多八＝文字栄・弥五郎＝芳穂・仲居＝亘・おかる＝津駒・仲居＝碩・一力亭主＝南都・伴内＝希・九太夫＝三輪・平右衛門＝藤＝前宗助、後 清友。 ※「芳穂」の「芳」は異体字。 ※国立文楽劇場開場三十五周年記念 ※「日本博」参画プロジェクト（第二部）	千崎弥五郎（玉勢）、鷺坂伴内（文司）、早野勘平（和生）、女房おかる（一輔）、遊女おかる（簗助／一輔）、与市兵衛女房（簗二郎）、大星力弥（玉翔）、斧九太夫（勘寿）、大星由良助（勘十郎）、百姓与市兵衛（亀次）、斧定九郎（玉輝）。
2019	令和1	11/2~24	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	道行旅路の嫁入（小浪＝津駒・戸無瀬＝織・ツレ 南都・亘・碩＝宗助・清志郎・寛太郎・錦吾・燕二郎）、雪転しの段（芳穂＝勝平）、山科閑居の段（前 千歳＝富助、後 藤＝藤蔵 尺八 井上整鶴）、天河屋の段（口 小住＝寛太郎、奥 靖＝錦糸）、花水橋引揚より光明寺焼香の段（由良助＝睦・平右衛門＝津国・若狭助＝咲寿・力弥・諸士＝碩＝清丈。 ※「芳穂」の「芳」、「清丈」の「丈」は異体字。 ※令和元年度（第74回）文化庁芸術祭主催 ※国立文楽劇場開場三十五周年記念 ※「日本博」参画プロジェクト（第二部）	桃井若狭助（玉助（2~12日）、玉志（14~24日））、加古川本蔵（勘十郎）、妻戸無瀬（和生）、娘小浪（一輔）、大星力弥（玉佳）、大星由良助（玉男）、妻お石（勘弥）、天河屋義平（玉也）。
2020	令和2	10/17	国立劇場小劇場	仮名手本忠臣蔵	勘平腹切の段（咲＝燕三）。 ※第31回文楽素浄瑠璃の会 ※令和2年度（第75回）文化庁芸術祭協賛 ※「日本博」参画プロジェクト	
2020	令和2	12/3~15	国立劇場小劇場	仮名手本忠臣蔵	二つ玉の段（希（3~9日）、睦（10~15日）＝藤蔵（3~9日）、清介（10~15日） 胡弓 清允）、身売りの段（芳穂＝宗助）、早野勘平腹切の段（靖＝錦糸）。 ※「芳穂」の「芳」は異字体。	早野勘平（勘弥）、おかる（簗一郎）、百姓与市兵衛（亀次）、斧定九郎（玉勢）、与市兵衛女房（文昇）。
2021	令和3	12/4~17	国立劇場小劇場	仮名手本忠臣蔵	桃井館本蔵松切の段（小住＝清丈）、下馬先進物の段（南都＝団吾）、殿中刃傷の段（靖＝錦糸）、塩谷判官切腹の段（織＝燕三）、城明渡しの段（碩＝清允）、道行旅路の嫁入（小浪＝呂勢・戸無瀬＝咲寿・ツレ 亘・聖・薫＝清志郎・清公・錦吾・燕二郎・清方）。 ※「清丈」の「丈」は異体字。 ※国立劇場開場55周年記念 ※「日本博」参画プロジェクト	高師直（玉助）、桃井若狭助（玉佳）、塩谷判官（簗二郎）、顔世御前（紋吉）、加古川本蔵（勘市）、妻戸無瀬（清十郎）、娘小浪（簗紫郎）、大星力弥（簗太郎）、鷺坂伴内（紋秀）、早野勘平（玉路）、大星由良助（玉志）。

西暦	和暦	月日	劇場	上演外題	場割・備考	主な人形役割
2022	令和4	6/2~16	国立文楽劇場	仮名手本忠臣蔵	【2~8日 10時30分】二つ玉の段（咲寿＝団吾 胡弓 清方）、身売りの段（芳穂＝清胤）、早野勘平腹切の段（藤＝藤蔵）。 ※「芳穂」の「芳」は異体字。 ※第39回文楽鑑賞教室 ※5日の昼に「大人のための文楽入門」も実施。	早野勘平（玉助）、おかる（清五郎）、百姓与市兵衛（亀次）、斧定九郎（玉勢）、与市兵衛女房（勘弥）。
					【2~8日 2時】二つ玉の段（碩＝寛太郎 胡弓 燕二郎）、身売りの段（希＝清志郎）、早野勘平腹切の段（呂勢＝錦糸）。 ※5日の昼に「Discover BUNRAKU」も実施。	早野勘平（簀二郎）、おかる（紋臣）、百姓与市兵衛（文昇）、斧定九郎（文哉）、与市兵衛女房（清十郎）。
					【9~16日 10時30分】二つ玉の段（亘＝友之助 胡弓 清允）、身売りの段（小住＝勝平）、早野勘平腹切の段（織＝燕三）。	早野勘平（一輔）、おかる（簀紫郎）、百姓与市兵衛（勘市）、斧定九郎（玉翔）、与市兵衛女房（簀一郎）。
					【9~16日 2時】二つ玉の段（咲寿＝団吾 胡弓 清方）、身売りの段（靖＝清文）、早野勘平腹切の段（睦＝宗助）。 ※「清文」の「文」は異体字。	早野勘平（玉佳）、おかる（紋秀）、百姓与市兵衛（紋臣）、斧定九郎（簀太郎）、与市兵衛女房（文司）。